文藝講談

坪内逍遥著

文藝雜談

坪内逍遥著

春陽堂發行

文藝瑣談

坪內逍遙著

春陽堂發行

文藝瑣談

目次

趣味……一
趣味界の將來……五
藝術界未曾有の大自由……一七
高雅なる社交的遊戯……二五
音樂と繪畫……三四
能樂研究の順序……四四
謠曲文は歌なりや文なりや……五三
美文としての謠曲文……五八
美文としての謠曲文(再び)……六六

目次

謠ひものゝ文章……七六
能樂の將來につきて（舞は水の味）……八四
宗教と演劇（雜誌「妙宗」の爲に）……九一
國民樂の將來……九九
「浦島」の寓意……一〇六
「かぐや姫」について……一一一
謠ひものに引き直したる「竹取」について……一一四
寫實劇の將來……一一八
歌舞伎劇の將來……一二三
新演劇の現在……一三三
日蓮上人辻說法を觀て……一四四
脚本鑑定書……一四七
「桐一葉」について……一六五
舞臺に上れる「桐一葉」について……一六九

「牧の方」について……一七四
東京座の「牧の方」について……一七九
「牧の方」の作意のあらまし……一八二
「沓手鳥孤城落月」と歴史的事實との關係……一八六
「孤城落月」について……一九八
明治座の「マーチャント、オブ、ヱニス」……二〇三
川上の「オセロ」を觀て……二〇八
八人藝……二一五
故齋藤綠雨氏……二二〇
故ハーン氏……二二八
百合若傳說の本源……二三二
學者頭と詩人頭……二四〇
文明の研究……二四九
牛のよだれ……二六一

文藝瑣談

趣味

「眞正にして高大なるものを感知するをテーストいふ。その何處にて、如何なる形にて現るゝも問ふ所にあらず、苟も美なるもの、秩序あるもの、善なるものを感知し愛敬する心の作用をテーストといふ」。これはカーライルの語である。テーストを塲合次第で、嗜好又は風尙と譯し、趣味とも譯し、鑑賞力又は趣味性とも譯する。凡そ人が物のよしあしを判斷するのは、主に理智の作用のやうに見えるが、其の實は此の趣味性がさせるのである。此の性に原かぬ批判は冷かで、形式的で、感化活動の力に乏しい。道德上、文藝上の事も煎じつめた末は、皆此の性に歸する。それゆゑ趣味といふことは等閑にはならない。

蓼喰ふ蟲もすきゝ〳〵、好きとなつては理窟はどうあらうともそれが欲しく、嫌と思つては命をもすてかねぬが人情の習ひで、そこに人生の意氣地も籠れば浮世の味ひも生じ、古今東西文華の異同も根ざした

のである。お前の趣味は卑しいといはれたとて、面白いものは矢張面白く、うまくもないものを重ねるのはつらい。眞に是非に及ばぬとは此の事て、理窟てどうもかうもしやうがない。「嗜好は論爭しがたし」といふは道理千萬、他人の上を如何ともしがたいばかりてなく、自身の趣味性さへ年齡や境遇てかはり、四季てかはり、どうかすると時刻てかはるもので、始末にならぬ。酒前酒後、食前食後で舌の作用が同じてない。氣分のよい時とわるい時ては物の味がちがふ。嬉しい時にはまづいものもうまけれど、腹の立つた瞬間には一切が氣に入らぬ。運動不足の、神經過敏の、贅澤な舌には如何な割烹もありがたくない程ゆゑ、細君が苦心を思ひやることが出來ず、圖らずも家庭小悲劇の伏線を作ることもある。まして一國、一社會となつては趣味の變遷に著しい差別があつて、それに原く利害もまた容易てない。順序をいへば、時勢が一代の風尙を定めるのてはあるが、その風尙が原因となつて後の時代精神を涵養する例もあるから、國民全體の趣味の善惡は風俗の本源てある。彼の文藝を重んじて移風易俗の要具とするのも、それらが趣味性涵養の最大機關てあるからて、國民が善惡美醜の評價力即ち理想建設の地盤は、一へに此の趣味性の高下によつて定まる。神代や奈良朝の事は姑く措き、平安朝から鎌倉、東山、桃山、元祿、享保、文化、文政と變遷して來た我が國過去の趣味性を見れば、國家隆替の因果まてがそのうちに見えるやうてある。希臘、羅馬の古さより、近くは伊太利、西班牙、支那、土耳古の趣味性を檢するも、若し見る人に活眼があつたら、また同じやうな感が起るてあらう。烱眼の人なら

過去ばかりてなく現代の趣味風尙の趨く所を見て、前途將來の利害までも見透し得る筈と思ふ。

舌に上戸口、下戸口の別がある通りに、趣味にも雅俗の別があり、濃淡の別がある。澁ずきあり、華美ずきあり、江戸前あり、上方好みあり、日本流、ハイカラ式、近松張、芭蕉じたて、黃表紙、讀本、能、歌舞伎、西洋にも伊太利、獨逸、英國、佛蘭西と國々にて別があり、このまた間をゆくのもあつて、到底一定はしがたいものゝ、尙ほ大まかに別けて見れば、大小、强弱、深淺、單複、濃淡の別はあつて、我が國の如きは、其の大と强と深と複と濃とに關する限りは、今までのところ西洋趣味に及ばぬ。これには人種性や氣候や風土や飲食物等に原く生理上の原因もあらうし、政治、宗敎、道德、風俗の感化に原因するところも隨分あらう。日本在來の趣味性の發現した跡を見るに、おしなべて淡しい、細い、小さい、あかるい、それゆゑ或時はかはいらしく、或時は淋しい、併し何となく淡いから、深く悲しく、大きに凄じく怖ろしいやうなことはない。桃山や元祿や享保は或は華美、雄大、或は豪奢、淫靡だといふが、決して西洋の或趣味のやうに大げさてもなければ毒々しくもない。七くどいセンジュアリズムやヂラブチュアスネスは我が國の趣味史には見えないやうに思ふ。隨つてその反對に、日本の所謂雅致、風流、清淡、瀟洒などいふ味ひは多分西洋の趣味史にあるまい。あちらへ往つたことがないから臆測に過ぎねども、又將來のとは分らねども、在來の風景畫や風景の寫眞を見、又は所謂ロマンチスト等が書いた作や論やに鑑みて英語にいふピクチュアレスクとかロマンチック、ビューテーとかいふのは我が風雅の極致に

比べては幾分かあくどいもの。西洋の風雅は日本の趣味からいへば俗に近い。日本好(ごの)の西洋人などの好みなどに折々そんな例がある。つまり我れに一長、彼れに一短で、互ひに融通すべきことが多い。要するに趣味は廣く善惡美醜を甄別し評價する根柢となるものゆゑ、今日の如き大變遷期に於ては最もその涵養に心を注がねばならぬ。政治上、社會上の改革即ち物質的の維新は一通り濟んで今は精神上の維新に向ひ、宗教、道德、文學、藝術、引括めていへば風俗上の大動搖が始まつたのであるから、こゝ一段の注意が大切である。世間の氣運が移らぬ限りは保守を本性とする婦人の風俗さへ、おひ〳〵新時代式に化しゆくと同じ度合に、國民全體の趣味性が新氣運の影響を蒙りつゝあるので、江戸趣味は假令滅びてしまはないまでも、今や將に後の方へ退却すべき運命となつて來たのである。元祿趣味が呼戻され、桃山趣味が迎へられるのは、例へば開國に先だちて昔ながらの王政復古が唱へられたやうなもの、まことの趣味界の國體は、歐化主義で定まるのでもなく、國粹保存一點ばりで定まるのでもあるまい。隨つて最も眞正にして高大なる趣味を感知する力を導き養ふことが此の際尤も大切である。此の雜誌(『趣味』を指す)の目的は正に此意に外あるまいと思ふ。

(三十九年六月)

趣味界の將來

東洋の藝術や風俗や趣味やに馴らされた目には、兎角新西洋式のものはあくどいやう、下品なやうに思はれ、其の反對に西洋趣味崇拜の目には總て日本在來のものが小さく薄手に見え、せゝこましくばかり思はれたのも今は漸く過去となつて、きのふけふは急轉直下の勢ひでどうやら我が趣味界に一大變動が起りさうになつて來た。西洋人が我國の舊文物を歎美する聲も日露戰爭以來は一段と高くなつたやうだが、それと同時に西洋趣味渇仰の氣運も我が新代社會に一段著しくなつて來た。勿論これは今日俄にはじまつたことてはなく、嚴密にいへば、遠く維新の間際から、遲くも鹿鳴館時代から催しつゝあつたことだが、幸ひに戰爭が終つて平和となつたから、譬へば春の草木が幾日かの膏雨を得たやうに一齊に萠えいでんと競ふのてもあらう。いづれにもせよ、內外共に過去幾十年間の接觸と研究とによつて互ひに其の眞相をさとりはじめたといふうちにも、趣味に對する相互の鑑賞力が進歩したことは爭ふべからざる事實てある。向う幾十年間は多分我が趣味界の維新時代であらう。

我が國民、とりわけ新代に屬する人々は、江戸時代の遺物たるに外ならぬ舊文藝に慊(あきた)らないで、何か清新なものを得たいと渇望してゐる。その中には舊文藝を舊文藝としては其の美を認めて尊重しながら、すべて文藝は其の時代々々々々の理想好尙の影なれば、過去の文藝は到底新代の需要には適しない

ものだといふ理由から、新しい者を需めてゐる向もあれば、明治に生れ、地方に育ち、新代の教育ばかりを受けたゝめに江戸式又は武家式文藝の趣味は殆ど外國人同樣に分りかね、(又は種々の社會的、乃至精神的理由があつて總て舊文物に對して反動を起しつゝある際なるが爲に)外國人が感ずるだけの趣味をも感ぜず、若しくは理ては分つてゐても情ては面白みを感じないところから之れを排斥し、多少未熟だと知りながら新代の好尚から生れたものを歡迎し、又はどうかして外國の新趣味を取入れやうとあせつてゐる向もあつて、趣味界に於ける保守派と革新派との鬪鬪は今や漸く公然の激戰とならうとしてゐる。繪畫界にも文學界にも演劇界にも音樂界にも同じ潮流の急ならんとする傾向が今年に至つて一段著しくなつたと思ふ。その道々々々の重鎭であつた老名手が相ついて凋落するのも多少此の氣運を速める緣であらう。

さらば目下のところ保守派と革新派とどちらが勢ひが熾んであるかといふと、前者は譬へば旗本八萬騎、後者は各地方一帶雲霞の如き大軍、野も山も其の旗じるし、鬨の聲と形容しても太した誇張ではあるまい。尤も此の大軍のうちには野武士もゐれば彌次馬もをり、大がいは烏合の兵なれば、必しもこれが錦の御旗だといふのではないが、大多數の傾向たることは事實で、其の滔々たる大勢は到底防ぎ切られるものではなからう。これが所謂平民時代の需尚で是非に及ばぬ所である。然るにそれに應ずるに依然として舊武家時代、江戸時代の貴族的文藝を以てせんとするは無理な話。鑛山で働き、製造所で働き、海で働き、野で働く下等社會や、眼は常に海外に向ふ大企業家や、目前の生活難や精神上の疑問などに苦しんでゐる青年、小學校以來唱歌か田舍歌以外には何等の音樂趣味をも解せぬ地方人や、早くより新體詩を讀みならひ、作りならひ、長じては專ら西洋の詩篇などを翫讀した新代の文學者や、多年西洋に留學して彼方(あちら)の趣味に薰染した當世紳士、當世婦人、又は新しい文藝によつて一代の人心を指導せんと企つる人々、その他何等かの新しい思想か新しい感情か新しい希望かを有する向は、到底古い文藝に安住し滿足してゐることは出來ぬ道理。どの道目ざましい革新が起らずにはゐまい。只どういふ鹽梅に、どういふ形ではじまるかは誰れにも分らない。

只一つほゞ豫言の出來ることは、將來の趣味は必然の勢ひとして洋服に折合ひ、束髮に折合ふものでなうてはならぬ、てはない、折合ふものになりゆかざるを得なからうといふことである。思ふに世の中に女ほど世間を憚り、舊慣に執着するものはあるまい、然るに今は中年以上の女さへ新風俗に向つて日進月化の體なれば、西洋趣味が半以上の割合て我が將來の文藝に入來るべきはいふまてもない。江戸趣味も保存せられるてあらうが、さりとて新社會の慰藉たり娛樂たり理想たり生命たる文藝はそれらのものにあらざることもほゞ明かてある。一言以て蔽へば、向う幾年間は西洋摸倣時代、歐化時代てあらう。畫は油畫まがひ、樂界にはオペラまがひのものがはやり、演劇は西洋式の社會劇、喜劇。此の歐化時代の作物は言ふまてもなく橋わたして、新代の理想に副ふものたらざるは勿論てあらうが、そ

こに保守派の反動を呼起す機會もあつて、若し政治界の事情、社會の狀態等に大變動さへなくば、向う幾十年間は多分我が國空前の目覺しい趣味界の大活動を現ずるであらう。

かやうに我が國民が何等か新しいものを得んと欲して刺戟か材料か摸範かを西洋の文藝に求めつゝある時に當つて、こゝに面白く思はれるは歐米人もまた幾らか同じやうな目的を抱いて我が文藝に目を注ぎつゝあるといふことである。我々が多少の歐化を欲してゐる時に、歐米人は多少の日化を欲してゐるとは面白い現象ではないか。

これは別段取調べたことでもないが、思ひついたことだけを述べて見よう。

西洋も十九世紀以來の大發展で、あらゆる藝術先づ殆ど一段落に達したといふ氣味、此際何か新しい刺戟か新しい感興か新しい材料かを見つけて、新しい工夫を凝らさぬ限りは、花々しい、目ざましい活動は出來さうにもない。「自然に歸れ」といふ號令は古往今來事物が爛熟の頂に達した時に唱へられる一種の呪文だが、これも歐羅巴では此の百年間ばかりに、あらゆる方面で唱へ盡した氣味。幾たびも本源に歸つて汲めるだけの清泉は汲みだしてしまつたのだから、當分は仕樣がない。擬古排斥は十八世紀の末からはじまり、例のロマンチシズム大飛躍このかた中古趣味も大かい穴探つてしまつたし、一面はロマンチシズムの反動とも見られる希臘國粹の新研究も既に久しい話ゆゑ、今は大ぶ秋風の氣味。寫實主義も自然主義も理想主義も標示主義もどうやら先つ一通り行きつくところまで行きついて、文

學の方面も畫、音樂、劇の方面も西洋在來の材料だけではさしあたり新工夫も浮びかねたといふ體らしく思はれる。されば彼等の東洋研究は、眞面目な學問方面の事は別として、文藝上から見ても、單に好事一點張ではあるまい。或は意識して、或は意識せずに、新刺戟を求めつゝあるのだといつてもよからう。東洋といつても印度、波斯、支那、朝鮮等のことは措いて、我が國だけの事をいへば、日本趣味は漆器や陶器や象牙彫や織物や北齋や歌麿やが橋渡して比較的に早い頃から翫賞されてゐたところへ日清、日露の戰勝以來日本が世界の花形となつたので、日本趣味の人氣が一段盛んになり、研究の心を以て日本の藝術に向ふ外國人が著しく殖えた。

思ふに歐米人の文藝上に於ける參考品としては東洋の諸藝術、就中我が國のは最も目新しい、最も適切な代物であらう。總じて參考品は他山の石だから、趣味から方法から體式から內容から一切が成るべく在來のに違つてゐるほど役に立つ。ちようど我々が西洋のを見て新知見を啓くことが多いと同じ道理。日本特有の、見たところよりも其の實は複雜ながら、何となく原始的な、淡しい、清い、優しい、寂しい、併し何處となく明るいやうな所もある一種の趣味は、恐らくは希臘以來凡そ三千年の彼方の趣味史中に見いだしがたい所であらう。されば一たび此の特殊の趣味が分つて見れば、西洋人にとつては眞に是れ一種のインスピレーションで、反照（コントラスト）の甚しきに撲たれて覺えず豁然として心眼を見ひらき、當面の黑暗のうちに微光を認めて新發展の地を切開くこともあるべき筈であるまいか。よしさまて

にはないまでも、贅澤を盡した大溫室の千花萬花を見盡して春の山、秋の野邊の鳥啼き蟲すだく自然の花園へ廻り出たほどの感じはあらう。 かなたの藝術家や詩人や鑑賞家や、好事家が日本の藝術を稱美するのは其筈のことだ。 彼等の鑑賞力を必しも高しとして驚くには及ばぬ。 これは清新なるものに觸れた刹那の自然の結果で、苟も鑑賞力あるものには珍らしくないことである。

まだ此外にも外國人が日本趣味に興味(インテレスト)を感ずる理由がある。 例の善と美とは一致するものであるか、否かといふ論は古い問題であるが、それは暫く別として、善といふも美といふも、詮じつめて見ると其の根底(どんそこ)には趣味性の作用があるとも言はれる。 成程、善といひ惡といふは美といひ醜といふことゝは違つて、主として利用上、理智上の批評であるが、又一面から考へると、美といひ醜といふにも隱然として利用上、理智上の批判が加はつてゐるやうなもので、善惡の評價も幾分かは趣味性のしわざと思はれる。 例へば、情を有のまゝに現して泣いたはうが善いといふ平民主義の倫理と、心に泣いても目には泣かぬが善いといふ武士道主義の倫理との底には性を異にした鑑賞力が横はつてゐる。 半は教義や實際上の利害や時代精神(即ち輿論、習俗)やに原いて、さう馴らはして來たのでもあらうが、幾分かは習俗以外、教理以外、利用以外の沙汰である。 淋しみが好きだとか、華美(はで)が好きだとかいふ理窟にかゝらない心の作用もまじつてゐるらしい。 其の因つて來る大根(おほね)は人種性の特色にあつて、彼のシャイロックの所謂ユーモアの然らしむる所で、蓼喰ふ蟲のすき〳〵に外ならぬこともある。 將來はどう變りゆくか圖られないが、今のところまだ〳〵我々どもは西洋趣味になりきつてしまふ譯にはゆかぬ。 久しく洋行してゐて幼少から故方(あちら)の趣味に涵養された人々を除くの外は、衣食住はいふに及びず、一切の嗜好品、娯樂の具を悉く西洋好みにしてしまふことはむづかしい。 大ていの者は年に幾時間、月に幾日、年に幾月位、それ以上の西洋式を堪へがたく感ずるのは、單に慣れないからばかりでもあるまい、趣味性の然らしむる所と見たはうが妥かである。 若し果してさうとすれば、日本の國體や道德や宗教や制度や文物や風俗や習慣の研究には自ら日本特有の趣味の研究が伴はねばなるまい。 例へば、武士道の發達を明かにせんとすれば、それと相並んで發展した種々の教理や技藝や文學や風習をも調べて見ずばなるまい。 神道や禪學や擊劍や柔術や茶の湯や香花や傳說文學や能や歌舞伎やの研究が今迄よりも幾倍の重みを加へて外國人間に行はれることゝなるであらう。 凡そ世の中の事物は研究の目的を抱いて之れに向ふときは多少の興味を感ぜしめざるものはない。 只見なれ、聞きなれ、研究し盡したもののみは興がない、その他は何物でも面白い。 小兒のいたづら書も兒童心理研究の目からは雪舟、探幽の畫よりも面白く、千日前や新京極、いや、たわいもない緣日の見せ物とても下等社會の時好を探る目的から見れば棄てたものでない。 日本の舊文明が世界の疑問となつた今日に、日本に關するもの、とりわけ我が特別の趣味界に屬するものが世界の心目を集注せしむる力をもつは其筈のことである。 例へば、我が雅樂の如く古色をさながらに傳へ得た活きた美術は、世界いづこの國へいつても恐らくま

たとは見られぬてあらう。 古希臘の樂劇に似た我が能樂、其の希臘劇に似てゐるといふ點ばかりでも、歐米の文藝鑑賞家を垂涎せしむるに足る。 又は歌舞伎といふ大まかながら音樂を土臺として發達した叙事詩劇、及びそれから分れいでた諸種の演藝、其の美術としての眞價値は如何やうにあらうとも現代の世界に於てまたと類の無い特殊の藝術だといふことは明かである。 其他、家屋、庭園、器具、調度、衣服や粧飾や模樣や遊戯や娯樂の末までも、何れも西洋のものとは、其の意匠に於て、其の構造に於て、其の趣味に於て、根本的に異なつてゐるだけに一つとして彼等が研究の目的とならぬものは無からう。 日本趣味が分りゆくにつれて日本熱は彌〻高くなり、鑑賞力も研究心も無い只の大俗の外人までが附加雷同して日本藝術をもてはやす時が來まいものでもない。 今てすら既に其の傾向はあるから、分らぬながら日本趣味を賞美せねば流行社會の生粋(きつすい)でないと言はれるやうに(よしや只一時なりとも)なるまいものでもない。 こゝに至ると恐らく下にいふが如きことが起るであらう。 即ち多少名聲ある西洋の藝術家や鑑賞家や又は日本最負の列國人(俗人)が皆口を揃へて日本の舊文物、舊趣味や舊藝術や舊風俗を激賞し、あらゆる改良沙汰や刷新計畫を由ないことだと冷眼視して、或は明かに、或は隱に非難の聲をあげ、少なくとも趣味に關する限りは悉く舊態のまゝ保存するが日本國の爲であらう、生中の改良や新工夫は本來固有の美術、長所を打毀すも同然だと熱心に勸告せんと試るでもあらう。 衣食住ともに舊のまゝなのが理想的である、兵事、工業、政事、宗教、その他實務上の事は別として、苟も趣

味、好尚に關する點は決して國粹を失ふべきでない、簡易自然の生活は古希臘の善美なりし所以で、今の歐米人の學ばんと欲して難んずる所で、而してそれは今の日本の現に十分に備へ得てゐる所である、何を苦しんでか老西洋の腐爛し果てた風俗に倣つて固有の美風を拋たんとはするぞ、風俗も藝術もその純粹にして直截明淨なるところ、淸淡簡約なるところ、時としては纖細可憐、時としては蕭疎幽遠なるところに美所、長所があつて、いづれも及びがたいものであるのに、改良などゝはさて〳〵間違つた話、なまじいな西洋もどきはかたはら痛いことである、曰く云々、曰く云々と聲を揃へて現日本の傾向に不賛成を表し、舊文物の現狀維持を推奬するでもあらう。 事によつたらこれが當分の間日本へ來遊する外國人の定り文句(きまり)、日本人に逢へば必ず口にするといふ挨拶代りとなるまいものでもない。 名所、舊跡に遊んで名物の廢れたのを惜む心に虛僞(うそ)のない如く、觀光の外國人がおひ〳〵日本の特色が薄らいでゆくのを歎惜するのも僞りではない、必しも世辭ではない。 多くは日本の爲を思ふ深切心から言ふのでもあらう。 併しながら日本固有の藝術の美、風俗の美は外國人の鑑賞を俟つてはじめて知ることでなく、又保存し得られる限りのものは其の保存に力を盡すべきは勿論であるが、刷新又は創始の急が我々の身邊に逼り來つてゐることも事實である。 此際、其の世辭でないが爲と、其の言ふ所に多少の道理がある爲とに動かされて、又は此の聲援に捲土重來する保守派の鬨の聲に威されて、革新派の步調が大に亂れ、又は其の勢ひが阻み衰へるやうなことがあつては甚だ面白からぬことだと思ふ。

廿年も以前のことであつたが、小生がはじめて西京の風俗を見た時の感じは、思ふに、大がいの人々のはじめて西京に遊んだ時の感じてもあり、又外國人がはじめて日本を見た時の感じでもあらうと思ふ。それは一言で言へば「この土地だけは一切舊態のまゝて保存させたい」といふ感じである。さてそれを土地の人々に語ると、一面は喜び、一面は不賛成の意を表する。土地の事物を褒められるのは嬉しい。平生自分もさう信じてゐるものを褒められるのだからわるい心持はせぬ。しかしいつまても男女の風俗、衣食住の末までも此のまゝがよいといはれては不便なことが夥しい。激しい生存競爭に堪へられさうにもない。いや、趣味に關する點だけをといはるれど、實際は何事もよれつもつれつて引離されるものでなく、京都を擧げて公園にせぬ限りはさうもならぬ。煙筒が出來る世には汽車も通ればヒーローの廣告も是非に及ばぬではないか。併し京都だけならば場合と相談によつては日本の公園に出來まいものでもないが、日本を擧げて世界の公園にするは活動の血の充ちてゐる自尊心の高い廿世紀の日本國民には假初にも我慢の出來ることでない。保存の必要だけは外國人にいはれずとも夙に承知のことだが、一切の新しい企を排斥し、非難し、それに國民みづからが雷同するやうになつては國家の前途のため決して祝すべきことでない。外國人が我が風俗の美、藝術の美を激賞するに虚僞なく私心のないは諒とするが、それははじめて京都を見た人の感じと同じたといふことを忘れてはならぬ。俗にいふ私心はないが、鑑賞家的の自分勝手、漫遊家的の私心が籠らぬでもない。旅日記に書

留めることの尠いは甚だ面白くなく、土産話の乏しいのも妙てないものだ。他國の山水、風俗、趣味、藝術を歎美する心の底には多少之れを玩具扱ひにする心持が潜まぬでもないことを忘れてはならぬ。武士道は我が國の最も大なる美風の一つに相違ない。併し其の保存すべきは其の形式にあらずして精神である。形式と共に應用の法も改めねばならぬ。猶維新の王政復古がしばらくにして改進と變じ、憲法制定、國會召集と變つて來た道行に考へ合せて、最も廣い意味て溫故知新の法を講じないのは間違てある。風俗習慣をむかしながらに保守することをのみ力めるは第二の朝鮮たるに外ならない。如何に裾裳を長く引く婦人の服裝が優美だからとて不斷引いてゐてたまつたものではない。能樂は元信、雪舟同格の國寶でもあらうが、長へに之れにのみ安住してゐたら日本の藝術の進歩は停止してしまふてあらう。實用は實用、趣味は趣味と截然引離されるものとは思はれない。多少纏綿して離れないとすれば、舊趣味は舊趣味で千年の後までも國寶として保存し、或は新代の或部分に向つては活力の源ともなり、或部分に向つては昔を偲ぶの料ともなり、或部分に向つては參考の料ともなるやうにしておいて、それと同時に新趣味は新趣味で盛んに涵養し、扶掖し、新代の滋味たり活力たらしむるやうに力めるが正當てはないか。舊を舊として回顧し、追慕し、愛惜し、景歎するのみとなつては、個人ならば老衰、國家ならば澆季、心細い行末と許せねばならぬ。之れを要するに、我が新代國人が新しい趣味を苛求し熱需するのが渇者の飲を欲するが如くならば、歐

米人の新發展を欲しつゝある心も多少之れ類にする。度合がちがふばかりである。宗教、道德の上ばかりでない、趣味の點までも現代は世界を擧つて不安不滿の情態にあるといつてよい。これは東西兩世界が比隣の如くなり、上下三千年の文明がパノラマの如く眼前に展開された結果たるに外ならぬ。

嚢くことを知らぬ現代の向上慾よりいへば、傳來の藝術に缺陷もあり、又急灘の如き時勢よりいへば何等か之れに應ずるに足る新舟筏を造らざるを得ない。つまり彼れより見れば彼れの藝術や趣味は漸く爛れ潰えんとし、我れより見れば我が藝術の大がいは乾固まり、錆びつき、若しくは朽ちかけた氣味である。心ある者は義理にも安然としては居られない。而して彼の爛熟中に我が新眼を以て觀るときは、我が乾固中に彼れが新眼を以て觀るときは、そこに優かに清新の材料や要素があるといふことは疑ふべからざる事實、且つ其の事實に基いて既に激烈な交渉がはじまつたことも事實であるが、その交渉が一時は背中合せになりゆくらしく見えるから、或は多少の誤解や徒勞や行惱みが生じまいものでない。つまり趣味界の將來は二者の交渉によつて決せらるべきは明かであるが、どちらが最も多く利するかは未定の疑問である。外國人中日本趣味を稱美するもの、增加するを見聞して日本藝術の大勝利の如く感じ、日本藝術は長永に今のまゝにて足れるもの、如く感じ、一概に悅ぶべきことゝのみ思ふ人々もなしともいへねば、聊か思ひついたゞけを述べておくのである。（三十九年六月）

藝術界未曾有の大自由

アルコールに水を割つたばかりのやうな飲料も灘、伊丹の一本ぎも、細君手製の覆盆子酒も十年貯藏の舶來葡萄酒も同じ壜、同じコップへ盛つて出して誰れひとり文句をいふものなく、同じ代價には賣れぬまでも半額位の正札をつけたとて、飲んで見た上て未だ曾て法律沙汰になつたといふ話を聞いたことがない。今日こそは眞に賞翫界未曾有の大自由時代であらう。面白いことだ。五六年たつと、もう斯うは行くまい。苟も藝術に志すもの、生れ甲斐ある時代といふは、明治の盛代も今日只今が花の三日の眞盛り、文學界も藝術界も當分のところ平等無階級といつてよい。腕さへあればどころてない、腕はなくても度胸さへよければ、けふ產聲をあげたばかりでフロックコートにシルクハットをかぶつて、よち〳〵と押出しても何處の誰れも咎立はしない。ルネッサンスの全盛期でも、まさか此れほど自由ではなかつたてあらう。新演藝に志すものにとつては、ほんたうに有難い時代さ。

文學界に此の傾向の生じたは餘程前かたからだが、演藝界は、つい近ごろからである。併し二度も三度も讀返すとが出來るのと、じつと印刷されて殘るので彼此比較することも出來るためか、文學はまん

ざら純平等ではない。　又畫や彫刻は寫實といふ標準がついてまはるだけに、西洋摸倣の新式などは俗眼にも入り易く、巧拙も大分分る、二つには彼の古びとか寂びとかいふ骨董趣味が舊派の名作に貫目を添へるので、餘り大びらに自由だともいへぬが、きのふけふの演藝界だけは殆ど理想的に自由である。

とりわけ音樂、舞踏の方面には、少くとも此處一二年間程は二度とは見られぬ馬鹿らしいもの、氣の毒らしいもの、隨分腹の立ちかねぬものも入代り立代つて現れるであらうかはり、或は眞に斬新なものの端緒も發かれるであらうと思ふ。　朗吟、朗讀、新曲、新舞踏、新振事、新演劇、新話術などといふ名で、前代未聞の、東西の文藝を一晩で打つて饂飩にしたやうな化物も現れれば、思ひの外の異なものが醍醐味の前献立として現れまいものでもない。　それらが江戸式、武家式の各派の家元と時をも處をも同じくして演奏するのが見物だ。　どんな眞似をしたからとて、文明時代の有難さには江戸全盛時代とは違つてはゐねてから裏木戸ではりとばされるやうな心配もなく、土間の煙草盆に翼が生へる恐もなし。　その代り此の春季に逆上せあがつて卒倒するものもあらうし、押つぶされたり踏倒されたりする手合も多少あらう。　喝采の的をとりちがへるほどに勘のわるい手合は、自ら求めて深みへはまつて、命を失ふことも或はあらうが、その位の事は是非がないとせねばならぬ。　多分新時代の若手は怜悧だから、二三度驅けて見て息切れがしたなら自分でよすであらう。　驅けはじめに二十人、三十人の怪我人が出來たからとて、何も文藝亡國などと騒ぎ立てるにも及ぶまいと思ふ。　或は百を以て數へる怪我人が出來ようも知れんが、旅順一つ落すに幾萬人の生命を犧牲にした慘事を思へば、文藝界の大革新に自ら求めて死地に飛込むものが百人や二百人あつたからとて止むを得ぬではないか。　情では忍びないが、理の上では飽までも然う言はねばならぬ、只無責任に傍から煽動上げぬやうにして貰ひたい。　末頼もしいのは保護つても貰ひたし、褒めても貰ひたい。　なれども褒めるなら、責任をもつて褒めて貰ひたい、素人藝だからとて、そら世辭は罪な事だ、輕卒な賞賛もよくない。　江戸根生の若旦那連でも遊藝事には兎角目が眩んだり、耳が狂つたり、有頂天になりがちなものであるらしい。　況んや江戸式演藝とは緣の遠い連中には、迂遠い諷刺や反語は通じないのが習ひ。　眞褒と世辭との區別などはつかう筈がない。　演藝に熱衷する當座は誰しも赤子の如く正直で、自信は天才に劣らないものである。

江戸趣味を本位にしてゐた諸演藝は此れから十數年間は隨分手きびしい試錬に出逢つて、其大部分は必然の勢ひで廢れるであらうと思ふ。　彼の手品や曲藝などのやうな、目に訴へるが主で、意味はあつても第二、第三になつてゐるやうなものは別だが、耳や目に訴へるのでも、歌や詞が添つてゐるものは、もう迚も新代の好みには適はない。　近い例が九一だ。　本藝の曲撥、曲鞠だけは、何の意味もないのが萬古不易の估券で、高時以來、江戸以來、西洋人にも女にも子供にも洋行歸りの紳士にもといふ味だが、餘興に添へる立茶番以下に至つては進物の水引同然で、今の見物にはなくて事缺けず、有つてそろ〳〵邪魔物といふ氣味である。　それもその筈。　題材も樣式も滑稽も當込も一切が江戸好み、舊時代じた

て、第一今の人に通じないといふのが大弱點。寄席で生粋の落語が受けられなくなつて劍舞、浪花節、その他新物が喝采を博するも同じ道理。女義太夫が今尙多少の勢力を振ふのも、一概に女の勢力とばかりはいはれない。意味なり樣式なりが江戸趣味にかたよつてゐないからであらう。一派の批評家は之れを目して趣味の墮落といふが、成程今日のところでは此れも慥かに幾分の眞理だ。併し趣味が墮落したといふよりは舊い趣味が底の方へ沈み側の方へ押されて、新しい、未熟な趣味が表面へ浮き上り、擴がりはじめたといつたほうが當然である。今の多數が地方者だから先天的に趣味が分らぬのだと思つたら怖しい誤解。趣味がちがふのである。舊時代の好尙と新時代の好尙とが、大衝突をはじめて伏見の戰爭がはじまつたのさ。今は趣味界の維新に近づいたのである。

明治はあらゆる意味に於ける維新時代だが、國治つて文事興り、衣食備はつて藝術に手が屆く自然の理數から、趣味好尙の革命が最後に來たのである。つい此間までは新代の勢力が趣味界までは及びかねてゐたゆゑ、反動を起しかけても押しつけられ〳〵てゐた。地方者(ゐなかもの)ゆゑ分らぬのだと罵られて無念ながら引さがつてゐたものだが、おひ〳〵例の「自覺」の餘波にあぼられて逆寄せの氣運を作るやうになつて來たのだ。按ふに女の言葉づかひや服裝や髮飾りや持物が變つてゆくと同じ程度に、日本全國の趣味の中心が移つてゆくのであらう。畢竟、趣味、好尙の本躰は保守的のものだ。ちようど女が男に比して或意味に於ては執着的、保守的であると同樣に保守的である。其の理由は二者共に智慧を本

領とせずして感情を本領とするからである。くはしくいへば藝術は直覺が命だ。思慮計量を經、說明解釋を俟つて後に扱はさうかと感得するたぐひのものでない。されば、とつたか見たかの演藝に附帶する理窟や意味は、少くとも大多數にとつては見聞くと同時に即刻に呑込めるものでなくてはならぬ。聞く見る即時に電氣を感ずるやうにとはいかぬまでも、飲食物を口に入れたやう、せめて溫石を肌にあてたやう位には素速く面白味が意識せられなくてはならぬ。撥音、節まはし、服飾の色合、模樣などが耳や服に入るやうに、意味から、樣式から、一切の面白味が直覺せられなくては面白からう筈がない。演藝はどうしたつて本躰は遊びさ。見聞くはうは尙更のこと。心を遊ばしてゐることが出來るところに別天地の面白味があるのだ。說法や講義を聽くやうに心を勞し、觀察し、反省し、分析し、思索し批評せねばならぬとなつては、もうそれは仕事だ。專門家ならぬ多數人の堪へることではない。筋書位は兎も角もだが、苦心談を讀んだり、批評を讀んだりして出掛るは準專門家ともいふべきであらう。新代の地方人にとつては江戸式の諸演藝は西洋物よりも分りにくいであらう。小生なども本來の地方者ゆゑ、同じ道理で分らなさうなものだが、そこが維新前に生れたお庇か不仕合かで德川文學の感化で以て或程度までは地方にゐた時分から分つてゐたものだが、もうさういふ時代は夙に過去つてしまつた。今の少年には西洋文藝の粗筋のほうが文化文政物より耳近い。維新前の地方人が洒落本や人情本やで江戸趣味を吹込まれてゐたと同じに、今の少年は西洋文學の感化を受けてゐる

のだ。錦繪で見た團十郎が景負であつたやうに、聽いたことも見たこともないオペラ役者に戀をするのが今の青年である。彼等に江戸式演藝の分らぬ度合は、天保生れの江戸つ子に最近の西洋趣味が分らぬのと同じで、五分と五分だ。どちらへも團扇は上げられない。將來の理想を標準にしていふと、どちらも不具だが、どちらも棄てゝしまふわけにはゆかぬ。それぢやあ眞二つにして燒繼をするかといふに生きものだから然うもならぬ。當分は自然の成行に任すより外にしやうはなからう。

歌舞伎趣味は義太夫趣味と同じく、流石に江戸趣味と狹く限られたものではないが、それさへおひ〳〵危なかしくなつて來た。新代の若い男女には「忠臣藏」や「千代萩」でさへ、第一先づ筋が分らぬ。すぢりもぢつたあの筋立だ、分らないといふはうが尤だ。況んや古名優の仕來りなぞを聯想して生ずる手數のかゝつた感興なぞが起らう筈がない。作に現れてゐる思想感情が新代とは風馬牛である上に、扮裝から擧動から言葉つきから囃子、鳴物までが奇異に思はれる。よしや不快又は滑稽に感ぜぬまでも、不審とか奇怪とか不自然とか不調和とかいふ感が先に立ち、それが爲に見聞く當座に悠然として神を遊ばせて忘我することが出來かねるのであらう。嘗て七八歳の少女が（尤も、多少音樂好の生れだちではあるが、）父母と共に殆ど全日の間能を見通し得た癖に、歌舞伎芝居の三四時間を辛抱しかねたのを見て考へたことがあつた。これは生中に幾分か意味が分るだけに退屈をするのである。芝居には音樂的の面白味が薄いゆゑに、直覺一方の子供には見づらいのだなと察したことであつたが、今の青年、とりわけ地方出の人たちが江戸式演藝に對するとき、多少之れに類することがあるのではないか。

江戸藝のうちで長唄だけは、今尙といふよりも明治になつて一段手廣く持囃されてゐる氣味があるが、これとても今のまゝて押してゆけば行末が覺束ないものだ。第一、出し物にも窮することであらう。さう〳〵は勸進帳、鞍馬山、筑摩川でもあるまい。さりとて研精會、長唄會のやうに長唄の本領發揮を力めたところで、それは參考室もの、多數にはむかぬ。むいたところで曲節も多少妖艶、それに狹斜を理想とした文句、筋立、所謂鄭聲、それを改修すれば明けて悔しき玉手箱の裳ぬけの殼で、ほんのすうつとしたものになつてしまひ、生粹の江戸通は「止んぬるかな〳〵」と歎息して河東か一中かにかくれ、ハイカラはビフテキの代りにすまし吸物たつた一椀あてがはれたやうに思ふであらう。どちらへも不首尾だ。こゝで思ひ切つて一大飛躍をする家元が出れば知らず、今の爲躰では假令新曲章が陸續と出來たとても長唄は程なく行きづまりだ。手を細かく附け、節を巧に廻さうとするから、いよ〳〵出ていよ〳〵巧みに、漸くせゝこましく、纖巧はあつても暢らかな大きな味が乏しい。わるくすると近いうちに一大頓挫を經驗するであらう。それといふが、今日までの彼等は歌舞伎役者と同じく交際が妙に舊趣味界に偏つて、とかく新代との緣が遠く、時勢の推移が目に見えぬからである。清元や常盤津に至つては尙更の事である。

元祿文學復興の餘波で、新代の地方人中にも案外に通人肌の青年もある。中には特に俗曲の研究に心を潜め、振事などを喜ぶ向もあるが、これが浮氣でなく、好事でなく、大眞面目の修養をつゞけたなら、或は第二の反動期のチャンピオンとなるのでもあらうか。目下はその勢力微々たるものだ。いづれにしても此處幾年間は江戸式演藝危急存亡の秋といはねばならぬ。

俗曲界の某名手が六十幾つながら、奮つて其の子と共に西洋樂を學んで見ようと志したといふ噂を聞くにつけ、或能樂の老名手が、酒興の上とはいひながら、油畫の背景を能にも移して見たいといつたといふ話を聞くにつけ、某々俳優が洋行せんとしてゐるのを聞くにつけ、脚本の饑饉が漸く甚しくなつたのを見るにつけ、風雲の轉た急なのが思ひやられる。

しからば將來の趣味は全く江戸趣味と手を絶つてしまふのかといふと、こゝが尙一大疑問。攘夷の方針がいつの間にか開國となり、復古の國是がいつの間にか立憲代議となつたやうに世の中は廻り燈籠には相違ない、が政治上、社會上の事と趣味好尙の問題とは同脉か不同脉かゞ疑問だ。競馬場に變形した不忍池畔を見るにつけ、戸山學校の構内に尾張やしきの舊庭園を偲ぶにつけ、進取と同時に保存を忘れてはならぬと思ふ。畫や建築は廢れたからとて消えてなくなるものでないが、音樂や演藝は棄てて五六十年もたつたら、或は取つてかへしがつくまい。音樂はまだしも譜に取れようが、振事に至つては保存の法が無い。藝術の大自由は悅ばしいことだが、これが又心配だ。（三十九年五月）

高雅なる社交的遊戯

香、花、茶の湯、歌、俳諧、琴、碁、書、畫など、明治以前にありては此等を女子の高雅なる遊藝とも娯樂ともしたりしが、時勢の改れる今の世には、かうばかりにても物足らぬ思ひあり。餘りに靜坐的なると餘りに打沈みがちなるとが社交と活動とを第一義とする現代の需要にはふさはぬなり。もとより此等を棄つべしとにはあらず、何等か新らしきものを增し加ふべき必要あるなり。

在來の遊藝のうちにも、多少の修正又は洗滌を加ふれば、社交と活動とに適するらしきものゝ無きにしもあらず。（箏の琴も例の三曲式の合奏とすれば當世樣にも適ふべく、淸樂將た用ひどころあるべしと思へど、今爰に取りいでゝ言はんとするはそれにはあらず）。例へば三味線樂、それに伴へる諸種の淨瑠璃、常磐津、淸元、富本、新內の類、長唄、歌澤のたぐひ、舞、踊、振事、更に進みては義太夫淨瑠璃、歌舞伎、又は男のみがすなるものゝうちには謠曲、仕舞、笛、鼓、太鼓、それらを纏めて本式にしたる能及び狂言、品下りては講談、落語、茶番など。これら、從來は或は全く賤惡忌避せられ、或は假初にも女子の與

るべからざるものと見做されたるもさることにて、如何に自由主義の目を以て見るも、有形のまゝにては、或は餘りに男々しくてぎごちなく、或は賤しく、粗く、或は其本質上又は其の連想上に忌むべき節、憚るべき廉多くて、到底上中流の女子がみづから物するにはふさはしからず。演ぜしめて觀るもの、聽くものとしても今のまゝにては如何はし。

さらば西洋新輸入の遊藝、といふうちにも西洋樂はいかゞといはんに、これは目下のところは珍らしさ七八分、正味二三分の氣味なり。西洋樂器のうちにも最も家庭に氣受よきは、手ごろなるためにヴイオリン、廉なるためオルガン、次にピヤノといふ順序らしきが、專門は別として、おしなべて眞に樂しむといふ程に、(在來の三曲などの趣味を解するほどに)西洋樂の趣味を解し得るや否や、即ちさほどまでに今の社會の樂趣味は進みたりや否やといはんに、此點尙頗る瞬味なるものゝ如し。先づは往年一時流行せし清樂などゝ同調子の氣味あり。合奏など催さんに、奏する人々みづから樂しむほどには、傍聽する人々は喜ばぬが通例なるが如し。奏する當人とても專門の少數を防くの外は、多少心底に疑惑あるにや。其の證據の一つをいへば、ヴイオリンとピヤノも現に打解けての遊びとしては、兎もすれば長唄其の他の俗曲の譜に合せ奏すること流行す、專門家は眉を顰むれども遊びとしてはそこに娛みは多げなり。按ふに此の推測にして誤らずば、西洋樂が我が家庭乃至社交上の普通の娛樂となるまでには、尙若干の變遷、尠くとも其の旋律又は歌詞の上に著しき變遷を經ざるべからざるものゝ如し。

樂既に然り、近頃西洋舞踏また芽ざせりといふ噂あるにもかゝはらず、それが我が社交上の遊藝として廣く歡迎せらるゝの日は恐らく尙遠かるべくや。まして素人オペラの催しなどをや。

活人畫、これも西洋傳來にて、物言はず、目口手足の動かぬだけに見た目に厭味なく品よき遊びには相違なけれど、費用の夥しき割合には氣の利かぬ遊びなり。如何なる不器用なる者にも出來る代り、出來たりとて餘り手柄にもならず、江戸式の藝には無き圖也。されば こそ内外共に近來は同時にふさはしき樂を奏し、又は歌詞を吟唱して、聊か畫面に内容を加へ、又は幕を重ね、或は幾回も幕を上下し、かくて畫樣を演劇式に變化せしめ、活動せしむるなど、多少の新工夫を試る向もありとか。されどこれは要するにせうことなさのわざくれなり。物を言ひ、目口手足を動かさば必ずや醜し、賤しと定りたる譯もなし、其の道の素養あり技倆さへあらば、其の畫面のまゝの扮粧にて其の歌詞のまゝを朗吟して、緩く舞ひ、徐ろに科介せば、一段と面白かるべき理合なるをや。

我が國にて演劇風の遊びを賤しむは、前にもいへる如く、一は河原乞食、遊び人、幇間、不品行、藝娼妓との關係などいふ快からぬ連想にも原けど、一は其の本來の性質にも原けり。殊に丸本物と稱するたぐひに至りては、三味線樂の一段繁く伴ふだけに浮靡の譏り一しほ也。二つには其の餘りに淺俗なる、餘りに不條理なる筋立、其の作中の人物の人がら、ともすれば雜る鄙俚猥雜なる言葉づかひ、餘りに不自然なる又は濃厚なる扮裝、科介、せりふづかひ、一體に高からざる氣韻、低き道德の調子などが、尠くと

も見なれ、聽きなれぬ人々に不快の感を與ふること事實にして、如何に文藝の獨立を主張せんとする論者とても常識ある以上は絶對に否とは言ひ得ざる所あり。彼の明治以來盛んになりし團十郎張の活歴劇に至りては、流石に此の嫌ひやゝ尠きに似たれども、これまた到底素人（アマタア）、就中女性の手には乘らぬが多し。セリフ廻しと肚とて見する芝居は丸本物よりもむづかし。丸本物、振事物は一わたり稽古すれば型のあるおかげにておさらひ並には成功せぬとも限らざれど、所謂活歴に至りては敎へんも術無なければ餘興並の成功も覺束なし。加ふるに手ごろの一幕物などもなく、それこれ試みんといふ連中ありとても行はれぬ話なり。

或は我が俗樂を辯護して、三味線其物に何等の罪もなし、只歌詞又は着想の非なるのみ、旋律又は音色などに先天的の瑕疵あるにあらず、連想上、歴史上の嫌ひあるのみ、今の曲人、樂人の人がらが卑しき爲のみ、といふ人もあれど、いかゞにや。予は思ひたつことありて、研究上の必要より、此十餘年家人に俗曲を習はしめて、利害一渡りは含味したる積りなるが、歌詞、着想、脚色等の事、歴史、連想等の事は全く別題として考ふるも、俗曲は雅正の調、雄大の聲などと稱美しがたきは勿論、大體は纖弱、浮靡、時としてはそれよりもあしき評判をさへも甘受せねばならぬ本質のものならんと思ふなり。總じて美術は其時代々々の好尚の結晶、俗曲は元祿、享保の華奢豪放に生ひ立ちて文化、文政の浮靡淫蕩に爛熟したるものなる以上は、該好尚の影を宿し、該傾向の臭ひを含めること必然の勢ひなり。おしなべていへば、三味線の音色にも、歌章の旋律にも、囃子の調子にも、舞の手にも、踊の振にも、狹斜趣味、肉慾趣味、媚嫵の態、艶冶の致、一言以て蔽へば兎角仇めき、なまめける、浮きたる趣味の多少附帶するを免れざるなり。附帶すればこそ歡迎せられ、流行したりしなれ。比較的近年の作に係る長唄などのうちには此の臭ひ大きに薄れ氣味のものもあれど、尚ほ雅正とは稱しがたく、莊嚴、雄大、又は高古、淡遠などいふ性質に至りては、之れを長唄にだに求むること難し。

之れを要するに、歌舞伎劇が大體に於て道德的調子低く、加ふるに種々の他の理由ありて良家庭の娯樂に適せざることも否みがたく、俗曲將た粗（はゞ）同樣の理由によりて、所詮は鄭聲といふ非難を否みがたきことも事實なり。予は現に社會に向つて振事劇の振興を主張しつゝある當人なれども、研究としては格別、高尚なる娯樂又は遊戯として今の良家庭に向つて、彼の「太閤記」、「二十四孝」、「菅原」、「忠臣藏」等を演じ試みよと勸むる勇氣はなく、清元、常磐津は勿論、長唄の振事などを稽古せよと主張する自信もなし。害多くして益少きを知ればなり。たしかなる主導者ありて、堅く高尚なる目的を立て、さて眞摯なる熱心を以て其の事に當らば格別、さもなくて此等遊藝に耽るときは、藝其の物より生ずる弊の外に、種々の妙ならぬ結果を生ずること必然にして頗る恐るべきとなり。

おからば男のみのすなる能樂は如何。近年は女流にて謠曲又は仕舞に堪能なるも間〻ありとか聞けり。又泉某親子の演ずる泉能をも觀たり。これは格別醜くはあらず、又弊も無げなれど、只何となく

借衣めきて落ちつかぬものなり。それもその筈、作意から、扮裝から、科介から、音吐から、一切が男子にとて、武家にとて作られたるものを、束髮仕立の明治の女性が演ずるなればなり。木彫の偶人の如くに角立ちシャチこばりたる能裝束、假面を着けぬときの男姿、あまりに生眞面目なる眼ざし、一の字口、態とらしき仕舞の指す手、引く手などは、女子が天禀の風姿美を發揮するものとしては妙ならず。又彼の讀經聲に似たる謠曲の節廻し、ともすれば太く強く又低くバスに聲を使ふことが女性が持前のソプラノを殺すことゝなりて妙ならず、到底社交用の遊藝たるに適はざること勿論なり。

或は今日既に活人畫などゝ共に稀に行はるゝ新體詩の朗吟又は美文の朗讀を今幾段か發達せしめて一種の遊藝となさば如何。秀でたる小說、脚本などを西洋のエロキューションに倣ひて、或は諳んじ、或は役を分ちて朗誦するなどは如何。これは男生に對ひては予みづからも嘗て試みしことあれど、やゝ藝と稱するに足るものとならしめんには種々の困難あり。第一に師表なく、第二に恰好の臺本なく、隨つて學びにくゝ、成りがたし。蓋し此れは我が國に限る缺點たり。彼方にはエロキューションの師幾らもあり、それに關する手引草のたぐひも許多あり。シェークスピヤをはじめ恰好の臺本幾らもあり。我れには朗讀の模範は勿論なく、參考とすべきものとても、說敎、演說、講談、落語、俳優の白廻し位のもの、臺本も言文一致の小說か、落語、講談の速記か、淨瑠璃本か、近作の脚本位のものなり。講談、落語は女子に適すべくもなし。然ればとて在來舞臺に上せられたる淨瑠璃又は歌舞伎の臺帳又は

新演劇の脚本などを採用するときは、自然の勢ひとして女義太夫の氣がさし、某々俳優の假聲めく嫌ひあるを免れがたき習ひなり。悉く義太夫化し、白化して相應に巧なるを得ば、それはそれにて愛みながらも聽く人あるべけれど、似て而して拙きものほど堪へがたきはなし。さらば此等の嫌ひなき別種の作を取らんかといふに、今のところ然る作殆ど無し。曲として作られたるものなどは勿論非なり。或は森鷗外君の『辻說法』『兩浦島』などは淸淡にして雅馴、先づ最も此の目的に適せんかと思はる。但し後者は主として七五調にて綴られたればとは淸淡にして雅馴、先づ最も此の目的に適せんかと思はる。

敍事式の文章を讀みても朗讀術を修め得べしなど思へる人々は未だ其の第一義に通ぜざる人たるに幾し。朗讀の極意は演劇式たる點に存すればなり。或は思ひ〳〵の工夫にて新體詩の朗吟を試る向もありとか聞けど、これは高雅なる藝としてはいかがあらん。音樂的天才の工夫に成らば知らず、只の人が我流にてすなる謠ひぶりは、兎角詩吟節、薩摩琵琶歌節、浪花節、祭文節、いや〳〵、わるくすればそれよりも厭なものに似ること多くてあさまし。女性などは試みぬに如くことなきか。只すら〳〵と讀むまでは仔細なし。

或は思ひ切つて一足飛びに假髮を被り、化粧を施し、衣裝もつけて、ずつと西洋風に、新作のコメデー乃至お伽物、寓意物などを演ぜんはいかゞあらん。今の所謂新演劇などに比して一段も二段も雅淡な

る、上品なるものを演じ試みては如何。 悲劇だちのものなればこそ多く技倆をも要し、隨つて巧みなれば巧みなるまゝに厭味あり、拙ければ拙きまゝに醜きこともある習ひなれど、只あつさりとをかしきまでの劇にして茶番又は俄などゝは全く立離れたるものならば、假令男女入まじりて演ずとも差支あるまじといふ說もあれど、いかゞにや。 男女交際の地盤さへまだ固まらぬ今日、これは言ふべくして或は行はれざるに近からずや。 最も女性ばかりにて演ずる分には故障もあるまじけれど、女性の男扮裝、束髮頭に眉だけ男らしく畫いたる、强ひて太く聲作りしたるなど、源氏節の芝居、女劍舞、ホーカイの踊などふと思ひ浮べられてあさまし。 女が男の眞似するは、男が女の眞似するよりも厭なものなり。

或は更に大膽にオペラの眞似をして見てはといふ說もあり。 音樂學校に於ては既に一度試みしこともありとか。 これも今のところ費用の夥しき程には、人騷がせ程には、興もなく、益もなく、只一寸物珍らしいといふまでのものゝ如し。 それも我が國の神話か傳說かに材を求め、旋律もやゝ皇國風に物して演じたらば知らず、外國のを强ひて撫でたやうに意譯して歌うて見たればとて、第一メリハリからが異樣なれば、悲喜哀觀の情が(專門家以外には)移らず、譬へば洋行した夢を見たるやうな心持にて五里霧中にて終るも是非なし。 眞に面白しと思ひて日本人がオペラを觀又は演ずるに至るまでには尙數十年かゝることなるべし。 總して遊戲、美術の類は直覺と聯想とが命なれば、聽いたる當座に其の面白味が胸に沁み渡らぬやうにては效なし。 是れ他方に於て、假初にもよからぬ聯想を起さしむるものを忌避する所以なり。

しからばツマリ如何にすべきかといふに、全然新しきものを作りいだすより外に思案なし。 德川時代の遺物も不可也、西洋よりの借物も妙ならず。 明治は明治の遊び、廿世紀は廿世紀の娛みのあるべき筈なれば、國民の特質、時代の精神、歷史、習慣、風俗、人情、遺傳の好尙、因襲の直覺等に鑑みて新に何物をか作りいだし、一面は以て情育、美育の幇助たらしめ、一面は以て家庭を調和し、社交を融會するの具たらしむるが一日の長ある人々の責任なるべし。 さて其の新案はといふに、これはやゝ込入たる問題なれば、到底爰に說盡すべくもあらねど、只一言抽象的にいへば、日本風、明治式の新樂劇又は新所作事こそ最も適當なるべけれといふことなり。 換言すれば、予が新樂劇論中に說きたる趣意を、多少の修正を加へ、取舍を施して、女子の遊戲、家庭及び社交の娛樂といふ方面に應用せんことを欲すといふに歸す。 されどかばかりにては誤解を招き易し、他日閑を得て又語ることあるべし。 今は只在來諸藝の新時代に適切ならざることを辨へおくのみ。 (三十九年二月)

音樂と繪畫

嘗て「新樂劇論」の中で、「能」の傑出したのを正倉院の御物に比較して論じたが、あれは主として過去の好尚の紀念、舊理想の結晶、國粹である、國寶であるといふ點をいつたので、何も悉く庫の中へしまひこんでしまへと云ふ意味ではなかつたのだが、或は誤解した人もあつたらしいと思ふから、お尋を幸ひ今日は少々比喩の續足をしようと思ふ。

凡そ一國の美術は、其時代々々の人情、風尚の反映であるから、繪畫、音樂、詩歌と互に質を異にするにも係らず、時と處とを同じうして出來たものには自ら相通ずる系脈の存在するとは必然である。されば我が音樂の變遷や特質を論ずるに當りて之れを我が國の繪畫のと比べて見るとは、他の抽象的に論じ去るよりも多少分りがよからうと思ふ。手元にある藤岡博士の「近世繪畫史」を枝折にして一通り比べて見ませう。無論、比喩のことですから十分ピッタリとはゆかぬが、まあ大躰について比較して見ると、彼の朝廷の式樂たる「雅樂」は、言はゞ寛平、延喜以前の繪畫、即ち只管支那や三韓の畫を模倣してゐた時代、河成、金岡以前、平安朝以前、古今集以前の繪畫に比すべきものであらう。尤も、中には土佐家の最古の繪卷物などに比すべきものもあらうが、概して延喜以前の外國傳來品と見てよからうと思ふ。

さて又「能」は明かに足利時代の產物、取も直さず東山時代の繪畫である。即ち雪舟派、狩野派です。土佐派の畫もいくらかは比較中に加へられようが、多くは雪舟や元信の畫の趣があつて、「雅樂」の場合とは趣は大きに違ふが、尙どことなく外國の感化を受けたらしい面影がほの見えて居る、即ち元時代の雜劇によつた跡と共に佛敎的感化の影が脚色や樂調に隱然として居る。元來北宗畫といふものは隨分華やかな彩色に富んだものだといふ事だが、我が國へ取り入れたのは多少禪味を帶びた、寂しい、澁い方であつて、支那のそつくりでない事は明かである。「能」も同樣で、幾分は元の雜劇を模したものであらうが、彼れの色氣のある所や、賑かな、騷がしい、富麗な所などは殆ど取らずに、徹頭徹尾佛敎趣味で、先づは枯淡な方面に偏した氣味。そして北宗の畫には寫生式のものがあるのに、東山時代の畫は概して寫意が眼目となつてゐる。「能」も同樣で、寫實はむしろ其の忌避する所で、理想といふことが其の生命である。隨つて叙事詩や劇詩に近いよりも抒情詩に近いのである。所謂リ、カル、ドラマです。序ながら、私の用ふる「樂劇」といふ語はミュージックに基くプレーの義で、此のうちへは希臘上古のリ、カル、ドラマも入れるし、中古の伊太利マスクも入れるし、オペラ一流のも入れるし、ワグチル式のも入れるのである。ワグチルが自分の作をオペラと混ぜられるを屑しとせずして「ミュージク、ドラマ」といふ新名稱を造つたからとて、漢字で書く「樂劇」といふ語をさへ彼れの以外に用ひがたいやうに思ふは西洋崇拜に過ぎた話、拘泥の甚しいものであらう。「樂劇」といふ語は「繪畫」と

いふ語と同じ理で、彼れが野蠻の書、小兒の書くヘマムシ入道にも用ひらるゝ如くに、此れはトッピキビの二十五座にも用ひられると信じます。

之れを要するに元信、永德、探幽等、狩野派の巨匠の作に比すべきものゝ「能劇」中にある事は、ほゞ斷言が出來る。 さて又、此等巨匠の作は永く我が古美術として、又日本畫道の千古不磨の參考品として、且つ愛玩し且つ回顧して長へに向上の地盤となすべきものたるには相違ないが、いかに雪舟や探幽が巧妙であるからと云つて、此の以上には出難いものと自から限り、拘々として其の格式を墨守して居つては國畫向上の道が長へに塞つてしまふと等しく、「能」が如何に高尚で莊重で優美であるからとても、そこに滿足し安住して居ては到底國樂、國劇の進歩發展を見る事が出來ぬは言ふまでもないことです。（雪舟、探幽一點張で日露戰爭等の畫はかゝれまい）。

されば とて、妄に改良々々と呼號して古美術の格式を破ることは考へ物である。 さて爰に至つて少々比喩が適らなくなつて來る。 蓋し畫の方は、古いものは古いもので十襲して取除けておいて、これから畫くものだけを破格にするとか新案を加ふるとかすることが出來るから、如何に突飛な改良をはじめたところで、雪舟は依然として雪舟、探幽は依然として探幽で、華族や富豪や好事家の寶藏に長へに殘つてゐるからよいのだが、音樂や演藝に至つては、古いの其のものが仕舞ひ込んでおくとツイ消えてなくなつてしまふといふ、言はゞ無定形のものであるから厄介だ。 而して一たび其の格を崩し始めると必然の勢ひ本家本元までもダラダラ崩れに崩れる事となる。 古音樂や古演藝に生中の修正を加へるのは恰も土佐、狩野の古名畫の保存せられたるものに油繪の具で新彩色を施して見たり、或部分を洗ひ落して見たり、さては陰影や別線を加へるやうなものでありませう。「能」や「丸本物」を改良しようと試るは古寶破壞に終らざるを得ない。 德川時代三百年間に行つた改良や修正は人情、風俗、制度、文物が同脉であつた頃ゆゑ甚しい破綻を生じなかつたのだ、もう明治の今日は改良沙汰嚴禁の期である。 改良する人達の感想が作物の本意と相容れない。 此の理をよう考へて貰ひたい。

さて又、「淨瑠璃劇」「歌舞伎劇」に至つては恰も浮世繪に比すべきものであらう。 而して古淨瑠璃劇は、少々勿躰ないが、年代上先づ岩佐又兵衛の繪でもあらうか。 近松あたり元祿、享保頃のものは菱川師宣、及び其の亞流か、それから寶暦以後天明、それから文化、文政の頃歌舞伎劇及び所作事などは歌麻呂乃至宮川長春、奥村正信などに比すべきものでもあらうか。 さては豐國、國貞、芳年乃至北齋一派といふところでもあらうか。 品位といひ、題目といひ、ともすれば多少 *pornographic* に流れる點に双方一致する所があります。

さて繪の方に於ては、流石に保守的な德川時代に於てさへ種々の新派が浮世繪以外にも起つてゐる。 從來の格式に拘泥することなく、古くは土佐、狩野より、近くは浮世繪乃至油繪までの諸長所をば打つて一丸とせんと試みた頗るアンビシャスな種々の大家があらはれた。 應擧の如きは其の適例である。

又彼の文晁、容齋の如きも多少其の氣味で、惡くいへば孰れも謀反人、破格者で、褒めて云へば自から古へを成さうとした集大成家である。 德川氏の始には例の探幽といふ一豪傑があつて雪舟以來の諸家の長所を集大成せんと試みたが、應擧等もまた其の志と方針とは彼れと同じであらうと思ふ。 しかしこゝに至つて比喩が又一蹉跌せざるを得ない。 何となれば音樂や演藝の方に於ては此等の革新に比擬すべき程のものが殆ど無いからである。

近松巢林子と竹本義太夫とは先づ探幽プラス菱川師宣ともいふべきもので、從來の諸樂劇的要素を打つて一丸となして國劇に一紀元を劃してゐる。 併し近松以後に於ては同樣の働をした巨人がない。

其の故如何にと云ふに、これは畢竟繪畫と演藝との本質の相違に基くのである。 畫は一天才の固有の力と其の修養と勇氣と勤勉と忍耐とで隨分空前の革新をもなし得べきであるが、換言すれば、能く逆境に耐へ、俗論に勝ち、五十年一日の如く拮据し奮勵したならば、假令其の初めは如何に冷遇され、等閑視されても、竟には世に知られ、歡迎され、功を奏するに至る時も來るのである。 然るに音樂や演劇に至つては到底一個の天才のみの力を以てしては、よしや如何に身を献じてかゝつたとても何事をも釀し得難い場合がいくらもあらう。

元來音樂や演劇、就中音樂を用ひて演ずる劇に至つては、是非四つの物の拍子が揃はなくては革新は扨おき、改良すらも行ふ事が出來難いのである。 さて其の四つと云ふのは、一には詞章を作るもの、即ち詩人、二には曲譜を作るもの、即ち作曲家、三には舞臺にて演奏することを司るもの、即ち俳優及び奏樂者、四には之れを歡迎する保護者(パトロン)即ち聽衆(時尙)である。 そこて此の四つの中の一つや二つ位は隨分揃はせることの出來る場合もあるが、四つとも揃はなければといふのて大困難が起る。 これが其の革新の實を擧ぐるに難い所以てある。

どなたも御承知の如く、ルチッサンスの末に當つて伊太利に新樂劇の端が開けた時の歷史を見ると恰も前に申した事が證據立てられる。 當時の詩人と音樂家と、それからそれを保護する貴族との結托と努力によつて出來たのであつた。

近世に至つてはワグチルのやうな稀有な天才が出て、自分一人で三拍子位を受持つことが出來たのであつたが、それてすら其の成功を見るに至つたのは、御存じの如く、七十餘歲までといふ長命てありながら、やつと晩年のとてあつたのを思へば、樂劇革新の業の如何に此の上なく困難てあるかゞ分りませう。

こゝに於てか、「能劇」成りたち、「淨瑠璃劇」成りたち、「歌舞伎劇」成りたつまでは駸々として且つ着々として進んだのであつたが、それ以外には大して斬新な發展を見ることを得なかつたのは無理ならぬことである。

尤も、德川時代の末に至つて、追々需尙の改り來るにつれて、劇の方面に「生世話物」や「活歷物」が出來、

所作事の方面にも多少變遷の兆が見えはじめ、「勸進帳」のやうなものが現はれた。若し止むを得ずんば、これらの運動をば應舉や容齊などの筆脈に比すべきでもあらうか。

樂劇といふ方面は先づ其れだけだが、なほ日本音樂の中に名譽ある箏、尺八等は何に比したらばよからうかといふに、箏は先づ其の大躰の質をいふと德川時代の土佐派などに比すべきものであらうか。即ち彼の光起以後容齋出づる前の土佐派、住吉派などいふ土佐派に似て居りはせぬか。たかゞ四條派位にしか働かないものではないか。方々へ應用せられ、上品でもあり優美でもあるが、何れかといへば源氏物語式又は寺社緣起などを書くに適して居るもので、非常に雄大な趣味、豪宕の風情を寫すには適して居ない。彼の楠公の訣別や廣瀨中佐の戰死などを箏で演奏するのは、どうも適らぬやうに感ずる。詞と樂と調和せぬやうに感じます。尤も近ごろ今井慶松氏などが色々工夫を凝らされるやうに聞いてゐるから容齋の歷史畫的活動がはじまりつゝあると見てもよいかも知れない。

次は尺八だが、これには適當の比喩が思ひつかぬが、一種別格といふ點から言へば光琳などに比すべきものであらうか。但し特質、趣味、應用を比べたのではない。光琳はあの通り端手な、艶な、酒落れた趣致を帶び、尺八はむしろ其の反對に寂し味を帶んでゐる。又光琳は理想化した畫で、實物には遠い、而して尺八は往々にして自然の聲に接するやうな思ひを起させる。

北海道の土人が尺八を弄ぶと聞いてゐますが、成程追分節のやうな人間天眞の聲に近いものに合せるには嘸かし妙であらうと思ふ。このやうな譯だから、尺八を光琳の畫と比べたのは、單に別格といふ點に於てであるが、強ひて比喩を押廣めれば、只是れ一つでは餘り單調子であつて千變萬化の複雜な感情を奏し出すには適して居ないといふ點に於ても、兩者やゝ互に相似たる所があるかと思ふ。兎に角光琳の畫は一種の裝飾風のものとして妙であらうが、何もかも此の式で畫かうとすることは難からう。其の傾が尺八に於ても見出されるのである。

畫と樂との比喩はまづ此れ位で止めて、今一つ「新樂劇論」の不足を補つて置きたい事がある。それは西洋の劇は主として科白劇であつてオペラ以外のものは非樂劇式に發展して來てゐると申しておいたものゝ、歐洲最近の傾向は漸々樂劇式を純劇の方へ取入れよう〳〵とする趣をほの見せて居るといふことを言ひ添へたい。大陸の方もさうのやうですが、英國などの劇の傾向を見ても、漸々音樂の利用が多くなつて來てゐる。過般アーヰングが演じた「ダンテ」の如きも、目に訴へ、耳に訴へる部分が夥しくなつて、所謂スペクタキュラルに流れてゐたらしい。又先日讀んだ「アート、イン、ゼ、ナインチンス、センチュリー」にも歐洲の劇壇が此の方面へ向つてゐる事を論じてあつた。これには種々の原因があらうけれど、一つは段々人を呼ぶ工夫に窮して、只管目先を變へることを求めるからであらう。かの英國劇壇全盛のエリザベス時代に於ても、末には段々と目に訴へ耳に訴へることを主にするやうになつて來て、沙翁の如き大天才を以てしても尙晩年には種切れになつたか、それとも俗尙を

迎へざるを得ざる理由があつたか、又は更に遠大な理由があつたか、晩年の作「テンペスト」「シムベリン」「ウインタアス、テール」などには慥かにマスクとも云ふべき脈、變則の所作事めいた脈を夥しく加へてゐる。演劇進化の順序として免れぬ所と見える。

之れを要するに歐洲劇壇今日の傾向は、吾々日本人が取らんとする傾向と殆ど直反對らしいところが面白いではないか。畢竟、其の傾向の相背くに拘らず、陳套に倦んで先づ形式の新案を求めるといふ點に双方共一致してゐるのである。

按ふに我が國のは從來餘りに樂劇式に出來上つてゐたのだから、此の際大轉化の法としては、一旦斷然と分離して夫婦別れをして藥劇式は樂劇式で獨立し、純劇式は純劇式で別世帶を持つことに改めるが、大解脱の善巧方便でもあり、目先も落想も著く新らしくなり、隨つて向上の道も開け來るべき次第であるが、彼方は丁度其の反對で今迄あまり分離して居た方だから、此の際二者を接近せしめて以て新局面を開かうとの案を立てつゝあるのも不思議ではない。

嘗て「文藝と教育」の中で、私が理想の劇を論じた時分には、我國に從來行はれてゐるやうな雜種式が却つて眞の永遠の理想に向ふ方式ではないか、よしこのまゝで行かないまでも、これを醇化する事が出來たならば、かの純劇とか樂劇とか云はれて居るものよりは一層圓滿に近いものではないかといふ意味の事を論じた事がありましたが、今も尙其の考は棄てたのではない。

凡そ人生の事は何れも初めは混沌として居て、後ふきわけられ發達して、更に又融會するに至るが進化の順序であるが、演劇も同じ歩武を取るものであるやうに其の時分は感じてゐた。

今日とても、全く其の考を棄て去つたのではないが、先づ今日の所では、一旦截然として引き分ける事が必要であると信ずる。此の際一度舊樂劇式を解脱し、舊雜種式の弊を除かなければ、新發展の道は到底立たないと思ふ。

彼の雜新の際に立憲政體に進む半無意識の準備として一旦王政の昔に立戻つた如く、あまりに複雜に發達し來りたる我が劇は今や "*Return to Nature*" と言はぬまでも *simplification* の必要を切に感ずる時期となつた。今はもはや修正又は改良といふことを唱ふべき時ではない。全く別格の立脚地を定めて大進歩の策を講ずべきである。舊いのは舊いので保存することにして、全く斬新な活動をはじむべき時であると信ずる。（三十八年一月）

能樂研究の順序

能樂研究の必要なる所以

今日は能樂大流行の時代らしく見ゆれども、其の實は何事も新舊移り變りの時代なれば、能樂に取りても、今日は頗る警戒すべき大事の瀨戸際なり。能は既に全く發展し盡したる藝術なりや否や、若しくは又尙ほ將來に新發展を爲し得べき餘地を有せりや否や、語を改めて言へば、能は有形の儘に只大切に保存すべきか、或は時勢の必要上何等かの改修を施さゞるべからざるか、若し改修を施すとすれば、果して如何やうに、如何程の範圍までかなどいふ問題は是非とも今のうちに決しおかざれば、德川時代とは違ひて、何事も大自由の當節柄、西洋の感化影響の激しければ、兎角人情は新奇に趨り易き習はしとて、自然の成行にのみ打任しおくときは、竟には始末の附けやうもなき程に崩れゆくことあらんかも圖り知るべからず。譬を以て言はんに、我が深く愛する父母妻子の身體に假初にも刃物をあつることは誰れしも先づ得忍ぶまじき業にはあれど、尙ほ時と場合とによりては醫師に命じて痲醉劑を投ぜさせ、腹部などの眞只中にも解剖刀を中させねばならぬことのある如く、能樂千萬年の爲を思ふ以上は、此の際一度根本的診斷を行ひ、十分なる解剖を試み、能は果して此の儘に保存するかた利なるか、若しくは何等かの改修を加ふる方利なるか、保存すると事きまらば其の手段方法は如何、改修すべきものと定まら

ば其の方針は如何など、先づ差當りて取調ぶべきにあらずや。蓋し此の取調の結果次第にて、隨分輿論を喚起して皇室に保護を請ひ奉るなどゝいふ擧も起るべく、或は特に樂譜を作り、詞章の飜譯をもなし、廣く海外までも布き行ふべき機緣の熟することもあるべし。いづれにもせよ能樂の根本的研究は目下の急務なり。從來の如く、外國に行はるゝ樂劇類の事などは聊かも心得ず、又絕えて外國のと比較することをもなさずして、只安に我が佛のみを崇むる格にて、さほどにもなき點までも數へたてゝ只、管能を褒めたつる唯我獨尊の管見沙汰は、按ふに能樂をして永遠に繁昌せしむる所以にあらじ。或は又時好の變遷に驚かされて、臨機應變流の小刀細工を試み若しくは其れに類する粗忽の改修を加ふるが如きも、疑ふらくは斯道を裨益する所以にあらじ。さればとて所謂學者、文士等の局外よりの見解も目下のところでは先づ只參考用としてのみ聽きおくべきものならん。例へば文辭上、脚色上、着想上などに就きての文學者、修辭學者などの批評の如き、それも一面の眞理には相違なけれど、之れを樂劇としての能樂の評として見るときは全く取るに足らぬこともあるべし。或は又外國紳士の能を觀ての激賞是れ將た餘りに重きを置くべからざるなり。何となれば東西美術の相同じからざるより、彼等の或者は單に物珍らしさに能を骨董扱ひにして褒めたつることもあるべければなり。之れを要するに能の眞價は眞實周到なる新研究を經て後にこそ定まるべきものなれ、最眞目の批判や食はず嫌ひの惡口や通りがゝりの判斷などは皆重きをおくに足らず。夫れ研究は獨斷と異なり。愼重に冷靜に

順序段取を定めて、四方八面より取調に着手し、褒める爲でもなく、毀る爲でもなく、無私公平に、只有のまゝに解剖もし分析もして、事毎に證據を擧げて判斷し、的確なる標準に照らして長短を明かにし、さて徐ろに其の性質及び本領を確定するに足るべき地盤を作ることが研究なり。 されば能樂崇拜家の目を以て見れば能樂の研究は、譬へば脹滿などの外科手術を見るが如く、最初は不快にも見え、危險にも見え、折々は見聞くに堪へがたくなることもあるべけれど、永遠の爲を思ふ場合には其の位の辛抱は是非に及ばぬとと心得られたし。 又譬ふれば、研究は裁判庭の取調のやうなるものなれば、隨分激烈なる檢事の論告もあるべく、いろ〳〵辯護士連の申立もあるべく、しばらくは是非曲直ごちやまぜとなることもあるべく、扨又とゞのつまりは何等かの判決も下さるゝことゝなるべし。 されどその判決が必しも最後の鐵案ともきまらず、これによりて能樂の興廢存亡が一決し、死命が制せらるゝと定まつたる譯でもなし。 尙ほ其の上に控訴院も大審院もあるべし。 研究はあくまでも研究なり。 危み怖るるには及ばぬことなり。 畢竟何物にもせよ眞に之れを研究せんとするときは、一度は其の物を殺し。てかゝる必要あり、卽ち缺點や弱點はあくまでも發き開き、短は短、弱は弱と合點しておいて、さて徐ろに治療又は營養にかゝらねばならぬ習ひなり。 我が兒は生れながらにして全く瑕疵なきもの、無病なるものゝ如く思込める父母あらば、そは賢明なる慈父母にあらざるべきが如く、眞に能樂を愛し、之れをして永遠に榮えしめんと望む人ならば、忍んで其の短所、弱點をも取調べて、其の矯治し得らるゝ限りは之れを矯治し、矯治しがたきは寧ろ男らしく弱點として之れを自認し、專ら其の本具の長所、美所に立脚して其の本領を發揮し宣揚せんことを力むべきなり。 牽强附會して短所、弱點をも辯護せんと試むるが如きは、偶〻以て守株固陋の弊に陷り、邪路に踏入るの端緒たるに外ならず。

能樂研究の準備としての系統調べ

さて以上の目的に副うて眞の研究をなさんとすれば、先づ其の準備として、從來の言ひ傳へ以上に出でて、確實に又精密に、能樂の歷史を取調べ、いづれが能の最も古樸なる體形を具へたるものなるか、いづれが其の最も發達せる姿を代表せるものなるかなどを確定し、さて後に研究の本舞臺に立入るべき筈なるが、予が見る所によれば、今日までに行はれたり起原調べ、系統調べ、分類沙汰は、要するに主として言傳へに縋り、古記錄に拘泥し若しくは習慣に盲從し乃至は演技者、興行者の手都合を標準とした る、言はゞ通り一邊の取調にして、所詮科學的の研究といふものには あらず。 例へば、彼の「神事能」は最も古き能の體形を遺傳したるものゝ一ならんと見る程の事は、始めて能樂に 接觸せる局外漢たりとも忽ちに思ひつくべき事件なれども、其の果して如何なる廉々が其の然る所以を證明するか、詞章上に於ては如何なる點が、樂曲としては如何なる點が、科介及び舞の手の如何なる點が其の最古のものたることを證明するかと問ひ、且つ其の如何なる部分が原始時代のまゝにして、其の如何なる部分が後世の

發達に屬するかなどゝ問ひ來らば、之れに明答を與ふることは、恐らく專門家といふとも多少困難に感ずる所なるべし。　或は又曲舞(クセマヒ)が能の本源なることは爭ふべからざる事實なりと假定するも、かゝる單純なるものより後の複雜なる能樂の成立つに至りし手順の歷史及び箇々の曲の次第に發展し變遷せし證跡に至りては今尙ほ頗る不明にして臆測的解釋すらも其の精細なるものは未だ曾て備はりてあらざるが如き、以て從來の取調の如何に不完全なるかを見るべし。　或は、かゝる事は今更迚も分らう筈なし、今日となりては最早取調の手蔓なければなりと斷じ去りて顧ざる人もあらんかなれど、それらは餘りに短氣なり、予が謂ふ所の研究の本意に違へり。　古記錄や傳說を機械的に取調べて、其れで忽ちに分るたぐひは未だ研究と稱するに足らず、それら通常の方法以外に出でゝ工夫に工夫を重ね、常識の思ひもつかぬ方法によりて、分らざりし事をも分らするに至ればこそ研究ともいふべく、學者の仕事ともいふべけれ。　予は能の起原調べ、變遷調べにも廿世紀式の方法なかるべからざるを信ず。　西洋の學者等が希臘、羅馬、印度、ペルシャ等古代の文物乃至ダンテ、チョーサア、シェークスピヤなどを研究する場合に用ふる手段方法は我が能樂の取調にも應用すべきものなりと思ふ。　其の一例を擧ぐれば、彼の傳說や古記錄に依りて取調ぶることの外に、作其の物の內部に存する證據に縋りて物する取調の法あり、之れを內部の證據に依る研究法と名づく。　此の法に依る時は從來は全く手蔓だになかりしことの兎も角も絲口程は探り得らるゝことあるべし。　內部の證據にもいろ〳〵あれど、作中に取入れたる事實、材料等が足利末葉のものなるによりて其の能の甚だ古からざることを知るが如き、其の作意、文致、其の脚色、其の曲調、其の所作等の單純簡樸なるによりて其の原始のものに遠からざることを察するが如き、其の一斑なり。　手近き例を擧ぐれば、過般矢來倶樂部の謠曲研究會に於て吉田東伍君が「太平記」に見えたる「天王寺のようれぼし云々」の句に新解を下して「弱法師」の年代を定めんと試みられたるが如き、又久米邦武翁が所謂脇所作物の特質を說明し、ついて所作の繁簡によりて作の先後を決すべしといはれたるが如き、これ等は皆予が謂ふ內部の證據によりての研究に屬するものと做すべし。　按ふに此のたぐひの研究にして大に進まば、能樂史の取調が從來の程度に止まらざるべきは勿論の事なるべく、又何れが樂曲としての能の本體にして、如何なるが所作としての劇としての能の本領なるかなどいふ問題も此の歷史調べの上より解決せられ來るが如き結果をも生ずべく、二つには單に保存をのみ力むべきか又は多少改修を施すべきか、乃至尙ほ此の上に進化發達すべき餘地ありや否やなどゝいふ問題も、過去に鑑みて決すれば、思ひの外滑かに決せらるゝこともあるべし。　其の他分類の法なども、從來のゝ如く「祝言物」とか「現在物」とかいふ習慣上の、又は「カヅラ物」とか「狂女物」とかいふ外形上の區別に拘(かゝ)らひての分類以外に、所作の繁簡、曲節の精粗、思想感情の內容等を標準としたる分類を試み、これによりて年代を探るなども甚だ有益なる一法なるべし。「玉淵集」、「花傳書」一流の分類も慥かに參考とするの價値はあれど、彼等にのみ拘らふ時は、いつまでたちても眞の系

統は明瞭とならざるべし。

さて何故にかく系純調べに重きを置くかといふに、曲の系統が明かになり、先後本末が判然せざる間は能の本領が何の邊に存するか明かにならず、本領が明かにならぬうちは本體が分らぬも同然にて捉へどころに迷ふ次第なり。男女を別たずして人物評を試ることの不當なるが如く、日吉丸時代や木下藤吉郎時代の行動を捉へて豊臣秀吉を月旦することの不當なるが如く、又は四十以後、五十以後の小野の小町の容貌を標準に其の若盛りや全盛時代の評判は出來ぬごとく、何が能の本領なるか、どれが能の最も滿開せる相なるか、どれが其の蕾にして、どれが其のすがれ氣味を代表するか位は豫め取調べてかゝるが順當なり。然らざれば能の非難者と賞讃者とは全く的を異にして矢を放ちつゝあるなどといふ奇觀を生ずべし。非難者は後の小細工の加はれる能を標準とせるに、賞讃者は醇乎として醇なるもののみに就きて自說を主張するなどといふことも起るべし。いづれにもせよ現在行はるゝ二百番が醇醨混淆なることは事實なれば、此際改めて取舍せざるべからず。かく言はゞ、或は、今日各流にて「習事」と稱し來れるものを選りいださばそれが取りも直さず件の目的に叶ふにあらずやといふ人もあちんかなれども、彼等必しも能の本領を代表すとも信ぜられざる理由あり。何となれば今日專門家間に用ひらるゝ分類は、總じて技藝家の都合、興行上の都合、稽古の都合にて定められたるものにして、必しも予がいふが如き趣意に基きて（歷史上又は組織上又は其の價値上の理由に基きて）定められたるものにあらざればなり。

さりながら目下のところ、かゝる新分類の急に成立つべくもあらねば、先づ從來の區別に從ひ、例の五番物の代表となるべき若干の名曲を選りいだし、その作の年代を調べ、其の材源を調べ、能ふ限りは作曲者は勿論、作詞者をも調べ、更に進んで予が所謂研究の本領に入らんことを要するなり。研究の本領とは

第一、文學上より觀たる謠曲文（詞章）の特質及び價値如何。

第二、音樂上より觀たる能樂の特質及び價値如何。

第三、樂劇としての能の特質、本領及び價値如何。

右三ヶ條のうち第一條は、予の考によれば、左程大切なることにあらざれども、我が國目下の事情上よりいへば、一通り研究を加へおく必要あり。さるは謠曲文を非常の妙文なるが如く激賞する人々尠からざると同時に、文法、修辭、脚色等の上より甚しく貶しめ毀る向も尠からざるが故に、果して其の何れが是なるかを一わたり研究しおく必要あるなり。さなきときは將來の文學上乃至謠ひ物の製作上に多少の心得違を醸すこと無きを保しがたければなり。今日の謠曲文の批評家は（予が見たる限にては）謠曲文は、詞章としては、散文なるか韻語なるか、韻語としては、抒情詩か叙事詩か劇詩か、劇詩としては、科白劇か樂劇かなどいふ根本的の問題をさへも決せずして、イキナリ散文又は普通の詩を批判す

る手心にて、謠ひ物、拍子物としての作者の用心に對して思ひやりなく、人物の性格、筋立の當否などに關しても恰も普通の劇を評すると同じ心持にて毀譽褒貶を試みつゝあるが多し。按ふに斯くの如きは研究としては殆ど徒爾に類すといはざるべからず、褒むるも毀るも水掛論にひとしければなり。

第二、第三の箇條に至りては尙更の事なり。此の二ヶ條の取調が濟まざるうちは、到底能の眞面目の批評は出來ぬ筈なり。かく言はゞ、さういふ足下が「新樂劇論」とかいふ小冊子のうちにて、能は過去のものにして將來のものにあらずなど憚り氣もなく斷論してゐるではないかなどいはるゝ人もあらんかなれど、あれは小生の一私言なり、研究者としての見解は自ら別なり。否、自身の上のみにはあらず、古今の黑人筋の能樂に關する著述及び批評などに對しても、小生は隨分抗議を申込みたく思ふこともなきにあらず。要するに標準を定めずしての批評沙汰は兎角僻ある獨斷に流れ易く、好惡評ともいふべきものにて、ツマリ一私言に外ならず。過去現去の能に對しての評すら既に然りとすれば、將來に對しては尙更なり。此の儘にして永久に內外の嗜好に適すべきや否や、或は時勢に應じて何等の新工夫を加ふべきや否やなどいふ大問題は彌〻以て輕々しく斷ずべきにあらざるや論無し。今日に當りて能樂の科學的研究が必要なる所以は斯ばかり論じたるによりても畧〻明かならずや。

能の研究の段取中、尙ほ加ふべき二ヶ條あり、其の一は材源の取調なり。これは作詞者、作曲者の技倆を考査する爲に必要にもあり、作の系統及び年代を取調ぶる上にも有用なり。傳說調べと通稱すべきもの是れなり。されど傳說調べは主として原材を如何に作者が利用せしか、詩化せしかを探らんため次には作と年代との關係を探らん爲めのものなり、能樂研究の上よりいへばそれ以上には必要なし。さて次には能と後の文藝との關係なり。之れを影響調べと名づくべし。これは能の價値及び勢力を評定する上に有用なれば是非一わたりは調べおくべきことなり。されど能の研究としては是れ將た餘業に屬す。（三十八年）

謠曲文は歌なりや文なりや

曲節を附して謠ふものは皆「歌」なりといふ時はそれにて事きまりて最早論は無さゝうなれども、若し例の研究の主意に基きて嚴密に論じはじむる時は、謠曲文は一種奇異なる文體より成れるものなれば、尠くとも一わたりは取調ぶる必要あるべし。所謂コトバに屬する部分が散文たることは勿論ながら、曲節を附して謠ふ部分とても支那や西洋の詩歌を標準としていへば、歌（律語即ち規律ある語）らしくはあらず。尤も外國の歌謠もいろ〳〵にて、古くは音の數と頭韻（同音を戴ける語）の用ひかた位

のみを格律とせる甚だ單純なる組立のものもあれば、音の量と句法とのみを眼目とせるものもあり、又は最近世の或作家等の工夫に成れるもの丶如き不羈放縱なる組立のものもあれど、通例詩學上にて詩と呼び歌と名づけたるたぐひは尙ほ有繋に規律の整然たるものにて我が謠曲文（乃至淨瑠璃文、俗曲の詞章など）の如くに音量若しくは音度の上に何等の制限なく、語法も句法も章法も、善くいへば自由自在、わるくいへば散漫放埒、只其の場合の都合次第にて勝手放題に格を作り若しくは散文を繼ると同樣の手心にて句取を伸縮したるにはあらずやと疑はるゝたぐひの不規律のものにはあらず。そも〳〵種々の窮屈なる規律を潛りて妙想巧辭を列ぬればこそそこに一稱の趣味を生じ價値をも加へて、形式上詩歌を散文の上に置き、兼ねて多少語法上、修辭上に於ける別格をも許すことなれども、さもあらぬ文章をば詩歌として別扱ひにするは、異なものなり。彼の四聲の用法、平仄韻字の約束むづかしく、字の數、句の數にさへも制限ある支那の詩歌、又は音の長短抑揚に拘束せられ、句拍子（ミーター）の格律乃至頭韻、脚韻の用法に纏縛せらるゝ西洋古今の詩歌などに比ぶれば、謠曲文は只やゝ句調よき散文も同然、節奏に富める文章、所謂節奏文（リヅミカル、プローズ）といふまでのもの、詩歌としての其の內容は兎も角も、形式の上にては絕えて詩歌扱ひにさるゝ資格なしと言はんとすれば言ふことを得べし。これやがて我が俗曲の詞章（淨瑠璃及び唄物）全體の上にも推し及ぼさるべき問題なれば一わたりの取調を要すべきなり。

さりながら又退いて考ふれば、本來我が國の藝術は、畫といはず、音樂といはず、兎角手心主義が其の本體らしく、即ち融會自在なる所に面白味ありて、即かず離れざるが持前なりとすれば、文學上の事も此の例に洩れざるにはあらざるか。例へば彼の萬葉の長歌からが果して守部翁が論ぜられたるやうに窮屈なる規則ありて後に成りたるものなりや否や、聊か以て疑はしき次第なり。さて短歌に至りては「八雲御抄」一流の管々しき繁規褥律を悉皆廢案として論ずれば、五七五七七といふ音數一點張の句拍子（ミーター）にて出來上り、韻もなければ平仄も抑揚（アクセント）の規定もなし。後世の長歌、今樣等は音數上の規律があるばかり、音量又は音度上のことは總て作者の手心に一任したる姿なり。彼の十七文字の發句に至りては、俗宗匠の俗論を度外視していふ時は、尙更に簡短なるが如し。措辭の巧拙と意匠の深淺こそはあれ、機械的に形式だけを整ふることは五歲の小兒にも出來得べきほどに平易なれば、藻に叫ぶ雨蛙、藪に鳴く鶯も一寸間を入れて音數を限りなば、成程さながらの句とも歌ともなりぬべき仕掛なり。畢竟規則はあれども大方は手心が第一なれば、無いも同樣の心安さ、詩歌の形式も西洋とは大ぶ流義ちがひなり。さて何事もかやうに大マカに自由を本體の我が藝術のならはしより見る時は、謠曲文は寧ろ太だ複雜なる文體にして、今の所謂新體詩、若しくは古今以後の長歌、蕉門以來の俳諧文などに比して遙かに綴りにくゝ、解剖しにくゝ、說明し易からず。次第、一セイ、ロンギ、其の他、何等か一定の句法あるもの丶如く、無きもの丶如く、掛言葉、緣語、枕言葉、古詩、古歌の用ひかたにも、何等かの定式あるもの丶如く、無きもの丶如し。七五又は五七にて一篇を貫綴するは、今の新體詩が現の證據を示せ

る如く（巧拙を別とすれば）隨分小學兒童にも爲し得らるゝわざなれども、謠曲の詞章の如くに、或は五六、或は八六、或は四四と情景の移るにつれて臨機應變に句拍子を變化し而も節奏に稱はしむるやうに綴ることは、恰も老通人の應接ぶりなどの如く、手心が專一ゆゑ、道に入らぬ者には敎へがたく、學びがたく、頗る困難なる藝道なり。

新體詩流行以來該社會の先進連はいろ〳〵に工夫を凝らし、種々面白き句拍子を案出し、或は八六、或は七七、或は四四など千變萬化して節奏の波瀾を試みたる作ども近頃に至りて尠からず世に出でたり、されどいづれも西洋の詩律風に機械的に句拍子を定めたるものなれば、何となく窮屈にて、讀む者に取りても、饜き易く且つ往々にして自繩自縛の氣味なきにしもあらず。 我が謠曲の文、俗曲の文などと比べて大なる相違あるを見る。 謠曲文の特質を研究せんとする人は是非雙方を對照して取調べられたし。 又近時作らるゝ俗曲の詞章といと古く行はれたるものとを比ぶるにこゝにも著き相違あり。 古きは句拍子に不定の變化あり。 近時のは大がい七五調の通しなり。 これも參考に資すべきものか。

之れを要するに、謠曲文には絕えて平仄といふものもなく、脚韻といふものもなく、音の長短抑揚によりて嚴格に句拍子を定むることもなく、何言、何句宛にて一くさりと限るやうのこともなく、且又散文的なるコトバと調子づいたる地の文と聯格上に一定不拔といふほどのむづかしき制約もなきが如し。 されども尙ほ仔細に取調ぶれば、有繋に曲亭などの文章又は後世の淨瑠璃文などに比して幾段か意味深き多少複雜なる格律が不即不離の間に隱然として存するらしくもあり、緣語、掛言葉、頭韻、間韻、名づくし、文字ぐさり、引喩、擬人法、聯句、對偶乃至和漢語の調攝鹽梅などにも多少偶然ならざる法規あるかとも疑はる。 西洋の劇詩家などの用ふる沒韻律語（ブランク、ヴァース）といふものは脚韻なく、句數の制限もなく、散文と律語との聯絡鹽梅に一定の約束とても無けれど、尙音度上の規律、句拍子上の格式の存するありて謠曲文ほどに自由ならず。 もとより謠曲文は、其の形式の文なるか、歌なるかに拘らず、拍子に合せて謳はるべきものたるは事實なれば、謠ひものたるの特權上、文法上に於ける種々の破格を許さるべき勿論ながら、若し以上の疑問にして肯定的に決定せらるゝ場合とならば、謠曲文は形式上に於ても公然詩歌たるの位附を有することゝなるべく、隨つて其の評價上に若干の斟酌箇條を加へ來るべきなり。

或は又謠曲文の隱然たる格律は、一に作者の手心に存するものにして、言はゞ不即不離、融會自在のものにして、制約あるが如く無きが如く、心を以て心に傳ふべきもの、心通默會すべきものにして、到底分析し解剖して機械的に言說する能はざるものならんかも知るべからず。 研究の結果しか定まらば、それもまた甚だ面白し。 近時の一大問題たる彼の田中博士の拍子論と相照らして是れやがて日本藝術の一種特別なる本來性をほのめかす他の事實にてはあらざるかなどいふ議論の花も咲出づべし。 い

づれにもせよ、尠くとも守部翁が萬葉研究に費したるほどの用意は謠曲文の研究にも費さるべき筈なりと思ふ。但しこは文學上よりの研究としては徒(はん)の端緒たるに外ならず。（三十八年）

美文としての謠曲文

前號に見えたる謠曲放談會の御記事近ごろ面白く拜見いたし候、いつもながら天眞流露なる會員諸君の御氣焰とりわけをかしく愉快に讀了り候、兼て御約束の原稿はけふを限りと迫りながら、さて何を書かうともまだ根つから案じかね候ひたる折から、ふと出來心の彌次馬、當座の思ひつきを少々左に申試候

謠曲文を「なつかしき美文」の一種と評價することに於ては、小生も人後に落ちぬ積に候へば、大體に於ては謠曲文最負黨の一人に御座候、併しその最負の度合は、彼の淨瑠璃文の或種類を最負するのと大てい同じ程の度合に候へば、若し謠曲文崇拜家より御覽なされ候はゞ頗る鼠色の最負とも相見え、何となく煮切らぬ、生ぬるな奴と露探扱ひなどに成し下され候はんこと聊か不本意にも候へば、自家の立脚地を明かにせんため、大ざつぱながら少々文章論に及び候、尤もこれは研究と申すほどでなく、ほんの放言式と御見做し下されたく候

理屈はどうあらうとも好きだから好きだ、嫌ひだによつて嫌ひだと申してしまへば議論はそれまでに候へども、何とか當座だけなりとも標準をきめておいて評をせぬば、詰る所水掛論に終ることゝ存じ候、謠曲文の長短も同じ道理にて、「長所」とは只トリエといふ位の輕き意味か、又は廣く古今東西の詩文に照らして慥かに云々の點に一日の長ありといふ程の重き意味か、前の意味ならば誰れしも大した異存は無かるべき代りに、鳴雪君の仰せられし如く「さることは他の詩文にも在り」といふ一句にて悉く拍子ぬけと相成るべくやと心配いたし候、さらば後の意味かといふに、こゝに至つては其の實謠曲文を他の詩文の上に崇め上げんとするにひとしき結果と相成候が故に、即ち語を換へていへば「謠曲文は美文の上乘なり」と斷言するに幾く候故めい〳〵異論も之れあるべく、隨つて比較研究の必要も相生ずべき儀と存ぜられ候

放談會の御評は別として、小生が從來見聞いたし候所によるに、明治になつて以來、謠曲文を和漢雅俗折衷の美文の模範なるが如く推稱なされ候人々存外尠からぬやうに御座候、これは又極端に謠曲文を崇め上げたる例に候へども、批判は最高級のからはじめ候が寧ろ順序かとも存じ候へば、先づ一わたり此の分を取調べ候ふべし

案ずるに、こゝに所謂模範の意義は稍曖昧にして、謠ひものゝ詞章として模範となるといふ義か、廣く普通の美文としてか明かならず候へど、兎に角「美文の上乘」と激賞せられ候からには、單に拍子に合はするものと狹く限りての意味にはあらずして、措辭の巧、構想の妙を認め、一種の讀みものとして謠曲文の價値を品評せられたる言葉たるや論なかるべく候、過般も一寸申述候如く、謠曲文を專ら謠ひものとといふ方面より觀察して、樂曲用としての其の價値を論ずるは慥かに能樂研究上の大切なる問題には相違なけれども、これは是非他の音樂上乃至樂劇上の研究と相俟ち、双方相照らして見ぬうちは振合の決しがたきものに候へば、文章ばかり引離して此の點を論評すべきやうも御座なく候、かた〳〵今は只讀みものとしての評論にとゞめ申すべく候

凡そ詞章の美を評價するに當りて、先づ問ふべきは「何をか美文の眞價値とするか」といふことゝ存じ候が、「形式と內容と相適ひて、共に巧妙なるもの」と申さば、やがて其の答とも相成るやう存ぜられ候へども、それでは尙ほ餘り漠然として、所謂內容と形式との解釋が人々によりて殊なる限りは、容易に論は決すまじく候、尤もかゝることは修辭學者や文學批判家、美學者たちの專門事業として表立つて論ずることゝなれば大ぶ八釜しき儀に候へど、爰には只當用ばかりの標準を設けて批評を試み候べし、或は此の標準は不具なるやも圖りがたく候へど、異存ある時は此の標準に取つてかゝることが出來るだけが、何等の目安なしにて論じあふよりは增しかと存ぜられ候

按ふに古今東西を通じて最も重んぜらるゝ妙文たるの要素は、第一に不易の眞理、又は不易の人情乃至不易の趣致を適切に又は靈活に言ひあらはすことに候ふべし、此のうちに作者の胸懷を熱烈に現し候ふことも、人物の性格をさながらに見せ候ことなども含まるべく候、彼のホーマア、シェークスピヤ、ゲーテ、近松、西鶴、芭蕉などと並べ立つる主なる理由は、概して此の要素を具へたる點に存すべく候、さて其の次には、よしや不易の眞理、不易の情趣とまでは及ばずとも、せめても斬新なる思想感情を巧に面白く言ひあらはしたるは之れを妙文と稱するものゝ如く候、さて又第三には、內容の必しも斬新なるを要とせず、單に形式だけなりとも奇警なるときは之れを妙文と稱することあるかと存じ候、用語、句作り、言ひまはし等に重きを置きて詩文を評價する場合の如き是れなり、彼の折々用ふる比喩、引用語、形容詞等が巧みなるために人に稱美せらるゝ場合の如きも之れに屬す、さて又第四には、以上の諸要素には乏しけれども、單に調べの流麗なるために稱美せらるることも御座候、若し其の調べにして拙惡ならば、恐らくは大した取所もなかるべしと思はるゝやうなる作、例へば十七字詩、三十一字詩などのうちに間〻あるやうに存じ候

さて以上四ヶ條を煎じつめ候へば、第一は不易、第二は斬新、第三は奇警、第四は流麗とやう相成るべく候が、之れを目安として我が謠曲文を鑑定いたし候はゞ、其の結果いかがに候ふべき、第四の流麗は名にしあふ謠ひものだけに此れは及第疑ひなく候へど、第三の奇警、第二の斬新などはいかゞなるべき、

この邊からは大ぶ愼密なる取調を要すべく候、前にも申し候通り、單に調べが麗しきばかりにても一種の妙文と稱して差支なき場合もなきに候はねど、さりとてさる類ひのものは美文の上乘にあらぬこと勿論に候、或は思想感情に何等の新しみなく、措辭行文にも何等の新意匠はなくとも、用語の雅びたるため、雅俗折衷の宜しきを得たるため、總體に朦朧と淡彩を以てぼかしてあるために、又は古事、古句等の點綴鹽梅の巧みなるために、讀みて一わたり面白く、隨つて一種の妙文とも見做さゝることも候、何さまかくの如きも慥かに一種の美文には相違なかるべく、かゝる技巧にも小ならざる趣致あることは爭ふべからず候へども、さりとてかゝる技巧美をば他の清新なる思想感情を清新なる比喩形容を以て寫しいだしたるものと日を同うして論ぜんとせば間違の基と相なるべくやに存じ候、こゝらが研究どころに候

同じく謠曲文と申し候ふうちにも優劣ありて、「松風」「羽衣」などの如く比較的巧妙なるものもあれば、現在物の多數の如く徒の筋を運ぶだけのもあり、又徒らに緣語、掛言葉、古詩歌等を襤褸の錦のやうに、婆さまのチャン〳〵のやうに縫ひあはせたるものもありて、一概には申しがたく候へど、尙おしならして見たる所、普通謠曲中に用ひらるゝ詞章の美は、美文としては蓋し末なり、言はゞ粉飾用とも申すべきものに御座候、對句を並べ、緣語、類語を集め、掛言葉を重ねかけ候などは、稍〻文才ある者に取りてさまで難からぬことにて、句拍子に變化あらしむることこそ難けれ、通例謠曲に見えたる道行式、クセ舞式程は（內容將たあの位でかまはぬといふ誂へならば）急には及びがたく候へど、必しも學びがたきものにはあるまじくやに存じ候

水に近き樓臺は先づ月を得るなり、陽に向へる花木はまた春に逢ふこと易きなる、其理りも數々の實に目の前に面白やな、春過ぎ夏たけ秋來る風の音づれは庭の萩原先づそよぎ、そよかゝる秋と知らすなり、身は古寺の軒の草、云々

これらは雅びもあり、寂びもあり、澁みもありて謠曲文の美なる一例として恥かしからぬものに候へども、尙ほ淸淡はあり、幽婉はあり、典雅はあり位のところで、新と奇と逸と高と大とは、內容にも形式にも見いだしかね、隨つて節調の上は格別、意味の上には到底「絕妙」などいふ評語を下しかね候次第なり、況んや他の樣に依つて書きたるものに至つては、虛飾の行列に外ならぬものも尠からず候、蓋し餘り多く古語を剪裁し、古句を翻用し、典故を援引し、佛說を附會するは、譬へば頻りに先祖の餘光を振廻すたぐひ、夥しく金銀箔を施し、紅白粉を塗り立つるたぐひに御座候、要するに踏襲、前栽の巧みなるは借金の遣繰に巧みなるやうなものなり、是れ將た一廉の經濟家には相違なく候はんが、餘り繰廻しの頻繁なるは、偶〻以て其の人の財政不如意、少々火の車式なることを證明するに外ならざるやにも存ぜられ候、まして緣語、文字鎖、掛言葉等の（內容に拘らず）餘りに繁きは昔のおいらんの髮飾などの如く、おひ〳〵狩野家趣味を離れて浮世繪流に墮落する基かと存じ候、尤も我が謠ひものゝ特質上、多少の緣

語と掛言葉とは殆ど欠くべからざるものに候へども、彼の「文武二道が忠度の船を得て彼の岸に到りたまへや」、「難波の事も忠度也」式は少々痛み入り候次第に御座候

古句の援引に於ても同樣に候、彼の實盛に「風新柳の髪を櫛り」を引くに至つては少々困り申候、總じて謠曲文は朗詠式、白氏式、駢儷式に候ふため、彼の俳諧文と申すものにひとしく、珍らしきうち五六種まては口あたり結構に候へど、度重なりては千篇一律が鼻につき、單に讀みものとしては饜が參り候、さて內容より申候はんに、「天鼓」「羽衣」「山姥」などの如き、神秘若しくは幽玄なるべき好題目を捉へ得たる場合にすら、又現に「松風」の如き優秀なるものすら、內容は只ぼんやり幽寂、空靈、凄婉、優麗ぐらゐのところにて、詩としての價値は心細きものかと存じ候、讀みものといふ上より申せば、恐らく近松物のかた勝るべくや、同じく朦朧體にして一段と囈語めく例の道行の文句さへ詩としての趣味には時には謠曲文を拔くとあるかと存じ候、いや〳〵さうでないと思し召され候方々は、試に其美妙とせられ候謠曲中の句どもを幾何なりとも取出でゝ御覽なされ候ふべし、近松、西鶴、芭蕉などの名句に匹敵すべきもの果して幾何候ふべき、古人の名句を其の儘に引いたるもの、又は綴りあはせたるものゝ外に、一つたりとも警句らしきもの候や、古句を面白く燒直し候手際に於ても近松に比すべきもの候やらん、不易の眞理、熱烈なる理想、人物の活寫などは申すに及ぶまじく候、我が國の作家に比してすら然りとすれば、外國の詩文人などは引合に出すにも及ぶまじく候

之れを要するに、謠曲文を讀むべき美文として餘りに稱美いたし候ふは、却つて反對を激成するばかりにて、最負の引倒しに類し候はんか、寧ろ謠曲文は謠ひものとして愛玩すべきものにて候ふべし、只何となく美しく、或は勇ましく、或は寂しく、或は哀れ深き趣きを感ぜしむる一種の節調文として稱美すべきものと存じ候、即ち主として聲律の上の美文、曲詞としての美文に候、抒情的美文としても、希臘劇の詞句などに似るよりは、寧ろオペラのに似たる朦朧體の美文に候、たしかに全體の上には「堪忍なりがたき美しさ」も候へど、部分々々を切離して見れば、只ほんの茫漠たるなつかしみのみ宿れる美文、名づけて箒木式とでも申すべくや

かくは申すものゝ、謠曲文は一種の劇詩に候へば、全豹を評し盡さんとすれば、只詞章だけを論じて止むべきに候はず、他日別に脚色、構想の上より觀たる愚見を申試み候はん、今回は此の大ざつぱにて引下り申すべく候、或は獨斷の見當ちがひも候はん、御用捨下さるべく候、草々　（三十八年）

美文としての謠曲文（再び）

謠ひ奏づるものとしての價價は別として、單に讀むべきものとして評するときは、謠曲文は主として句調の美即ち言葉の擇びや、言ひ廻しや、句のならべ方や、和漢雅俗折衷の手心の巧妙なるを以て勝るもので、其の典、富麗な文句の大方は、前代文學からの寄木細工で、全體の思想の上にも、片言隻句の上にも、比喩にも形容にも訓誨めいた言葉の上にも、奇警清新などいふ趣きは乏しく、偶〻古今不易の情趣がほのめかされてあるかと見れば、それらは概ね「朗詠」、「白氏文集」、「古今」、「後撰」其の他の歌集、「伊勢」、「源氏」、「平家」、「今樣」など乃至佛典中の文句か思想かを多くは其の儘に踏襲したもので、眞面目の詩としての價値は思ひの外に甚だ低く、尋常又は時としては其れよりも以下だといふことは、既に昨年の誌上にても申し試みたことで、これは一々證例を擧げずとも、平安朝から鎌倉時代に掛けての文學にお通じのお方は夙に御了察の事と存じます。 尤もかやう申したからとて、それは單に文章上の話で能其の物の價値には別段影響を及ぼす譯ではなく、又これが爲に謠曲文は文章として何等の取り所も無くなるなどいふ次第ではない。「後撰集」以後の世々の歌集に數〻散見するが如き詞花言葉の技巧を以て、又は彼の箒木式の朦朧とした、一種のなつかしい風姿風情の美を以て勝る文章としては先づ類の無い一體と申して不都合はない。 蓋し按ふに、凡そ音樂に伴ふ劇詩の詞章は、如何なる天才の筆に成

るとても、多少右樣の弱點を生ずることは止むを得ない必然の結果でもありませう。 とはいへ、謠ひものゝ詞章は、到底我が謠曲文以上の詩趣を具ふること能はざるかと言へば、即ち謠曲文は樂劇用の詞章としては最上乘のものかと問ふ人があらば、私は遺憾ながら否と答へざるを得ない。 何となれば彼の希臘の古劇やワグテルの音樂劇や古支那の院本の如きは、何れも立派な樂劇であるが、其の詩趣の豐かなことも、脚色の一段整然として巧緻なことも、どうやら我が謠曲文などゝ日を同うして談ずべきもので無いらしく思はれるからです。 綴り方によつては、我が謠曲文とても、もすこしは斬新な、もすこしは瑰麗な、詩趣の饒かなものが出來さうなものであつたかと思ふのです。

さて以上は過般の文章論の補足までに申したので、これよりは一歩を進めて結構や脚色の大體に就いて批判を試みようと存じます。

脚色に關しては、先づ第一に問ふべきは、謠曲文は、兎も角も劇詩（ドラマ）と稱すべき體式のものなりや否や、或は又只拍子に合せて舞ひ謠ひ所作をなす便宜のみを主として只管その用にとて詞句を組み立て綴り合せたるに過ぎざるものなりや 否やといふことです。 さて劇詩とは、形式の上から云へば、一切の詞章が悉く曲中の人物のみづから言ふこと又は謠ふことで出來てゐて、著作者みづからの觀察や批評や詠歎や叙事狀景の詞のまじらぬを本體とするのです。 尠くとも曲中の人物、シテやワキの詞と地の文と混雜（こんざつ）になるやうなとのないのを本體とするのである。 又內容からいふと、曲中の人物のめい〳〵が、

せめても輪廓だけなりとも裁然と區分がついてゐて、まさかに女だか、男だか、大人だか、子供だか、貴人だか、下賤だか、鬼神だか、人間だか分らぬやうなとはなく、假面や裝束によつてやつと區別が付くのでなく、文章の脈の上に多少の區別が存してゐるのが本領。其の上乘を言へば、まだいろ〳〵むづかしい注文もあれど、其の最低度が右樣の條件。苟も此の程度にすら達してゐないやうな文章ならば、それは先づ劇詩とは名づけにくい。ちようど素人が書いた畫も畫には相違ないやうなもの〻名工の所謂畫にはならぬやうなものです。

大體右の如く目安を立て〻おいて、さて我が謠曲文を調べて見ると、謠曲文の一部分はたしかに劇詩です。尠くとも劇詩の粗撲なもの、簡單なものと言へます。併し又或部分は物語文に節をつけて誦し又は謠ひ、兼ねて其の一部を舞ひ又は所作するに止まるものとしか言へない。例へば「翁」の如き、「鶴龜」の如きをはじめとして神事能、祝言能の若干は、單に所作事とか物語に伴ふ歌舞とでも名づけたはうが適當かと思はれます。然るところ彼の現在物乃至かづら物、狂女物などのうちには原始的ながらも、多少不純粹ながらも劇詩と稱して決して差支の無いものもある。して見ると、これは何と判斷したらよいであらうか。按ふに總じて何事も本末首尾はあるならひ、人間に小兒あり未開人あるは其の未發達の姿なれば、人間の本領を論ずるには丁年以上の文明人を標準としたはうが當然なるが如く、能の脚色を論ずるにも、其の最も發達せるもの即ち劇式に出來てゐるもの〻方を主とするが當然だらうと

思はれます。て私は以下の批判に於ては、主として「鉢の木」や「七騎落」や「景清」や「俊寛」や「安宅」や「望月」や「熊野」や「羽衣」や「松風」や「三井寺」や「隅田川」や「卒塔婆小町」や「烏帽子折」や「舟辨慶」といふやうなのを目安にして論じて見ようと存じます。これは決して劇になつてゐぬのは取るに足らぬゆゑなどいふ意見ではないが、現に通例歡迎さるゝものは主として此の類の曲で、世間も專門家連も此等を能の本尊と崇めてゐることは事實らしく、隨つて輿論の推稱する能の價値はやはり多少劇式になつてゐる點にあるらしく思はれますから、特に此の點に重きを置くのであります。

先づ形式の上に於て此等代表となるべき諸曲は純然たる劇詩の體を得たりや否やといふに、(演奏上に非劇詩的の點あるは別とし、單に文章の組織上に就いて見るも、)殆ど皆幾分かづゝの叙事詩(エポス)脈を加味してゐて、或部分は劇の如く、或部分は叙事詩の如く、或部分は抒情(リリック)詩の如く、理窟からいへば、隨分混沌たるものです。叙事詩脈とは地の文即ち著作者自身の觀察、詠歎、批評とも見るべき言葉が人物(シテ、ワキ、ツレなど)の言葉と混交し、纏綿し、シテの言葉がいつの間にか地に引取られ、ワキかツレかの言葉でなくてはならぬことが、卒然としてシテや地に移り、或は地即ち局外者の言ふべき筈のことをシテ又はワキなどが自ら言ふなどの例が屢〻ある。尤もかやうな混沌式は、我が國の藝術のあらゆる方面に見ゆる特質であるから、別に不思議がるには及ばず、又必しも缺點とすべきでもないが、尙日本以外の人に照せば異例たることは明かです。之れに關して只一例を示しませう。彼の「羽衣」の「此の

御詞を聞くよりも彌ゝ白龍力を得」、又は「今はさながら天人も羽なき鳥の如くにて」、又は「少女は衣を着しつゝ」、「去程に時移つて天の羽衣浦風に云々」。これらは何れも當人物の言葉とは思はれず、さりとて傍にゐて評する漁夫群の言葉とも思はれんから、劇としては變則です。みづから自分の事を評しつゝ立廻るに至つては更に變則です。歌舞伎にチョボやワタリゼリフがあり、所作事や丸本物に地の文があれども、劇式たることに於ては幾歩かを進めてゐます。俗間の演藝中で形式の此の點に於て能に似た者は大阪ニワカの時代物のみでせう。尤も彼れは滑稽、此れは嚴肅、其の點は全く違つてゐます。さて此の混沌の形式、之れを稱して一種の面白味と稱することは出來ます、そこに古撲な味ひがあることは事實である。即ち原始的な、ナイーヴな面白味があります。同じく樂劇式でも希臘の古劇やワグネル物などにはかういふことは無い。オペラにも多分無いでせう。何處の國のでも、稍ゝ發達した形の樂劇では、凡そ我が地謠に當る役即ちコーラスに與るもの全體が曲中の人物なのが通例のやうです。又シテ、ワキ、ツレなどの言ふことが意味にかまはず曲の都合で持合になつたり胴切になつたりすることも無い、兎も角も人物めい〳〵が生きて分れて別々に感想を謠ふやうに出來てゐる、それが劇詩の本體でありませう。尤もこれは地謠が出張つてゐるから、それで幻影が起らぬなどといふ寫實論からいふのではない。コーラス即ち地謠の役は脚色次第で曲中の人物にさせることが出來るといふこと、並びにさういふ風に仕組まれてゐるのゝ方が劇詩として整つてゐるのである、明言すれば謠曲文は劇詩としては原始的なものだといふことを申すまでゝす。必しも貶しめるのではありません。

こゝに一寸意外なことは、謠曲文中の稍ゝ古作らしい「芭蕉」や「東北」や「錦木」や「源氏供養」などを見ると、形式だけは純然たる劇詩に近いといふことです。「塚のうちにぞ入りにける」とか、「此方へ入らせたまへとて云々」とか、「かき消すやうに失せにけり」とか、「芭蕉は破れて殘りけり」とか、結末だけに少々ばかり叙事狀景の句が添はつてゐるが大部分は人物の言葉ばかり。(尤も、いざ演奏となつては、例の地謠へ取つて謠ふゆゑ、劇の形式は悉皆破れてしまふことなれど、こゝには文章の上のみをいふのです)。何と、これは順序からいふと一寸逆のやうにも感ぜらるるではあるまいか。併し考へて見れば、何も不思議はないのです。現在物をはじめ總て複雜な部類のは、多く野史や物語から材料を得てゐるのだから、つい〳〵材源の物語脉即ち叙事詩脉にかぶれたまでの事でありませう。

「景清」、「安宅」などの如きは大ぶ形式からが劇になつてゐます。「景清」の如き、結末の一句「さらばよ、とまる、行くぞとの只一聲を聞殘す、これぞ親子の形見なる」の一句を若しシテの言葉かワキの言葉かに引直すことゝすれば(地謠の存在及び演奏上の非劇式な點は別問題として)文體上は純劇式です。彼の「目こそ暗けれど云々」の一節などはシテが情懷を語る抒情の名文と稱してよいでせう。併しながら形式が劇になつてゐたからとて、其の内容が劇になつてゐないことは幾らもあり、よし内容

までが劇の格に叶つてゐたからとて、淺俗て、平凡て、詩趣に乏しく、只の芝居としては兎も角も、樂劇としては妙てないこともありますから、叶ふ、叶はぬは必しも優劣論てはない。 其の邊はよう呑込んて私の評を讀んていたゞきたい。 過日謠曲研究會て久米先生がお話の「自然居士」といふ曲は、私は曾て讀んだことも見たこともなかつたので、早速歸宅後に一讀して見ましたが、成程材料はわるくもなく、脚色の骨組だけは思附だとは思ひましたが、樂劇としては餘り妙てないやうに思ひます。 殊に上半は全く筋を運ぶだけに出來てゐて、近頃出來る芝居などの格、むだな問答而も只のコトバが多く抒情的の面白みが更にない。 筋も不自然で情趣がない。 樂劇は、劇は劇だが、樂に伴はせるのが眼目ゆゑ材もどちらかといへば十分に抒情的、成るべくは理想的な、神秘的な傾向を帶んだものゝはうが適しませう。 私は形式に不備なところがあつても「松風」や「羽衣」や「葵の上」や「天鼓」や「山姥」などが結構だと思ひます。 いや只今のまゝでも天下に誇示するに足るものだと信じてゐます。 かういふものになると形式が内容と十分に調和して不備を不備と感ぜしめないで、さながらにして一種無類(ユニック)な樂劇だと思ふことを得るのてす。「俊寛」、「景清」などもわるくありません。 然るに「鉢の木」や「望月」や「七騎落」や「藤榮」や「壇風」や「烏帽子折」乃至「夜討曾我」式のものになると、只の芝居に近いだけに、それほどに感心しません。 演じ方に寫實や理窟が滑り込まんとする氣味あるに至つては時としては妙な心持がします。

之れを要するに樂劇としての體式の上より觀て謠曲文は不備なもの、原始的なものであるといふことは免れない。 然らば其の内容、即ち舞臺面の波瀾や人物の出入や其の性格の寫し方や、其の他劇としての用意の上はいかゞといふに、形式の蕪雜なことは謠曲文よりも甚しく、而して叙事詩脈を脱しない混沌たる樂劇たる點は全く能と同一ながらに、彼の淨瑠璃文の方が劇たるの内容の上に於ては謠曲文よりか幾段か上てす。これは或は樂といふ點に於て能に劣る所があるせいて劇詩としての價値を加へ得たのかも知れません。 此の優劣は私には判らない。 早晩田中博士をはじめ專門の方々の敎示を煩はせねばならぬことゝ思ひます。 いづれにもせよ、謠曲文は形式が簡單てあるに相應して、内容も甚だ蕭散、そこに雅正な、高古な、沖淡な味ひがあることは爭はれないが、脚色は每に粗なもので、千篇殆ど一律、文句こそは絢爛なれ、殊に波瀾乏しく、所作に變化乏しく、全局を貫く感想も概して抒情詩脈、シテ、ワキ、ツレ、トモ、男、女、老、幼、貴、賤、鬼神、亡靈、と名は附けてあるものゝ、其の實は傀儡同然、之れを譬ふれば種々の佛像を排列したるが如く、面貌服飾に多少の變化はあれど、之れが代表する究竟の思想感情は殆ど同脉同調子、單純なもの、言はゞ一人の思想、感情、一家、一派、一宗の大まかな思想感情たるに外ならんのを便宜上假に配分して種々の役者を謠はせるといふまでのもの、一色、一味、一臭、聲や姿や假面や被服に區別があつても、擧動や言語や思想感情には何等著しい區別もない。 隨つて之れに對して故實だの、人物の性格だの、筋立の自然、不自然だのを論ずるのは見當違ひ、隨つて又現在物の如

き正劇に近いものは兎角氣がさして十分妙でないと思ひます。 これはしかあるべき筈です。 形式が劇でないのに內容が劇にならう筈がない。 蓋しかういふ注文は西洋のオペラに對しても見當違ひでせう。 假にも性格とか筋の自然とかいふことを言ふならば、是非ともワグネル物又は希臘古劇位までには劇詩の體を得ねば無理でせう。

之れを要するに謠曲文は形式だけを言へば、七分がたまで劇詩なれども、三分は叙事詩脉をまじへ、詞華言葉は燦爛として眼を眩すれども、其の內容は存外に單純に、聯絡も無きことを只聊かの緣語に因みて綴り合する例多ければ、例へば彼の「萬葉」の長歌の如く、長き割合程には複雜なる思想感情の言ひあらはさるゝことなく、人物は錯綜交代して相語れども聽者に與ふる感銘は每に同調子、生者必滅とか、諸行無常とか、優美嫻雅とか、高古冲淡とか、凄哀とか、勇壯とか、莊重とか、幽玄とか、極言すれば、或は三十一文字でもほのめかされさうな神祇釋敎戀無常の漠とした感銘を與ふるに過ぎないもので、只文章として讀んだ上だけで言つても、大物のオペラや希臘古劇やワグネル劇などゝは比すべきものでないやうに思ひます。 即ち謠曲文を讀了つた後の感銘はあくまでも長篇の抒情詩を讀んだ時と同じい。

尤も、オペラとても通例のは抒情詩的に甚だ漠としたものらしいから、抒情詩的といふことは必しも貶意では無い、而も謠曲文は、抒情詩的といふ中にも頗る主觀的な、單純な思想感情を操返してゐる抒情詩に類する。 即ちいつも〳〵佛敎小乘的、然らざれば佛色に薰らした武士道といふ特色が著しく目に

映ります。 尤もこゝが能の淡遠高古なる所以で、彼の歌舞伎其の他の雜藝に伴ふが如き濃厚な、纖細な、猥雜な、野俗な趣味の更に無いところで、そこに一種特別な妙味が存することは言ふまでもない。

而も尙之れを樂劇として世界に示すに當つては、其の原始的に簡粗で、其の癖、叙事詩脉だの、劇詩脉だの、抒情詩脉だの、所作だの、舞だの、狂言だのと、種々の要素が雜然として、巧く調和してはゐるが原始的なものだといふことだけは自認しておかねばならぬ。 すなはち謠曲文の結構上、脚色上の面白味は、其の文致上に現はれてゐる面白味と同樣に、甚だ茫漠としたもの、模糊縹緲たるもの、或はほんのりと美しく、或は大まかに勇ましく、或は何となく寂しく、氣高く、乃至奧ゆかしいといふまで。 其の多數は雪舟派、狩野派の墨繪、中には極彩色のものもあれど、俗世間の人物を畫くことは其の長所ではない。

山水とても、どちらかと言へば、仙鄕とか、靈山とか、動物でも鳥獸以上となつては、觀音とか、仙人とか、隱者とか、鬼神とか、靈物とかでなうては其の筆致に相應しない趣が見えます。 餘りに多く能の現在物を推稱するは、雪舟や探幽の人物畫で名作の油繪と競爭しようと試るに類する譯、私は斯道の爲めに取らない。 彼の俊寬や景淸は人物畫ながら寂しみ勝て大ぶ仙趣を帶び、俗を脫しかけてゐるから能の趣致に適當し、見て心持がよいのです。 斯道を重んずる方々は油繪乃至浮世繪對狩野、土佐の畫風に鑑みて將來の方針を定められたらよからうと存じます。

以上は主として結構、脚色の上即ち文學上から觀た謠曲文の批評、まだこれは能としての批評ではあり

ません。 日本固有の一種特別の樂劇としての評價はまたおのづから別でありませう。 文學上いや脚色上の評としても、まだ大ぶ申し殘した點もありますから、何れ後日申し足すことゝ致します。

（三十九年一月）

謠ひもゝの文章

巢林子が中年以後の諸作は、主として竹本淨瑠璃といふ一種の樂劇の臺本にとて作られたるものなれども、淨瑠璃樂は尙さすがに扇拍子の餘風を留めて、語ると稱すべき部分多く、謠ふと名づくべき部分は少ければ、節は如何さまにも附し得べく、とりわけ義太夫出世の頃は創始期のならひとて、未だ是れといふ窮屈なる先例も格律もなく、隨つて文句も曲節も一體に伸縮自在なりし氣味あり、門左衛門が如何さまに書流しても義太夫ばかりは之れに面白く節附して語り得たりといふ逸話の傳はれるを以ても其の一證とすべし。 されば明かに一種の謠ひもゝの臺本にはあれど、巢林子が筆づかひは尙まさかに籠の鳥の曲藝の如くにもあらねば、四疊半内の薙刀さばきのやうでもなし。 是れ近松研究などゝ大招牌を懸けてお互ひに大つぴらな批評鑑定にとりかゝりながら、音樂方面を一切留守にしても、萬さら木で鼻くゝるやうな結果ともならでずむ所以なるべし。 併しながら苟も樂劇の臺本なるからには、其の文致にも脚色にも特別の用意あるべき筈なれば、之れを單に讀みものとのみ見做しての批評は、尠くとも三分がたの脫落なりといはざるべからず。

試に文致の上をいはんに、總じて謠ひもゝ文章は半以上技工より成らねばならぬ筈のものなり。 蓋し讀みものならば語の意味を第一にして必しも聲調を重んぜざるも可なり、熟讀數回の後に會得せらるゝやうなる含糊晦澁の句が却りて妙なることもあり。 字面の珍らしく見た目に面白き文句また頗る佳し。 とりわけ我が謠ひものには外國に例のなき奇なる修辭上の現象を見ることもあり、例へば近來の新體詩に散見する「妙想」又は「理想」と書きて「オモヒ」と傍訓し、「現象」を「アラハレ」、運命を「サダメ」、狂瀾を「ナミ」、佳人を「ヲミナ」、これらは目に見る所を介添にして文字外の意味をも加へんとするの例なり、若し耳にのみ聽かんには或は全く解すべからざることもあるべく、或は感銘の甚だ茫漠として薄弱なるべき筈のものなり。 按ふに傍訓と漢字との間に著しき內容の懸隔あるは讀みものとしても一種の弱點にして、譬へば目はじき、鼻白粉の厚化粧によりて美人と化し得たりと自信するにひとしき自欺又は卑怯の一例に外ならざることなるが、殊に謠ひもゝ文致としては殆ど絕對に非なり、否不利といふべし。 何となれば謠ひものは耳の直覺に訴ふることを第一義とす、其の語は其の聲調其物

に於て内容の符號たるに堪ふるものならざるべからず、聽くと同時に何等かの感銘を生じ得るたくひのものならざるべからず。さりとて技工を嫌ふにはあらず。まして淺露なれ、通俗なれとの謂ひにあらす。朦朧可なり、縹緲可なり、漢語も可なり、梵語も可なり、廢語も可なり、造語も可なり、或は外國語の盛んにまじへ用ひらるゝも不可ならぬことあるべし。但し其の内容の感銘は(おぼろげなるは妨げざれど)聽くと其のまゝ直覺にて得らるゝやうならざるべからず、如何に字面は美しとも、聽いた當座に耳に粗く又は澁り、又は突當り、又は要なきにざらめき、がらめきて聞ゆるは非なり。漢語のやや見慣れざるは目には美しけれど、ア行よりもイ行、母聲よりも子聲に富むならひなれば、兎兎耳に快からぬが多し。「彩雲」よりも「綺雲」の方見た目には珍しけれど、聽いては妙ならず、或は「柔肌」「花顔」などの訓じて美しく音讀して何の美もなき、或は「渾金璞玉」「山紫水明」などいふ語の耳には何の興をも感ぜしめざる、皆同理なり。さればといつも〳〵、する〳〵と萬葉式、祝詞式、古事記式に、雅び言葉にのみ片荷づりて、滑かに流麗にといふにはあらず。短音にして促節なるべき場合もあり、跌宕にして奔放ならざるべからざる場合もあるべし。要は毎に直覺に訴ふるにあり、須からく彼の器樂が一の人語無うして尚能く情を傳ふるを得るが如くすべきなり。試に我が謠曲又は俗曲の詞章を檢せよ、其の大半は詩としては殆ど言ふに足らず、甚しきは支離滅裂語をなさざるものあり。されば其の詞意に泥みて詩趣を尋ねんとすれば茫漫として何の得る所も無きに拘らず、耳にて味へば、其の參差錯落として斷續する聲調のうちに、語義以外の緩急あり、弛張あり、昂低あり、濃淡あり、明暗あり、浮沈あり、榮枯あり、哀歡あるを感じ、讀むと聽くとの同一ならざるを覺ゆることあり。いふまでもなく、字も意も聲調も三つながら妙なるを得ば最も妙なり。然れども何れか一を擇ばざるべからざるに當つては、謠ひものとしては調のシムボリカルなるをこそ取るべきなれ。

次に言ふべきは律格なり、律格とは七五又は五七などと音數によりて句格を定むることを指す。外國のは我が國のに比して此の點甚だ窮屈なり。韵は踏むもあり踏まぬもありて、言はゞ自由なれど、苟も詩と呼び歌と名づくるものに(稀有の例外は別として)何等かの律格の或程度まで備はらざるはなし。又支那に謂ふ韻平仄やうの格式の存せざることは絶えて無し。謠ひものに至りても同樣なり。これは外國の語は我が國のと違ひて比較的子聲に終るもの多かると同時に、發音の抑揚弛張の一段著鋭なる傾きあるが爲の故に、迚も我が國の語の如くに臨機應變に歌ひ伸し、歌ひ縮むるの自由なければ、隨つて豫め一語々々の音量を擇び定めて律呂を整ふることを力めざれば節奏を面白く物する能はざるなどの理由もあるべし。いづれにもせよ、外國のは大概窮屈に、機械的に、律格を豫定し、或はアイヤムバスの五歩にて通じ、或はヒロイック、カプレット一點張、或はトロキー、或はバラッド體、或は十四行體と音數を限り、歩數を限り、解を限り、或は相並べて或は隔行に韵を押し、又は解毎に釣合を取る、謠ひものゝ方面はよくも知らねど、大體に於ては同理なるが如く、其の捨言葉などの配りかたなども我

が國のに比すれば何となくきまり過ぎて機械的なる氣味あり、整然、秩然などゝ褒むることは出來れども、不即不離の（彼の俗曲中に發見するが如き）突拍子もなき面白味は先づ見當らず。 これは彼方の國語の性質にも由るべく固有の好尚にも由るべく、數千年來の藝術上の因襲にも由るべく、強ひて是非すべきにはあらねど、以て東西趣味性を異にすることだけは察するに堪へたり。 然るに近來、一は新體詩家が頻りに西詩の律格を模するに原由し、二は機械的に音數を限りて語を排列することの比較的成し易き措辭法なるが爲にや、長篇の謠ひもの（劇詩の體をなせるもの）を綴る人々さへ、好んで西洋の體式を模し、相ひきゐて七五調、五七調、八六調などを用ふることゝなれり。 中には七五、五七を錯綜し、又は五五、七五を轉換するなどの例も見えたれど、要するに西詩の顰に倣へるもの、其の錯綜法や、其の轉換法や、我が國在來の謠ひもの、例へば謠曲、淨瑠璃、長唄などに見るが如き不即不離式のものにはあらずして、飽迄も均齊的、律呂的、機械的なり。 蓋し、二者の相異なるは兵士の步調の常人の步調と異なるが如く、西洋の花園（ガーデン）と日本の庭との異なるが如し。 これ一つは西洋風の樂譜にて歌はせんの下心よりかく綴り做せるにもあるべけれど、予は此の點に聊か疑問あり、他無し、平仄なくアクセントなき國語の性質上より見て、此一律格主義、此の機械的錯綜主義は長篇の（謠ひものとしても疑問なれど）讀みもの〻形式に適すべきや否やといふことなり。 謠ひものとしたる場合には隨分譜の附けかた次第にて變化も波瀾も生ずべけれど、讀みものとしては兎もすれば下手な馬琴調、更に下りては浪花節調、

阿房陀羅調に類し、自然單調子に流るゝことを避けがたく、勢ひ目の助けを借りて無理に句讀を拵へ、態と短く千切（ちぎれ）〳〵々々に句を排列し、夥しく餘白を剩して見た目の上、想像の上に強ひて餘韻を生ぜしむるやうに工夫するが如き不便を釀さゞるべしや。 アクセントの取舍選擇、四聲の配合、律步（フート）の整理、韻（ライム）の踏みかた、此等諸種の制約を一擧に行ひ而も辭は巧妙に、詩趣は饒多なればこそ有りがたけれ、我が國語の如き伸縮如意の飴式の國語を、七五と限り、五七と限りて只行儀よく並べたればとて、そこに何の技工かあるべき、そこに何の手柄かあるべき、むしろ謠曲又は俗曲の〻如く不即不離の間に意味內容に伴うて調べを整へ、自然の波瀾を作りいだすをこそ技巧としては一段難く、成功したる場合には一段面白きものと稱すべきにあらざるか。 現に海音と門左衛門とを比べ、古き河東、長唄の詞章と近來出來る俗曲の詞章とを比べ見よ、七五に泥みて綴りたるもの〻如きは讀むにも甚だ不妙なるの理忽ちに認め得らるゝにあらずや。 曲としても七五調一點張の新作長唄などが、辭の意味には何の關係もなく、强ひて句をきざみ、合の手を挿みて辛うじて曲節に波瀾を作らんとする原因は、恐らく此の非音樂的なる點に存するにあらずや。 嘗て或立三味線に聽く、「曰はく學者方の御演說だつても、唄にせよ、手を附けろとおつしやれば隨分手も附き節も附きます」と。 如何にも節は附くべし、手も附くべし、只演說者自身が傳へんと欲する思想感情のシムボルたるやうに節や手を附け得るや否やは疑問なり。 內容も急、語勢も急、節調も急、意も緩、辭も緩、曲も緩といふやうならでは眞の樂歌とはいひがたし。 況んや

樂劇の曲白たることをや。止むを得ずば辭の意味は或は無意義に近くてもありぬべし、聽いたる上が其の感想らしくだに聞えなば、或は破格の辭、語を成さぬ漢語の挿まるをも妨げざることあるべし、特り感想のシムボルたらぬ句に至りては謠ひものとしては落第なり。僅かに節附によりて物となる如き詞章を作るものあらば、それらは詞壇の下司なり、物貰ひにも比ぶべし。彼方にてオペラの脚本(リブレトー)を綴る者を卑むはかゝる理合あればならんか。さらぬ場合には樂劇の脚本を綴ること其の事が必しも卑しかるべくもなし、希臘古劇の例などを想ふべし。

思ふに、我が謠ひものゝ調律は、音數やアクセントの數を一定するによりて整ふるよりも、句作り、語呂、乃至おのづからなる頭脚韻、間韻、緣語、掛言葉等によりて調ふべきものにあらざるか。こは調の上の便宜のみにあらず、我が謠ひものゝ第一義たる成るべく簡約といふ資質を得る上に必要なるが如し。此等の舊修辭法を棄てゝ、單に七五、五七、八六、五五などゝ音數をのみ限りたる場合にも簡勁の致は得がたきにあらねど、簡約ならんとすれば、兎角單調に陷る傾きあり、名詞どめ、其の他副詞、形容詞どめの五月蠅く同じ調子に重複することあるなど妙ならず。尤も、西洋式の樂譜を附する場合は全く別なりと知るべし。

右に謂ふ成るべく簡約にといふことの我が謠ひものゝ一條件たる所以は、聲を永うして謠ふ上より生ずる必要なり。こは時としては同意義の而も單純なる思想感情を少しく語と調とを換へたるのみにて反覆して謠ふことゝ矛盾せず。蓋し感銘を切ならしむる要あれば常の文章よりもはるかに冗漫に書綴る場合もあるなり。されど只事を叙し、筋を運び、物を狀し、景を寫すにとゞまるやうの場合は、語は成るべく簡に、意は成るべく奇警ならまほしきならひなり。讀みものならば十行二十字にも綴りて可なる場合に五行六行以上を容しがたきこと間〻あり、これも西洋風の旋律を附する場合とならば緩みを生ずるかも知れねど、謠曲式、長唄式なる以上は、此の點が新思想、新脚色を行る上の一大障碍なり。とりわけ長唄式は新體詩式とは殆ど柄鑿なり、彼の謠曲式の詞章に長唄の曲節を附したるものゝ後者の純粹なるものに比して妙ならざるも此の理による。謠曲文と長唄の詞章と脉を異にするも同根の理に原くなり。

此等の理由によりて謠ひものゝ詞章は全く讀みものとは手心を異にす。殊に科介を伴はしめ、舞ひ又は踊らしむる必要ある場合の詞章は、更に格段の用意なかるべからず。抽象的の句、活動の意、具體的の語に乏しき句、散文的の句、テニハ多き句などには面白き振を附しがたきを通例とす。之れを要するに西洋風に律格を定め音數を限りて謠ひものを綴ることは(內容と巧拙とは別として)尤も容易なり、小學兒童とても之れを爲し得べし。我が謠ひものゝ如く手心專一なる(形ばかりだにも)頗る綴りにくし。學者、文章家の作りたる俗曲の詞章と無學なる狂言作者のとを比べて其の句拍子の上の優劣を見よ、思ひ半に過ぎぬべし。調子だけの上をいはゞ、まだしも淨瑠璃は模し易し、語りものなればな

り。謠曲文に至りては一段難く、長唄、清元などの句拍子面白きものに至りては更に難し。蓋し謠曲の詞致は、根が朗讀體の文章より出でしものなれば、其の調比較的模し易きなり、俗曲の句拍子に至つては、俚謠、俗歌の曲より生れ、それを長き間の人工にて細工したるものなれば學びにくきなり。

以上謠ひものゝ文章の尋常一樣の修辭法を以て律すべからざる所以の一斑を說きたるのみ。其の劇としての結構、脚色の上にも同樣の用意あること勿論なり。（三十九年一月）

能樂の將來につきて

（舞は水の味）

拜啓、大ぶ久しく「能樂」へ御無沙汰いたし候ところ、御盡力の夜能會も御苦心の甲斐ありて先以て幸先めでたき御成功、御同慶に御座候、さて小生もいろ〳〵お話を承つたお庇にや、以前よりは能樂のやゝ眞味らしい所が分りかけ候ふやうに存じ候、併ながら分りかけ候ふにつれて先入主となつたる愚見去りがたく、ます〳〵現狀維持主義に傾き、此體では、いづれかといへば、保守派中にても頗る頑固なはうに成りはすまいかと自分ながら危み候、嘗て承りしことありし如く、餘りに長き舞の幾段を省き、文句の無要なる部分を削り去るが如きは、これは門外觀者には氣もつくまじき程のことゆゑ、兎も角もに候へども、萬一にも所謂改良說なるもの勢力を得て、能役者連が現代の嗜好に適ふやうにと少しづゝ〳〵カタを改めゆくやうのことあらんには頗る憂ふべきことゝ存じ候、況んや背景、西洋樂器などは未來永々七里結界と存じ候、尙叶ふべくは、改良どころか更に一段の復古が願はしく候、即ち室町式又は翁式とでも名づくべき古い格式へ逆戻りして、地謠、囃子方一同素襖袴にて登場し、侍烏帽子をいただきて五分刈頭をかくさるゝやうありたく候、これは先日さる所にて大和田君に逢ひし折同君もさやう申されし所なるが、彼の直面のシテ、ワキ、ツレ等もまた同樣に、何等か其役相當の冠り物を用ひて貰ひたく、それから見物は男女とも必ず禮服を着用し、演奏中には談話、微吟、退席を禁じ、又喫烟、飲食をも場內にては禁じ、興行時間を縮め、休息時間を設け、用所の不便なさやう、下足口の雜沓し混雜せぬやうに注意し、如何さま能といふものは幕府の式樂だけのことはあるものと內外人に感歎せしむる程度までに退歩させて貰ひたく候

もし現代に能樂改良といふことを企てられ候ふ人（もしあらば）、その目的は多分能をも少し通俗にして見んといふ點にあるべし、今の見物人の心を察して、甚しい退屈をさせたくなし、多少取捨を施し、彼等も興味を覺えるやうにしてやりたいものといふ老婆心切に原けるならんと存じ候、然るに、愚見によれば、能樂の眞生命は、一へに其の高古淡遠にして俚耳俗眼に入り易からざる所にあるものゝ如し、其

の何となく現代らしからぬ所、肉や血に遠げなる所、生まじめなる所、窮屈なる所、氣のおける所、有難げなる所、澁い所、わびた所、早い話が佛畫めく所、仙畫めいて神々しい所、由緒のいかめしき骨董めく所が命なり、されば能樂に生中の改良を加へて俗に通ずるやうにするは、燻つた古器物に磨きをかけて女子供の目につくやうにすると一般、寂びも詫びも有難みも一擧になくなる恐れあり、いや〳〵古書畫の表裝を仕立直すといふこともあるならひと申さるゝ人もあらんかなれども、それは内と外と離ればなれのもの、これは内外無差別なれば、内なる畫に關係なしに外なる天地のみを引離して取り易へるといふこと叶ひがたし、比喩が當らぬ也、能樂の手入れは古畫に新しい畫の具を塗るたぐひなり

さて骨董といふことにつけて思ひついたる事あり、能と茶の湯とは其の發展の時機が東山、桃山、德川時代とほゞ同時代にありし爲にや、何かにつけて多少相通ずる所あるやうに覺え候、先づ其の傳來が支那からといふ所も萬更の無緣にはあらず、或は東山式の驕奢、或は桃山式の華美と部分々々の濃淡はありと雖も、大體の趣味に於ては、双方ともに高古淡遠、沈靜莊重、いくらか佛さび、禪味がゝつたる所も相似たり、其の武家と纏綿して貴族的なる所も相似たり、茶も其の發展のはじめに於ては主として遊玩の道具なりしに、いつしか交際の機關となり、貴賓接待の要具となつたる所も能の閲歷と相似たり、千家流、遠州流、石州流、武者小路などゝ諸流互ひに對立して各〻特色を發揮せる所も五派の樹立と相似たり、双方共に古例、舊格を尊重し、徹頭徹尾、齊々肅々、段取、姿勢やかましく、服飾、器具の末までも取

舍選擇のやゝこしき所も相似たり、改良して西洋趣味を加ふべからざる所も相似たり、茶會席へ牛肉や豚を用ふべからざる點も相似たり、勿論能の種類によつては、同じく茶に似たりといふうちにも抹茶の複雜に似たるよりも煎茶の瀟洒に似たるものあり、とりわけ舞に至つては淡遠中の淡遠なるもの、高古中の高古なるもの、沈靜の粹、莊重の精、こゝし眞に其の味ひを解することを得たらんには、能の舞の味ひこそは茶人の所謂水の味ひに比すべきものか、茶人は水を種類分して山の水、河の水、井の水などゝなし、其うちいろ〳〵謂れをつけて更に幾多の小別をなし、十里、五十里の外に出でゝ水を汲ましめ、名水選びに浮身をやつし、云々の山の水は輕く甘く、云々の河の水は甘く重く、云々は腥臭、云々のは鹹苦などゝ、一々むづかしい評價を試み、或は夜の丑寅に井の水を汲み、或は庭上に瓶を置いて天水を取り貯へ、或はランビキにかけた上で星の露を受けるなどゝ三段五段の工夫を凝らし、たま〳〵理想の水を得ては天に歡び地に喜んで、さながら天上の漿でも手に入れたやうな騷ぎ、迚も凡舌の解し得る所にあらず、彼の天下第一の美味はと問はれて鹽と答へ、不味はと問はれて又鹽と答へたる昔語り、浮世は月夜に米の飯といふ諺、それもこれも頗る穿つたる言分ながら、鹽の味も米の飯も水の眞味を知つた人に取つては、恐らくはあまいものなるべし、小生なぞは此の結構さうな水の味をいまだ曾て念を入れて試驗したることなく、それゆゑ無論知つたとは申さぬなれども、只一度、二十年前、徒歩にて木曾街道を眞夏の道中、行く先々の岩清水、しょろしょろ流れ、井戸の水、汗もしとゝの貌さしよせて飲みし時の心持今

も尚忘れがたし、蓋し水の味は凡舌にあつては、或特別の情態(例へば夏の旅中、酔ざめ)に在るときか、然らざれば多年の經驗を重ねて後かに非ざれば、ツイうつかりと喉を素通りさせてしまふほどの大味、大味は味ならず、大賢の愚なるが如きたぐひ也、之を要するに、水の味ひが茶の味ひの大源なるが如く、舞は能の生命なるべし、今尚小生は舞を見る間は、兎角肩が凝つてどうもならぬといふ外道なれども、それでもおひ〳〵に東方微白といふほどに目があいて來て、さすがに一二年以前の如くにはあらず、思へらく、雅樂の舞を薄く淡しき數盞の冷酒に比すべくば、俗曲の舞や踊や振事は一ぱい〳〵又一ぱい、果は亂に及ぶ爛酒などに譬ふべし、なぞとツイ筆拍子て巧者らしいことは申すものゝ、其實今のところ拍子に伴ふものか、何か意味のついて廻る仕舞風のものてなくては面白からず、醇乎として醇なる舞の味は餘り仙味すぎて下さりかね候ふ所實正也、しかはあれども、それは昨今の寂修行に古器物の時代が分らぬやうなものにて、罪は此の方にあること勿論に候、そちから寸分も讓歩せらるべき理由かつふつあるべからず、分らぬ奴は緣なき衆生と見棄、泰然自若として格式一切を嚴守せられて然るべきことと確信いたし候、此際生中の改良は能の特質を消磨するやうなものにて、誰れの利益にもならず、能樂萬歳の策にあらざること明白に候

かくいはゞ、そんなことは今更いはれずとも十年も前から百も二百も承知の事なり、只久しい問題ながら、囃子方の養成扶持を何とすべき、斯道維持の策を如何にすべき、識者の間にすら多少の改良を行うてはといふ心の動くも、畢竟は右の爲の方便品、如來が濟世の大慈悲心のみ、それを知らぬげに差出口は時勢に暗過ぎた門外評ぢやと頭から笑はれ候ふかも圖られねど、そこに少しばかり愚見あり、能樂萬歳策の補遺として左に申試むべく候

若し果して囃子方の扶持養成が眼目にして、能役者活動の領地擴張が目的に候はば、前の保守的萬歳の外に進取的萬歳策なきにしもあらず、併しながらこれは普通の改良案とは全く別格のものゆゑ御混同なきやう願ひ候、普通のは在來の持地所へ開拓の鍬を入れることを主張し、これは海外移住出稼の獻策、結果に至つては猫と虎ほどに違ふべしと存じ候

それは、爰に新に能樂を基礎としたる而も全く新しき組織、方案に成れる新樂劇を興されてはいかゞといふことなり、長さは在來のものと伯仲の間となし、材料、脚色、段取等は成るべく在來のものと異なるやうに物し、詞章は勿論、曲も舞も科介も一切在來の格式に拘泥することなく、むしろ思ひ切つて飛離るゝことを本願とし、西洋樂器をも折あふ限りは採用し、場合によつて、或種類の背景をも用ひ、更に一歩を進め得べくば、女の役は女性をして、男の役は男性をして演ぜしめ、紅白粉も或程度までは利用し、假面は神仙か、魔性か、幽界のものゝ外には用ひぬことゝし、地謠の服裝もオペラのコーラスにならひて多少立方と調和するやうになし、且つ之を新式能と名づけて舊式能と峻別し、最初は餘興並に各興行のハネ前に演奏せしむるものとなさば如何、猶歌舞伎に地藝あり所作事あるが如く、演ずる役者は同じ

けれども演ずるものは全く別物、相犯す所なければ本藝には些のさゝはりもあるべからずと存じ候、改良を古い名畫に新しい畫の具を塗り線を加ふるに比すべくば、これは古名畫は崇め敬ひ、愛し貴み、掛けて詠め、列ねて覽せしむると同時に、別に、油繪、水彩畫をも參考し、モデルをも使ひ、線法、陰影法、傅彩法にも新意を凝らし、明治式の日本畫を試みて見るまでの事なり、舊格法に拘泥して新畫が出來る筈なき如く、この企も大突飛が肝要、こわ〳〵ながらでは物になるべきことならず、さて如何に突飛しても參考室とは別棟なれば、飛火の恐れ曾て無し、こゝが所謂改良案などゝは根本的に違ふ所也、これと同時に狂言にもまた類似の新案を行ふこと易かるべし、愚見によれば、將來は能の全日興行は到底困難となり行くべし、恐らく夜能會にて定められたるが程度か、たかゞ舊能二番、新能一番、狂言新舊二番位のところならん、如何に舊能に手を入れゝばとて（西洋人は格別）迚もハイカラ受のものとならざること、茶人好みの古道具が如何に磨きをかけて見たればとて世話女房の氣に入らぬやうなものに候、要するに能樂萬歳の策は一面舊格を寸分も破らざるにあると同時に、一面聊かも舊格に泥まざる新能を興すにあり、此の策前後矛盾なるが如くにして、他の改良策よりも條理あり、方法あり、成竹あつて、危險分子少しと信じ候、匆卒の筆、用語蕪雜に候ふゆゑ、或は冗談とお讀取も圖られねど、當人に於ては大まじめ、いづれ其中御閑暇に高見を承り、若し藪睨に候はゞ、此の案にこそ大改良相行ひ申すべく候、草々

不盡　（三十九年六月）

宗教と演劇

（雜誌「妙宗」の爲に）

申すまでもなく宗教は眞實無妄を性命とするもの、世間に向つての第一義は教化救濟、それに對して演劇は狂言綺語、少なくとも其の表招牌は遊戯娯樂なれば、此の二つは甚しく相背馳するものゝやうに思はれるも理の然らしむる所であります。　されば太古混沌の世は別として社會が稍〻秩序立つて後は古今東西とも宗教家と演劇とは兎角背中あはせとなり易く、演劇が蛇蝎の如くに忌まれ鴆毒のやうに惡まれた例も尠くないことである。

美的生活の本場たる古代の希臘國は演劇を一種の國家的式典として崇めてゐた程でありましたが、その美術ずきの希臘にてすら彼の有名な賢人のソロンは俳優は虚言を職とする者だといつて痛く擯斥し、又彼の峻嚴を以て聞えたスパルタのライカルガスは堅く内國で劇を催すことを禁じたといひます。つゞいては彼の風紀大弛廢の羅馬帝政時代に出てた第一期の基督教徒、これがまた演劇を見ること惡魔の如く、苟も信徒にして劇場に立入るものあるときは、直ちに破門するを例とした。ずつと降つては

クロムウエル時代の英國のピューリタン宗徒、彼等が全國に嚴令を下して一切の演劇類似の興行物を禁制したことは皆人の知る所であるが、今日でも嚴格な基督信者は、新教舊教の別なく、大抵皆演劇を惡み、子弟の之れに近づくことを禁ずるが習ひである。何さま今日亞米利加や佛蘭西などで行はれるいかゞはしい劇の筋立や其の演じかたを考へあはすれば、かやうな警誡も無理のないことゝ思はれます。現時に於ける我が佛教家の劇に對する態度如何は小生のよくも知らぬ所であるが、南北や默阿彌の書いた猥雜な又は殘忍な或芝居、若しくは今の新俳優が演ずる或寫實劇などを見ては、宗教家ならぬ我々も眉を顰めて丁年未滿のものには餘り見せたくないと思ふこともあれば、宗教家や教育家が演劇を忌むのも無理のないことと思ふ。

さからば演劇と宗教とは到底相容れず兩立しがたいものかといふに、必しもさうでない、いや、むしろ宗教と演劇とは其の原始時代に於て因となり果となつて離れがたい關係をもつてゐたばかりでなく、今も尙宗教は立派に演劇的の一面を具へてゐると思ふ。彼の建築なり、繪畫なり、彫刻なり、詩歌なり、諸種の服飾なりが、主として宗教上の必要から生れいでたといふ社會進化史上の事實が先づ既に宗教の目や耳や想像や感情に訴ふることを主とするもの即ち演劇的に端手な一面を具へてゐるといふ證據を示してゐるが、降つて複雜な儀型や格式や典例やを守るやうになつた後の宗教は何れの國のも慥かに演劇的である。彼の金碧煌煌たる龕や燭や瓶や爐や、絢爛眼を奪ふ蓋や幡や錦襴の袈裟や絹布の法衣や、深紫、淺紫、緋、黄等の光彩相映じて燦然として輝く美しさや、其の他器具の順序や僧員の配列やに意匠を凝せる點に於ても、其の樂器を精選し、樂調を精練せる點に於ても、動作、音吐、面貌、即ち表情法一切に周到なる工夫を凝らせる點に於ても、禮拜、祈禱、供養等、種々の典例や會合に於ける行裝、儀式の莊嚴にして艶麗にして詩的、畫的なる點に於ても多大の演劇趣味を帶んでゐることは今更取りいでて申すまでもない。而して其の詩的、畫的、演劇的なるところが取りも直さず他の科學や哲學や乃至世間の教訓やの企て及ばない玄妙な感化力即ち一種の不可思議作用の宿る所であるらしくも思はれる。

して見ると宗教家が演劇を惡むのは今の所謂演劇を惡むのて、演劇其物の本領や形式を惡むのでないことは明かである。さればこそ西洋などでは現に宗教家が特に護法傳道のために公然と宗教演劇を興行した著しい例が現にある。又それが民心に莫大の感化を與へたことも事實であつた。最も我が國にも各宗祖の偉蹟や神佛の靈驗やを一篇の骨子として綴つた淨瑠璃、歌舞伎が尠くない、例へば役の行者や菅公や中將姫や阿竹大日や釋尊や聖德太子や日蓮上人や弘法大師や法然上人などに關する作がそれである。これらも隨分信徒をして隨喜渴仰の涙を灑がしむるに足つたもの、しかし小生がこゝに說かうとするのはあれらとは大ぶちがふ。

淨瑠璃作者や歌舞伎作者の本心は千客萬來を願ふに外ならぬ、即ち宗教趣味はほんの附けたり、間にあ

はせに過ぎない。 按ふにこれら間に合せの宗教劇は最早新代の社會には歡迎せらるまいと思はれる、よし行はれたとても其の宗教的效用は單に智識の最下等のみに限られることであらう。 藝と人とは別だとは申すものゝ、平生不品行を以て知られてゐる俳優が聖祖などに扮するのを見ることは眞摯な信徒たちの堪忍しがたいことであらうと思ふ。 東洋の事は知らず、西洋の上代中代の演劇に宗教的の妙作用があつた所以のものは、作者も信者で役者も信者で而も頗る高尚な尊敬すべき人物であつたからのことである。 彼の希臘の上代では、劇の作者はいづれも當時の立派な紳士で、兼ねて武人で、政治家で、熱烈な信徒で、大抵はみづから役者となつて演ずるのであつた。 彼のマラソンの勇士で、大詩人であつたエスキラスなどが其の好例である。 歐洲の中古に行はれたミステリー劇なども同じ譯合で、作者兼役者は僧侶みづから、法を說き道を傳ふるの方便として毎年幾回、幾十日、例へばクリスマスやイースタア祭や基督復活祭前の某々日などに、精進潔齋の上で一の神聖なる儀式として一種の演劇を演ずるの習ひであつた。 其のはじめは劇といはうよりも式といふべきもので、僅かに敎會堂の祭壇前に並んで、諸信徒の面前で同音に讃美歌を歌ひ、其の切れ目〳〵に一寸問答めくこと、所作めくことをしたまでゞあつたが、後にはやゝ仕掛を進めて本堂で演ずることとなり、更に下つて十二世紀の末頃となつては會堂前の廣庭まで押出し、幾段幾場と重ねかけて演ずるやうになつた。 勿論其の劇は脚色も詞章も演じかたも概して簡樸粗笨なもので、別に拍子に合せるといふこともなくて平仄あり韵脚ある

文句を朗誦する鹽梅は、一寸能の詞に似て、又ところ〳〵は能の狂言にも似てゐたものらしいが、徹頭徹尾眞面目に嚴肅にしてのけたものなれば、先づ能がゝりなどと評してよからうかと思ふ。 最も獸頭人身の鬼や惡魔が出て來て種々の惡戲を行ふくだんなどになつては神樂芝居の馬鹿踊などにも髣髴たる點があつたらしい。 さて劇の題材は大抵新約全書で、多くは基督が十字架上の最期を大眼目としたものであつた故に、別稱して御難劇ともいひました。

十三世紀以後俗人が僧徒に代つて此の種の劇を演ずるやうになつて以來、ミステリー劇は漸く廢れて、奇蹟劇といふが盛んになり、おひ〳〵神聖な特質を減じ、言葉づかひも通俗を第一として卑しくなり、筋は多く各宗の上人、例へばポール上人とかジョン上人とかの傳記を取り、脚色は目先の變化を主として複雜にもなり面白くもなつたれども、勢ひ敎化の本旨には遠ざからざるを得ざることゝなり、隨つて信徒連の厭惡を來し、皮肉な不信徒連の嘲弄を招き、十五六世紀のころ今の所謂西洋の正劇が勃興するに及んでとう〳〵跡かたなく廢れてしまつた。 其の間凡そ四五百年、其の隆盛時代に於ける感化力は眞に侮るべからざる勢力のものであつたらしい。 御難劇の片影のみは今も尙田樂の古能が常陸邊とかに殘つてゐるやうに獨のパワリヤ國の或地方だけに殘つてゐるといふことである。

又之れとは別に、同じく中古の末に興つた一種の宗教的音樂がある、名づけてオラトリオといふ。 これは其の大道具や背景を一切用ひぬ點、科介は無くして地の文の伴へる點、人物の白が悉く歌ふやうに

なつてゐて、音樂が眼目なる點、觀るといふよりも聽くといふべき演劇たるの點等に於て頗る我が能樂に似通つてゐるものらしく、それが彼の大作曲家ヘンデル以後おひ〳〵と進歩し發達して、彼のメンデルゾンといふ大音樂家の出づるに及んで彌ゝ完備して今日盛んに西洋列國の宗教界に行はれてゐるとの事、而して其れが宗教上の感化機關として妙作用を有してゐることは言ふまでもなく、音樂劇の一體としても慥かに參考すべき價格のあるものらしい。 何と彼方の宗教家は演劇的要素を利用することに於て力めたものではあるまいか。

これら西洋の事例によつて見ても演劇的要素は利用宜しきを得れば感化上に效用あることは彌ゝ明かになります。 宗教は理に訴へ、智に訴ふるものでない以上は情及び想像に訴ふる最上の手段たる詩歌や音樂や繪畫や又それらを打つて一丸としたる演劇の要素を等閑にするは利器を棄て珠玉を拋つに幾いではあるまいか。 佛教諸宗が夙に此の點に意を用ひてゐたことは今更辯ずるを俟たぬことだが、只現在の情態について見ると頗る遺憾なことが多い。 何事も移り換る明治現代の止むを得ざる現象とはいへ、從來は有效なりしものもおひ〳〵と新代に向つては何の效用もないものとなりゆく中にも、從來佛教が用ひ來つてゐた演劇的要素の如きは其の最も著しいもの丶一つといはねばならぬ。 少なくとも新代の青年等にとりては今の佛教の演劇的要素は周圍との調和を失ひはじめたので、殆ど何の效用をも有たぬ。 五分刈頭に七條の袈裟は調和しない。 電車鐵道の轟々とやかしましい町中を不揃の

服裝て葬式が練つて行くのも折合はない。 洋服て胡座かいて卷煙草の煙がうづまく席で長い〳〵讀經も有難味乏しく、磬、木魚、銅鑼、銅鈸子の音樂もペンキ塗の二階や穢い煙突が見えるやうな本堂では何等幽寂の感も起らぬ。 要するに佛教の演劇趣味は他の俗間の諸形式と共に最早一轉化を經驗せざるべからざるの時機に臨んでゐるのではあるまいか。

眞摯熱誠なる宗教家の本旨よりいへば、所謂演劇趣味は宗教の末の末でもあらう、又信仰さへ堅實にして熱烈ならば、之れを他に傳ふるは不言不說の間にあつて、形式や方法を要とせぬのでもあらう、即ち以心傳心の妙作用で一切埒があくのでもあらう。 しかしそれは主として直接に面と面と相觸れた場合にこそいふべきことで、遠く離れてゐる者や薄緣、逆緣の者はやはり方便でなうては靡かぬ道理。

小生は將來に活動せんとする佛教家諸氏が演劇的要素の新利用に心を注がるゝことは徒ら事ではなかうと思ふ。 さりとて小生は彼の歌舞伎や新演劇の眞似をせられよといふのではない、世間の としてすら歌舞伎は漸く廢れんとしてゐる、而して所謂新演劇は今のところ、俗中の俗なるもの、あれらを用ひんとしたならば宗教の神聖を汚損するの悔なきを保しがたい。

小生はむしろ佛教家をして能樂を利用することに力めしめたいと思ふ。 能は今日の世間の嗜好からいへば高古に過ぎ、淡遠に過ぎ、清雅に過ぎ、兼ねて餘りに宗教臭を帶んでゐる。 今てさへも既に世間の多數には喜ばれない位ゆゑ、恐らく今二三十年も經たなら、迚も今日ほどの流行は覺束ないであら

う。現在でさへも囃子方はおひ〳〵凋落しつゝある、維持保存の方法の彌〻困難となつた曉はどうてあらうかと懸念でならぬ。かゝる立派な日本特有の古美術が空しく衰滅に歸しゆくは歎かはしい次第ではあるまいか。此際若し佛教家が此の能樂を地盤として一種の新樂劇を興されたならば如何てあらう。オラトリオに擬して新しい能樂を興したらば如何であらう。一面、能樂の保存上に有力なる後援を與ふると同時に、他面、新日本の文藝上に小少ならぬ貢献をも試ることが出來やうではないか。三つには能樂の愛翫者が主として中流以上なることを想ひ合すれば此の擧が傳道上にも存外な好便宜を與ふることにならうと思ふ。

文藝上に謂ふ眞の樂劇を興すことは極めて難い。併し此の方便用の樂劇位は之れを興すこと必しも難くないであらう。大體は殆ど在來の能樂の組織そのまゝでも用をなさうかと思はれる。只題材や脚色や科介や扮裝や樂器やなどには大ぶ新案を凝らさねばなるまい。諸宗祖の偉蹟や釋尊傳などに適當な材料が溢るゝほどあると思ふ。

かやう申したばかりては餘りに唐突で、簡疎で、十分會得もせらるまいが、さりとてくはしいことは迚も手短かには申しやうもないから、今は只これだけにとゞめておき、更に一言。

同じく演劇的とはいへ、音樂と詩歌と繪畫と舞蹈と科と白とを兼ねた音樂劇といふものは宗教用としては最も上品で、適當でもあり且つ有效でもあらう。

といふことだけを終に臨んで繰返しておきます。（三十九年六月）

國民樂の將來

我が在來の樂曲中最も發達したるものは三絃樂曲なり。最も廣く行はれ、最も多く國民の嗜好に觸れたりと思はるゝものもまた三絃樂曲なり。源氏節や浪華節や義太夫や何れも三絃樂曲なり。一中や常磐津や新内や富本や清元や皆三絃樂曲なり。河東や大薩摩や長唄や歌澤やカッポレやトッチリトンやシノノメノストライキや何れも皆三絃樂曲なり。

三絃樂曲の最も巧緻を極めたるものを江戸式俗曲とす。殆ど廢れたるものに在りては富本、今尚盛に行はるゝものに在りては常磐津と長唄とを其の代表となすべし。若し三絃樂曲を本位として新樂曲を興さんと欲せば鄭聲たるの故を以て江戸式俗曲を排せんは法の宜しきを得たるものにあらじ。

江戸式俗曲の宿痾は其の詞章の猥雜なり、着想の鄙俚淺露なり、脚色の支離滅裂なり、樂調の浮靡纖弱なり。此の四者皆刷新せらるべからず。さりながら別に此の四者を一貫せる一通弊あり。何

ぞや。千篇一律といふ弊是なり。

德川氏全盛の後半期より明治の今日へ掛けて成れる俗曲の數は、按ふに百千を以て算ふるに足りぬべし、其のうち機軸を新しうせるもの果して幾何かあるべき。概しては模擬似倣の作なり。詞章も着想も脚色も樂調も宛としてステロ版に取れるものと一般、舊窠以外殆ど一歩をだに轉ずる能はざるもの比々皆是なり。美術何々會などの作品に似たり。甚しきに至りては題材將た舊のまゝ、反覆又反覆、樣に依りて胡蘆を畫くのみ。彌々いでゝ彌々生氣無きデケーデンス、アートたり。

或は俗樂刷新の一法として樂器の刷新を主張する人々あり、猶日本畫の向上を希うて彩具（顏料）の改良を先にするがごときか。其の斯道前進の一要法たるは論無し。されど畫趣革らざれば新彩具を要することと切ならざるべく、必要逼迫せざれば大なる新工夫も成らざるべきが如く、在來のまゝの長唄、常盤津の題材は必しも新樂器を要求せざるべく、隨つて其の改良に便宜を供せざる如き虞れはあらざるべきか。

自然が同一物を再びせざるが如く、歷史が同一事を反覆せざるが如く、美術もまた其の內容を長へにすること難く、其の形式將た時代精神と共に推移せざるべからざるものにはあらざるか。內容既に新なり、形式また新ならざるを得んや、按ふに美術刷新の根本義は先づ內容を新にするにあり。題材を新にするに在り。脚色を、筆致を、樂調を新にするに在り。然らんには新彩具自ら招き致されん。新

樂器自ら製出せらるゝことあらん。

奈翁の露都退却やテルソンの艦頭の戰死や旅順遼陽の激戰や、之れを土佐、狩野の畫風にて描かんことは恐らくは不可能に近からん。ハムレットの煩悶やファウストの懊惱や之れを長唄樂に奏しいださんことは殆ど難く、イゾールデの憤怨やヂュリエットの切戀や、之れを常磐津、清元に演ぜんことは蓋し更に難からん。譬へばお七吉三やお俊傳兵衛の情事が謠曲に箝らず、西鄕隆盛や、東鄕大將の傳記が義太夫節に適せざるが如し。

或は古藝術の復興を以て刷新の最好手段と做すものあり。彼等は革新を非し保存を專とす。彼等は尙古を主とし新案を斥く。されど古藝術の復興は要するに每に參考に資するに止まる。東西古今、未だ曾て眞の復古といふことなし。政治上、宗敎上將た同例なり。

十六七紀に於ける伊太利樂劇の創始史を見よ。希臘古劇を復興せんの企は新樂劇（即ち歌劇）の端を開きたるに外ならざりき。十八九世紀に於ける歐洲のロマンチシズム（中古文藝復興の活動）は單に舊文藝破壞の一方便となれるのみ。又我が元祿文學の復興を見よ。西鶴の研究は紅葉、露伴を出ししが西鶴は決して再生せざりき。此等皆舊美術の再びしがたき好例なり。要するに舊文藝を保存することは叶ふべきも、强ひて之れをして將來永遠の唯一の文藝たらしめんとするは不可能なり。然らざれば向上の途を杜ぐの所爲也。

古藝術の復興は新藝術創始の一大刺戟たり。古さを溫ねて新しさを知る、舊形式の幾分を學ぶ、可なり、舊着眼の精神に悟る、可なり。然れども誤つて舊形式に拘泥するの弊に陷らんか、歐洲十八世紀の Pseudo-classicism の陋に墮せざらんこと殆ど難し。夫れ文藝は最も專制主義(デスポチズム)を忌む。統一を强ふる勿れ。新らしきものをして競ひ起らしめよ。

既に保存といふ、修正と相容れず。保存を主とせば悉く保存するが策の宜しきを得たるものなるべし。生中に姑息の修正を加へて將に廢れんとする藝術を保存せんと試るは、角を矯めて牛を殺し兼ねて犧牲たるの機會をも失はしむるに比すべきか。蓋し新時代の好尚を以て舊好尚の紀念を修正す、根本の特質に累を及ぼさゞらんこと難かるべき也。德川氏は三百年なれども此の間はほゞ好尚を全じうし着眼を全じうしたりき、それすら末には理窟に墮し、小刀細工に流れたりし跡、能劇の修正に徵すべく、歌舞伎劇の修正に見るべし。況や明治式好尚の修正をや。明治三十年代は舊藝術の存亡機(クライシス)なり。格式典型の儼たる保存を圖るべき大時機なり。

歌舞伎に於ける修正や擬入や明治に入りてのは殆ど忍ぶべからず。「忠臣藏」や「夜討曾我」や「地震加藤」や、何ぞ年毎に理窟臭くせゝこましく成りゆくや。文樂一座の竹本樂を聽きし者は如何に寫實式の浸潤が古色を薄らがしめつゝあるかに氣付きしならん。攝津大掾や桐竹紋十郎や彼等は　を作る者なり。

能の現在物に同じ傾向を見ざること難し。「鉢木」や「藤榮」や「曾我」や「望月」や「安宅」や。嗚呼危いかな〳〵。水と油、夢と現との不調和。

鶴が岡の石燈に坐しながら師直の白を修正せし故團十郎、大振袖で裾引ずりて「お前」を「アナタ」に、「わたし」を「ワラハ」に言ひ直して見る北條時姫、淺妻船の振が上品式一點張となつたり、隈取安宅が勸進帳式になつたり、いづれも最負の引倒しの格なり。

或は猥雜卑陋の詞句を惡みて之れに代ふるに庸劣又は無意義に近き詞を以てするものあり。「外記猿」の四つ竹節、「關の扉」の小町が物語り、「淺妻」の「こちらむかせて」は其の例の一二なり。到底原詞の妖艶に及ぶべくもあらずして且つ樂調と相和せず。かゝる小刀修正何するものぞ、全躰の浮靡を奈何せんとする。瀕死の傳染病者に益なき注射を施すは寸時の餘命を與ふると共に幾何の餘毒をも加ふるの所爲たるに近し。

已に模倣を非とし小修正を非とせば如何にせば可ならん。曰はく舊藝術は舊のまゝに保存することとして別に新曲を興すべき也。

皆無よりは何物も生ぜず、蒔かぬ種は實りがたし。何物かを地盤とせざるべからず。最も進みたる樂律 endogenous なる樂律に立脚せんとする限りは是非とも俗曲に依據せざるべからざるは已に前にいへるが如し。二つには俗曲は兎も角も最近世の中流以下の樂聲、能や箏や雅樂の貴族的なるに對し

平民的好尚に應じて起りし曲なるだけに、其の纖巧にして浮靡の失あり、莊重雄大の致無く、天眞流露の美缺けたるにも拘らず、尚さすがに彼の自然の民聲たる俚歌童謠を攝取し相聯絡せしむるに便なればなり。（謠曲に近世俚歌を取入れんは殆ど不可能なり。）第三には所謂江戸式俗曲は早晩亡滅すべきもの、されば、ほしいまゝに取捨し取崩すも未練氣比較的尠かるべく、猛進に便なり。人爲を加へざるも江戸式俗曲は廢れゆくべし。林中が常磐津は年を逐うて清元に流れんとし、杵屋が節調も暗に富本調を攝取し來る。齊一變せば魯に至らん。三絃がマーチを奏し出すの時豈遠からんや。予が俗曲に立脚するは一は割愛に便なるが爲なり、好む所に侯するにあらず。

能劇は位置及び知識の上流の乃至中年以上の衣食住に裕かなる者の玩び草として長へに貴重すべし。貴族に宜しく、好事家に宜しく、隱者に宜し。心を沈禪せしめ、安定せしむるの效力に於て能劇に優るもの天下能く幾何かあるべき。其の兵馬倥偬、殺伐鬪諍、霎時も安息する能はざる底の戰國時代に悅ばれたるの理觀易からずや。現實に直反對するもの是れ理想なればなり。

能（謠曲）と骨董とは趣味を同じうす。心を塵外の理想鄕に遊ばしむる力あり、氣品を嫻雅にし高尚にする力あり、煩悶を忘れしむる力あり、宥和し、安慰し、鎭靜する力あり。生存の競爭日々に激甚を加へ來り、人々の自意誠の强烈なる廿世紀に此の般の趣味が中年以上の人士に特殊の需要あるは多言を要せざるなり。而も有爲活潑なる青年、壯年を擧りて骨董癖に沈湎せしめんは望ましきことにあらず。

一國の藝術は其の類の多きを妨げず。否、嗜好は强ひて一定すべくもあらず。種々の嗜好を共存せしむるは寧ろ美術素を豐かならしむる所以なり。

さもあらばあれ、上は上、下は下と德川時代に於ける如く藝術にまで階級制度を施さんは社會の障魔也、好尚の離畔は感情の融會を阻害すればなり。

維新以後歌舞伎に團十郎ありて其の殊なる藝風に能と歌舞伎とを繫ぎ、隱然として上中下の好尚を融會せる氣味ありしが今や其の人亡し。義太夫、浪花節、源氏節、薩摩琵琶歌、詩吟、新躰詩の朗誦乃至新舊の演劇、此等を以て今の中下流の嗜好に適するものとすれば、能は紳士、上流の玩びにして、二者の間を繫ぐものあるを知らず。今若し能劇に赴くには餘りに活潑にして、進歩的にして向上的なる、さりとて歌舞伎以下に向ふには餘りに高雅にして博大なる藝術の嗜好者あらんに、彼等は何物に就きてか慰藉と娛樂とを求めん。

歌舞伎や新演劇や日々に理窟に累せられ、皮相の寫實を是れ事とし、詩美を害ひつゝあり。尠くとも當分はかくの如くにしてつゞくべし。實感挑發にあらざれば見世物同然の小兒だまし。前者は年毎にdelicate（センシビリチ）になりゆく上中流の感受性の堪ふる所にあらずして、後者は識高く賞鑑力高きものゝ忍ぶを難んずる所なり。新樂劇の需要此に於てか生ぜんとす。

さりとて富本樂劇は餘りに油こくひねくれたり。河東、一中は餘りに澁くひねくれたり。清元は細く弱くひねくれ、常磐津は卑しく甘くひねくれたり。比較的ひねくれの尠きは長唄なれど、これ將た一本立にしては如何ともすべからず。長唄に俚歌童謠を綴り合せたる、裳たるに堪ふべく、謠曲に一中節を縫ひ合せたる、衣たるに堪へなん。西洋樂は或は紐たるべく、或は帶たるべく、或は上被たるべし。何か頭とし、何をか胴とし、何をか四肢とせん。曰はく謠曲、曰はく淨瑠璃、曰はく希臘劇、曰はく歌劇。信ずらくは是れ新樂劇創製の第一策。（三十八年二月）

「浦島」の寓意

「浦島」に種々の樂曲を取入れ、場面により人物によつて曲の適用を殊にしたには聊か諷意あつての事でしたが、いざ曲に附けるといふ間際までは、何も說明する必要も無いので、一切斷らずに置いた所、世上の人々が存外同情を寄せられ、兎も角も試驗の爲に曲を附けて見てはどうかとさへ言ふ人も尠からぬ今となつては、一通り微意を寓した點を說明しておくはうが當然だと思ひますから、大要を述べて見ませう。馬鹿な、そんな餘計な寓意が無かつたならば幾段か空想の自由を得たであらうものをと、或は非難せらるゝ人もあらうが、何も特に此の寓意の爲に作意を曲げた覺えもなければ、それが爲に別段苦勞をした譯でもない。總じてかゝることは作者が感興の行きがゝりから殆ど自然に出來上るので、自分ながら、言はゞ是非に及ばぬ結果であるのです。

序の幕の初めに出る仕出し、即ち散文の白を口にする外には只自然の聲樂ともいふべき船歌（俚歌）のみを歌ひ得る漁夫三人は、これは廣く我が下等社會全體の音樂的趣味好尙を代表し、それから（河東でなく、一中でなく、富本でなく、淸元でなく、長唄でもなく、主として）常盤津を口にする浦島が姥は、これは次第に墮落しつゝある都會（江戸）的音樂趣味の代表です。それから又始終竹本を本體とし而も時々常盤津と相觸れるところある浦島が尉は、義太夫節以上の樂曲には何等の趣味をも有たぬ今の大多數の地方人的好尙の代表、無論此のうちに源氏節や浪花節をも緣つゞきの曲として含ませた積です。

さて此二樣の樂曲趣味が都鄙の中流以下を風靡しつゝある時に當つて、位置の上流と智識好尙の上流は流石に之れに嫌らずして他の好尙の目的物を求めた。謠曲（能）は舊幕時代に於けるが如く明治の今日に於ても上流の玩び草である。然るに爰に特に新時代の高雅な嗜好を代表する青年者流がある。浦島は即ちそれです。彼れも其初めは謠曲（能）趣味に同情を寄せて、先づこれが理想に近いもの、西洋のオペラの向ふへ廻されるものは只是れのみと信じてゐた。隨つて狹斜臭味を帶べる常盤津とも氣

が合はず、劇としては兎も角も樂としては粗笨な竹本とも氣が合はない。彼れは全然下等社會の好尚を度外視して超然として自家が空想裏の新謠曲世界に心を遊ばせてゐた。

然るところ國民樂といふことが浦島の理想であるだけに、日を經るまゝに彼れは不安を感じはじめた。謠曲は餘りに俗に遠いやうに思ひはじめた。謠曲だけでは何となく古風過ぎ、澁過ぎ、寂し過ぎ、陰氣過ぎるやうな氣がして、もすこし快活な、端手な、花やかな、清新な樂調が加へたいやうに思ひ、いろいろ心を焦しはじめたが、工夫が附かぬ。そこで漸〳〵氣が變になつて何を宛ともなしに行吟ひあるく。

（一中節を謠曲の代用としたのは三絃樂の都合からです。）

舊上流は謠曲に滿足してゐるが、進取の氣に富んだ新上流は何か新しい樂曲を得ようと望んで煩悶してゐるのです。

さるほどに新上流の嗜好（浦島）と、都鄙の下流的嗜好（尉姥）との衝突は彌〻甚しくなつて、遂に全く背馳してしまふ。此の際浦島が耳に船歌（俚歌）が這入らぬても無い、が、之れによりて新樂曲を作さうなどいふ考はまだ浮ばぬ。何かにつけて只高尚々々とばかり覗つてゐるので、天眞の情を歌つたに過ぎぬ船歌をもをかしくむづかしく解釋する癖が附纏つてゐて埒が開かない。て、絶望して自暴自棄におちいらんとする。其の途端偶然長唄の精靈（乙姫）に出逢ひ、嗚呼これだ、これが我が理想に近い、謠曲よりも一中よりも是れが最も目的に近さうだと大に喜び、ツイ彼れと夫婦の契を結んで謠曲兼長唄

兼雅樂といふ理想樂界へ浮かれ入るに至る。（長唄全盛の昨今をほのめかすと同時に勸進帳、紅葉狩乃至泉流などのやうな能がゝりを理想とする一部の好尚を間接に諷した積です。）

併し謠曲や長唄や一中や雅樂は上品には相違ないが、尚天眞自然といふ趣致には貧しい、餘りに人工が加はり過ぎてゐる、餘りにクラシカルである。久しうして物足らぬ感が起らざるを得ない。何となく血や肉に緣遠く、生氣に乏しく、溫かみに乏しい、と尠くとも新代の代表者は感じはじめる。て、人間自然の要求として俗調を思慕するに至る。船歌がなつかしい、俚歌童謠が慕はしい、兎も角も自然の聲調へ今一度立戻つて見たいといふ希望が生ずる。ロマンチックが戀しい。さればとて舊のまゝの竹本へ我を折つて詫言して戻らうといふのではない、常盤津へ降參しようといふのでもない。いやいや、むしろ彼等を說得し誘引して長唄界へ伴れて來たい、只俚調に近いだけに彼等が何となくなつかしく慕はしくなつたのである。

いや〳〵、それは無理だ、謠曲はタカゞ長唄か雅樂とは融會しようが、俚歌や下等の俗曲などゝ調和するものかい、生中なことをすれば虻蜂取らずだ、と半心が留めるが、他の半心は聽かない、なあに旨く行く、と成功を堅く信じて、意氣揚々として俚曲世界へ戻つて來る。

ところが會釋も無き時勢は急阪を下る車の如く走つて好尚は三年が間に三百年がたの大變遷。勿論過渡時代の習ひとして、舊江戸的好尚の遺裔たる清元や常磐津や長唄も尚幾分か老若男女の間に殘つ

てはゐるが、大勢は既に明かに歐化的である。而して俚歌は其自然の聲たるの點、陽旋律なる點などが西洋の樂曲に調和し易いと見えて、祭禮などの囃子にさへ著く新樂調の感化が見える。さすがに女連は、其性の然らしむる所、遺傳や舊慣を脱すること遲く、今尙舊好尙を持續し、清元、常磐津乃至長唄に眷々たる趣も見えるが、三十歲以下の男や最新代の代表たる小學童兒は、多年馴致されたので、悉く若しくは多少唱歌式、オルガン式、ドンガラガッタガン式である。中には時と場合とによつて清元、常磐津乃至長唄などを口にする男連もあるが、それはほんの酒興か、然らざれば其意中の人が江戸的好尙の遺裔である爲か、又は國民樂は是非とも歷史的、根生的でなければいけぬなどいふ主義に基いてするのであらう。いづれにもせよ大勢は歐樂攝取といふ風潮であるところへ、かうあらうとは夢にも知らず迂濶にも純然たる舊長唄式で戻つて來た浦島は宛然たるリップ、ヴァン、ウィンクルで、何を言つても、尋ねても、彼れと此れとは全く風馬牛で、トンチンカンで、カラ調子が合はない。弱い細い三絃樂は強い高い太い西洋器樂の大波瀾に卷倒されて、押潰されて、詬罵嘲笑、大噪音のうちに葬られてしまふ。十年の苦辛水の泡と消えて、絃は斷れ、胴は破れ、棹は折れ、再び自暴自棄に墮らんとするに當つて、俗曲の遺裔であると同時に新樂界の太氣中に育つた若い男女が驅附て來て樣々に慰め介抱し、彼れを扶掖して新國民樂製作の端を開く。云々、云々。（詰の幕第三段の末に優人が自ら謠ふとあるも、第四段が全然白ヌキになつてゐるのも多少意味あつて爲たのです。）

やれ〳〵、とんだ新年宴會の口上茶番で、お退屈さまでした。理窟屋が聽いたら嘸小言をいふであらう。私しも二度とはこんな餘計な惡戲をする氣もないが、其以前我が樂界の風潮に感ずる所あつて兼ては多少自嘲の意味もあつて、數年前に立てた此の腹案をさすがに打棄てかねてゐましたので、かた〳〵「浦島」を眞先の題材となさゞるを得なかつたのでした。尙此點に關しては二月の「新聲」に掲げた「如何にして我が國民樂を刷新すべき」といふ漫言を御參照下されたい。

序ながら、序の幕に添へました前曲を、長唄一式にせずに、全曲中にあらはるゝあらゆる曲を集めたものにしたはうが、曲人、樂人の總顏見せになつて作者が「前曲」といふものを作つた趣意にも叶ひ、且つは幾らか歌劇のオヴチューアなどの趣にも通はうといふ友人の忠告もありましたから、中の幕の前曲は廢することにし、又西洋樂だけは省くことにして別の前曲を綴り、第三版に添へて置ました。（卅八年）

「かぐや姫」について

例によつて何か話せといふお需だが、今度のは前作「浦島」のやうに複雜つた寓意などがあつて作つた

のでないから、取り出してお話し申す程の事もない。

原作が、あの通り、我が古代文學中他に類の無い名作で、立派に芝居になつてゐるから、生中にそれを崩すのが惜しく、大抵は原作の意を辿りました。例のロマンチシズム流から申したら思ひ切つて飛び離れて作りかへたはうが働きでもありませうが、傳說や歷史や古い作品に縋る本意は一面傳襲の知識と感情とを利用するに在るといふが私しの持論ですから、輪廓だけは殆ど原のまゝに存しておきました。

「浦島」は主として振事を地盤にして作りましたが、こんどは主人公が月界の天女だけに、さう〳〵踊らせる譯にもゆかず、二つには「浦島」で、一中節を謠曲と長唄とのツナギに用ひやうとした案の迚も行はれさうにもないのに心附いた結果、「新樂劇論」の修正を兼ねて、こんどは態と謠曲式の要素を殖し、踊るよりも謠ふといふ方を主位に立てゝ綴つて見ました。かういふのも一二種は試驗して見る價値があらうかと思ひます。尤も、此の組織なら、脚色着眼こそ違へ從來の長唄所作事に幾らもあり、隨つて比較的に綴り易くもあり、かた〳〵此の種の樂劇に安んずる位なら何も殊更立つて新樂劇論などを唱へる必要もなかつたのです。それゆゑ「浦島」を目安にして私しの立脚地から言へば、今度の作は幾分か讓步の氣味、多少逆戻りの姿です。

併し、これは私し共に取つては、徒の第二の摸索たるに過ぎない。此の次はまた餘程趣を變へる積りです。

「浦島」は下手々々と浮世繪派の手法に倣つて綴りましたから、こんどのは怪しいながら狩野家の筆意といふ積り。若し第三作を出す日が來ましたらば、前の二作の筆意を併せ、出來るものなら油繪の樣式をも混ぜて見たいものと思つてゐます。いづれも下繪たるに過ぎないは勿論です。要するに仕上げはいつの事だか分らない。平生は隨分せつかちですが、これだけは先づ大馬鹿程度に氣が長い積りです。

竹取物語の時代は、實はいつ頃だか知りませんが、私しは舞臺面や服裝の都合から奈良朝時代と定めて綴りました。併し古實に拘泥して服裝や調度を誂へる氣は無い。大體は能衣裝式に、端手な中に澁みを持ち、花やかなうちに寂びを含ませたものにして、仕立方からが見た目に詩趣のあるやうにしたいといふが望です。謠ふ文句は、多くは謠曲文の句取に倣つて書きましたが、さうでない部分も間〻あります。隨つて旋律も謠曲に泥んで附けるには及ばず、樂器も能樂のに拘らふに及ばぬこと勿論です。又今の舞臺に上せるために作したのでもない。男の役は男に、女の役は女にといふ積りです。

（卅九年一月）

謠ひものに「竹取」について
引直したる

お需ゆる態と拙作に關係したとのみお話し申します。「竹取物語」はあの通りの名作でもあり、本來の材料がいかにもロマンチックで面白いから、誰れも目をつけさうなものであつて、存外古今の作物に取入れてないかと思ひます。誰れかの淨瑠璃に何とかいふつまらぬ作がある由幸堂君に聞きましたが、私はまだ讀みません。草双紙では應賀の作(?)に折角の好詩材を何の變哲もないものにしてのけた長篇物がありましたが、その外には差當つて思ひ附きません。或は滑稽の作といふので、源氏や伊勢ほどには國文家間にも持囃されぬので、俗間には尙更人氣が薄かつたのでもありませうか。近世の大切淨瑠璃に、ちようど似た趣向の娘一人に婿八人を仕組んだのが數種ありながら、「竹取」の名だけさへも取入れてはなかつたやうです。明治になつて高安月郊君が何れかの雜誌(文藝界?)に竹取中の人物を使つて一種の新しい謠ひものを作られたが、筋は原作とは大ぶ離れてゐたかと記憶します。浦島の傳說は年と共にいろ〳〵に變化して同源異趣の諸說あるに係らず、何れも簡單でありますから、之れを新曲の材とするに當つては、諸說を融會し折衷して更に新脚色を加ふるの餘地に富んでゐましたが、竹取は原作が立派なコメデーになつてゐて、人物の數も十分であるから、生中な新意を加ふるのが勿體ないやうにも感ぜられ、成るべく輪廓は元のまゝにして只中身だけに新意をと心掛けて綴りま

した。

原作者は、我が古今の文學中有數のユーモリストと稱してもよからうと思ひます。本來我が國人は戲謔の才に貧しうはない、隨つて頓智滑稽の作は古今に通じて隨分多い方でもありませうが、俳句以外には美術品として見る程のユーモアの作に乏しい。概して諷刺か頓智か惡謔かに流れ易い。「竹取」の如きも幾分か諷刺臭味を含んではゐますが、先づ〳〵ユーモアの佳作と稱してもよろしからう。見やうによつては、多少シムボリスチックな作で、一種の幽意玄趣も讀取られないでもないが、それは原作者の與らぬことゝ見る方が當然でありませう。又卷末別離の條下に至つて、隱然として尊皇主義や報恩主義がほのめいてゐるなども、必しも考案の結果とは思はれません。私などは此のほのめきが大ぶ赫映姫の器量を下げて只の人にしてしまふやうにも思ふ。これは多分時の國民精神の影が偶と寫つたのでもありませう。

原作が簡勁な古雅な而も明晰な名文であるだけに、之れを謠ひ物に引直すに當つては頗る弱りました。總じて謠ひ物は耳に快きを第一義とせねばならぬ筈のもの、而して耳の直覺は主として聽き馴れたのを快く感ずるならひ、即ち咄嗟に聽いて咄嗟に直覺するところが謠ひ物の生命、彼の默讀數回の後、目て見、相像で描きいだして、徐ろに玩味するたぐひの讀み物とは此一點に於て大逕庭があります。それも謠ひかたを悉く新たにし、例へば西洋の唱歌式に謠ふことに誂へて綴りましたらば知らぬこと、多

少從來の日本旋律、とりわけ謠曲や俗曲の如きに憑依すべきものと案を定め、さて其の詞章に創新の意を發揮しようといふことになると、私共の筆では困難です。 意も辭も新たにしようとすると、どうしても新體詩めいたものになる、生硬な句や不調和な成語が續出する、造語がしたくなる、テニハ、係り結びが謠曲以上、俗曲以上に破られてしまふ。 せめても措辭だけなりと餘り耳障りにならぬやうにと思ふと、肝腎の新意は壓殺(おしころ)されてしまふ。 双方少しづゝ讓歩と定めて再應の談判に及ぶと、讓歩更に讓歩で、曖昧な、朦朧な狀態に陷る。 遣る瀬がない。 併しながら是れは我が過渡期の謠ひ物に限つての累ひではないらしい。 謠曲、俗曲の詞章を御覽なされても、オペラのを御覽なされても、如何に節調の美のために内容が犧牲にせられてあるかは明瞭でありませう。 ワグナルのでさへも、崇拜者が激賞するほどに妙ではないらしい。 ワグナルのを詩として貶しめる諸論者の說に七八分の理があらうと思ふ。 要するに謠ひものゝ詞章は、有らゆる音樂の内容と同じやうに、茫として漠として、底も見えず涯も見えず、之れだけといふ限定の無いところが命で、聽く心の深さ淺さによつて解釋の單複繁簡を生ずるところに面白みがあるものではあるまいか。 無心無想にして聽く時は、只何となう細く、美しく、なつかしく、かよはく、哀しく、寂しく、痛ましく、又は勇ましく、手强く、いかつく、尊く、大きく、すさまじく、又は輕く、心よく、をかしく、樂しく位に感ずるに過ぎぬのを本領とするのではあるまいか。 彼のメンデルゾンの詞章なしの樂歌の如き、某詩人が該樂を聽いて後、態〻詞章に翻譯して、斯ういふ意であらうと問ひあはせたれば「さうお解し下されてもよい」と答へたといふ話が、此の消息を洩してゐるかと思ひます。 音樂は主として主觀的のもの、隨つて傳襲の耳癖(みゝくせ)や聯念に負ふ所が多いから、外國より俄か輸入のものなどは、よしや一時は珍らしさに好くとも、久しうして饜き、恰も西洋料理數回の後に米の飯が戀しくなると一般の感がありませう。

右樣の理由もあり、二つには腕が鈍いので、成るべく陳套を避けたいと望みながら、存外新しみの無いものとなつたやうですが、作者はそれでも成るたけ淸新にといふ素志であつたため、「浦島」とはちがひ、今度はやゝ古詩歌や古成句を其のまゝに用ふることを減(へら)しました、さなくも及ぶべきだけ意味か言葉かを翻化して用ひた積りです。 (尤も原作の詞句は態と取入れるのを力めました。)

凡そ樂劇の詞章は、聲を永うして歌ふといふ上よりいふも、其の比較的簡約又は朦朧たらざるを得ざる上よりいふも、並の劇詩の詞章に比して、ふと聽いて解しにくいは勿論ですから、是非とも筋が簡單でなければならん。 豫め見物人がよう合點してゐるたぐひの話でなうてはなりません。 淨瑠璃などには複雜な筋のもあれば、多くは淺近な筋立を平明卑俚の語で語ればこそもつたもの、眞に謠ふといふ程度のものとなつては、筋は人口に膾炙してゐるものでなくては無理です。 此の意より見て古傳說などが樂劇には向きませう。 これがまた輪廓だけは古傳說のまゝと主張する所以の一理由であります。

「竹取」も筋は見物のよう心得てゐるものとして綴りました。 (三十九年一月)

寫實劇の將來

近ごろ西洋にて當る芝居といへば、大抵生世話物の輕く愁嘆脉を帶んだるものゝ由、これは彼方の雜誌などにも見えたりしが、新歸朝の島村抱月君の話なり。偶然の現象なるにや。或は悲劇は一段大なる天才の作者を要するが故か。又は他に理由あるにや。悲劇にも階段あり、エスキラス、シェークスピヤ程度のは望みがたしとするも、今日彼方にて當りを博する世話物位なるは、必しも得がたかるまじく思はるゝものを。先だつて或西洋雜誌を讀みしに、拜金宗の本山たる亞米利加にて、近きころ屢〻銀行、會社員、相場師等の內幕を眼目とせる劇を演ぜしに、いづれも不入なりし其の理由は、主として營々悶々の自家平素の影を再び劇場に見るを好まぬ人情に在りしものゝ如し。又總じて "fatal ending" は亞米利加にては成功稀なりと、これは彼國の或劇通の著書に見えたり。米國の見物は我が大阪の見物などの如く娯樂を專一にして鑑賞の眼低きが爲とも思はるれど、英吉利も兎角コメデー流行り、大陸も抱月氏の話の如くなるときは、そこに何か別樣の消息あるものゝ如し。

一概に悲劇と名づくるうちに、悲壯にして雄大なるもあり、只哀れなるもあり、甚しく悲慘なるもあり、前なるは古今東西有數にして天才を俟たざれば得がたき習ひなれば、大概は後の二者なり。さていづこの國の劇を觀るも、昔の悲劇は概して理想的にして歷史的か樂劇式か然らざるまでも多少夢幻的に作られてあり。我が淨璃瑠、取わけ新內物、又は默阿彌作の脚本などのうちには、隨分悲慘を盡したる見るに痛ましきたぐひのもあれど、或は材料の上に、脚色の上に、又は演技の上に、多少夢幻化の作用あるため、人々悲み傷みながらも流石に實感に墮するには至らずして見物し得たりき。然るに近時行はるゝ悲劇は、何事にも寫實の傾向盛んなる自然の結果とて、二つには平民時代の需要の結果とて、材は大抵現社會の中流、科介扮裝は力めて實際のまゝ、脚色も自然らしくと覘ふゆゑ、人物も偉人よりは凡人、脚色も悲壯よりは悲慘、隨つて作意淺膚にして優技拙劣なるときは、兎角不自然や不條理が目に立ちて見聞くに堪へがたく、作深刻にして技眞に逼るときは、或は痛く身につまされ、或は周圍に思ひあはさるゝこと、淺ましきことなどありて、是れ將た見るに忍びざるが如きこと多きかと覺ゆ。今日悲劇のコメデーに幾步を讓る所以のもの必しも良き作者無きが故のみにもあらじ。さすがに我が國にては甚しく不自然にして殘忍なる作も、病難、災厄などによりて强ひて主人公を悲境におとしゐるゝみじめなる作も歡迎せらるゝ例なれど、これはまだ我が國が比較的に餘裕ありて生存の競爭が外國ほどに激烈ならぬ爲なるべし。さらずば見物の多數が世故に昏く、趣味もきが爲なるべく、さなくば作も

技もまだ〳〵餘りに稚くして眞に逼まらねばなるべし。

演藝を娯樂用といふときは眉を顰むる人あれど、多數の公衆は娯樂の爲ならずして演劇場に入ることなしとすれば、其の技の彌ゝ巧妙なるに及びて多少の苦痛とはならぬまでも不快を感ぜしむるたぐひのものを喜びもてはやすといふことは理窟に合はぬ話なり。 先づは面白く心地よきを好むが人情なり。 さりとて小兒や田舍人ならば知らず、稍ゝ立上りたるは、玉乘やうのもの、寄席藝のやうなるもののみを繰返し〳〵見ることを喜ぶまじき筈、何等かしんみりと心に沁みて而も心地よく玩賞し得らるゝものをこそ欲しがるべき筈なれ。 人は何故に悲劇を好むかといふ疑問の屢ゝ審美論者間に繰返さるる所以は是なり。 笑うてばかりは濟まされず、さりとて泣いてばかりも得堪へられぬが人情と見えたり。 然るに生存競爭の昔日に比べて幾十倍に激烈を極むる此のごろは、平生が泣きの涙なること多かるべきを、劇場に入りてまでも涙事は今の感じ鋭き手合の得堪ふまじき所なり。 さればとて悲觀が人情の眞髓なるからは亞米利加のやうなる生活に餘裕ありて若々しく活潑なる國は別として、歐洲大陸、就中沈思に長じたる獨逸などにては見物が純然たるコメデーに安んぜざるも道理なり。 輕き愁歎脈の加へられたるが諸國に流行するも一面は此の理に基くと解するを得べし。 英吉利などの科白劇におひ〳〵音樂を利用することの行はるゝ正面の理由は、主として客寄せの一策とも見ゆれど、策士も心附かぬ内面の因由は、今の悲劇の兎角現に流れかゝるを和げて、ほんのり夢にしてのける一方便とも

見るべし。

淨瑠璃にては近松が心中物、歌舞伎にてはお夏清十郎、お千代半兵衛、お染久松、お七吉三など、町家の中流を悲劇に取入れたるものも尠からざれど、それらはいづれも予が謂ふ樂劇式にて現に流るゝを夢にぼかす用意十分なるものなり。 默阿彌作の世話物などの中にて、囃子、鳴物の伴へるにも係らず、殆ど今の新演劇にひとしきも間々あれど、尙流石に人物の選びかたに自然の用意あり。 尠くとも其の重立ちたるは娼妓、藝妓、盜賊、田舍武士、又はずつと上流か下流かなり。 即ち徒の社會の一邊隅を代表する人物か、或は當の見物人の多數とは懸離れたる部分を代表する人物なるゆゑ、多少脚色の上、科介、扮裝の上に不自然不精確なる點あるも、大かたは看過せられて幻影を呼ぶ邪魔とはならず、兼ねて實感を催さしむるやうのこともなくて見物することを得べかりしなり。 今日の生世話物はそれとは同じからず、主として中等社會を寫すを例とす、然るに平等時代の然らしむる所とて、今人は其の外形に於ては殆ど悉く中等社會的なれば、扮裝、科介の不自然も忽ちに目だち耳だちて、見るに面白ければ眞に逼りすぎて氣味わるく、痛々しく、淺ましく、久しうして堪へられぬやうにもなるなり。 我が新俳優の演劇の如きは、やゝ世故人情に通じたる目を以て見れば、或は馬鹿らしく、或は穢らしくして堪へがたし。 美術の妙はなくして、寫實の淺と拙とのみが浮上りて見ゆればなり。 折々は、嗚呼悲劇作者の上手がなうて、役者が下手揃ひて、それで持つたものなりと感ずることもあるなり。

東京座の「魔風戀風」は女學生をあて込の興行なりしに、外れたりしは、理あることなり。女學生などは見くらべられにゆくやうな氣がして聊か鼻白みぬべし。まして親心をや。「不如歸」の流行は、一は原作が兎も角も時代精神の那邊にか觸れたるにもよるべけれど、一つは稍ゝ見物の多數とは懸離れたる上流社會を犧牲にしたる作意なれば、見物人には向う河岸の火事と同じき風情あるべくや。涙を流す女客の心にも大ぶの遊びがありて、痛ましといふも夢心地以上にはならぬなるべし。審美論者にいはすれば、それは作の高下巧拙にあること、出て來る人物の階級や種類によらんやといふならんが、それは拔けた作の事、並の作につきては以上言ふ所に若干の道理あるべき也。

世話物は必然の勢ひに驅られ、今よりも更に寫實脈の度を加ふべしとすれば、如上の理由によりて悲劇だちの作は歷史物へ戻るか、我が歌舞伎の如き淮樂劇式を取るか、多少理想的又は夢幻的に脚色するか、其のいづれへか向ばずば、尠くとも此の過渡時代に處しにくかるべし。我が國のはまだ幼稚なれば格別として、彼方は既に其の域に詣れるにはあらざるか。コメデーの全盛に對峙するオペラの流行は、別に理由あること勿論ながら、此の意味に解しても一理ある也。

歌舞伎爛熟し、能乾枯し、所謂新演劇は生硬尙ほ舊の如し、我が知識の中流は全然として娛樂を缺けるなり。如何にしてか此の缺陷を補はんとするぞ。是れが我が演劇壇當面の疑題なり（三十九年一月）

歌舞伎劇の將來

今の脚本は時勢に副はぬ

これからの芝居は如何なるであらうがといふ問題は詮じつめれば脚本次第と云ふ一言で解けるであらう。新演劇がどうやら物になりかけたやうで、其の實はほんの若い人達に喜ばれるばかりで、贅澤な趣味をもつてゐる連中を喜ばすことの出來ぬのも、つまる所脚本が間に合せもので、世態をも人情をも穿つてゐないからです。舊俳優とても同じ事で、世の劇通たちが褒立てる當り狂言すら、新代の精神から見ると興が薄く、時としては不快を感じたり、馬鹿らしく感じたりすることもある。團菊が生きてゐても、もう迚も此の水と油とほどに違ひかけた新舊の好尙を共に滿足させることは出來まいと思ふ。すなはち俳優の罪と云ふよりも、脚本がもう時勢に副はないといつたはうが當然です。

屢ゝもいふ通り、俳優は美術家だといつても、彼の畫家や彫像家や詩人や作曲家なども同樣には見られない。他人が拵へた脚本を演活すといふだけの美術家、文學者あつての俳優ゆゑ、時勢が移り變つた際には如何なる天才の俳優も新作家を俟たねば如何ともしがたい。德川時代には、五十年、百年、百五

十年と時勢が推し移つても、太した激變はなかつたもの。 政體も同じなら、士農工商と別れた社會の組織も同く、隨つて風俗習慣も大抵變りなく、人情や好尚もたかゞ表面だけの變遷にとゞまつてゐたものゆゑ、元祿、享保に出來た作を文化、文政はさておき、安政、慶應まで用ひつゞけても、座附作者に多少の機轉があり、演ずる俳優に多少の工夫があれば、和藤内や定九郎の扮裝を改めたり、白、科の其處此處を改めたり、脚色に幾分の添削をして、それて新代の要求に合せてゆくことが出來たものです。 併し傾城や藝妓を美人の理想と見做すことを是とした時代とハイカラ式の今日とては話しあひが附かう筈がない。 譬へていはゞ、德川時代は修繕普請て間に合つたものだが、けふびはもう地盤から易へなければならないのである。 茶室の鴨居が低いので西洋人の客に氣の毒をしたといふので、ドーア並に高くしては斯道の趣味が保たれう筈がない。 高麗瘢の吃又、雁次郎の治兵衛、骨折は十分見えても、それだけの感興が起らぬと云ふは、技倆の故はかりではあるまい。 生中の修繕が目に立つからではあるまいか。 言ひかへれば脚本が時勢に遠い。 遠いなりに、堅く舊型を守つて演ればそれはまたそれて面白味があれど、それは明治の太氣を吸ひすぎた連中、とりわけ四十以内の俳優には無理な話。 つまり脚本の本意と俳優の肚とが一つてない。 團十郎の解釋さへ往々維新以後の肚て、どうも呑込みかねたことがあつたを、今の俳優が揉上を剃落しかねぬ手て手を入れるのは尚更のこと。 工夫をすればするほど妙てない。 要するに脚本がもう時勢に副はない。

どういふ點が時勢に副はぬか

將來の脚本は、目のつけどころは勿論、脚色方までを改めねばならぬ。 在來のには三つの癖があつて、どの作にも附纏つて離れず、俳優もそれを劇の本領のやうに思ひ、世の劇通たちも多くはそれを喜んでゐるのだが、それがまだ新時代とは背中合せとなる主な原因であらうと思ふ。

第一は草雙紙張といふこと、第二は錦繪仕立といふこと、第三は茶番氣といふことです。 此の三つは德川文藝に附き纏つてゐるものであつて、互ひにこんがらかつてゐるものながら、別ければ三つにならぬこともない。 文化、文政に至つてはそれが頂點に達し、明治に近づくに隨つて腐り爛れて、今尚全く融けてしまひもしないといふ有樣。 これを江戸文藝の怨靈とでもいつたらよからう。 もうよい加減のところて退散させぬと、日本固有の文藝は取殺されて、舶來の生々しい蠟人形か、明治三十年代生れのよちよちあはゝばかりが殘るであらう。

草雙紙ばり

草雙紙ばりとは、在來の作はどれも〳〵昔の小說と同じやうに、主となる人物の性格を明かに寫すといふことを第一とするよりは、話の筋の面白さや、思ひがけぬ目先の變化や、此の末どうなるといふ感興

やを眼目にして、一幕一幕が草雙紙の一篇一篇のやうに、見物の心を釣り、又は意表に出づることに浮身をやつしたものである。 それゆゑ筋立の復雜といつたらない。 西洋の作では、多分英國のシェークスピヤ及び其の時代の作者の一二を除いては、劇にこんな復雜な筋立をしたものはあるまい。 シェークスピヤとても我が國の程ではなく、又さすがに草双紙張に淺俗くもなく、目先主義でもない。 しかもそのシェークスピヤすら、形式としては、もはや外國の新作の模範にもならねば、我が國の新作の參考にもならぬ。 小生が「桐一葉」などを書いた時分は、せめても日本のをシェークスピヤの形式までじも進めて見たいと思つて試みたのであつたが、今から見れば姑息な策であつたゞけ、失敗した。 それといふのも、畢竟は子供の頃から染込んでゐた草双紙張が累をなしたのである。

草雙紙は本來が學識のない女、子供を相手のものゆゑ、總躰に淺俗い。 一枚一枚飜つて目先の變るを喜んだのを標準とするゆゑ、近く譬へれば「双蝶々」の引窓の塲同樣、巧緻もあり、一種の趣味もあるが、要するに屑々として目まぐろしい。 波瀾が小さ過ぎる。 又彼の見物に筋の成行が分るのを「底を割る」といつて嫌つたのも、草雙紙張の特質。 で、探偵小説式に二重底、三重底にと仕組んだもの。 これも昔の作には必要でもあり、一種の面白味を加へたものでもありましたらう。 しかし今日の好尚からいへば、見物には劇中の人物の肚が皆よく分つてゐるはうが俳優も藝が爲よい筈、見物も俳優の苦心がよう分つて面白い筈であらう。 現に勘平の切腹に同感するも、松王の首實驗に深い面白味を覺えるのも、名高い作だけに、誰れもとうに作意即ち狂言の底を知てゐればからのこと。 それを態ゝ底の知れぬやう〳〵と仕組むを妙とする癖が附纏つてゐるゆゑ、惡人かと思へば善人、阿呆かと思へば怜悧などといふ紋切形うるさく、却つて千篇一律に成り易い。 在來のは大抵どれも〳〵時雨煮仕立て、砂糖、味啉、塩一切が利過ぎてゐる。 酒をさし、水をさし、只一幕を引き延し淡しくし、三幕位に仕立てたら今樣向にならうかと思ふ位。 「オセロ」や「ハムレット」もシェークスピヤの作なればこそなれ、他人の作ならもう程なく祭り込まれてしまふであらう。 あら〳〵ながら草雙紙張の謂れはこんなもの。 此の後新しく作する人は此の癖を襲用してはなるまいと思ふ。

錦繪仕立

西洋の劇にもタブロー、ヰヴン(活人畫)といつて、幕切に一同體よく並んで所謂引張の景めいたことをすることがあれど、それは大抵俳優側の思附ともいふべく、作者自身が作をするときに、一々幕切の格へて綴くことは稀有であるらしい。 いはんや一幕のうちに幾度も活人畫模樣になることを必要とするなどは、オペラ風のものは別とすれば、先づ彼方にはないことであらう。 然るに我が國のは、草双紙の一枚一枚に目先の變るを理想としたばかりでもかくなりさうな筈なるを、例の極彩色の豐國、國貞の役者繪が市川の爽快なる荒事、尾上、澤村の意氣溫柔、瀨川、岩井の嬌態、媚態を聯想する限り、殆

ど憑魔のやうに作者の頭を支配せざるを得なかつたゆゑ、筆を取ると同時に、作者自分も手を振り、頭を搖かし、三足下つてぎつくりばつたりの、活人畫どころでない、活きて動いて物を言ふ人形身といふものに重きを置き、それが拙ければ劇てないとまでも貶しめたもの。 例の團十郎の活歴以來、少しばかり餘裕はついたものゝ、尙國貞、芳幾が芳年好みとなり、ところ〴〵能畫の彩色を取入れたり、容齊好みを眞似て見たといふまで。 畫割から服裝から、色取から、配置から、大體に於ては錦繪好みて、繪畫本位の劇たることは變らぬ。 もとより劇は半分は目に訴へるもの、畫面の面白味を重んずるを惡るいといふのではない。 なれども畫面又は活人畫式といふことに殆ど七分がた以上の地を占められて、剩す所僅かに方何寸、そこだけに眞の劇の面白味、即ち迚も畫では現せぬたぐひの深沈とした人情美は生ひ立つのであるとすると、心細い話。 大近松の筆を以てしても、畫面の興を主とした時代物では殆ど劇の本領たる人情美の面白味を寫すことを得せなかつた。 今の審美眼ある若手の人々が、歌舞伎の名作を見て其の巧みに驚くことはあらうし、其の巧みを喜ぶこともあらうが、とかく其の巧みが目先にちらつくので、我れを忘れて作意又は作中の人物と同化しかねるのも、一つはこれがためであらう。 將來の作者は思ひ切つて此の錦繪脈を解脫し、俳優もまた思ひ切つて科介を在來のと變へずばなるまい。 既に今日でも大阪俳優と東京の俳優とでは、此點に於て大ぶ演方を異にしてゐるは事實なれど、さりとて彼の淨瑠璃物を演ずるに寫實式を加へたり、古い歌舞伎脚本へ明治式の工夫を補綴合せるなどの勘

違へは困りもの。 古いのは、昔ながらに演ずるが、其の作をも其の藝をも活す道理。 彼の團十郎まで續いた脚本の幹や根は元のまゝにしておきながら、枝葉ばかりへ小鋏を入れるといふ遣口は、もう斷然と廢めたはうがよいと思ふ。 いや、廢めなければ一擧兩損、古い型も亡び、新しい作を呼出すことも後れる。 もう折衷時代ではない。 追分時代である。

茶番氣

古くは近松門左衞門、近くは古河默阿彌に至るまで一貫してゐるのは茶番氣。 茶番氣とは、劇の作意が兎角眞面目でない。 悲しい、傷ましい筋を綴りながら、遊戯が六七分、頓智思附が三四分といふ割合で出來てゐる。 大體に於て樂觀的であつた德川時代の見物にはこれが相應であつたのだが、濃い淡いの差こそはあれ、多少深刻と苦い生活の味ひを知らぬはない今の見物には、此の滑稽ならぬ滑稽の面白味が氣に入らぬ。 わるくいへば、田舍育ちで江戸趣味が解らないのだが、よくいへば、氣に入らないのだ。 滑稽なら滑稽て、いつそ人情離れのした、馬鹿らしい活きたボンチのやうなのなら、それはまたそれで、大阪俄を見る氣て見てもゐやうといふ氣。 人情にからむなら、眞の喜劇らしく作つて貰ひたい。 心持よく、巧みを衒耀けずに、頓智や思附は二の町にして自然に笑はして貰ひたい。 とんでもないところて和漢の故事を匂はせたり、讎案の巧妙を吹聽したり、牽强附會鹽梅に落を取らうとしたり、通を

並べたり、嵌方や繼合せ方や取合せかたや繪心などを第一の手柄のやうに浮上らせて貰ひたくない。少なくともこれからの作者や劇評家にはさういふ點を脚本の眼目だと思つて貰ひたくないものだといふ氣がある。さて此のやうな作法を總稱して、三題話式と名づける。三題話は三題話としては一寸面白いものだが、劇の式としては甚だ妙でない。

草双紙好の小生さへ幼少の時分から、脚本としてはどうも好かなかつたのは柳亭種彦の作、種彦は此式の頭取と稱してもよい。「正本仕立」などは、多分劇にして見たら皆面白くあるまい。近くば今度の「田舍源氏」の古寺を御覽。草双紙で見ると、流石に面白い思附だと誰も褒めて一寸翻るのを躇躇させる程の味がないでもないが、舞臺に上せて見ると、煩い。今の目からは勿論、昔の目から見ても御馳走過ぎると評すべき代物。本源氏の本筋通り、京極の御息所の生靈が現れることにして、能樂式に近い清淡とした振事物に仕組んだら、それこそ優美でもあり、妖冶でもあり、凄愴でもあつて、嘸よい抒情詩が出來たであらうものを、怨靈と思へば只の老女かと思へば情婦の母で、しかもそれが舞の師匠で、刑餘人で、謀叛人の片人で、それが善心に立返つて自害する、女も自害する。寶物の行衞が分る、山伏が出る、それが又只の山伏でない。まだしも寺の坊主が山名の廻し者で無いのが見附者。せめて手早く始末がつけばまだ助かれど、怨靈が出ると、山伏が出て、それからは局面俄に一轉して、「葵の上」をそつくりそのまゝの長丁場。草双紙ではたつた一二枚だからよいが、乳の下を突いてから

も長談義があるから辛い。美しい晝寢の夢の後で嬉しくない理窟話を聽くやうなもの。併しかういふことは種彦のには限らぬ、どれも〳〵此式。默阿彌の「十字の辻占」を其當時は持囃したものであつたが、三題話式は舊作者にとつては最も綴り易いのである。彼等は頭に案があつて後に材料を探すのではなくて、材料を拾ひ集めて綴合するを本領としてゐたゆゑ、これとこれとを集めてと注文されば、探す手間は入らず、迷ふこともなく、最も容易いと感じたのである。此外、其筋がやかましいので例の露骨な濡事や猥りがはしい科介や野卑な幕がなくなつたのはよいが、その代り色氣艶氣が悉く脫けて、舊脚本は、いよ〳〵今の目からつまらなく見える。又殘忍なことの除かれたのは結構だが、腹切だけは其筋は「國粹」とでも思つてゐるのか今も尙居殘つて、一日の劇に三度も四度も見せられるには困る。それもこれも今日のものでない。

かやう言つたからとて、强ち昔の作を悉く貶すのではない。かゝる式の名作も、勿論文學上、演劇上の一種の寶物として後世に傳へてよい。迚も將來に二度と再びかういふ作者を出さうとしたとても出すことは出來まい。が、今日の好みには適らぬ。作者も俳優も劇評家も、かういふ作に對する時と將來の作に對する時とは、全く心の態度を別にして、舊いのを好くがために、新しいのにも多少は此茶番氣、三題話脉が要るものゝやうに思つて貰ひたくない。南與兵衛の武士と町人との變り目よりも、もちつと截然と氣の變り目を見せて貰ひたい。興行主も、もうよい加減に擬古物展覽の手加減を改めた

がよからうと思ふ。

將來の脚本

西洋は、何事につけても日本から見れば濃厚いが、ひとり劇の筋立だけは意外に淡泊です。我が在來のは、あゝでもない、かうでもあるまいが蒿じて巧緻の極に達して爛熟し、中には味が戻つて無味のやうになつてゐるものもある。これからの作は自然の初めに戻らねばならぬと思ふ。

さて右にいつた舊脚本の三癖を脱した新脚本が出來た曉には、俳優の藝風はどうなるであらうといふにこれが一寸一言ではいへない。先づ所謂新脚本が少なくとも三種に分れることを言はねばならぬ。

先づ在來のと全く形式、精神を異にした史劇の脚本が出來やう。次に現在のと違つた社會劇の脚本が出來やう。次に所作事劇となつて現れるか、オペラに模つて樂劇として現はれるか、又は能と所作事とオペラとを絢交たやうなものとなつて現れるか、それは分らぬが、何かそのたぐひのもの、脚本も出來やう。で此の三種の何れかに適當した天分を持つてゐて、其の道の修養もあつて、そして好い作者と提携する俳優が將來の新派の名優。

次には舊脚本、舊藝風が全く廢らう筈もなく、廢らせてはならぬ筈ゆゑ、自然にその保存の道が開け、早い話が能樂と同じやうな道筋を踏むであらうと思ふ。例へば、最も代表的となる淨瑠璃劇若干種程、

同じく最も珍重すべき歌舞伎劇及び活歴劇合せて若干種程、別に振事劇とも總稱すべきもの同じく若干種程(これが最も嚴密な注意を以て型を崩さぬやうにさへ保存されたら)長く後世に傳はり、これに當る名優は同一人で兼ねられることゝして、立派にそれだけに安立して修養をつゞけ、腕さへあれば内外に名優と稱美せられることであらう。今のうちはともあれ、今二三十年經たば、旗印の鮮かになることは明かであるから、大ていのところに見切をつけて、兩天秤主義を廢め、一意專念の方針を取らずば作者も俳優もどちら取らずになるだらうと心配します。(三十九年十月)

新演劇の現在

さても其後新演劇が技倆に於ても、道具立に於ても、脚本に於ても、たしかに幾段かの進歩をしたといふことは世間の噂で知り、如何さまし、たであらうと自分も想像し、とかく思ふやうにならぬ時間を繰合せて、時たま出掛けて行つて見ると、星の廻り合せが惡いと見えて、噂程でもなく、又想像程でもなかつたと感ずることの多いのは、我れながら不本意千萬である。古い事から話さんと分るまいが、小生は日

清戰爭ごろまでは相應に新演劇を觀たものであつた。其後ずつと遠退いてゐたが、洋行歸りの川上夫婦の評判が高いので、彼の沙翁物や「江戸城明渡し」などを窺き、近松研究の呼聲が花々しいので、眞砂座の伊井一座をも一兩度おとづれたが、これらは何れも失望であつた。近松研究は最も上出來と噂の「浪の鼓」や「天の網島」を見落したからでもあらう。近くは歌舞伎座の「サッホー」が豪い人氣との事故行つて見ると、其筋の手入の後の故か、これもまた目に殘る程のことなく、本郷座が新代の見物を興行毎に引寄せると聞いて、「俠艶錄」を觀に往くと、折も折、千秋樂の日で高田實は病氣缺勤、よく〳〵緣の……と舊劇ならば思入のあるべき始末。それこれ小生は新演劇を周到に公平に評するには素養が足ら無いと言はれても一言も無い。隨つて下に言ふことは少々酷に過ぎることもあらう。運わるく不當りなのばかりを見たゝめだと新演劇通には合點して貰ひませう。

脚本

假に最近の「サッホー」と「俠艶錄」とを標準にして評して見れば、第一脚本がまだ美術品になつてゐないと思ふ。將來の脚本は史劇、社會劇の何れを問はず、もうそろ〳〵と物語脈を脫し、成るべく時の一致を保つやうにし、長くも一二ヶ月間位の事を三幕か四幕に仕組むイブセン式を體とし、前々の履歷は人物の對話のうちに解つてゆくやうにせねば妙でないと思ふのに、其の邊の用心がちつとも見えない。

それから又生世話としては、筋立が甚だ不自然で、「サッホー」の如きも何となく黴案臭く、日本の今の情態には的切と適らないから、やゝ世故人情に通じてゐるものには、どうも同感が起りにくい。一例を擧げれば、佐保子が男に棄てられて「待つて下さいよう」とハイカラの佐用姫を演ずる幕切は、最も喝采を博した見せ場らしいが、小生には、この場が初心な女學生あがりなどの痴話喧嘩かとも思はれて、其前後に現れる世馴れた佐保子とは別人のやうに感ぜられる。西洋には非常な感情的な、女學生と藝妓とを等分にまぜ合したやうな女も多いから、原作では或はうまく調和が附いてゐるのかも知れんが、黴案の筋立と河合の演じた柄合とでは、子供の言ひ爭ひ同樣な一時の事で、あれほどまでに狼狽し絕望する女とはどうしても受取れない。葛藤の原因が薄弱で、衝突が子供氣で、如何にも虛らしい。さうでなくば河合の柄が分別臭くて役に適らないのだともいへる。前後の幕の佐保子を、もつと感情的な、うぶな女にするか、此の幕の佐保子を、もつと分別ある姉女房にするか、どちらかでなくば呑込にくいと思つた。せめて情夫の性質が、多血だちの、もつと激烈な、一徹な、勝氣な、癇癖の強い男に出來てゐれば道理らしくもなるのだが、伊井の演ずる所によると、普通の而も溫厚しい息子、うぶな書生風、煩悶するのも腹を立つのも徒のだゞつ子のやう。今火の如く怒つても半日も經つたら笑ひ出しさうに初手から見えすいてゐるゆゑ、如何に惚れた弱身があればとて、あれほどまでに佐保子が狼狽へるが不自然である。按ふに此の場を自然らしくするには佐保子の競爭者の娘をもつと働かして、豫め佐保子

の心に「棄てられはせぬか」といふ疑惧の念のあることを十分に伏線的に示しておかねばならぬ筈だ。子に對する情とても同じこと、前々の幕に相當の伏線がなくて、此幕で俄かに母子の情を見せるから骨折ほどには同感が起らない。女の見物すら更に涙を催す樣子がなかつた。絶叫して氣絶するまでの大悲痛の場を寫實的に演じながら、箸が折れても泣く女の見物をさへ泣かせることが出來ぬは、筋の不自然な證據であるまいか。「千代萩」の御殿場なぞは大々夢幻劇ながら、如何な拙な俳優が演じても女客は泣く、人情の自然に觸れてゐるからではないか。

「俠艶錄」を見ては更に甚しい不自然を覺えた。俳優連がめい〳〵注文を持出して手を入れたとか聞いたから、作者の本意ではなからうが、如何にも不自然な矛盾が多い。栗本弓彦といふ惡漢が奸計を以て某子爵家の相續人となつて其家の女雪江といふを妻にしたところ、其の娘が許嫁の男に操を立てて肌を許さないので、自棄を發し、亂酒に耽るといふまでは先づよいとしたところで、子爵及び舊家令等に譴められて、氣短かに其相續權を放棄し、素直に出て行つてしまふといふことからが先づ解しがたい。非常な正直な、感情的な男ゆゑ、むか腹を立つたのだとすれば、前の陰險な奸計が呑込難く、後の執念深い高田實式の冷かな復讐心とも兩立せず、性格が矛盾だらけ。眞に意志の强い男ならば、飽までも法律を楯にして相續權を棄てざるべく、奸計に富んだ男ならば、手を變へ品を變へて雪江を手に入れるために更に策を講ずべきだ。復讐をするにしてからが、わざ〳〵北海道へ高飛して錢儲をしてから

なぞといふモント、クリスト式は餘り持つて廻つた話。とりわけ前に何の伏線もなくて鹽原の場で翻然として急に善心に立返つて自殺するなぞは舊劇の常套たる「戻り」同樣で、呑込みがたい筋立。これはほんの一二例だが、一々枝葉に渉つて矛盾や不自然を數へれば殆ど果しがない。どうせ芝居だからといふ辯護もあらうが、歌舞伎風の史劇でさへ穿鑿や考證の五月蠅い今日、寫實を表の生世話では我慢がしにくい。默阿彌物の生世話のはうが、まだしも自然に近いやうに思ふ。よし形式は不自然でも、もすこし切に人情の自然に觸れてゐたと記憶する。かて〻加へて出て來る

人物

が妙でない。平民全盛の今日、凡人本位の今日は、劇中に現れる人物が英雄、豪傑、忠臣、孝子、貞女、烈婦でないは當り前、そこに却つて舊劇以外の自然の情趣が寫される次第であるから、人物が理想的でないからとて新演劇の筋立を咎める沒分曉漢はよもやあるまい。しかし「理想的」といふと〻「深刻」又は「强烈」といふとは一つでない。劇の人物は疵だらけでも、不具でもよいが、どこか强烈なところはなくてはならぬ。しかるに「俠艶錄」なぞを見ると、如何にも人物が何れも〳〵生溫く、薄ぺらで、水調子式に出來てゐるやうで、感興を牽きにくい。力枝は俠婦として綴つてあるやうだが、如何にも平凡な女で、たかゞ惚れた男を食はせておくといふ位の俠氣。明かに自分に氣があつて、恩に被せる心

て金を貸すといふことが見えすいてゐるのに、如何に絶體絶命なればとて、出入の盲按摩の金を平氣で喜んで借るも俠婦らしくなく、自分の情夫が華族の嗣子と分つて、それを迎に來た家令の言分が癪に障り、痰火を切るのはよいとして、すぐに情夫を食はせておいたことを而も情夫の鼻の先でいふも餘りにザラな明治式にて、さもしく、調子低く、默阿彌物に現るゝ俠婦ほどの感銘をも與へない。 前に擧げた惡漢の弓彦とても結局は水調子。 高田がやれば、或は腕で見物の目を滿足さすかも知れんが、役柄に見えた所では智情意共に薄手な男で、悲劇の惡漢たるほどの深刻が無い。 力枝の情夫は華族の零落たのではあるが、これ將た平々凡々、紙治程の熱もなく、忠兵衛程の意地もなく、情婦に對しても薄志弱行、手に汗を握るに至らぬうちに氣が變るといふ風ゆゑ同情を起す暇がない。 高田の役の按摩の如きも、餘り自意識が甚し過ぎて、金を出して女主人公の難義を救ふ前後なぞも、餘りに利己主義が見えすきすきて厭らしく、同感が起らない。 其實は利己心から出づるにもせよ、人の難義に接した瞬間だけは、もすこし無意識的にもなりさうなもの。 いや、見物に同情を起させうと思へば、もう少し無意識的に演ぜねば損だらう。 それとも作者は態と利己的な而も薄つぺらな人物を群らせて明治の社會の實相を諷刺したのであるか。 いや、恐らくは世馴れぬ大向の見物にも分るやう〳〵と覘つて筋を立てたのではないかな。 其苦心の跡が歴々としてゐるやうなのが妙でない。 一言以て蔽へば、淺い、薄手な、剩へ不自然な、概して虚僞な寫しかたといふ感銘が殘る。 これが新演劇を見るたびに不滿足を感

ずる主な理由である。 もすこし脚本を改めぬうちは小生なぞは、どうしても新演劇といふものを我れを忘れて見る氣は出ない。

藝風

脚本はさうとしたところで、藝風はいかゞといふに、十年以前に比べては進歩したには相違ない。 長ぜりふは初心な政談演說の口吻、科介、思入は素人くさい、ぎすついた仕方話か、然らざれば下卑た大阪俄臭味の附纏ふことをまぬがれなかつた壯士芝居時代の藝風に比べれば、牛鍋屋が西洋料理店になつた程の進化、木造ながら三階立て、RESTAURANT と羅馬字の招牌もいかめしく、材料さへ良いものを使へば慥かに食へる程にはなつた。 少くとも山の手の會席なぞは其の前に立つて顔色は無い。 とりわけ河合、喜多村、兒島等を以て代表とする女形の發達は著しい。 多少薄手ながら悲劇の女形としての前二人、コメデヤンとしての兒島の技倆は(數年の後は知らず)目下のところ舊派には無い味。 此の三人よりも以下の者までが歩きぶりのヒヨコスカと腰の浮く鹽梅、セリフ廻しの稍〻七五離れのした點などが明治式で新しく、無鹽らしいところが食へる。 併しそれも概して中流以下の、若い女だけで、華族の夫人とか令嬢とか、學者の細君とか、やゝ識見のある、品性の高い女となると忽ちあぶなかしい。 いや、むしろ舊派へ逆戻りの氣味かと思はれる。

立役や敵役の進歩は女形程てない、　大ぶ洗錬して滑かにもなり、ふくらみもつき、大様にもなり、手奇麗にもなつたが、まだどうも美術品としては味が足らない。　せりふ廻し、科介及び思入に四臭を脱し盡さない。　四臭とは講談落語臭、演説臭、大阪俄臭、舊劇臭の四つをいふ。　就中氣になるは用語の野卑いこと、不自然なことである。　僻地出又は成上りの紳士の多い今なれば、不束な言葉づかひが中流以上にも行はれるは實際には相違ないが、そこが美術だから、寫實の必要のない限りは、主な立役の言葉使ひ位は成るべく聞苦しくないやうにして貰ひたいもの。　いや、國語の模範を垂れるといふ位の抱負は作者にも俳優にもあつて當然。　同感を集めんとするには言葉使も奇麗でなくてはならぬ。　口を開けば「こりや面白いですなあ」「よかつたですなあ」式乃至「あるですか」「聞くですか」「行くですか」式の山出し口調。　おまけに漢語の雅馴てないことも夥しい。　それから少し長いセリフになると隱然見物に向つて履歴の説明をすると一般。　現に鼻の先にゐる人物に向つて「あなたのお父さまの何々伯爵ねえ、その伯爵が、それ、先達て某々處へ御旅行になつたてせう。　其折にねえ……」といふやうに、危なく七五になりかけるのを「ねえ」や「しかし」で調子を取つて、ごまかして縫つてゆく説明口調。　或は其の人に面と向ひながら「オヤいらつしやいまし、大層お立派な方で」と露骨に艶辭をいふ前座口調。　甚しきに至つては最も感情が高調に達した場合にすら語尾だけが口語體といふ文章調。　實際ならば只目を怒らして默つて席を蹶つて去るでもあらうかと思ふ場合に、冷然と敵手を尻目にかけて文章口

調、而も漢文直譯式なぞは手嚴しい。「これからお前はどうする積りぢや。」「どうするといつて、外にないです。　只一の復讐あるのみです。　ウフ、、、、、。　只一のウフ、、、、復讐あるのみです。」一座愕き且つ怖れ又呆れて見上げる。幕。高田式としては其定格を全うしたものであらうが、小生なぞは生煮の青豆を食はせられたやうに感じる。　それから中流以上とさへいへば、男でも女でも、子供でも鬚くひそらした大人でも其父母に向つて甘たるい「お父さま」「お母あさま」呼はりが氣障だ。　女言葉と男言葉との別さへも無いとは情ない。　要するに中流以上の言葉づかひとなると、妙に餘所ゆきばかりを寫して生氣に乏しいのみか、概して使ひかたが虚だと思ふ。　それでは中流以下は自然に叶つてゐるかといふと、必しもさうでない。　當込澤山、場受專一、大向に分るやう受けるやうと撫つて行く鹽梅、眞面目なるべき場合に一句づゝ滑稽を振撒いてゆく鹽梅が、さながらの講談、落語。　思ふにこれらは作者の知つたことでなく、俳優が仕勝手をよくせうために、思ひ〳〵に修正したものに相違ない。　高田の役にはとりわけこれが多いらしい。　寄席式、公園式としてはともかくも帝國座へ持出すべき美術品としては品がわるからうてはないか。

科介に至つては、流石に立物側には多少新しい工夫が見えぬでもないが、それが概して、直接か間接かは知らぬが、西洋の劇の寫し、明治の實際から感得したものとは見えない。　煩悶を表すに兩手で肱を張つて頭を抱へて、緩く仰向に倒れかゝる介なぞは慥かに西洋寫しで何となく拵へ物らしく、情が移ら

ない。要するに寫實を標榜しながら鍛錬工夫はまだまだ到らないと思ふ。

道戯滑稽になると、いよ〳〵大阪俄の血統が爭はれない。吾々とても見て笑ひこそすれ、只馬鹿々々しさに笑ふので、人情に興を覺えてゞはない。藝がどうもまだガサツで、まだ幾らか埃臭い。

それから上品なるべき筈の女形の口吻、これが又面白くない。中流以下の若女形、とりわけ兒島式のお俠なぞは殆ど美術品となりかけてゐるが、品のよい夫人、令嬢となると妙でない。故圓朝の武家令嬢の假聲は、多少圓朝景負の小生も嫌ひであつたが、新演劇の上流婦人の口吻が恰もそれ。いやに切口上で、遊ばせ盡めで、作り聲の餘所ゆき仕立で、不自然を極めてゐる。胸に一物ある河合式の女は此限りにあらずとするが、只の令嬢や夫人だから妙でない。それから、今は舊派の史劇物ですら下座の合方を廢めようといふ時代であるのに、寫實を標榜してゐながら、舞臺を引締める工夫に困つてか、無意味に鳴物の助けを借りるとは不調和千萬。おひ〳〵舊劇へ退歩の氣味。これも新しい美術品と見做しかねる一つの理由。蟲の音とか、波の音とか、俚歌とか、門附とか、里神樂とか、自然に成立つべきものを捕へて音樂を利用したらよささうなもの。

それから今一つ新演劇に足らぬのは「品」だ。まだ〳〵「位」に乏しい。時々は例外もあらうが、通例は華族と名宣り、顯官と名宣り、學者と名宣つても、概して然う見えない。只番附にさうなつてゐるから然うとして觀るまで。奥方だといふからさう思つて見るものゝ、何となく成上りらしく、又令嬢の

口吻も小間使めく。新俳優が史劇又は沙翁物などに適らぬのも、こゝの道理に因るのである。

將來

三年ぶり、五年ぶりに見た目に映ずるところ、まさか此れらの缺點ばかりといふのではない。しかし斯ういふ缺點の浮上つてゐるうちは、さすがに能や歌舞伎なぞの傑品と同列にして鑑賞することは出來にくいと思ふ。いはゞまだ十分に素人劇の域を離れ切らない。器用なものならば、二三年の修行て追附くことは勿論、凌駕することも難くない。それが美術品でない證據。九郎や實といはぬまでも、萬三郎や六郎、政吉や長の能、右團治、猿之助、小團治、訥升等の踊、これらはよしや絶品でないまでも、まさか五年や六七年程度の俄鍛練で以て追附くことの出來るたぐひの藝でないところが有難いところ。新演劇が器用な素人を絶望せしむる程度まで進むには、まだ〳〵間があるらしい。一に容姿、二に聲調で、此二資格がずば抜けてゐたら、そこに鷄群の一鶴的地位を占むる資格が成立つ譯だが、前にいつた「品位」缺乏の一件で、それさへもまだ十分でない。劇界の新機運の押寄せ來るに當つて、世人の多くは歌舞伎のはうが先へ落城するであらうと想像してゐるやうであるが、小生は最先に新派のはうが危かしいと思ふ。深刻に適切に日本の現代の思潮を代表し得る作者が出て、イブセン、ハウプトマンとまでは行かずとも、ビヂロ、ヂョーンス程度の脚本を陸續綴り、それを大砲や水雷にして、悲劇、

喜劇の海陸から押寄する學識もあり、技藝の修養もあり、品性も比較的高い、押出しも立派な新手があつたら、今の所謂新派連は片時も油斷はなるまい。歌舞伎連は型物や所作物の灣に隱れて一時の海濤を避けて氣運の改まるを俟つことも出來るし、又其中の若手は新演劇の所領へ移住して、或は開拓し、或は攻略して新發展を試みることも容易だが、新派連は武器が只一種であるだけに、いざとなつたら少々防禦策に困ることであらうぞ。何れにもせよ、こゝ幾年間は演藝界の大混戰、舞臺の上の劇よりも、舞臺の外の劇の成行が目覺しからうと思ふ。とりとめもない話で餘り長くなつた。あとは又の日に話さう。（四十年一月）

日蓮聖人辻説法を觀て

此の中幕は、臺帳で觀ました時に、既に其の手際よく只一場に纏められた出來榮と其の希臘美術風の一種沈靜な調子とに淺からぬ面白味を覺えたのでしたが、舞臺に上つたのを觀ると其の感じが彌ゝ深くなりました。狹い制限の内で種々の人物を活動させ而もよく釣合を保たせ、贅の出ぬやう、外へ溢れぬやう、後段を待設けさするやうな不都合もなく、單純に、明晰に、一切を此の一場のうちに統整し盡して秩然又渾然たる趣味を見せられたは、主として作者の働きながら、背景から道具、鳴物、古實を正した優人の扮裝、其の科介、白廻し、皆よく臺帳の趣旨と調和し、近ごろ珍らしい典雅高尚な中幕物でした。取わけ一番目があの通りな思ひ切つて草双紙ぶり、稗史ぶりのロマンチック劇であつただけに、此の沈靜な中幕を觀了つた時の心持は、夏の初めに或園藝師の花室を出でて千家好みの待合に憩ひ、青葉若葉に吹渡る微風に觸れたやうな心地でした。

總じて美術品の第一義は内容と形式との調和にあること申すまでもないが、はるかに雪もよひを見せた日本畫ぶりの背景の沈んだ色調、總體に調を低めて音をかすめた合方、主人公に扮する八百藏の例よりもおちついた、時々柔かに引きしまつた、先づ單調な白廻し、我が歌舞伎劇には珍らしい無言の仕出し、生中に物を言はぬゆゑに意味何となく深く長く、ちらちらと降りいでて、中ごろ止みて、又しと〳〵と降りしきり來てやがて舞臺も見えわかぬまでにおのづから幕となりゆく雪景色など、人と自然と、景と情と、渾然融會調諧して、一種沈靜な、譬へば小い美しい白い石に巧みに彫り做した半裸體の女神などの眼睛を點ぜず色彩をも施さぬのを觀た時などと相似たる清新の趣致、我が觀劇者にとりては全く目新しい見物、能樂の味とも別、又從來行はれた活歴物などとは、其の叙事詩脉を蟬脱したる點に於て、全然別種に屬するものと認めました。優人では松助の禪僧だけは、どうやら其の人らしからず感じま

したが、羽左衛門も謹んでしてゐたる白まはしいつもよりよく、妙も能本も故障なしと見ました。謹み過ぎて感足らぬげの影も見えたなれど、それがまたおのづから沈靜の趣味には適つてゐたと感じました。

或は此の中幕は淡泊に過ぎて味ひが薄いといひ、波瀾狂湧の面白味が見えぬの、個性が著しくないなどと評する向もあれど、それらは美術品にいろ〳〵の類あることを知らず、殊に希臘美術の美を解し得ない人達てありませう。就中後者の如きは一幕、一場では到底出來ぬ相談を持出す手合といふべきです。此の演藝の過渡期に於ては、初手から俗おどしの形の大きな作を求めるよりも、小さうても眞に美術品と稱し得られるもの丶追々に現はれるのを望んだはうがよいと思ひます。

西洋では希臘的と云へば文藝上の保守主義のことになれど、我が國に取つては此の作の如きが却つて新機運の導火となり得べきものだと思はれる氣味があります。それといふのは畢竟我が歌舞伎劇は西洋に云ふロマンチック劇の爛熟若しくは固結したものに似てをるので、或は之れを一新するは西洋のロマンチシズムの形式を追ふよりは寧ろ彼方では古いはうの趣味、格式を注込んで見るのが却つて好方便だといふやうな譯合があるのではあるまいか。兎も角も「兩浦島」といひ、此の作といひ、專ら一幕物に手を着けられるは當作者に何等か深慮あること丶思ふ。世事多端になるにつれて觀劇時間の短縮さる丶ことは勿論の事、丸本物と違つて支離滅裂てないだけに百足式に切離して仕活す譯にもゆくまじき將來の新脚本は、よしや一度は中るとも其の後は甚だ心元ないことです。私は人人が競つて一幕乃至三幕限り位のものに新作を試みられんことを切望します。（三十七年五月）

默阿彌作「青砥稿花紅彩畫」の鑑定

（裁判所の命にて作れる鑑定書）

○事　件

峯岸傳次郎外一人著作權法違犯被告事件に付き、板權登錄吉村新七作「青砥稿花紅彩畫」別名「辨天娘女男白浪」と題せる脚本は果して新七が創作なりや否や、若し創作ならば其創作年月、若し改作ならば原作及び原作者は如何なるものぞと云ふこと、並びに被告より押收せられたる三種の脚本と前示脚本との關係如何と云ふこと鑑定の件。

○鑑定すべき書類

鑑定すべき書類を分ちて甲乙の二種とす。甲は吉村新七が作と稱して板權登錄濟となれるもの、即ち

吉村いとより提出せる内務省納本謄寫、乙は被告より押收せられたる三種の脚本なり。先づ甲種が新七の創作なりや改作なりやと云ふことを鑑査し、次に乙種と甲種との關係に及ぶべし。

○甲種は吉村新七の創作なりや否や

甲種脚本即ち内務省納本の謄寫「青砥稿花紅彩書」序幕雪の下濱松屋の場及び稲村ヶ崎勢揃之場は明かに吉村新七が創作に係れり。されど其理由の詳細を說明せんとすれば、便宜上豫め辨じ置くべき要件あり。そは右内務省納本と吉村新七が文久二年市村座の爲に起稿したるものと長短繁簡の上に大差あること是れなり。文久二年の初稿は納本に比すれば、筋立及び肝要なる廉々こそ同一なれ、枝葉の詞句に至りては遙に複雜にして繁冗なり。蓋し納本は重要なる骨組だけを殘して、其他の部分を削除せるなり。例へば文久二年の觀客にのみ興味あるべき所謂場當りの文句、若しくは通し狂言として「青砥稿」全體を演ずる際にのみ必要なる臺詞の形容詞等をば悉く削り去りたり。（板權登錄上必要なしと認めたるが爲めか、猥瑣なる句抹あるが爲めか、或は其他にも理由ありてか、吉村イトに尋問あらば明かならん。）按ずるに新七が自筆に係る文久二年起稿當時の稿、今尙告訴人の手許に保存しあるべし、提出せしめて參照あらば、事實明著ならん。（鑑定人提出の柳屋梅彦編草雙紙六冊は恰も新七が初稿のまゝなる引直したるなれば參照ありたし。）右の自筆の稿は種々の點に於て必要なる證據物となるべきものなれば、告訴人に命じて提出せしめられたし。左に目前の必要の爲めに、文久二年起稿當時の役割番附によりて「青砥稿花紅彩書」の場割を掲出し置くこと下の如し。

一、新清水花見の場。
二、觀世音石壇の場。
三、御輿ヶ嶽辻堂の場。
四、稻瀨川道行の場。
五、雪下濱松屋の場。
六、稻村ヶ崎勢揃の場。
七、極樂寺山門の場。
八、滑河原詮義の場。

右のうち今回の事件に關係あるは第五と第六とのみなり。

○「青砥稿」は新七が創作なり

「青砥稿」に用ひたる脚色は必しも斬新ならず。其の幾分は見かたによりては、古來淨瑠璃、草雙紙又は講談物等に慣用し來れるものゝ翻案に外ならずとも見做さるべし。然れども其等在りふれたる材料を取捨選擇し、更に新案を凝らして補綴綜合し、「青砥稿」と云ふ一の時好に適したる演劇脚本に作り做したるは、吉村新七の創意たること疑ふべからず。例へば「五人男」と云ふ名稱の如きは古來屢〻用ひられて珍しからず。「雁金五人男」と題して雁金文七、雷庄九郎、安の平兵衛、布袋の市右衛門、極

印千右衛門の五俠夫を人物としたる淨瑠璃もあれば、其れに因む脚本、草雙紙などもあり。「白浪五人男」又は「雲霧五人男」、其の他「何々五人男」と題せる講談物一二のみならず、又日本駄右衛門を主人公とし、「戀の白浪」と題して、嘉永五年子九月大阪にて興行せし脚本もあり。 されど其等は皆全然別種の物なり。

又女賊の萬引の欺騙、强請等を仕組たるものも、文久以前の淨瑠璃、(例へば「阿波の鳴戸」)草雙紙(例へば三馬作「雷太郎一代記」?)などにも見えたれど、辨天小僧と名宣る美少年の賊が、武家の娘子らしく變裝して呉服店にて萬引をなし、態と同類の賊魁をして見露さしめ、扨大言壯語し、剩へ其の夜同じ商家に强盜となりて押入り、意外にも其商家の主人公は我が實父にして、該商家の若主人に賊魁の實子たることを知りて奇遇に愕くと云ふ筋を脚本に仕組みたるは、新七以前曾て見當らざる所とす。 强請の塲に

爰やかしこの寺島て、小耳に聞たぢいさんの、似ぬ聲色で小ゆすりかたり、名さへゆかりの辨天小僧菊之助

とあるは、特に五代目菊五郎の若盛り、即ち羽左衛門にはめて書き下したる一證なり。 但し此の句も內務省納本の謄寫には省かれたり。

特に「稻村ヶ崎勢揃の塲」の如きは、全然新七が創案なること、第一其の新七に特別なる七五調の「つらね」の文致にも著しく、第二其の臺詞の中に左の如き語あるに徵しても明かなり。 但此句內務省納本謄寫には省かれたり。

三十　五つ連れたる雁金の五人男にかたどりて

羽　案に相違の顏觸れは誰白波の五人づれ

權　その名も轟く雷の音にひゞきし我々は

粂　千人あまりのその中て極印うつたる頭分

芝　ふていか布袋か盗人の腹は大きな膽ッ玉

「五人男にかたどりて」と言ひ、「案に相違」ト言ひたるは、在來の五人男と相似て全く異なれる新案なる由をほのめかせるなり。

○辨天小僧及び其の他四人男の名の出所

辨天小僧外四賊の名は新七が創案にあらず。 其第一證は文久二年起稿當時の役割番附 多分告訴人所藏すべし、提出せしめられたし。に附記したる所謂かたりに左の文句あるにて明かなり。 此のかたりは新七が自筆の原稿には附記しあること勿論なり。

豐國漫畫の姿を其儘歌舞伎に仕組む義賊傳

扨盗人の世話物も、阿漕が浦に引網の度重りて古めかしく、刑部が娘花形の新清水の花見から趣向を更へて支那唐土、日本駄右衛門、辨天小僧、御輿ヶ嶽の出合さへ、すごみを茲に和らげて、小夜衣重三が道行に、濡て嬉しき稻瀨川、身投を助けし忠信が、其のだんまりも闇まぎれ、左右へ別れて雪

の下、彼の濱松屋の力丸が、ぶまな騙の萬引も、あぢにからんだ遠州灘、頭と頼む親船の、捨てた我子も十七年、月日も辰の臍の緒ゆゑ、名乘りあふたる女房子に、岩打つ波の碎けては、退れぬ中に幸兵衛が、後世を弔ふ極樂寺、佛の庭も修羅道の、名を捕物に藤綱が、落せし錢の詮議より、寶を得たる滑川、是狂言の大詰にて、爰に寄する白浪の五人男。

其第二證は「演藝世界」第十一號伊東橋塘が記せる「默阿彌翁」と云ふ隨筆文の中にも見えたり。下の如し。

翁曰く。辨天小僧は別に種が有つて書いたといふ譯でもありません。あれは下谷徒士町に魚榮といふ繪草紙屋がありまして、此の男は繪が好て、魚屋から繪草紙屋になつたので魚榮といひます が、そこからでた三枚續の錦繪に辨天小僧や何か五人男が出て居たのを見て、思ひついて書いたのですから、それで名題も「青砥稿花紅彩書」としたのでございます。

爰に三枚續とあるは五枚揃の誤聞ならんか。「豐國漫畫圖繪」と稱せるものゝうちに、斯る繪あることは事實なるが、其繪は所謂見立繪にて、一枚々々別々にて續き繪にはあらず。而して「五人男」云々とあるからは、三枚にあらずして五枚なりしこと明けし。或は五枚揃と云ふ、尙不穩當ならんか。何となれば右漫畫は名の如く漫畫にして、必しも一組何枚と限らざりしものなればなり。

按ずるに、件の五枚揃の錦繪は目下饗庭與三郎（竹のや篁村、向島小梅町住）所藏の品と同一なるに疑ひなし。即ち「豐國漫畫圖繪」と題せる下谷魚榮版の役者似顔繪の一種にして、五枚揃かとも思はるゝ見立畫なり。一は辨天小僧菊之助、（岩井粂三郎似顔）二は南郷力丸、（片岡仁左衛門似貌）三は日本左衛門、（中村芝翫似貌）四は忠信利平、（河原崎權十郎似貌）五は狼の惡次郎、（坂東竹三郎似貌）なり。

右錦繪の筆者歌川豐國は、元治元年（即文久四年十二月十五日）七十九歳の高齡にて逝去したれば、此の繪は果して何時頃の筆なるか明かならず。されど其の筆致に徵し、且つ見立られたる俳優の役柄に徵すれば、遲くも文久二年、早くは其の二三年以前かとも思はれたり。現今洋畫工として知られたる小山正太郎は、幼時右の魚榮に奉公せしことありきと聞けり。尋問あらば、或は右の繪の出版年月を知ることを得べきか。

吉村新七が件の錦繪に負ふ所ありしは、前掲かたちに明かなるのみならず、「青砥稿」の中に用ひたる人名が日本左衛門を日本駄右衛門と改め、狼の惡次郎を赤星十三郎と改めたる外は悉く同じ。而して狼の惡次郎の名は別に「青砥稿」中の端役（市川三八の役）の名として用ひ居れり。

新七が件の錦繪に負へるは、啻に人名のみにはあらず。辨天小僧が美少年にして女裝し、緋鹿子淺黄染分の長襦袢にガックリ島田と云ふ傳法の風采にて、片肌ぬぎとなりて櫻の花の文身を現し、婚禮の閨房らしき一間に、解荷に腰を掛け、白刃を突立て、茶碗酒を飲み居る樣は、該錦繪に畫かれたり。新七が此の繪によりて彼の强請場の趣向、及び奥座敷に於ける辨天小僧が態度風采に關する思付を幇けら

れたるや疑ひなし。（梅彦編草壁紙參照）されど其の强請の趣向其の物は右の書に負ふ所なし。或は告訴人の上申に見えたる如く、大傳馬町大丸店に於ける股に文身せる女賊が强請の事實に基けるならんか。尙下に述ぶる所を參照ありたし。

稻村ヶ崎勢揃の場に於ける五賊が、服裝の摸樣及び海邊に於ける捕吏との鬪爭、是れ將た右の錦繪に負ふ所あること明かなり。くはしくは饗庭與三郎所藏の錦繪、「靑砥稿」興行當時の繪草紙、梅彦編「靑砥稿」の草雙紙等對照せられたし。

○萬引、强請の場の趣向の由來

「豐國漫畫圖繪」に見えたる五賊の名は、抑〻何處より出てたるか。十中九までは講談物なるべしと察せらるれど、詳かならず。現存松林東玉（前名伯圓）は「ドロバウ伯圓」と異名せられて、頗る賊徒傳の講談に名ありき。且伯圓は其の壯時俳優市川小團治（吉村新七は此の小團治の爲に最も盡力せし作者なり。）に親昵し、脚本の材料を供せしことありと、嘗て自ら言へるものなるが、其先代伯圓が得意とせし講談の內に、慥に「白浪五人男」と題せし講談ありて、其のうちに辨天小僧と云ふ名ありしやうに記憶すと云ふもの、維新前の事に精しき老人中に尠からず。されど一人として明かに其の梗概を語り得たる者なし。或は謂ふ伯圓が「白浪五人男」は相連關したる話にはあらずして、所謂銘〻傳なりきと。（此の點は松林東玉を召喚して取調べられなば、或は明白となるべし。）蓋し「豐國漫畫」の書樣によりて察するも、五枚各〻別々のもの〻如し。且つ又新七がかたりのなかに記したる

句にも、「爰に寄する白浪五人男」とあり。「寄する」とは浪の打寄することを兼ねて、別々なるものをありきとするも、原のまゝならぬことはほゞ明かなり。

○脚本版權と脚本ならざる作物の版權とは全然區別せらるべきものなり

よしや「靑砥稿」に類似したる筋の講談若しくは小說、否殆ど全く相似たる程の作物が、其の以前に有りたりとするも、彼れは講談小說にして、此れは劇に演ずべき樣作り直したる脚本なり。講談、小說は決して其の儘には劇に演ずべからざるものなる以上は、劇に適用したる所に專占權の生ずべき道理なれば、よしや前者に版權あるも、後者が版權とは相關することなかるべき道理なり。況や此等は版權もなき舊作物なるをや。若し大體の筋立若しくは人名等が古き作に似通ひたりとて、後の作物に版權を拒否せんか、古くは馬琴、近松の作より、近くはあらゆる小說、脚本に至るまで、多少皆前々の作物に負ふ所あるべきが故に、所詮は一も版權を有すること能はざるに至るべし。

○被告辯護人の提出せる早川貞水が書面に關して

眞龍齋貞水と云へる講談師が被告に送れる書面のうちに、辨天小僧の出所を述べたるものありて、此の話は百何十年來ありと云へり。自分も嘗て同樣の講談を寫本にて見たることあれども、果してさほどに古き作なりや否や頗る疑はし。

自分が見たるは無名氏が貸本屋主人(牛込山伏町池清)の爲めに、明治十三年に筆記しやりたる者にして、(賤機鬼神譚)筋の梗概はほゞ貞水の云へるが如くなれど、人名などは多少異なれり。藤掛兵庫と云へるは日下部主膳、傳三郎と云へるは金三郎、辨天小僧の異名の由來も貞水の云へるやうに文身に基かずして、住所が辨天小路なるに基き、鬼神のお松の件も萬引にあらずして、欺騙の上の强請なり。或は謂ふ、件の講談は明治初年の頃故田邊南龍と云ふ講談師が、種々材料を取捨して綴れるなり、蓋し南龍は劇を好み、殊に菊五郎最負なりし故、菊五郎が當藝を當込み、彼等社會の慣例としてさながら實錄らしく牽强附會して、此の新講談を作りしなりと。(貞吉と云へる現存の講談師が、以上の如く語れりと聞けり。)或は然らん。若し被告又は貞水に於て慥かに百何十年來のものなりと主張せば、其の明證を記錄其他によりて擧示せよと命ぜられて然るべし。尚現今行はるゝ講釋物にて、「雲霧五人男」(故春錦亭柳櫻の讀物)「白浪五人男」(現存神田伯山の讀物)等あり。何れも賊徒を中心として綴りたる物語ながら、此の度の事件には全然相關する所なし。故に曰く。

「青砥稿花紅彩畫」は吉村新七の創作なりと。

○鑑定すべき乙種書類

一、第二五五七號四　深川座興行用

(當る戌の彌生狂言)「青砥稿花紅彩畫」と題したる正本　壹冊

二、第二五五七號七の一、二

(當る丑の春狂言)「青砥草紙花錦繪」と題したる正本　貳冊

三、第二五五七號六の一、二、三

「白波五人男」又「五人揃東京錦繪」と題したる横綴正本　參冊

右三種の中、第二五五七號四は深川座興行に用ひたる脚本なれば、新七作との關係を第一に鑑査すべきものとせり。又第二五五七號七の一、二は被告に於て其の表紙に「當る丑の春狂言」と記したる、丑年は嘉永六年の丑(今より五十年前)を指したるなりと主張し、之れによりて所謂尾上菊次郎原作の脚本と同一なる由を證明せんと試みたる證據品なれば、被告に取りても告訴人に取りても關係重大なりと認め、第二に鑑査すべきものとせり。扨又第二五五七號六の一、二、三は、被告に於て尾上菊次郎原作と主張し、墨色鑑定人に於ても、或は五十年以上即ち嘉永年度の物なるべしと認めたる品なれば、被告に取りて最も有力なる證據物と認め、最後に鑑査すべきものとせり。

○深川座興行用の分は全然新七が起稿脚本のまゝなり

第二五五七號四が、吉村新七が文久二年壬戌三月創作せし「青砥稿花紅彩畫」と全然同一の作たることは、新七が自筆の原稿と參照あらば一目瞭然たるべし。尚念の爲其の理由の一二を言はゞ(第一)該脚本の表紙に「當る戌の彌生狂言」とあるは、明かに文久二年壬戌三月を指す。且つ粂三郎、羽左衛門、權十郎、芝翫、團藏、三十郎等其頃相並んで盛名ありし俳優の名を列記せり。該諸俳優は何れも起稿當時

作中の諸役に扮せし者たること、當時の繪草紙、番附、あふむ石、傳說、目睹者の記臆に徵して明確なり。第二五五七號三「繪像史」及び鑑定人提出の柳屋梅彥編草雙紙六冊、錦繪帖、あふむ石等參照ありたし。（第二）本文に至りてもまた新七が原稿のまゝなり。（但し前文辯じ置きたる理由によりて、內務省納本とは繁簡一ならざること勿論なり。）處々貼紙したる底に「團」とあるは團藏（今の團藏の父）「三十」とあるは關三十郎（今の花助の祖父）「羽」は羽左衛門（今の菊五郎）「芝」は芝翫（今の芝翫の養父）其の他皆起稿當時のまゝなり、くはしくは附箋を參照ありたし。

○「當る丑の春狂言」と題したる分も新七が作を少しく削除したるものに外ならず

第二五五七號「七の一」と同「七の二」とは一見同筆なるが如くにして、其の實は別筆なるが如し。「七の一」の方は明かに「當る丑の春狂言」とあれども「七の二」の方は「當る巳の春狂言」とあり、本文將た明かに同じ、原本を謄寫したるものにあらざることを證す。何となれば「七の一」の方は起稿當時即ち市村座の役割のまゝに諸俳優の名を記したるに「七の二」の方即ち「稻邑ヶ崎勢揃の場」と題したる方は、明治の初めに時を同うして名聲ありし俳優の名を用ひたればなり、菊五郎、左團治、芝翫、半四郎、訥升を以て五人男に配したるが如き是れなり。按ずるに「七の一」は市村座のを其儘に謄し「七の二」は明治三年正月守田座にて「舘扇曾我訥芝玉」の二番目に初稿の通り「濱松屋」「勢揃」「山門」を出したる時のを寫し置きたるならん、前に揭げたる役割と俳優の名と此の時の番附に符合するのみならず、尾上多賀

之丞が其の際濱松屋宗之助の役を演じ居るなど、益〻前陳を慥かならしむるに足る。（梅枝は菊次郎にあらずといふ條下參照ありたし。）さて其の內容は右言へる理由によりても察せらるべきが如く、新七の作を多少削除せるものに外ならざること勿論なり。前示深川座興行用の分に比べて異なるは、枝葉の文句の繁簡のみ、肝要なる筋立、臺詞等は悉皆同一なり、くはしくは附箋によりて判知せられたし。要するに此の脚本は斷じて文久二年以前の作にあらず。其の最も有力なる證據は俳優の名が「七の一」に於ては起稿當時のものと全然同一「七の二」に於ては悉く皆明治三年守田座興行の際の俳優たる點にあり。夫れ俳優は代々同名を襲ふを例とすれど、幾多同名の俳優が起稿當時若しくは明治三年と全然同じさまに輩出し、剩へ何れも同じ役を演ずなど云ふことは道理上あり得べき筈なく、事實上嘉永年度の演劇史を調査するも其の跡なし。詳細は附箋及び鑑定人提出の草雙紙、錦繪等參照ありたし。其の他本文の詞意一切が新七の案に基き其の筆に成れるに相違なき詳細は一々附箋して證し置きたり。（但し何故に「當る丑の春狂言」と記し「當る巳の春狂言」と記したるか未だ詳ならず）

○梅枝原作と稱するものも新七の作を多少改寫したるものに外ならず

尾上菊次郎原作と稱する橫綴本三冊は、證明の便宜上二段に分つ必要あり。何となれば「六の二」と「六の一」及び「六の三」とは明に筆者を異にせるのみならず、本文の記しかたに於ても「六の二」は他の脚本にひとしく臺詞每に肩に俳優の名を記したるに「六の一」と「六の三」とは劇中人物の名を以て之れ

に代へたるなど同筆にあらざること明かなればなり。

「六の二」即ち今回の被告事件の焦點たる「濱松屋呉服店强請の塲」は新七が文久二戌年の原稿と同一なること爭ふべからず、其の理由は詞句の相同じきによりても明かなれど、最も有力なる證は俳優の名の文久當時のと全然同一なることなり。第二種に關して辯明し置きたる諸點參照ありたし

「六ノ一」稻瀨村の塲、極樂寺の塲と題したる分と「六ノ三」五人揃東京錦繪と題したるものとは、或は梅枝と號せし俳優（梅枝は菊次郎なりや否やは別問題として）の手づからか又は他人に命じて寫し置けるものなるべし。所謂折釘流の惡筆なる點、狂言作者の筆とは思はれず、文字に貧なるを例とせし舊俳優の自筆らし。是れ前示諸本と異なる一點なり。又此の謄寫本に限り絶えて俳優の名を記すことなし。且つ「五人揃東京錦繪」と題したる方は新七が筆にあらず、「靑砥稿」の一部分を飜案して新に綴りたるものゝ如し。

さもあれ「稻瀨村の塲」と題したる分の筋立及び詞句に至りては聊か繁簡の差あるのみにて、新七が文久二年の作を改寫したるに過ぎざること、作中の辭意に徵して明瞭なり。辨天小僧の詞及び日本駄衛門の詞に「靑砥稿」の筋立にあらざるよりは言はしむべからざる文句あるなど其の一證なり。くはしくは新七が自筆の原稿に徵せられたし。（新七が自筆の原稿は取りも直さず深川座興行用の分と同一なれば、彼れを參照せらるゝも可なり。）

按ずるに六ノ一、二、三は所謂旅役者が京阪地方にて興行の際、特に謄寫せるものなるべし。總じて關

東にては舞臺面の裝設を記するに「本舞臺何間の間」と書きはじむるを例とせるに、此れには「造り物」云々と書き出したるは關西の記法に從へるなり。

又按ずるに「六ノ三」の表題は五人揃東京錦繪とあり。東京と書して「あづま」と訓ましめんと欲したりしは勿論ならんが、それにしても嘉永年度に江戸のことを東京と書すべき筈なし、漢文風を氣取るとも東都などあるべき理なり。是れまた此の謄寫本の文久二年以後、否、明治初年のものたる一證なり。

○梅枝は菊次郎にあらず

尾上菊次郎はもと大阪の俳優なり、天保七年初めて江戸に出て三代目梅幸の門人となりしが、安政四年二十年ぶりにて大阪に歸りて梅花と號し、又程なく江戸に下りて文久二三年の頃は、市川小團次、市川市藏等と共に守田座に出勤して女形として盛名あり、即ち羽左衛門が初めて市村座にて辨天小僧を演ぜし當時は直ぐ其の近傍なる守田座に出演してありしなり。

被告は「靑砥稿」若しくは「白浪五人男」を菊次郎の作なりと主張すれど、其の作せし塲所も年月も詳かならず。「當ル丑」とあるを嘉永六年の丑なりと主張せし由なれど、嘉永年間は菊次郎が江戸に在りし際なれば、彼れが此の脚本を自作して演じたりと云ふを事實とすれば、必ずや江戸の或座にてなるべきが、當時の演劇史は明かに其の然らざるを證明するなり。嘉永年度の番附、繪草紙等を取調べられたし。

梅枝と云ふ名は古くは嘉永年間の俳優にあり、即ち今の中村時藏の父歌六の別名なりきといふ。其の他四代目菊五郎の門人にも尾上梅枝と云へる者ありきと傳聞せしが詳かならず。何れも今回の事件には何等の關係もなし。

按ずるに被告の所謂梅枝は菊次郎にはあらずして、告訴人の云へる如く梅花(即ち菊次郎)の弟子養子たりし多賀之丞の俳名なりしならんか。多賀之丞は多年地方に旅稼なしたれば、或は關西などにて辨天小僧を演ぜしことありしならんか、されどもそは明治以後なること勿論なり。多賀之丞は文久二年「青砥稿」起稿の頃は菊松と稱して漸く子役を勤め居れり、而して明治三年守田座にて「青砥稿」興行の際には、濱松屋宗之助を勤めたり、是れ此の劇の緣故ある一證なり。

假に梅枝は多賀之丞にあらずして菊次郎なりとするも、辨天小僧など江戸ッ子肌の賊少年の役は其の不得意とせし所なれば、斯る役を演ぜんと思ひ立つこと不思議なり。文久二年には惡若衆青柳春之助に扮せしことあれども、それと辨天小僧とは全く肌合を異にせり。菊次郎は譬へば近年死亡せる阪東秀調などに似たる純粹の女形なり。

假に「辨天小僧」の劇は菊次郎が自作にして、之れを演ぜし最初の俳優は彼れなりきとせんか、近世の演劇史に明るき吉村新七が其の原作者が現存して現に隣座に出演しつゝある際に新作らしく吹聽し、剩へ羽左衛門をして公々然之れを演ぜしめたるなどは奇怪なり。文久二年三月即ち市村座にて「青砥稿」を興行せし月は守田座にては「蝶小蝶團鏡寫繪」といへるを興行したる時にて、菊次郎は市村市藏の源之丞に對して、おこよの役を演じ居れり、如何に板權も興行權もなき時代とは言へ、自家の作を無斷にて奪ひ去られて默々に附し置くべき謂れなきにあらずや。(二二五五七號三、繪草紙參照)

○總　括

以上陳述せる理由によりて被告所藏の脚本は表面は三種なるが如しと雖も、其の實は五種の時を異にして謄寫せられたる脚本より成れり。而して其の內容は深川座興行用の分は勿論、梅枝原作と稱するものも、要するに吉村新七が作を多少改寫したるものに外ならず。內務省納本に比すれば被告所藏の諸本の力却りて增補したるもの、如き趣を具へたり、されど其の增補らしく見ゆるは其の實は新七が第一の原稿を省略せずして直寫したるに因るなり、他作者の加筆にはあらず。

○被告に反問すべき條々

一、菊次郎作と稱する脚本は何年何月何處の何座にて興行せるものなりや。其の一座を組織せし俳優の姓名如何。

二、當ル丑とあるは嘉永丑なりとせば、其の興行は何處の何座にてなるか。列記せる俳優の名の文久二年市村座との同一なるは如何。又明治三年守田座のと同一なるは如何。

三、菊次郎の俳名は梅枝なりといふ證及び彼れが此の脚本の作者に相違なしといふ證如何。

四、文久二年に於ける羽左衛門、芝翫等にあらざるよりは用ふべからざる場當りの句、吉村新七にあらざれば得綴るまじき筆癖の臺詞等が作中に散見するは如何。

○斷　案

右四ヶ條の反問に對する積極的證明と、本鑑定人が舉證せる前陳諸ヶ條に對する消極的反證との具はらざる以上は「青低稿花紅彩畫」別名「辨天娘女男白浪」が吉村新七の創作脚本たることは動かすべからざる事實なりとす。

右の通り鑑定候也。

明治三十五年六月二十日より三十日に至る

東京地方裁判所刑事第四部

御　中

鑑定人　㊞

「桐一葉」について

よく世間で活歴々々と一口に云ひますが(若しさういふものが成立つとしたなら)、其のうちに自ら傳說(謂はゆる事實)の活歴と時代精神の活歴との區別が立てられようと思ふ。語を變へていへば、即ち故實の活歴と人情の活歴で、故實派といふのは專ら書籍上の歴史に拘泥して、この事は古文書に見えてゐぬから不可ぬとか、當時の風俗に相違して居るから不可ぬとか言ひますが、一體從來の歴史に傳はつて居る謂はゆる事實はツマリほんの傳說たるに過ぎぬのであるので、後人の想像によつて假作せられた事柄が半を占めてゐると思つてよいのだから、其れを根據としての虛實論は隨分不條理な談です。私しの考へでは脚本を書くに史事實に據る事は只見物の幻覺を起さすまでの定度までにすれば其れで十分である。蓋し時代物を書く目的はそんな表面の事實を寫さんとするにあるのではない、過去の特別なる時代精神の底に萬古不易の人情あるを看取してそれを寫すのである、故に最も大切なは人情、次は其の特別な時代精神なのです。衣服の調査や有職故實はイハバ小道具、大道具で、なくてならぬものだが、主要なものではないのです。時代精神と不易の人情とが寫しいだされさへすれば服裝や言葉は似つこらしければよいので、丁度譬へていへば上手が舞ひ踊りさへすれば生中面をかぶり乃至紅粉を施し假髪をいたゞきなどするよりも素のまゝのが味ひが深いやうなもの、面や假髪は幻覺を呼ぶ道

具たるに過ぎません。但し餘り世間に弘通して極わかり切つた歴史上の事實、即ち傳說を强ひて枉げて芝居にすれば見物がどうしても同感し得ぬ即ち幻覺が毀れるからこれは不可いが、其の以上に於ては故實や傳說に拘泥する必要はないと思ふのです。例へば「桐一葉」を例にすると、片桐邸の塲あたりで片桐に腹を切らねば悲劇にならぬと評した人もあつたが、私しはさうまでに傳說を打こはすと見物の幻覺を破ると思ふ、それで態と一旦傳說通り退身させ、「孤城落月」に成つて其の最期を見せました。この位までには傳說を敷衍してもよからうと考へました。あれならば白石の傳へた說とも衝突しませんから。「桐一葉」を書いた當座に、學海翁であつたか、大野道軒を修理の父としたは笑ふべきだといはれたやうに聞きましたが、成程所謂事實にはちがひませう、父ではなくて弟でせう、(叔父だといふ說もありますが)俗には父といふ方が通つて居るから、脚色の都合上幻覺を毀す恐れはないゆゑ誤つた俗說の方を故と採用したのです。それから同じ翁の評に、彼の時は關東から大阪へ間者が入つて居るゆゑ、それを脚色して片桐の敵にすると引立つものをといはれたと聞きましたが、こゝは私しと見やうがちがひます。私しは片桐はむしろ大阪方が內部から腐つて紊亂して居る事を心痛してゐるとしたのです。一體、何時の世、如何なる時にも、間者といふものは今の露探的のもので左ほど勢力をなす者ではない、恐るべきは自家內部の敵でありませう。

「桐一葉」を書いた動機は二樣です、一は內容上、一は形式上です。內容上といふは、一體人間の運命といふものは半ばは當人の性格にも因るであらうが、半ばは又境遇即ち周圍に纏綿した因果の結果で、即ち運命の悲劇です。片桐は即ち其の一適例なので、重盛は其の二例でせう。性格悲劇は悲壯淋漓として激しく勇ましく、心地よく面白いが、然し性格悲劇以外の悲劇にも面白味はある、必らずしも敘事詩の擅塲だとは思ひません。性格悲劇は花やかで端手であるが、境遇悲劇は一種引しまつた淋しみの趣味がある。すべて日本の文學に止る淋しみといふ味のある事は西行、芭蕉などが其の例ですが、其等と同じ味を劇の上に寓する事が出來さうなもの。又境遇悲劇を綴るには彼の支離滅裂な散漫な挿話(エピソード)澤山で出來て居る日本在來の芝居の形式は却て面白いフォーム(形式)ではないかと斯う思つたのです。此の事については曾て「中央公論」の記者に話したことがありましたから其筆記を彼の紙上で見ていたゞきたい。つまり豐臣氏の末路の哀れさ、淋しさを描く脚本ですから、始めには豐臣氏の全盛期の面影を見せて照りあはせたいと思つて、吉野山櫻狩といふ夢の塲を出しました、而して其のうちに淀君の一代記も性格も豐臣氏衰亡の二三の誘緣もほのかながら見せたいものといふ腹なので、且つ夢とはいへど在來のとは趣きを變くて綴つたつもりでした。在來の夢の塲は只過去の事蹟を突然挿む便宜に用ひられて居るのみで、實は夢ではなくて現です、イヤ外の塲と全く同調子、同色彩の夢幻劇です。私しは此の夢そつくりの在來の形式を(曾て夢幻劇で論じた如く)面白く感じたので、是非夢の現象として使つて見たかつたで、彼の吉野山の夢は決して現でなく如何にも夢のやう

に不條理で、辻褄が合はなくて而してところ〴〵分つて居るやうに書いて見たのです。併しあの一場は全く一夜のふとした感興で案を立てゝ、いはば一氣呵成でしたから、作者の獨合點になつて、讀者や見物にはくだらなく見えませう。

森さんの評にも餘り夢になり過ぎたとあつた、さうもありませう。自分の獨合點だけをいへば、彼の夢の場で、太閤との關係、諸嬖人との關係、それから秀次を讒言したゆくたて、良心の苛責に氣が狂ひゆく因緣までもほのめかさうとしたので、全體に「桐一葉」は淋しい芝居ですから、彼の場は極端手にうつくしく、淀君のうら若い艶々とした仇な姿を見せ、色を好む英雄が鼻の下を長くして居る閨門の裏おもて、其の豪奢、其の榮華、歡樂極まつて衰亡の哀傷來るその略歷史を早取にした積であつたのです。だから此の幕はどうしても二幕目、殊にはじめて淀君其の他を見物に紹介する幕に用ひねば作意に外れるのです。晩年の淀君を見せてから榮華の同人を見せるのは底を割つたやうなものです。正榮尼や大藏卿とてもさうで、四十歳、五十歳の比較的若い時代を見せて、榮華の夢が忽然として醒めるとガラリと變つて、淀君もふけて居れば正榮尼、大藏卿も既に老朽に近づいて居る、其の變化を見せたかつたので、其の次ぎの二女密訴の場は夫故に物すごい程寂びれた殿中の有樣を見せ、其れから幕毎に次第に寂れて、最後には廣い遠い長良堤に亡國の忠臣片桐が木村と只つたふたりきり、つまり序幕が大勢で賑かに、大詰が二人きりで淋しく哀れに而も傾く月と昇る朝日とを一時に見せ、立脚地を換へて見れば勇

ましく賴もしくも見られるやう、即ち一方に豐臣の沒落、一方には德川の勃興、それに思ひ寄せたのであつた。何處までも自分の積りは秋の心である、秋狂言にしたら向きませうが、其れを春も春、活きた芝居の最中にやるとは迷惑です。云々。

舞臺に上れる「桐一葉」につきて

（歌舞伎のために）

役々の藝評は諸新聞の專門家諸君の評で盡きて居ますが、折角のお需めだから、作者の心づもりと舞臺面とがところ〴〵行違つたのを申して見ませう、或は見た目はよくなつた所もありませう。

二幕目に置いて貰はねばならぬ夢の場が末へ廻つた爲作意が多少崩れたことは過日もいひましたが、舞臺に上つたのを見て彌〻不都合を感じました。第一、末三幕が混雜過ぎ、銀之丞の振事と夢の振事とが衝き、夢でも淀君が短劍を拔き、現でも拔き、幻でも拔き、殆ど同じ幕のうちに三度同じ仕草、そればかりでなく、あの怖い不氣味な夢のあとで直色合もをかしなもの。又二幕目に夢の幽靈が見せてないから不開の間の幽靈沙汰が何の事か見物にわからず、剩へあの不快な夢を見て神經が高ぶつてゐた

ところだから二女の讒訴が一段ときいたといふ段取も死に、夢と幻と前後照應させようとして、態と二度寢所を使つたのも贅となりました。

大野道軒と正榮とは肝腎の臺詞を大がい削られた氣味て、つまらぬ役になつて、筋もしどろもどろ、役者は演りにくかつたであらう。

二女密訴の場の淀君は「エヽ、腹立しや、胸苦しや」で痞を起す仕草をさせる積り、これを介抱せんとて修理が立寄る、態とじれて拂ひのけて泣き怒る、此の馴々しい仕草の間に隱然二人の關係をほのめかし、末の寢所の場の伏線を示したつもり、又斯くして人物にイゴキをつけておいた積りであつたが、淀君があんまり馴柔て、そして修理が色氣皆無の四角四面て、あの場は無意味になりました。「柳眉さかだち雪よりも白き顏朱をそゝぎ裂くともなしに御袖のちぎるゝ音の耳立や」て淀君は襦袢か下着の袖を我れ知らず銜へてベリ〳〵と引裂くといふ仕草、この邊から癪の氣味を見せて正榮、大藏も座をいごいて貰ひたかつたのです。一體に近頃の活歴流は言動共に餘所行流て、殊に座つた切りが多くて行儀がよすぎて困ります。それから「御貌さつとあげさせたまひ」以後は前の女こしさと打つて代り昂然凛然たる高慢の思入にかはつて貰ひたかつたのです。

溜の間の幕切、修理渡邊は口あんごり立ちながら向うを見送る、片桐は坐つたまゝ二人を見て思はず微笑二人見返る、氣を代へて又悄然とうつむくを木の頭、幕といふのが作者の積りてあつたのです。二

人が氣込む、片桐がギックリ睨回す、あれては改めて刃傷になりかねまい。

黑書院は道軒の勢ひ烈火の如く、常眞の辯論は殘燈の火影の如く、常眞の辯論は殘燈の火影の如く、そこへ修理渡邊二人が加はつて彌〻片桐黨大敗と思はるゝところへ木村の出といふが注文でした。こゝの木村は一寸病後といふことをきかせて徐かに優美に、道軒が勝誇つたる鼻先を折られた腹立たしさに、前幕で石川を文なした時とは直反對に焦ち急立ち、理不盡に抑へつけうとするを、事理明白に而もおとなしく說破するといふが爰の木村の肚です。腕力の立廻りではなうて理智と至誠との力で衆敵を挫くといふ積てあつたのです。

高麗藏は臺辭をうろ覺えの三日目ごろの方が却つて此の趣意に叶つてゐました。淀君も出はあくまて沈着いてゐる積りて而も目は釣上つてゐるといふが誂へ「常眞どのをはじめ市正景負の面々」は最も皮肉にいつて貰ひたかつた。

片桐はどの幕でも自分の苦心を語る時には泣かず、「豐臣家の社稷ほどは」などいふ臺詞の折にばかり我知らず泣くのです。耶の場の幕切に「衰ふる勢は水の低につき影も」とある。すべて斯ういふ臺詞は空の月へ思入あつて云ふべきだのに、此の場でも長良堤の「あり明の影薄れつゝ」なども一切かまひなしは少々情ない。

鳥居前、局部屋、乳母自害の場等は作者も大の陳腐式で書いただけに、實は一切チョボぬきて演じさせようといふ積りてあつたのです。然るにそれが外れたので、腐氣鼻を撲つ次第となつて俗惡の作意が

目だち、銀之丞などはエタイが分らぬものになりました。銀之丞の振事は、もつとたはいのないものを極あどけなく踊らせ、それもまた半ごろに「大變ぢや大變ぢや」にして欲しかつたのです。一體こゝも皆々行儀がよすぎて舞臺面が淋しかつた。銀之丞はどうしても階段に足をなげだして腰かけてゐねば通らない。

夢の塲は大がい積り通りでしたが、石田の太閤の同勢中に花やかな童小姓が無く、舞臺に月が見えず、何となく淋しかつた。淀君の長刀だけはうまく消したが、成政の死骸が走つたのは夢にしても不思議でした。作意がわるいからでもあらうが、どうも一體に夢とは見えなかつた。淀君の臺詞が唄へ取られて振が附いたのと、怨靈の惱ましになつてから、暗中に唄が聞えるのとは全く作者の思ひつかなかつた面白味で、これは全く舞臺方の働きです。怨靈が長くうるさかつたのは子供にはいやらしく、大人には馬鹿らしく、困り物でした。片桐邸奥書院が玄關になり、絶望の餘り七本槍の且元へ戻るといふ奮激の市正が馬にも乘らず仕舞ひ、石川伊豆の呼とめも作者は二重からさせる積り、石川も獅子奮迅で花道半まで家來引つれ驅出して呼止められたはうが儲かりさうなものと思ひました。爰は本文を讀んで下されたら作意と舞臺と大きに行違つたことがお分りにならうから何もいひません。思ふに爰で一ぱいに手強くせねば片桐も大きに損でせう。

長良堤での間違ひは作者が暗に正成の烏帽子姿を匂はせておいた市の正の素襖姿が起がけに飛びだして來た木村の方へ廻つたとは案外。前の玄關は社祢姿で馬に乘る、こゝは烏帽子素襖と見た目をかへた積が空になつた。堤の道具も上手奥へ斜に遠く、長く、ほのかに飾つて貰ひ、下手へ（地理にちがはうが其樣こと搆ひなし）大阪の街區をおぼろに見せ、本文通りその中へ天守を聳えさせる積りであつた。無論揚幕から片桐は出る積り、木村も同然。こゝは道具も人物の言動も大ぶ作者とは肚がちがひました。一々申すもげふ〳〵しいから略します。時候は本文を訂正して十月末位にして、柳も枯葉にしたし、土堤には一ぱいに葭や薄を生ひ茂らせたいと思つた、月も夢の月と衝かぬために下絃か何かにしたかつたと思ひます。

併し作者の肚通りに優人たちが演じてくれたからとて到底此の作は面白くはなるまい。舞臺に上つたのを見て、我が折れ、境遇悲劇などいふものはヤハリ叙事詩小説の壇場でありませう。どこ一つ泣けず手に汗を握らする塲もなき作、それを兎も角も二十日餘打ちつゞけたのは優人の技藝と人氣との力であつたと思ふ。（三十七年四月）

「牧の方」に就いて

（都新聞記者に語る）

私しは活歴主義でない

新作の史劇といふと今日では團洲流の「活歴」に限るやうに思つてゐる人もあるから、一應私しの考へを斷つておきませう、私しは活歴主義ではない、「桐一葉」や「牧の方」を書いたのは何方かといへば所謂活歴主義に反對であつたからです。

表玄關から覗いた浮世の相

劇は小説以上、歴史以上と言ふ譯は、浮世の相、浮世の味を如何にも濃く深く細かく寫し出して見せるからである。歴史や普通の小説に寫されてある浮世の相や味は徒の皮相、譬へば表玄關から一寸覗いた浮世の模樣たるに過ぎぬ、さなくば餘所行の人情が寫されてあるので、裏の裏の極髓は見えてゐない。實録や普通の稗史に書いてある淺岡の局や大石内藏之助やを淨瑠璃又は劇のと比べて見ると此の理が直分る。劇では腹の中の煩悶まで形に現して見せるから感動が深い。榮御前が歸つてからの大愁歎などが其の一例。實際をいはゞ正岡程の男まさりの女は如何に腸が千裂るやうであつてもマサカあの場で彼のやうに取亂して大泣きに泣きはしなかつたであらう、たかゞ堀越式の思入でジッと向ふを見込みやがて背を向けて涙をかくす位であつたかも知れぬ。しかしそれでは既に「浮世の味」を知り盡してゐるものばかりに「味ひ」が分つても普通の者には迚も深い感銘を與へがたい、イヤ「浮世の味」を知つてゐるものとても、想像の力は人毎にちがふゆゑ、此の思入主義の壺に適ることもあれば適らぬこともある。言はぬは言ふに彌優るで、時と場合とによつては、見物の想像に一任して朦朧とさせておいたはうが一段「味ひ」の深いこともある、團十郎は慥かに此の方法で見物を魅したが、此の流義が極端に達すると例の「活歴」とか「寫實」とかいふ奴になつていつも〳〵表玄關から瞥と覗いた浮世の模樣となつて、どの幕もどの場も、サア此れからといふとこでお結局、いつも白湯を飲むやう。先づ御殿なら榮御前の引込で幕、山の段なら定高と大判事とが川を隔てゝの仕方話が濟んで、無言で首を渡す無言で請取る、それで幕。事によると「女の面一目見て云々」は活歴の武士の主意には叶はぬ言葉だなぞとて除かれるかも知れない。名優がやればさうしても隨分人を動すてもあらうが、名優が原本のまま巧を凝らして演じたのと比べたら、何らが上であらう。

小説でも近ごろのは段々筆が細かくなつて、人物の肚の中の煩悶を寫すことが眼目となつてゐる世の中に、劇は却つて後戻の氣味で、徒の事實の皮相を繪の具で摸つたり、此の後は宜しく御見物がたの想像にお任せ申します、何分宜しくお願ひ申しますなぞはずるいてはないか。無精なことだぞ。

世話物と時代物

尤も、かういつたからとて、劇によつては少々は見物に手傳つて貰はねばならぬのがある。例へば時

代物は全くの無學者や子供には分りにくい。これは彼の世話物ならぱ始めて見る西洋の劇さへ善く分るのに、時代物となると西洋のなどは普通の洋行者には薩張分らぬことがあるのでも知れる。時代物を味ふには幾らか豫備知識が要る、假に「牧の方」でいへば、尼將軍とか賴家とか時政とか義時とか、日本歴史で有名な人物位は、其の關係やら事歴やら大躰の人柄位はマア知つてゐて貰はねば分らない。畢竟これだけの事を註文するのは時代物の特權で、西洋の名作とても此點は同樣である。そこで今日のやうな四民平等の平民時代には、兎角時代物の稍高尚なのや多少素養の要る音樂趣味の型物なぞは迚も世話物程には流行らぬ。見るに素地が要るからである。今日明治の世話物を演る新演劇が地方の人や若い人たちに喜ばれるのは、他にも理由があれど、一つは此の道理。舊劇の名作は多くは時代物と同樣に幾らかの素養がなくては眞の味が分りにくい、殊に俗曲趣味が分つてゐねばならぬので、今の若手には氣に入らぬ。イヤ氣に入らぬといふよりも面白味が通じぬのである。時勢が變つたの故分らぬが有理、田舍者だなぞと一概に惡くいふはうが無理さ。丸本物にさへ筋書といふものが無くてならぬものとなつたも時世である。

「牧の方」の粗筋

北條時政の後妻牧の方が繼女に當る尼將軍と角突合の末、自分の手許に預つてゐた若君(實朝)を若し、や毒害でもしはせぬかと邪推されて取戻されたので赫と逆上せ、日頃の怨が一時に破裂した途端、兼ね

て牧の方に取入つて時節の來るを俟つてゐた平賀朝雅や稻毛入道に煽動られ、疑はれた上は毒食はぬ皿、いつそ實朝卿をはじめ尼將軍をも義時をも殺し、朝雅か自分の子の政範を將軍家にしようと思ひたつといふが發端。併し其の惡心の元はといへば、政範といふ實子の可愛さゆゑである、僻んだ邪けた女とはいへ、牧の方は根からの大惡人ではない、冷かな女ではなく、情のある女で、癇癖の激しい、赫と逆上せた時には全て狂人のやうな女、すべての樣子は團洲式といふよりは先代の梅幸式、怒も怨も炎のやうに外に發する質。さてかういふ女ゆゑ、尼將軍憎さ、我子可愛さの餘りに一旦は謀叛を企んだものゝ、我が子が破格の立身をしたので怨みが緩み、角が折れ、尚ほ他にも理由があつて後悔し、變心せんとする、それを稻毛等は變心させまいとて尚ほ惡事を勸める、すると奸雄の義時が夙に之を察して、繼母の惡心の原は政範があるからだと、それとなく政範を諭して自殺させる、併し自殺といふことは政範が遺言して秘しかくしたゆゑ、牧の方は知らず、悲しみ歎いた餘り、最愛の子の死んだのも年頃惡いことをした天罰ではないかと怖れ、尼にならうとする、平賀朝雅や稻毛がそれをとゞめ、政範を殺したは畠山親子や尼將軍や義時の所爲だと讒言する、それで牧の方は殆ど狂人のやうになつて怨み怒り、先づ時政を勸めて畠山親子を殺させ、つゞいて窃に謀を回らして、實朝を邸へ招き暗殺しようとする、ところがアバヤといふ時に及んで情に脆い女氣が崩し、實朝の容姿が政範にそつくりなので、一寸躊躇するうちに機會を誤り、義時の兵に圍まれ、自害するといふのが粗筋です。

「桐一葉」に出て來る人物は大野道軒はじめ大惡人ではない、然るに此の作に出る人物は見樣によつては大がい惡人です。牧の方も自分の怨と子の可愛さとで謀叛を企む女、稻毛入道親子は便佞利口の小人、朝雅は腹の黑い淸水の冠者と云ふ人物、義時は大政治家といはゞいへるが、先づ奸雄、經世上の都合によつては親を幽め、弟を殺す位は何とも思はず、實朝をも成るべく牧の方に殺させて置いて後に「此の上は潔き御改悛云々」を言ふ料簡、肚の裏は氷のやうに冷い男。それから殆ど幕毎に人殺しがある。これは必しも日本在來の劇の習はしに感染れたといふばかりではない、私慾無慚の惡人の蔓延つて骨肉相殺すことが平生になつてゐた鎌倉時代を一篇のうちに髣髴さうとした爲です。この事は嘗て「文學其の折々」に論じておきました。

淀君と牧の方

「桐一葉」で淀君を演じた芝翫が牧の方を演ずるのであるから性根を呑込まずにかゝつたら嘸演りにくからうと察します。作者の肚では性格を變て書いた積りだが、そこが筆が未熟だから、白や場面などに處々似たところが知らぬ間に出來てゐた。今度春陽堂から出す三版には多少訂正を加へておいたが、初版には淀君の白と同じやうなのが大ぶある。但しそれは白の上で、性格は異つてゐる筈。淀君と牧の方との似てゐるところは共にヒステリー質で、怖しい癇癖で、所謂悍婦だちで、きかぬ氣といふ位まで。牧の方は到底淀君のやうな氣位の高い、利己主義一點張の、剛情な意志の强い女ではない。淀君は秀賴をもさほど愛してはゐない、兎に角秀賴よりも何よりも自分を愛し自分を主にし、傲岸で、聰慧で、何者をも容易に信じない。嬖人の大野修理をも信じてはゐない。又決して後悔などはせぬ、折々は良心の苛責を覺えて怨靈などに惱されることはあるが、それが爲に發心せうなどゝは曾て思はない。此れだけを見ても邪推、疑ひの深い癖に存外淺はかで、輕々しく人の讒言を信ずるのみか、折々氣が變りかけ、我が子の破格の立身位で角が折れ、藥師の靈驗で怖氣づく意氣地のない牧の方とは大ちがひ。牧の方は只の女、淀君はザラにある女ではない。くはしいことは「歌舞伎」に書いておいた、此の區別さへ合點がいつたら芝翫もさほど難義ではあるまい。只本來が寺島式に出來てゐる牧の方ゆゑ、柄の上で骨が折れませう。（卅八年四月）

東京座の「牧の方」につきて

（歌舞伎のために）

役々の藝評は專門の批評家が各新聞に物せられたに盡きてゐるから、別段申すことはない。新聞など

では私しが毎日稽古に臨んで、一切の指圖でもしたやうに書いてあつたが、あれは間違です。尤も、上場前に座附作者が屢〻參つたので、折々心附いた廉々を話してはおいたものゝ、こちらの指圖とむかうの解釋とは行違つたことも多く、かた〳〵私しと舞臺面とは殆んど何等の關係も無い。さて又今日讀合せといふ日に來てくれろといふ申込があつたので、私しはまだ曾て役者の稽古といふものを見たことがないから、態と茶屋まで往つて見たところが、めい〳〵覺束なげに徒の素讀をしてゐるので、これなら聽いてゐるでもないと直ぐ歸りました。其折質問に應じて二三廉説明をした。さて三日目のまだ出揃はぬ時分に始めて舞臺面を觀たところ、大ぶ思はくが違つてゐたゆゑ、心附いたことを一應は作者や或俳優に注意してはおいたものゝ、これはそれ〳〵當事者の都合仕勝手もあることなれば私しの注意通りになつてゐないことは勿論です。本來此の作は出來損ねの作ゆゑ、昨年大阪の辨天座から角田君や伊原君や香川君を介して申込があつた折もきつぱり斷つて永く封じ込めるといふ意味の返答をした位、本年になつて青々園君のお勸で私しも發心し、どうせ捨物、強ひてむづかしく言つて斷るほどの代物でもないと觀念し、上場はさせたものゝ、初手から重きをおいてはゐません。第一餘りごたついた作意ゆゑ、見物に筋が通らぬばかりか、演じる役者自身にも分ればよいがと懸念の餘り、お需を幸ひ、牧の方の性格の説明を試み其の寫しを望みに任せて芝翫へ送り、同時に青々園君の需によつて都新聞へも作意のあらましを掲げた。そんなこんなが多少役に立つたか芝翫が大骨折、いつにない奮發で演じてくれたので、どうか斯うか見物に分り、定例だけ打つゞけたのは物怪の幸ひといふものです。しかし餘り骨折が過ぎたか三日目の芝翫と十日のとては生ビールと拔置ほどに違つてゐた。それも無理はない。制限九時間が長過ぎるところへ二十五日立を一日出通しなどは無法至極、疲れるが道理これで眞面目の藝が出來たら不思議です。前號でも申した通り此の作は仔細あつて總體に息忙しく出來てゐるので、白なぞも半分いひかけて思入あつて突と餘所事をいひ又前のつゞきを云ふといふやうなのが多い。原作に—印が使つてあるところは臺帳式に書けば○印を使ふべきところだか、臺帳に引直す時分に取急いで一切ヌキにしたものらしい。それゆゑ「時政どのとの緣を切つて黑髮おろし—みづからさへ無いならば」などいふ白はいつも一息、それがため折々意味が通じかねた。これはどの役者にもあつた。又「幼いに因みましたる云々」とある句が「幼いに」の句頭が失つてゐたり、その外これに類する片言が幾らもあつた。書拔く時に寫しおとしたものと思はれる。それでも見物は我慢して見てゐてくれるのを見れば、ツマリ芝居は役者の腕次第、作意が役者の柄に適らなければ無駄なことだと今更ながら大發明、役者の柄を見ぬいて筆を取る玄人作者の出ぬうちは爰歌舞伎の危機でありませう。（三十八年六月）

「牧の方」の作意のあらまし

此の作は北條義時といふ奸雄といへば奸雄、えらい政治家といへばさうも言はれる一人物を一種風變りの悲劇の主人公にして其最期を書いて見たいと思ひたち、先づ其の段取に二篇の悲劇を綴らうと企てた頃の作です。もう十年近くにもなりませうか。生中舞臺面と人形の動きとを氣にして、成るだけ動くやう、運ぶやう、穴のあかぬやうと覘つて綴つたので、一體に息忙しく、あわたゞしく、落着が無く、それで存外に自に贅が多く、又舌足らずのやうになつてゐる處もあり、それこれ、單に形式の上ばかりを見ても不都合の多い作である上に、筋立が餘り込入すぎてゐるから、出あひで觀る人達には、何の事だか、經緯が分るまいと思ひます。今度塲に上すについては座附の作者に指圖してだれさうな部分や白の長いのを削り、又ところ〴〵は文意をも改めて見たものゝ、優人の骨折ほどに見物に筋が分り同感が起らうやら、覺束ないことです。

言ふまでもなく、牧の方は此の作の主人公ですが、其の性格を言ふと、自ら主となつて働く女ではなく、他人に役せられ、境遇に役せられてゐる女です。感情の女で、意志の女ではない。俗に謂ふ多血神經質の、癇癖の激しい、感情の爲に淺はかになり勝の、「移り氣」「氣の變り易い」といふではないが、感情の

冷熱によつて意志の力に強弱のある、くわつと情火の燃え立つ最中には如何な鐵壁をも鑠しさうな力があつて何物も之れを消滅し得ぬやうだが、其の勢の猛烈な割合には熱度も火氣も衰へ易い。それから僻み疑ひ邪推の激しいにも拘らず、大根に何處か正直な、淺はかなところがあつて他に欺され易く、又怨み憎む心は深く鋭い方だが、本來は情に脆く、主な煩惱の火が冷却した時、若しくは人間本具の性が發動した瞬間などには到底之れに克つ意志力の無い、イヤさほどに殘忍ではない女。で彼の冷かに考へて冷かに行ひ、何の憤怨も無くて利害一點張で無辜をも殺し得る義時一流とは全で異つた人物と斯う案を立てゝ綴つたのでした。私しの牧の方は、馬琴が「巡島記」に描いたやうな人面獸でないは勿論、高井蘭山の書いたやうな紋切形の史的奸婦でもなく、又どこと言つてずばぬけた特質のある女でもない。併しながら此の言はゞ平凡な女が、因果纏綿の結果、一大波瀾を捲起す動機となるといふ點が、其の當時は大ぶ私しの感興を惹いたのであつたが、それは元より腹案だけのことで、言ふまでもなく筆は誂通りには働いてをりません。

史乘傳説に見えたところでは牧の方が逆謀を思ひ立つに至つた動機は、第一に、繼女に當る尼將軍の權勢を嫉み憎むよりして起る僻み、第二には、繼子で北條家の繼嗣で、尼將軍の肱股で、追々老衰した時政が亡き後には是非とも自分が懸らねばならぬ筈の義時に對する隔心、それに伴ふ猜疑、第三は、時政が寵を得て何事も思ふやうになるより次第に慢心し、我れ若し第二の尼將軍たらんとせばならるべき身

分なりと思ひ驕れる心、第四は我が實の女荻の前の婿平賀右衛門ノ佐朝雅に對する依怙贔負、彼れが源家の嫡流たるは取りも直さず件の野心を遂ぐるに便宜なりと思ひ込みたること(後には政範の生れたのていくらか心組が變つたでもあらうが)此等が主なものであつたらうと思ひます。 或は此の通りに書いたはうが、悲劇としては一段手強い、マーロー式、ウエブスタア式の一寸マクベス夫人の面影を匂はせたやうなものが出來たかも知れなかつたのですが、そこが例の癖で、下手々々と名作の燒直しめいたものを作るのが厭さに、二つには、牧の方を意志の女たるよりも寧ろ感情の激しい質の女にして、子を思ふ情の爲に心機を變轉し、性格の發展してゆく鹽梅を描いても見たく、かた〳〵、最初は(よし腹の底には我れ知らず其の氣があつたにもせよ、未だ意識しては)逆意といふ程の底企(そこたくみ)のなかつたのが、例の尼將軍との女性的猜忌、邪推の額合せが導火となり、稻毛の入道や平賀の朝雅の讒言や煽動が薪ともなり、油ともなり、多年胸の中に煮えてゐた尼將軍や義時や其の他に對する僻み、怨み、乃至自身及び愛子政範が將來に對する取越苦勞等が一時に爆發し、燃上つて、遂に逆意を企つるに至ると、先づそんな鹽梅に拵へて見たのて、ツマリ私しの作意では、牧の方の心機は都合三度轉移する譯になつてゐるのです。

第一は序幕で、逆意といふやうなものはまだ流石に無かつたのを、故なく疑はれたばかりかバッと世間に知らるゝまでになつたので、赫と逆上せて、知らず〳〵ながら多年心に潛んでゐた野心、害心が破裂する一段、是れが第一轉です。 次は政範が端無くも從五位下に立身したので、其の嬉しさに、僻みが薄らぎ、角が折れ、兼ねては神佛の靈驗を畏れ憚る心生じ、後悔の心の萌した途端圖らずも政範の頓死したゝめ、是れ或は從來時政の寵を恃んで前將軍や比企、仁田などを讒死せしめた應報ではないかなどと怖氣(こはゝ)だち、良心の苛責を覺え、ます〳〵懺悔の心募り、哀傷し、煩悶し、果は佛門に入らんとする一段、之れが第二轉です。 それから第三轉は逆謀の卷返して、これは主として朝雅の讒言によつて、己れを責むる心を轉じて他を怨み他を咎むるに至つたのが元で、即ち政範の横死は尼將軍と義時の計略に出づるものと察つたのが動機です。(釣殿の一刹那は、譬へばマクベス夫人がダンカン王の寢貌を見て躊躇したのと同じ趣の出來心で、これは徒(はん)の女心の作用、心機轉變の中に加へるほどではない。

稻毛入道は便佞の小人、人を役して自利を圖る積りて、其の實は一枚上手の惡人に役せられてゐる人物。 平賀朝雅は恰も一枚上の敵役。 而して義時は其の又上の立敵といつたやうな關係です。

春陽堂が此際第三版を出すといつたので、多少訂正を加へておきましたから、萬一原作によつて批評して下さるやうな場合には、第三版とあるのを御覽を願ふ。 東京座の脚本は右の三版を土臺にして更に幾分を削つたものである。(三十八年五月)

「沓手鳥孤城落月」と歴史的事實との關係

此の作は「桐一葉」の後段なれど、彼の作を綴つた當初にはかやうなものを書き足す心ではなかつた。「桐一葉」を綴つた當時の考は、境遇悲劇といふよりは、寧ろ深く同感する所があつたからで、其の頃批評家たちが頻に主張せられた美學上の脚本論などには餘り多く心を注いではゐなかつたのであつた。

片桐且元の悲劇は性格に因緣する所比較的に少うして、境遇に因緣する所比較的に多いといふことが深く小生の心を牽いた。而もそれが希臘劇に見ゆる運命の作用などゝは頗る趣を異にし、性格の作用と境遇の作用とが相纏綿し錯交し、互ひに因となり果となつて紛糾の極に達し、片桐且元が駿府より立返つた當時の大阪城内は、譬へば百千束の絹絲が一度に紊れて縺れたやうな爲體、如何なる蟻通し再び生るゝとも、如何なるソロモン再現すとも殆ど如何ともすべからざる有樣であるやうに感じた。大野修理親子を打果したら善後策が立つかといふにさうはゆかぬ。思ひ切つて淀君を暗殺したら何とかならうかといふにさうでもない。早い話が近ごろの東洋小王國の情態に髣髴たる、到底救ふべからざる窮境、而して此の間に介立して托孤の遺命を全うせんとする且元其の人は思慮餘りあつて勇斷にゆ

たかならず、策士ながら本來が正直律儀にして人情深く、隨つて思ひ切つた陰險な又は殘忍なことは出來ぬ人物、又出來たところで豐臣家の爲に寸功もなかつたであらうといふ點が小生の甚だ趣味深く感じたところであつた。よしや且元に十倍する器量の人物が之れに處しても解決は出來まい。勝海舟翁が其の著「鷄肋」に記された所は强ち謙遜の語とも思はれぬ。慶應戊辰年自記一章中にいふ

慶應戊辰の變は余が終身の愁苦危險慘憺の極なり、奉命より以來是等は胸中に謀るといへども、身低弱膽識不足、其愁苦に狼狽す、勉勵して說諭辯解すれども、衆人余が心裡を察せず疑念甚しく、薩長二藩の爲に遊說するの疑固く、出づれば途上に覘ひ詩たむとし、內れは激論殺害せむとす、或は憤激じて是を叱し、或は論じて是を退かしむ、今日の愁苦孰にか告げ孰にか訴へむ、唯一片の精神不欺の志を以て死すとも自から泉下に愧る無きを期する而已

昔大坂の役片桐且元其中間に居て百變千化幼主を補弼す、其苦況凡庸の及ぶ所にあらず、然れども時の諸臣其忠誠に從はず、千慮万苦終に水泡となり、隨て豐臣氏の社稷滅す、余今日の事に處して其愁苦を察す、者るに古人に及ばざる事萬々、如何ぞ我が德川氏をして全きを得せしめむ、是を知つて退かざるは頗る愚也といへ共、思ふに我が德川歴代渥恩の名族近日の大變に逢て其方向を失し、一も大義に苦慮盡力し死してやまむとする者なきは、獨り是余等の恥にあらず、我が家君の恥辱後世之を如何といはむ、譬へば一身八裂溝壑に轉たるゝもまた顧みるに暇無きものあり、亦悲しからずや(三年三月十九日曉記)

翁の境遇と且元の境遇とを比較するに、よしや苦境たることは同等としたところで、後者の方が幾割か割がわるいと思はれる。將軍家と皇室、豐臣氏と德川氏、敵身方の關係が大ぶ相異つてゐる所に心を注いだなら此の理はおのづから明かであらうと思ふ。それは兎もあれ作者は一に主人公の此の悲慘なる境遇に歴史的、倫理的及び劇詩的の感興を覺えたが原で筆をとつたのであつた、故に兎も角も一通

り此の趣意を描き得たと信じた以上は、もはや其の上に美學上の約束などを履行する必要もなかつた。寧ろ作者の意は彼方の劇詩學などに違背するのを承知の上で、言はゞ態と在來の國劇式を踏襲した氣味、以爲へらく人を主とせずして事を主となし、幕毎に主人公を異にするほどまでに局面を雜多にし、波瀾又波瀾、挿話又挿話、而して其の大團圓に至つて翕然として收るの國劇式は純然たる性格劇には妙ならざると勿論なれど、我が所謂境遇悲劇の樣式としては頗る適當なものではないかと思ひついてのわざくれ、換言すれば、或一人二人の罪過の結果で悲劇が起るのではなく、若し人に罪ありとすれば、あらゆる關係者悉くに罪があり、若しまた無しとすれば、誰れにも大した罪過はなく、罪はむしろ境遇にありともいへる隱妙にして不可思議な點、それが如何にも趣味深く感ぜられたのであつたが、何分筆力が伴はぬのと脚色にも無理があり、今にして思へば本來の考其物にも多少の思ひ違へがあつたので、作者の旨とする所讀者に通ぜず、とりわけドラマツルギーに悖戻した諸點は時の諸批評家が非難の的となつたのであつた。或は且元の如きは頭から悲劇の主人公となすべからざるものと論じ、或は且元を自殺せしめないのは面白くない、歴史の事實に拘泥して、劇詩の本領を閑却したのであらう抔といふ批評もあつた。要するに「桐一葉」の且元は意氣地なし又は不得要領の凡骨と解せられてしまつた。若し「桐一葉」の且元に靈があるものならば嘸かし作者の不料簡を怨めしく思ふことであらうと思ひついて、つい後段を書きつがうといふ氣になつたので、初手からの腹案ではなかつたのだが、さりとて性格

は前後矛盾するとのないやうに寫した積り、又境遇悲劇としての本來の作意に何等の變化も生ぜなんだ積り、故に主人公は、見やうによつては此の作にも「桐一葉」にも終始相ならんで二人あるともいへる、一人は淀君で、一人は且元、強ひて性格劇と見やうとすれば此の二人者の悲劇即ち双頭の性格劇とも見られるのである。

さて參考書は「桐一葉」の時と略ゝ同樣、考證が主ではなく、興を幇けるのと材料を求めるのとが第一ゆゑ、正史、俗書の區別なく、例へば「難波戰記」「大阪軍記」流のもの、「慶元記」「明良洪範」のやうなもの、又は「豐内記」「片桐家秘記」のやうなもの、つまり何てもかまはぬ、役に立ちさうなのは、その全部又は入用の箇所々々を走り讀に讀んだ。其うち最も多く役に立つたは小宮山南梁氏の「德川太平記」、尤も其の記事は他で調べたことゝ重複したこともあつたが、史事實としても略ゝ信ずるに足るものと思はれるゆゑ、空想と傳說との關係を示すために左に揭げおく。

秀賴は淀殿と共に天守に登りて已に自殺せんとしけるに、速水守久急に押留め、勝敗は兵家の常なれば、今暫く待せ給へとて、月見櫓より蘆田曲輪のしかみ櫓へ移らせけるが、大野治長やがて又これを山里へ土庫へ移せり、是その急難を救ほんが爲なり、速水守久、毛利勝永始終これに從へり、時に城中火勢益々猛くして殿宇樓閣悉く焦土となりければ、數萬の兵士或は戰死し、或は自殺し、又は逃走り、又は火に焚け水に溺れて死し、東軍に計取る所の首凡そ一萬四千五百三十餘級なり。

此夜家康公は茶臼山に屯ぜられ、秀忠公は岡山に屯ぜられしに、城中にては刑部卿局秀賴の御臺所德川氏を扶け、堀内主水これを導きて城の東なる堀の上に置きしかば、坂崎孝親これを見て茶臼山の陣所へ護送ぜり。

「齋手鳥孤城落月」と歴史的事實との關係

千姫に關する事實は殆どそのまゝに取入れておいた。事實は小說よりも奇なりといふ諺があるが、大阪落城の事蹟の如きは眞にそのまゝの大悲劇詩で、因緣果報の脈絡を辿つて見ると只の一筋だにも廢りはないやうに思はれる。千姫の事は尙後に引かう。

此日家康公は本多忠政を召て、其の弟忠朝が戰死を弔ひ從兵五人に感書を給ほり、又小笠原忠政の陣へ使を遣して、その創を問ひ、父兄の戰死を弔はる、次の日八日秀忠公秀頼猶存命なるよしを聞き、安藤重信を以て其狀を視察せられ、本多正純、井伊直孝、阿部正次に命じて土塵を圍み守らしめしに、治守、長久は重信に告げて、諸士は皆自殺すべけれども秀頼母子の命全からんことを望むよしをいひ出ければ、家康公より加賀爪忠澄、豐島刑部を遣されて治長に諭され、秀頼母子は死せざるやうに計らひ、塵中に從へる諸士の姓名を記し出すべしとありて、片桐且元に命ぜられ、櫓の上より二位の局を召し、淀殿に聊爾のことなきやうに諭すべしとあり、又直孝を以て秀頼に諭され、戰爭已に訖りぬれば、別にいふべきともなし、太閤以來の舊好忘れがたければ若干の領知を與へて衣食の料となすべし、城を出て此に來られよとありしにより、守久その命を秀頼母子に傳へ、さて治長、守久の云へるは、母子とも謹みて命を承るべけれども徒歩して出ること叶はざれば輿を以て迎へ給はるべしとて再三往復しける內に、直孝、重信、正次等相謀りて云く、此際に至れるに秀頼なほ存命ならば必ず後來の患あらん寧ろ斷決して自殺せしめんには如かじとて、乃ち土塵を警衛するものに命し、銃を發せしめければ、治長、守久談判の破れたることを悟りて、塵中より火を放ち、秀頼竟に自盡しければ、毛利勝永かたはらより之を介錯せり、時に年二十三なり、淀殿も亦介錯せさせて俱に亡ぜられぬ、後に塵中の屍を檢するに悉く焚損じて誰の屍とも辨じがたかりけれども、骨塚吉光の刀側に在しを以て、僅かに秀頼の屍を知ることを得たり、時に大野治長その子治德、速水守久その子出來麿、毛利勝永その弟勘解由、眞田大介、津川左近、荻野道喜、堀對馬守、伊藤武藏守、成田左吉、森、島長以、竹田榮應、加藤彌平太、高橋半三郎、高橋十三郎、土肥勝五郎、寺尾勝右衞門、片岡十右衞門、埴原八藏、埴原三十郎、小室茂兵衞、中島將監、中高半三郎等二十餘人殉死し、大藏卿、右京太夫、宮內卿、和期局、饗庭局、玉局も亦同じく死せり、京極備前守、今木源右衞門、別所孫右衞門は使者となりて城を出、二位局は召れて本陣に來り、靑木一重は京師に拘留せられし故皆死せざることを得たり。

家康公は秀頼いまだ出來らざるを以て櫻門に至て待れしに、直孝、正純來りて秀頼以下自殺の由を申立ければ、公哀憫の色見えて直に駕を還されたり、此日家康公は二條の城に還られ、次の日(九日)秀忠公は伏見城に遷られ、德川義直、德川頼宣も亦之に從はれたり秀忠公阿部正次に天王寺口を守らしめ、靑山忠俊に玉造口を守らしめ、水野忠淸に靑屋口を守らしめ、高木正次に京橋口を守らしめ、右隊下の士を率ゐて警衞すべき旨を命ぜられ、又正次、忠俊及び安藤重信に命じて城中の金銀を監視せしめらる、此日從軍の諸將二條及び伏見に至て干戈全く戢りて四海寧謐に歸せしことを賀されたり。

また秀頼が最期に關しての記事は左の如し。

其後秀頼城を出らるべきに極り、乘物二挺といひ越すやうにと申出けるを近藤石見聞て、かゝる刻劇の中に何とて乘物の才覺なるべきや、馬を求めて參らすべしといふを速水聞もあへず、いかに此仕合になり給へばとて忝くも秀頼公、淀殿面をさらして馬に召さるべきや、蛔武者抔の知るとにあらずと惡口して門を閉ぢ、內へ入るとひとしく念佛稱名の聲同音に聞え、外よりは鐵砲を打かけゝれば秀頼母子惣して三十餘人、八日の未の刻に自害あり、秀頼當年二十三歲、淀殿は三十九歲也、大御所後に速水が取計ひを感ぜられ、前年人質として江戸へ取置る速水が子を助命して福島正則方へ出仕せしめ、姓名を三宅庄九郎と改め、七百石を給はりしが、福島廢して後は黑田長政方へ仕へたり。

秀頼の切腹せしは千飯櫓のよし、是はゆうせんが櫓とて茨木より移せし櫓なり、殉死三十二人の內、高橋半三郎十五歲、土肥庄五郎十七歲、高橋十三郎十三歲、三人は秀頼の兒小姓なり、秀頼最後のときに云るやう、上臈どもは皆介錯を申付たり、三人の兒小姓と眞田大介とは幼少なり、加藤彌平太、武田佐吉介錯して取せよとありければ、三人の兒小姓並に大介いづれも物の具脫置、四人西向に並び手を合せ念佛高らかに唱へ、雪の如くなる肌おしぬぎ、四人一度に聲をかけ、いさぎよく切腹せしを、彌平太、佐吉介錯し各〻大刀を捨て涙にむせびしとなり、一說に秀頼の介錯は氏家、淀殿の介錯は速水、女子幼子の介錯は毛利とあり、又秀頼は色白く肥滿して長六尺二寸ありしと見えたり

又御臺所(千姫)の事に關しては曰はく

御臺所は秀忠公の姫君にて、名を千姫と申し、七歳のとき大坂城に輿入して秀頼の室となり、落城のときまで城中に在して、竟に危急の難を遁れ、城外へ出られしことは舊記の載する所に據るに云く、佐々孫助といふもの逆心して大臺所へ火を放ち次第に燃立ゆゑ、秀頼は、はじめ天守へ登りけるが、程なく下りて月見の矢倉より芦田曲輪の矢倉へ移られたり、其とき御臺所をも伴はれしかば大野修理介抱して傍の女房にいへるやう、もはやかゝる次第になり候へば御前さまには城外へ出給ひ大御所へ願ひ上られ、内府さま秀頼御母子のいのち恙なきやうに計ひ給はりたしとありしにより、供奉の女房もみな口々に修理が申せし如くになし進らせられて然るべしといひければ、それより城外へ出られしが、其時大臺所は盛んに燒上りて城兵はうろたへ騷ぎ、拔身の槍太刀携へて走り廻りければ、供奉の女房を始め身をちゞめて歩みかね、高石垣の上に寄集り御臺所を中に置き、めぐりを取圍みて居けるに、紀州熊野の士に堀内主水といふものありしが、新宮左馬助朝重なりなどゝ同じく冬陣の頃より城中に在ければ右石垣の方を見やりしに、二十人ばかりの女房の中に白地に葵の丸のちらしを付たるかつぎを着し女性の見えしに心づきて、主水走りより、誰殿かと尋ねけるに、是は關東の姫君なれど去りがたきことありて城外へ出給ふにより、供奉いたされ候へといへば、さらばとて主水先に立て人を拂ひつゝ城を出しに、坂崎出羽守親孝も來合せて供奉したり

又「老談一言記」を引きて曰はく

天壽院殿御臺所のことにつかへし松坂は今の越智民部祖母なり、大坂落城のとき十四歳にてありし、天壽院殿に淀殿ひしとつきそひ給ひて事急ならば刺殺し參らせん樣子なりし、矢倉に上りて淀殿御側に居よりておはせしに、然るべき御運にや、誰とはなしに秀頼さま御自害にて候と申せしかば、淀殿御自害は時まだはやしとて、ついたちて矢倉を下り給ふ間に、女中蒲團を以て天壽院殿を卷きて、矢ざま押開ておとし參らせしときに、松坂も石垣をつたふて下りたり、殘りの女中も同じく石垣を下りおほせんとせし處に淀殿歸り給ひて、叶はずと見えし、堀内主水御供して岡山へ入まゐらす、松坂は武者の通るなよびかけて其尻馬にのせられて御供したり、多くの死骸の上などをわたりて出たりし、その後大雨のときに簑を着て馬にのりて京へ參りしといふ。

又大住與左衛門に關しては

大住與左衛門は太閤の世に臺所にて魚鳥などを洗ひし下男なりしが、取立られて料理人となり、後は料理人の頭となり、秀頼の時には臺所頭となりて此へもかしこへもまめまめしく立はたらく者なりしが、遂に逆心して己が手下の者に云つけ、大臺所へ火を放ち事をはりて後右放火のはたらきを申立、旗本へ召出されんことを望みけれども、其の望み未だ叶はざる内に病死せり、籠城中に、或時渡邊、大野同座の處へ後藤來りて云へるは、おもしろきことを聞くものかな、大住關東へ内通するとのことなり、と治長聞きていやいや與左衛門に限りて其氣遣ひ會てあるまじ、渠は魚洗にてありしを太閤取立られ、秀頼公御口に叶へるものを進めさせよとありて秀頼公へ付られしものなれば、籠城後も處々あまたの倉の鑰を與左衛門一人にて預り、晝夜をかぎらず御用を辨ずれば彼の心入にては中々貳心あるまじきなりといふに、後藤いや鈍なるものより其樣なるものが却て氣遣はし、と云けるが、果して城外より火矢を射けるときに内より火をかけたるは大住なりとぞ　一書大住を佐佐孫助に作る

又且元の最期に關しては

廿八日秀忠公、直孝、高虎に金銀千枚分銅各二個を賜はりて其軍功を賞ぜらる、此月、中國、西國、南海の諸將兵を率ゐて大坂に至りけるが、中途にて大坂城の陷りしことを聞て、各々其の兵を國に還し、其身のみ京師に來りて大捷を賀せり、此日片桐且元駿府に於て卒す、且元七日の戰に岡山に出しは蓋し疾を輿して出たるなり、是に至りて豐臣家の滅びたるを見て、深く愧ぢ憤り、遂に狂疾を發して卒せしとも云へり。

按ずるに且元が死については諸書に傳ふるところ一樣でない。「山本日記」には

片桐市正去年之夏のころより氣色宜しかられ共今度の事なれば兩方心に懸ろ故片時も休息なく立廻りしがすでに五月七日に落着し八日に秀頼公御果被成と力を落しよわりて和州知行所まて漸歸我が領知ながら法隆寺等其外遠慮にてヌカタベカクアンシと云所に先居座し氣色おもりぬれば不自由なる故京へ上り京我屋敷二條御城際成故常陸殿へ申し上三條衣の棚つきぬけ松田庄右衛門と云所司代屋敷折節明きたるを板倉伊賀守に斷申借り居て五月廿八日秀頼公より廿日後死去す唯ひとりと近年苦勞し剩何事も其甲斐もなく水に成たる事共誠世の理りと云ながら豐臣家わきて市正佐衛門太夫等ためし少くぞ覺ゆる

「沓手鳥孤城落月」と歴史的事實との關係

と見え、「藩翰譜」にはヤハリ駿府で逝去したやうに書いてある。或は自刄したのであらうともいひ、或は食を斷つて死んだのであらうともいふ。正史上の批判は孰れにあるか知らねど、演劇の脚色上からいふと「德川太平記」と「山本日記」とに記すところが、尤も都合よく思はれたゆゑ、大體に於て之れを取入れ、幾多の想像を加へて現在の作のやうにした　岡山の陣所を茶臼山とし、廿八日に死んだのを八日の當日櫻門で血を吐いて死することにしたまでゝ、甚しく作りかへた所もない。但し史乘の上では且元が心中はよくは分らぬ、岡山の陣所へ出頭して何を願つたか明かには分つてをらぬ、就中淀君の座所へ大砲を打かけたといふ事實に關する疑問が未解決の姿のまゝで殘つて、忠か不忠かと疑はれてゐるのを、此の作と「桐一葉」とで描寫し解說して見やうといふのが作者の志してあつた。すなはち一面はシルレルがワレンスタインの序詞中に述べたやうな意味もあつて、幾分かの倫理的インテレストもまじり、史論的感興も混じてゐたのであつた。

"In history's page reputation wavers,
As party hate or favour sway the scale;
Yet shall the poet's skill to sight display——
Yea, bring him nearer to your human heart.
For Art, which all embraces, all confines,
Subdues extremes, and brings them back to nature;
She looks at man, urged in the whirl of life;
And, lenient to his errors, she awards
His evil constellations half their blames.

trans. by L. Gower.

史論家的感興も混じてゐたといつても、それはあくまでも二の町の沙汰で、決してそれが爲に劇の本領を曲げやうとしたのではなかつた。本來小生の史劇に於ける態度は高尙優雅の名の底に繪卷物の活動に外ならぬものや時代風俗の物言ふ活人畫に類するものが歎ばれ、之れを活歷劇ともてはやし、甚しきに至つては蠟を嚙むやうな、活動に乏しい、情熱皆無の、形似一點張の、而も人情からいへば却つて嘘としか思はれぬものゝ一時行はれたのに反動したので、彼れを一種の典雅主義といふべくば、小生のは隱然近松とシエークスピヤとに胚胎した一種の新ロマンチシズムともいふべきものであつた。活歷主義の主張は、每に風敎に稗益すべきやう物せよ、即ち忠臣、孝子、義僕、英傑、節婦、貞女等を主人物とせよといふが一つ、成るべく史事實に忠なれ、詞も服裝も道具立も成るべく其の時代に忠なれ、といふが二つ、事件も人物も脚色も餘りに荒唐無稽ならしむる勿れ、扮裝、科介も成るべく自然に遠からざれといふ三つであつた。成るべくといふ語の解釋次第でこれらは必しも異存のあるまじきことなれど、實際の出來榮が甚だ妙でなかつたのみならず、おひ〳〵考證沙汰と風敎論がむづかしくなつて肝腎の

劇詩の本領が留守になり、道具や衣裳の穿鑿が屆く割合には時代精神や不易の人情はあがつたりの撫附仕事、よく出來たのさへも兎もすると平家や太平記を白(せりふ)で聽かされるやうな風のものであつたゆゑ活歴劇も一時行止りとなつてしまつた。小生はそれが甚だ氣に入らなかつたので、も少し火のある、熱のある、形似の上では不自然でもかまはぬ、情趣の上で自然な、いはゞ、も少し行儀のわるい、活動に富んだ、玄關前ばかりではない、寢間や臺所やを見せた、餘所行仕立てない、不斷着姿のまゝ、成るべくは綻びたまゝ、破れたまゝ、といふやうな史劇がほしいと思つた。近松では餘り荒唐、默阿彌では餘り淺俗、形式の上はエリザベス劇程度で、性格を描寫したり因緣果報の理をほのめかしたりする手心は是非ともシエークスピヤなどを理想としたものがほしいといふ大野心、隨つて及ばぬ鯉の瀧登りと嘲けられるは承知で、何事も鵜の眞似をする烏で、史材の取捨鹽梅までもほゞお手本と同格にゆかうと思ひだち、活歴家とは全く別に、成るべく歴史の裏を〳〵と覗つて、舞臺面も成るべく不行儀な、我れを忘れた、氣違ひめいた、ごつた返した、てんやわんやなのを主とし、詞づかひも成るべく情を痛切に表するに足るやうなのを選び、情の激した瞬間には貴賤もなく賢愚もないといふ點に重きを置いて綴つたのが此作と「桐一葉」、「牧の方」。そのうち此の作は最後の筆だけに大ぶ反動當時の熱が下り、多少自分の思はくも變りかけてゐたゆゑ、幾らか甚しいところが減じてゐれど「牧の方」時代は自信が強かつたのだけに一段藥がきゝすぎてゐたと思ふ。

かやうな次第ゆゑ、すべて小生の史劇は相應に歴史を調べて書いたものではあれど強ちそれに拘ふといふことはない。例へば大野道軒の如き、正史には治長の弟に道見又は道犬とあつて父にはかやうな人物はない。尤も「慶元記」には「大野道軒、治長の叔父、始の名美濃守官目なり」とあれど此の書も疑はしいことだらけ。然るを脚色上の都合より態と俗說のまゝに治長の父として用ひておいたなど、かやうなことは他にもある。又身分、年齡、服裝、言語なども第二、第三のことゝして等閑に附した故、歴史家や穿鑿家が見られたなら定めし快らず思はるゝことも多からう。

尙淀君の性格に關しては「太閤記」や「豐臣閨閤傳」などいふ俗書、小說に負ふ所もあれど、無論大部分は作者自らの想像で、所謂活歴流の考證や穿鑿に成つたものではなく、又敢てさういふ穿鑿をして見やうとも思はなかつたのである。尤もヒステリーだちの人物に作つて見やうといふ考へは「桐一葉」を著した折に三上博士を訪ひ、話の序に同君が示された曲直瀨玄朔の「醫學天正記」から多少のヒントを得たので、全然たる空想でもなかつたのであつたが、例の粗放から其の折それを寫しとりもせずおいたのを思ひだし、今度再び同君を煩して淀君に關する限りの寫しを手に入れることを得たゆゑ、そのまゝ左に掲げて、まだ見ぬ人々の參考に供する。玄朔は正親町天皇、後陽成天皇をも拜診しなゐらせ、幕府の侍醫となつては將軍秀忠に仕へ、寛永八年に齡八十歳で歿した當代の名國手、其の著いろ〳〵ある中で件の「天正記」は天正年間の著名な人物の臨床治療の實記であるから歴史上一種の證文たるの價値が

あるとのこと。

一、秀頼公御母（御年三十餘）御氣鬱滯不食眩暈快氣湯木香飲也（十月二日、慶長？）

一内大臣秀頼公御母（三十餘歳）氣鬱胸中痞塞而痛全不能食干時頭痛順氣湯（回の痞滿）養胃湯

以上二條の外尚一つ左の如く記したのがあるは、或は前のと重複か、別か、分らぬと三上君は附記せられた。

一秀頼公母公（三十餘）氣鬱心中痞塞疼全不食干時頭痛養胃湯木令守貴（各一錢）莎宿木洞白蔻朴婆（各七分）甘（二分）棗姜入十余貼之後同劑爲丸久服而瘥（五月一日）

「孤城落月」の淀君との關係は兎も角もとして甚だ面白い證文だと思ふ。なほ淀君や且元の性格については「都新聞」に載せておいたから參照せられたい。（卅九年四月）

「孤城落月」について

「桐一葉」以來の經驗で、作其物のあらも分り、俳優の藝風との調和もしつくりとはゆかぬといふことを感じてゐましたから、はじめ此作をと申込のあつた時分、一たんは斷らうとしたのでしたが、已に大阪を放たれたが、これは寧ろ同優へ氣の毒、無論あちらから申込んだことではあるが、又初手は小生も拒絶したことであつたが、後に考へ直して許してやつたので、何も先方がほしいまゝに小生の作を踏みにじつたのではない。許した理由はこんな作を彼れ是れとこだはるでもないといふだけの事、或は書いた當座なら、作意がどうのかうのと氣焔らしいものを吐いたかも知れない。

右の次第ゆゑ、初手は作意についても一切口をきくまい積りであつたが、俳優連がいつになく大眞面目らしいので、つい何時の間にか釣出され、尋に應じて役々の性根だけは說明しました。

今度は立者連は勿論、名代以下、下まはりの連中まで道具方、囃子かたまで、それ相應に氣を入れてしてゐるらしいのは感心、そのせいか色氣のない芝居が、ともかくもだれずに見てゐられたかと思ふ。役々の評は出來、不出來いろ〳〵だが、これは專門家の諸評にゆづつて、小生は今度の經驗で感じた丈の事を申さう。

初日前に、舞臺で、ともかくも道具を飾つて、たつた一日ながらも稽古をしたは、近ごろ珍らしく、よい例だと思ふ。しかし其稽古が衣裳、假髮は着けず、書拔もまだろく〳〵覺えずにやるのゆゑ、呼吸が合

はず、歩武が揃はず、中には徒の素讀同樣な手合も多かつたゆゑ、素人目には眞劍の手心が分りかね、隨つて「これなら上等」と思つたのも、初日になつて見ると、大ぶ變つて、或は藝の調子が強かつたり、低かつたり、技の色彩が濃くなつたり、淡くなつたり、ほめたのが藥になつたり、毒になつたり、それといふのも畢竟は此方が素人ゆゑ、こちらとあちらと語の意味の解釋が別々、譬へば獨學の洋語で西洋人と應對するやうなもの、ともすると聾話になり易かつた。で頭がちがふばかりでなく、言葉が通ぜぬといふのも、今の時代に於ける作者と役者との間の一大屏障だとさとつた。

今の役者を分らぬ〳〵といふ人もあれど、それは「分らぬ」といふ語の意味次第、小生は彼等は餘り分り、が早過ぎると思ふ、說の片ぱしを聽いて、もう已に合點したらしい樣子故、安心してゐると、存外徹底してゐないのみか、思ひ違へてゐることもある。一字一句を會得せねば人物の性格は分らず、全篇を讀通さねば人物相互の關係は分らぬものといふとに氣がついてゐない、書拔以外の筋を初日までに心得てゐたもの、芝、猿、高等以外に何人あつたか覺束ないといふ程ゆゑ、白廻しに味ひが乏しく、仕草も活きない。況んや持役以外の性格などは、殆ど一人も研究してはゐないといふ有樣。要するに怜悧すぎて早呑込をするのが今の優人の通弊。しんみりと質問しない。衣裳、持物など(これは作者は不得手の事)の質問は細いが、肝心要の性格といふことは甚だ大まかに考へてゐる、此の點の注意が比較的に綿密で一字一句の白廻しに意を注いだは猿之助であつて、芝翫も同じく苦心したらしいが、何分に

も調子が自由に變らぬ人ゆゑか、その割合に成功しなかつたを氣の毒に感じた。

白のめりはりにも、思入や科介にも寫實分子と舊歌舞伎分子とがまだどうも調和せぬのを今更のやうに感じた、例へば近來は强ひて歌舞伎ばなれ、義太夫ばなれをしやうと思つてか語意にはかまはず妙に早目に白を廻す俳優もある。これに目下東京、大阪の二市にわたつて凡そ二流あるかと思ふ、一は團洲式の活歷張に自分流をまじへたもの、他は團洲式をも親しくは知らぬらしき新式。前者は團洲の假聲に類して分別くさく、後者は壯士芝居の史劇めく嫌ひがある、例へば歌舞伎式に泣落すべきところをも泣上げる、そこは泣落したらといへば、つい又純乎たる義太夫式に逆戻りする氣味、思ふに、將來は作者も幾分かは役者を兼ねて「こんな風に」と一々やつて見せるやうでなくては新作の成功は覺束ないと思ふ。素人が生中に指圖をすれば役者を迷はせるやうなものだと思つた。

詰るところ、新作、とりわけ時代物を演ずるは、古いものをしなれた舊俳優にとつては七分がたの不利である。新作には彼の歷代の名優が經營慘憺(苦心の解釋)の結果たるに外ならぬ「型」といふものもなければ、背景なり、鳴物なり、道具、衣裳、其他一切の選擇、段取も定まつてをらぬ、恰も新式の折衷畫や折衷音樂と同樣、彼れは少くも百五六十年來の寂のついた器、これは昨今の發明品、專賣特許さへ得てをらぬ、當分の間儀式の場所へ持出しにくいのは其筈の事である。

俳優は一種の美術家には相違なけれど、要するに第二級に位するもの、脚本は根幹、俳優は枝葉花實、仕

活すといふ點にこそ獨創力はあれ、その他は脚本次第、作意次第、作がわるくて性格に區別もなく、作意に深みもなからうものなら、いかな名優も工夫のしやうがない道理。 これを思へば目下第一の急務は新作の奬勵である。 第二は新作に對する深切な研究と念入りの舞臺稽古の奬勵であらう。 新作はすくなくとも一箇月位の研究を積んでから公にして貰ひたいものだ。 ワグテル物は純然たる樂劇ゆゑ只の芝居とは一樣にはいへぬものゝ、「ツリスタン」であつたか、新に上場するとて、たしか優人が六十日ばかりも稽古して見て、どうも不結果ゆゑ中止し、其翌年改めて他所で稽古の上興行したことがあつたと記憶する。 その六分の一の十日でも、或は一週間でもよい、試演してから公にしてもらひたい。

いや初日前一兩度でもよい、しんみりと稽古を行ひ、あらゆる劇通諸氏を招き、其評を聽き、その指圖を乞ひ、參照し取捨した上で、更に一日道具を飾り、すべて本式通にして試演し、更に評を聽き、中二三日を置いてから公開して貰ひたい。 目下我が劇場には舞臺主幹がないゆゑ、舞臺面全體の取締がない、調和がつかぬ、小生は劇通諸氏が斯道のために一大會を組織して顧問になられたらばと思ふ。 若葉會雅劇會も結構だが、右やうな會がほしいではないか。 さうでもせずば當分新作は出まいと思ふ。 今のやうでは新作は多く不評ゆゑ、役者も尻込みし、作者もさしひかへ、いつまでたつても同じ居場所にどう〳〵めぐりといふやうなことになりはせぬかと思ふ。

但しこれは將來の新作に對する理想をいふので、小生の作に對する今度の出來榮は、たつた一日の稽古

の結果としてはむしろ上出來、深い研究なしてあれほどにしてゐるのは、流石に黑人だけのことはあると思ふ。（三十九年四月）

明治座の「マーチャント、オフ、ヴェニス」

お需だから、又の興行の時の參考ともならうから、私しは只今度の興行で或は間違つてゐやうかと思はれる廉々ばかりを申して見ませう。 今度のを到底原作に照したり彼方の役者のしきたりなどに比べて是いの非いのと言ふのは無理であらうと思ふから。

先づ臺帳の方からいはうならば、流石に原作に目を通した春曙君が飜譯せられたゞけに廉々の意味には間違ひはないが、總體が譯といふよりは釋に近く、いはゞ間のびの姿です。 二つには語尾が兎角同じ結びて止るゆゑ（例へば「がす」といふ語が行列するなど）言ひまはしにくく、自然とだれる氣味。 原作者は徒の舞臺の穴ふさげに挿入した句までが重々と譯され、それをまた俳優が思入澤山で一語々々念入に言ひまはしたゆゑ、舞臺に却て穴があき、ところ〳〵原作者に對しては何だか氣の毒なやうな氣

がしました。（ヂリッサが登場して手持不沙汰に見えたのが其の一例。）ポオシャが洋書をひねくらねばならぬやうになつたなどが其の第二例である。総體に譯文は今一しめひきしめねば誰れが演ずるにしても演じにくからうと思ふ。

次には着附が氣に入らない。原作者在世のころのバルバッヂ以來ドッゲット、マックリン、クック、キーン（エドモンド）、マクリディ、ブルック、ブース親子、キーン（チャールス）を經て今のアヽヰングに至るまで多少シャイロックの服裝には變遷はあつたものゝ、今度のゝやうなのは新發明過ぎて、チャリ子の道化形ではないかと思はせるなぞは罪が深い。畫を見たつてわかりさうなものだ。例外もあれど、先づシャイロックは多少長い鬚髯で、椀をふせた形の帽をかぶつて、長袖の長上被を被て、其の裾はほと〳〵地に觸れ、杖をも携へてゐるのが通例。（總じて老人は長上被を被たものです。）今度のシャイロックは矢口の頓兵衛を鬼瓦銅八でゆからといふハキチガへで、位取がちがつてゐると思ふ。着附がわるいから、本來が貴族的（アリストクラチック）といふ自尊傲岸な根性が少しも見えない。シャイロックすらさうだから、其の他は大抵大間ちがひ。まだしもポオシャは似つこらしく見えてゐました。（尤も怪しげな帽子に花飾がついてゐるなぞは呆れた。）アントニオ、バッサニオなどは粗末すぎて笑止千萬、これが當時の海上王ヴェニスの一豪商、全世界を相手に貿易をする西洋三菱とは冗談にも受取れない。バッサニオとてもさうで、大富豪の姫君の戀婿となつた貴公子、幾千萬圓を風流驕奢に浪費した上流のつゝこ

ゝばゝしとは見えない。思ふにあの着附では數等立まさつた名優が演じても嘸しにくいことでありませう。

大道具は是非に及ばぬとしても、せめて小道具なりとも今少しどうか工夫が出來なかつたものか。とりわけ公爵やポオシャの前にするゑたデスクには愛相が盡きた。あんな粗末なものを用ふる位ならボールの紙で切ぬいて胡粉でも塗つたはうがどうにかふさはしく出來たらうに、さて〳〵智惠の餘つたことだぞ。シャイロックが衣嚢から出す秤が東洋式の代物であるなぞは餘りやつてつけすぎるではないか。

さて藝の上では腹は間違ひながらもヤハリ川上が一番見られました。併しあくまでも下卑た高利貸のシャイロックで、タカヽ半道化に演じたといふ言傳（いつたへ）のドッゲット式のシャイロックで、彼の有名なマックリンや、エドモンドキーンや、ブースや、今のアヽヰングなぞの型とは似ても似つかぬものであります。マックリンなぞは眞に中興のシャイロックで、既にポープも激賞して、「是れこそは眞個沙翁が畫けるシャイロック」と詠じた位。其の苦々しげな澁面の皺は恰（まる）て索をつくねたやうに見えて、見るからが執念深く殘忍氣であつたと書殘されてある。古くは舞鶴屋、今ならば先づ團藏式なので、其の他キーン、アヽヰングとも名高い成功、ふたりとも貫目とスゴミとを持たせた演じかたであつたと劇通の評言に見えてゐる。又は彼のエドヰン、ブースのシャイロック、これもまた大評判の當り役、就中

裁判廷の場のゆきかたはアヽヰングともちがつて、面白いところがあつたらしい。それからイヤ見たとも無いくせに、受賣で比較沙汰を試みても詰らぬからよさう。あれだけにやつてのけた川上の度胸をほめたはうが當然てありませう。それから證文を引裂くところ、三木君もほめられたが、成程あそこは流石にようしてゐました。尤もブースの型ではあそこてボオシャが證書を投げ與へるとそれを其の儘シャイロックが憤然としてふみにじり、見もかへらずして立去らうとするトタンにボオシャが「俟て猶太人云々」と呼止めて、更に法律の明文によつて本裁判に移る——、爰に始めてシャイロックが愕然として驚き且つ怖れるといふ段取てあつたといふ。

よろめき〳〵の引込はアヽヰングの直傳のやうに傳聞したが、さる學者の劇評て見たところては、アヽヰングのはまだ〳〵ずつと念入て、グラシャノに對しての思入なども色々趣の深いシグサがあつたやうに想像される。併しいづれも自身て見たのてはないから、さうでないと言はれゝばそれまてのことです。

最も目立つて惡かつたのはアントニオです。シャイロックに對してこそ其の以前稍酷薄の振舞をもしたれ、身分はヴェニスの大富豪、任俠て廉直て飽くまて士君子と稱して耻かしからぬ剛毅の大商人、イハヾ一段身分の高い松前屋五郎兵衛ともいふべき肌合をどう勘違へしてか、ひどくギスついた覺悟のわるい、女々しい人物にしてのけた藤澤の氣がわからぬ(尤も前幕の筋を知らぬのも原因てせうが)。

アントニオはとうに死を決してゐるので、法廷てあのやうな見苦るしい振舞をしやう筈ないと思ふ。セリフまはしなども徐かにおちついて惡びれぬ覺悟を示して貰ひたかつた。バッサニオも歴とした貴公子、もすこし溫和としたうちに義憤をも痛心の樣をも見せて、譬へば骨組を武士にして皮肉はつゝころばしの若旦那でいつてもらひたかつた。

ボオシャのせりふまはしは飜譯者直傳の由、ところどころよかつた。兎も角もあの長ぜりふを暗記してスラ〳〵と述べたは感心です。只あんまりスラ〳〵すぎて仁慈の講釋などが白湯を飲むやうになつたは是非がない。しぐさのうちて面白からず思つたは机の上の洋書をひねくつたことてす。此の場に臨んで民法第何條の取調てもあるまいに、型のあることか知らねど妙てない。これてはどうや ら海老茶式部の試驗官と見立てられる姿になつた。シャイロックがアントニオを捉へて將に刃をあてんとする瞬間にキョト〳〵と洋書を見てゐるなどは彌々おもしろくない。爰は間一髪といふところだ、尤もこれは川上のシャイロックがわるく爰て芝居をして、右から突かうか左から刺さうかといふやうな所謂緞帳式の奇怪なシグサに間を延ばしたので、やむを得ずテレかくしに本を見た譯てもあらうが。いづれにもせよシャイロックもシャイロック、ボオシャもボオシャと言へば、走りかゝつてはしたなくシャイロックを押のけようと騒ぐバッサニオもバッサニオ、刺股のやうなものて強ひてシャイロックを押隔てる役人も役人、ヴェニスの法廷は大ぶ威令の行はれぬ亂雜なものてあつたと見えた。

要するにいづれも人物の言語舉動が野卑下劣で、其の事、其の人、其の趣にはまりかねました。まだ申すことはいくらもあるが、ほのかに聞けば、さる方面のさる有志家連が川上の向うを張つてか遠からぬうちに同じく此の劇を演じ試みやうかといふ目論見があると承つたから、或は改めて卑見を述べる機會があらうも圖りがたいと思ふから、今度はマアこんなこと御免を蒙つておきませう。（三十四年七月）

明治座の「オセロ」に就いて

いかに物がシェークスピヤだからとて、明治座のこんどの劇を直に原作に引きあてゝ批評したり、英米佛獨のシェークスピヤ役者の慣例や型に照らしあはせての評判三昧は、例へば昨今の新體詩などを評するにミルトンやシルレルを引合に出す格で餘り大げふかと思ふ。しかし折角のおたづねを無下にするでもないから、ホンのおもひ浮んだことだけ言つて見ませう。

六七年以前までは早稲田の學校でシェークスピヤの作を講じてゐましたから、大ぶ逸話やら傳説やら、つまらぬ事まで記えてゐましたつけが、今は大概忘れてしまひました。

自體今度のは時代物を世話も世話、生世話に直した格ゆゑ、頭で原作の雄大な質は消えてしまつた、是れも是非がないが、それが爲あぶなくコメデーに流れさうになつてゐる。原作のまゝでやつてすら兎角優人の技倆が足らぬと、惡落になりかねないのが此の作のむつかしい所て、名優キーンでもマクリデーでも彼の佛のフェシテルでも十分の成効ではなかつた、イヤむしろフェシテルの如きは失敗、マクリデーの如きも凡々、キーンだけが八分の成効、とは古劇通の書殘した所に明かである。ブース（子）もアービングも十二分ではなかつたらしい。「ハムレット」が「忠臣藏」なら「オセロ」は近松の世話物であらうか、ハムレットは下手がやつても不思議に見物の同情を引くが、オセロは餘ほどの腕さゝがやつても嫉妬煩悶の邊があぶなく惡落に流れるか、さなくも同感は得にくいらしい、そのむづかしい奴に眞先に取つてかゝつた川上の意氣は例の遠州灘乘切式とでもいはうか。

オセロの演じにくいに比べれば、イヤゴはむづかしいながらも儲かる所の多い役です。キーンもブース（親）も大分當てたらしい。其の性格をいふと、イヤゴは廿世紀に所謂唯物主義者で、神を信ぜぬは勿論、道義の命令を芋の尾ほどにも思つてゐない、言はゞ一種の本能滿足論者で實行者で、近時流行のニイチェヤニズムの躬踐者だが、ニイチェ流とちがふ所は、たゞ口先ばかりでないのと僞飾を行ふとである。即ち其の親友に對しての外は必しも此の主義を公言しない、或程度までは公言し、或程度まで

は僞飾する。 尠くともオセロだけに對しては道義を尊崇するやうな顏附をしてゐる。

イヤゴの信ずる所によると、人間の最も重んずべきは意志(ウイル)である、ニイチェの所謂意志力(ルベツウー)です。 次には智惠だ、天命も道德もあつたものでない、智と意とによつて運命を作りだすのが人間の本分、隨つて最も賤しむべき情に溺るゝことだ、可愛いの、氣の毒だのと女々しい情慾の奴となるのが人間の大弱點云々といふ此の邊の議論は彼のノルダウが『墮落論』の結論に半(なかば)諷刺氣味をまじへて論じてゐる所そつくりで、まことに面白い。 いつの間にか話が横へ外(そ)れはじめたが、ツマリ此の人物は決して並の惡漢(ヒレーン)ではない、女に惚れたり、人をそねんだり、錢をほしがつたり、虛榮を求めたり、その邊の動機で惡事をなす輩(やから)とは格ちがひで、言はゞ同胞を弄び、悉く之れを自身が惡戲の餌食にするのが面白いといふやうな氣で惡事を働くのかとも見える。 即ち人面の惡魔で、さるべき動機がなくても惡事をしかねぬ惡漢、外から見ると何の爲めに惡事を爲すか、解しがたい。 ゲーテの「ファウスト」の惡魔は或は此れを標本にしたのではあるまいか。 ゲーテだから決して其儘には用ひない、無論奪胎換骨した上に精げが掛けてはあるが。 斯んな惡漢はシェークスピヤの前にも後にも無いので、之れを「理想的(アルデ)の惡漢(ヒレーン)」と評したものもある。 さて此のイヤゴーは氣質(テムペラメント)の上から頗る平均が取れて居る人物、即ち多血質で、神經質で、膽汁質で、當意即妙の頓才も廻はれば、辯舌もよく、滑稽もあり、遠く慮り、深く考へる事も出來れば果斷敢行もなし得る、換言すれば直覺的にも、分析的にも、腦が働く、常識にも富み膽力も据わつて居る、詩人的で、哲學者的で、又實際家的であるが、高田のは神經質的膽汁質的で、(高田の惡漢はいつでも此型一點張だ)多智圓轉で無く、原作の如く洒脫快活で無い。 原作では、カシオに酒を飲ます處で、流行(はやり)唄を歌ふ、高田は只樸直を裝つて居る惡漢であるが原作の意とはちがふ。 極洒脫磊落な軍人肌で、高田の樣にあゝ粘々(ねんばり〳〵)では無い、滑稽突梯口を衝いて出づといふ鹽梅で、言ふ言葉に毒はあれど腹には毒がなさゝうなと思はせるがイヤゴの技倆、即ち言動共に磊落だから皆が欺されるのである。 ッケ〳〵と嘲弄し、ッケ〳〵と口外し、遠慮斟酌をせぬげに見せつけてゐるのがイヤゴの慣手段、例へば彼れは女は男の玩弄(ぐもちや)だ、と明言して居るが、其れをデスデモナの前でも憚はずに言ふ、誰の前でも磊落な言動を變へない。 今度のには除いてゐるが彼のオセロの上陸するを待つ間に、デスデモナを慰めがてらに女の淑慝を述立てる所などを見るとこの理がわかる、イヤゴが快活洒脫磊落といふことは古今の名優の型が證明してゐる。 尤も優人〳〵によつて少しづゝ濃淡のあることは勿論だが、之を要するに外題は「オセロ」と言つても、イヤゴが主なるワキで、此の劇からイヤゴを除き去るは、猶ほ「平家物語」から重盛を除くやうなものです。

ブラバンショーも少し違ふ。 以太利は熱い國で、日本で言へば薩摩ッ坊だ、老人ではあるが直ぐに怒るといふ所が無くては成らぬ。 オセロにあつて喧嘩になる塲も、原作ではブラバンショーが家來を連れて追手に出て途中でオセロの一連に遇ふ、自分が直ぐに劍を拔いて決鬪を望むのでは無い、家來が先

づ闘ふ。（これにも仔細があることです）。而してイヤゴはオセロがたて、態とロデリゴに斬つて蒐るなどいふゴマカシがある。さて兩方斬合ふ途端、オセロが割つて入つて大喝する、川上のやうに相手の手を制へるのでは無い、だから人物が大きく見える、而して此處では一喝すれば千軍靡れ伏すといふ程の勇將が、後にはたつた一婦人の爲めに、小くなつて煩悶し歎き騒ぐといふ、此の前後の對照が、尤も微妙なのだと思ふ。

其れから、デスデモナの出が引立たぬ。議員列座で殆ど裁判庭的の大事の場所でオセロとブラバンショーの對決になる、水掛論で曲直明かならず、而してオセロは絶對絶命で、論より證人、デスデモナを呼んで貰ひたいといふ。自分が訥辯で、巧く言開けないから、デスデモナを呼ぶので、呼びに行つて居る跡で物語になる、物語が了る途端に姫が場に登る。總理大臣は原作で公爵だが、今度の伊藤侯的通人でない、むしろ嚴格に言渡す。オセロが絶對絶命になると思ふから、デスデモナは常ならば斯んな席へ出れば羞ぢ怖れて口ごもるべきだが、今は情人の一大事、羞も怖れも斟酌する暇がないので雄辯になる、即ち情の雄辯——貞奴のは分別がありすぎる。

オセロの容貌に關しては黒奴だといふ舊來の說と只アフリカ未開族の血統即ちモーリタニヤの國人たるに過ぎぬので、所謂クロンボではないから、今度の川上位の赤ぐろい顏色でよろしいといふ說と二派ある。シェークスピヤはムーアとニグロの區別を明に知つてゐなかつたかも知れず、又其の當時の趣

向は多分ニグロでやる點にあつたらしいが、何もこんなことまで原作に拘泥するに及ばぬといふので、キーンは英斷で赤ぐろ式をはじめ、コールリッヂは之れを贊成したが、今尙議論は一定せぬ。尤もロデリゴーなどの白の內に色が黒いとか、唇が厚いとかいふ事が言はせてあるが、其れは罵詈の句で、明らかに黒奴と言つてある所はない。ムール人中の王統、王統と言つて大きい酋長ぐらゐかも知れぬが兎に角、一族の長たる血統を承けて、賤い人物ではない。先輩の所謂開化したる蠻人（シビライズド、バアバリヤン）即ち威嚴のある、確に團十郎張の怒れば獅子の如く殘忍な事をなしかねぬが、併し非常に氣高い純潔な心を有つて、人の讒言などを輕々しく信ずるやうな男では無い、が、イヤゴの理想的惡漢の辯舌でツイおとしいれられるので、だから嫉妬の悲劇では無い、全く奸計の犧牲となつたので、何んな人でも原作の如き場合にはオセロと同じき運命を取るより他は無いといふのが眼目であらう。それを燒餅深い男と思つて演ては間違ふ。平生は只ノタリ〳〵としてむしろ柔和に見える大蛇が、一旦獵夫の毒箭にかゝつて苦痛の骨に徹るをおぼえはじむるに至つて七顚八倒の惱亂をはじめる、其のありさまなどに思ひあはせて演じて當然であらうと思ふ。

其れから、デスデモナが夫婦別ありすぎて行儀正しい、といふよりは斟酌分別がありすぎて、冷かな明治式。つまり元が野合だから、ことに此の女はシェークスピヤが女性中でも情的と特稱される組の女だから、もつと〳〵アドケなく多少「よくつてよ式」「だわねえ式」を加味しなくてはいけぬ。要する

に言動に無邪氣が見えねばならぬ。前の議席でオセロを辯護した雄辯は全く情がさせた辯舌で、其の後は狐がおちた只の嬢さまといふ所が身上だのに、貞奴はあんまりサラ〳〵として油氣がうすい。ツマリもつと甘へる所が無くてはならないのに、今度のは男尊女卑の舊日本式で、あの關係鹽梅では姦通と證があがつた以上は重ねておいて眞二つの舊制裁を行はねば筋徒があふまい、尠くとも打殺しても爲なければ成らないやうに見える。

カッシオはまあ彼んなものでせう、扮粧や詞にはいかさはしい所も少々あるが。

エミリヤも分別がつきすぎて居る。イヤゴの白に「汝は、外へ出れば繪に描いたやう、客の前へ行けば鈴のやうな聲をする、併し臺所では野猫だ、荒廻る、家政をやらせると懶け者が、床へ入つてはじや〳〵馬だ云々」無論これは惡口だが、どちらかといへば餘り機轉のきく女ではない。今度は役がよくなつてゐる。九女八は利口過ぎて、ハンケチを渡しさうに無い。

ロデリゴーは服部式のハイカラではないが、あくまでもイヤゴの餌になる好色の、利發でない男で、併しデスデモナを慕ふ心は全く切なので、惡人ではない。情慾の奴となつた、めに、イヤゴにあざむかれ、次第に罪惡を犯さんとするに至るのである。但し今度之れを飜案して服部式にしたのはむしろ作者役者の働き、咎むるには及ばないと思ふ。

私は末の幕三場ばかり殘して歸つたから、お話は此の邊で切上げます。（三十六年三月）

西洋の八人藝

西洋に希臘、羅馬の昔から腹語術（腹の中で物を言ふ術）といつて、少しも唇を動さないで種々の假聲を使ふ法がある、恐らく今も尚あちこちで行はれてゐることでありませう。此の法で物を言ふと、其の聲が其の人の口から出るとは思はれず、先づ其の人の腹の底から出るかのやうに聞える。或時は尚く、或時は遠く、或は屋根裏からのやうに、或は穴倉の底からのやうに、或は手に持つてゐる偶人が口をきいたかのやう、或は外國語を使ふとか、歌でも歌ふとかすれば、平生は其の心得の更に無い傍に立つてゐる男又は女の口から出るかの如く聞える。未開時代には此の法を行ふものを、或は魔術使ひと思ひ、或は何等かの精靈やうのものに憑られてゐるものと信じ、深く怖れ、羅馬人などは之れを「腹占」と名づけて未來の吉凶を卜する一法としたといふ。希臘時代にやかましかつた神託といふものも、多くは神官が此の法を行つて神の告らしくもてなしたものであらうと思ふ。普通精靈が憑いたと稱する場合の「腹語」は頗る間延びな低い調子で呻吟く樣な聲で言ふものらしい。それが老練になると何の八人

樣な聲でも自由自在に出し得るのである。其の秘訣については多分胃腑をどうかいふ鹽梅に作用すのだらうといふ俗說もあつたが、今はそれは單に深く長く息を吸つておいて即ち十分に息を貯へておいて、さて巧みに咽喉と上顎とを作用かせて徐ろに物を言ふに外ならぬもので、別段不思議な術があるではなく、全く熟練の結果だといふことが分つた。老練な腹語師は一時に多數の人の假聲を使ひわける。無論聽衆の面前に立つてゐて行ふのであるから(幸堂君の話に因んで言ふと)登山式でなくて壽鶴齋式である。

「八犬傳」に匹田基藤の父の某といふ剛盜の首領が、多年兇惡無慚の振舞をなし、孕婦の肚を裂いて肚の子を取り出し之れを食ふなどいふ大惡業をした報いで、或時都見物に出てたる折、年來附き纏うてゐた怨靈が都大路の眞中で彼れが肚の裏から聲を發し、高聲に其の舊惡を罵り立てたので、忽ち巡邏の役人に見咎められ、捕へられて誅に伏すといふ一段がある。思ふに、あれもまた一種の腹語であらう。病理學上の心理から見て此のたぐひのことがあり得るものらしい。所謂幻想作用で、平生から神經にかけてゐると、ふと其の物に憑られたやうに感じ、自分では言ふまい〳〵と思つてゐることを却つて我知らず口にして驚き訝ることがある、即ち自分では知らないでゐて腹語術を行ふので、そして自分迄が他人の聲を聞いたかのやうに思ふのである。さういふ場合には怨靈などに憑かれたと思ふのも道理である。多分は馬琴は何かそのたぐひの實例を讀んだか聞いたかしてゐて、それであそこへ利用したものであらう。「八犬傳」以外の小說の隨筆かて別に讀んだことがあつたやうに思ふ。

この腹語術さへ出來たならば器用な人ならば所謂八人藝位は何でもないとであらう、小生の讀んだ書で比較的に此の術のことがくはしく書いてあつたのは英國のライシャム座の歷史。ライシャム座といふのは例のアーヰングが沙翁劇をやつてから有名な座で、先づ守田勘彌時代の新富座に比すべきもの。しかし何分にも自分で直接に聽いたのでないのみか、詳いといつても徒の大要が書いてあるばかりのを取次ぐのだから、到底面白くはないものだが、約束だから雜と話しませう。

それは、今から八九十年も前のこと、ライシャム座がまだ大寄座同樣であつた時分、チャールス、マシウスといふ男が出勤して、兎に角英國では空前ともいふべき奇な藝を演じた。それが恰も我國で謂ふ落語兼帶の八人藝、大層な人氣で、愛蘭土の詩人、それ、バイロンの信友のムーアも、米國の文人ワシントン、アーヰングなども喜んで見物したといふこと。番數も多く藝道は種々雜多なれど、最も喝采を博したのは「乘合馬車」といふのと「腹語術の實驗」とも名づくべきものであつた。

幕が開くと舞臺面は應接の間で、道具といつては小さい卓子が一脚あるばかり、萠黃色の卓子掛が掛けてあつて、其の左右の端にランプが一基づゝ、それから椅子が一脚。こゝへ普通の夜會へても出掛けたといふやうな服裝で當の演藝者たるチャールス、マシウスが登壇し、先づ普通の挨拶をする、種々滑稽澤山の演說をする。やがてがたくり馬車の話に移つて、同じく滑稽的に乘物の種類にいろ〳〵ある

ことをいひ、すべて此の種の乘物はぬらくらものを運搬するための道具て毛蟲や芋蟲や蝸牛などゝ餘り離れた中でもないなどいふ、がたくり馬車の諷刺かとも思はれる長枕があつて、さて「或時吾等乘合馬車に乘込んで云々の地へ參つたところ」といふ話になり、乘合の男女の事に移り、其の人々の身分、職業、人柄特質等を批評し、說明し、いよ〳〵本藝にはいるのであつたが、登山や壽鶴齋とは違つて人物中に女性も一人二人はまじつてゐる。併しやつぱり演りにくいと見えて若い女はいれてない。

さて此の乘合中の立者は、第一が氣むづかしい批評家、第二が饒舌の佛蘭西人、第三が舌たらずのやうな口のきゝかたをする老女、これがまた暫くも默つてはをられぬといふ冗言ずきで更に要領を得ぬ囈語をしつきりなしにしやべる。さてだん〳〵馬車が進むにつれて佛蘭西人は彌〻敵手ほしやで、氣むづかしやの批評家へ話をしかけるが、これがまた話嫌ひで、中々敵手にならぬのを、いろ〳〵にして誘ひ出し、三人の話がおひ〳〵興に入りかける途端、俄に馬車に破損所が出來てハイゲートといふ所で暫時停車といふことになる。（此の邊は八人藝といふよりも寧ろ我が仕方話式で話したものかとも思はれる）。こゝて屠丁が一枚加はる。この男が屠丁の癖に文學好で、とりわけ英國の歷史が得意で、過去の大事件や英雄豪傑の逸話などを自慢さうにならべたてるところ、それが悉く大まちがひで、秀吉と義經とが同時代になつたり、六代御前と靜御前とが姉妹になつたり間ちがひだらけ。そのうちに破損所の修繕が濟む。馬車はまた動き出す。佛蘭西人と批評家との間に演劇論や脚本の評がはじまる。

佛蘭西人は脚本は是非有韻有平仄の文章即ち韻文でなうてはならぬもの、英國の韻文にも折々はすばらしいのがあると、よせばよいに知つたかぶりに古い歌を朗吟する、ところがそれがまた悉く間ちがひだらけといふやうな滑稽。大がい此のるゐ、無論此の間に三人四人の談話や批評が錯綜になるのであるらしい。此の邊も八人藝といふよりは我が落語式に近くはなかつたかと思ふ。

此の一くさりが第一部で、それが濟むと間に唱歌か何かゞあつて、第二部に移ると、腹語術がはじまる。これが全くの八人藝だ。幕が開くとテーブルがあり寢臺があつて、そこに一人の紳士が寢てゐるこゝろ。（無論、誰れもゐないので）。カルテンか何かで內の樣子も見えねば臥てゐる人の姿も見えない。その人は久しく憂鬱病にかゝつて今にも死ぬやうに思つてゐるので、折々囈語をいふとなどもあるといふ仕組、こゝへマシウスが此の紳士に使はれる侍僕に扮して登場すると、何處ともなく幼兒の聲が聞えるので、あちこちを見廻し、とゞテーブルの下の箱から大きな偶人の童子の服裝をさせたのを取出し、腹を立つた思入で「何で貴樣はこんなとこへ這入つてゐやあがるのだ」といふと、すぐに童子の聲で如何にも其の偶人の口から出たやうな聲で「だつてわたい、をぢさんが八人藝をするのが見たかつたから箱へはいつてゐたの」（箱とは猶桝といふが如し、見物席のこと也）といふのが滑稽の序開て、此の子供とマシウスとの間に道外問答がつゞく、そのうちに病人が目を醒し、床の中から苦しさうな聲で「物がたべたい、早う食事にしてくれろ」とせきたてる。そこへ女中頭のスロップこいふ女、執事のコオク

といふ男などが、ごた〳〵と這入つて來て、都合五人になり、怒るやら呻吟くやら笑ふやらといふ段取らしい、とゞマシウスが右の四人とかはる〴〵組合つて歌を唱ふのが幕。

尙此外に裁判所に於ける滑稽、家のことが原で訴訟になり、原告、被告、判事、檢事、辯護人などが出て、これも滑稽百出、それから新聞紙の諷刺（これは一人演說らしい）などいろ〳〵あつて、最後に蘇格蘭土の老女が何の意味もなき、たはいもなき長話をする一段あり、それと同時にありあふショールと帽子をとりて戴くと忽然として、こゝに示すが如き老女となるが一段落、即ち百面相も兼帶。まだ此の外にもいろ〳〵あれど、要するにマシウスは口舌の上の八人藝ばかりでなく假裝も頗る巧みであつたと見え其の後一千八百二十二年に演じた時には八人藝を扮裝の上でも演じてゐる、そのあらましは前の畫で分る、いづれもマシウスが扮してゐるのである。此のマシウスの妻及び一子ジェームス、マシウスは一時多少の名聲を博した俳優であつた。（三十九年七月圖は省く）

故綠雨君を追懷す

明治はまだやつと三十七年にしかなりませんが、文學上の曆ではもう既に三度ほど期を改めてゐるかと思はれるのですが、故齋藤綠雨君は其の恰も第一期、即ち同君が江東みどりと名宣つてゐた時分、今からほゞ二十年程も前かたからの知合で、先づは私が最も長く親しく交際つた文學上の友人の一人だといつて差閊ありません。君は作家、修辭家、批評家の三資格を具へて、而も多少著く自家の特質を發揮し得た人で、明治文學第一期から第二期へかけての名物男です。さて其の本領は（尤も、怜悧な、機敏な人であつたから、晩年は多少新しい感想をも取入れて、筆つきもおひ〳〵新しみを加へて來たやうであつたが、尙其の本領は）どちらかといへば文化文政脈で、英佛でいふ十八世紀的で、一言以て蔽へば江戸式作家の殿の一人といふべきでありました。それは君が明かに又は暗に師事し若しくは私淑してゐた人や著述を調べたならすぐに分らうと思ひます。即ち君をして狹斜通、會席通、浮世通たらしむる端を開いたのは小西義敬一流の男女の粹客で、濃艶なる修辭家たらしめたのは君が愛讀の詩集、歌集、俗謠、淨瑠璃のたぐひ、又君をして諷刺家、嘲罵家、秀句家たらしむる礎を築いたのは假名垣魯文、其角堂永機、南新二、三馬、一九、京傳（？）などであつたらうと思はれます。

明治十七八年から二十年頃までの君は、曲亭式の雅俗折衷全盛時代のことゝて、四六駢儷張大信仰で、詩句、歌詞、俳語なひまぜの、それは〳〵濃厚な、七五調まがひの、當時の繪入新聞には先づ目新しい、筋は甚だ單純な文は思ひ切つて華やかな、短い人情話などを綴つて居たものであつたが、「讀賣新聞」など

を舞臺にして正直、正直、正太夫と名宣つた前後から(二十三四年頃)突然一變して諷刺家の本事を現し、一種特色ある批評家となり、前半生を知らぬ人達には、或は怖れられ、或は買ひかぶられ、或は甚しく憎まれ種々の意味に於て誤解されたり、もてはやされたりしてゐました。併し本來を知つて居るものから見れば、何も驚くべき變化があつたのではないので、只批評家、諷刺家といふ新資格を發揮したのと、その資格に必要な一文體を工夫しいだしたといふまでゝあつた。

前にも申した通り、君の文士としての資格は三つあるので、其の一は作家です、其の最傑作は「かくれんぼ」で、其の最も苦心して筆を着け且つ頗る綴り惱んだ作でそして其の最も成熟した感想と筆致とか現れてゐるのが「門三味線」、夫から比較的に樂に書いて最も當世向に纏つてゐるのが、「油地獄」、其の他はとりたてゝ言ふ程てない。 蓋し作家としては、文化文政式の稗史流に廣く淺くか、然らざれば人物を若旦那、雛妓、小娘等に限り、舞臺を江戸の町家、東京の狹斜と狹く限つて、細かく且つ稍〻深く寫すか、此の二樣に過ぎなかつたのです。 されば其の傑作三種は詰る所同脈、同工で、隨つて「かくれんぼ」の簡淨の妙は他の二作を壓して餘りあるやうに思ひます。 さて第二の資格は修辭家(文章家)ですが其の特質は濃艶、精緻、纖巧、時としては絢爛から脫化した淸麗、いはゞ、艶消し、薫しの趣味に似たる瀟洒、華文はどことなく俗曲俗謠の風韵を傳へ、論文、批評文は諷諧に長じて才氣の溢るゝばかりなるにも係らず、兎もすれば貴族的即ち殿樣式、若旦那ぶりの尊大な影を見せてゐました。 それから第三の

資格は批評家、諷刺家、嘲罵家で、これが後には殆ど本領のやうになつたのですが、此の側面の代表は第一に「小說評註」、これは其當時私が激賞し、君も大得意であつたもので、彼のスヰフト、ポープが合作の「詩の下手になる法」といふのにそつくり其の儘比較すべき珍篇、早晩其の拾遺のやうなものを作つて、それへは鷗外君と故思軒君と私とを綴り入れる筈だといつてゐたのでしたに、とう〳〵例の吹聽だけで立消えてしまつたは甚だ殘念であつたと思ひます。 つゞいては新聞紙に載つた諷刺嘲罵の文乃至「覺帳」「仕入帳」等一切の雜筆、これらのうちには苛辣だの冷刻だのと世間の批評家からいはれた分もありますが、大體は寧ろ奇警とか穿細とか評したはうが當然でせう。 大ぶ文句に苦勞した痕が見えるだけに、實感を離れて讀むと、存外文氣は峻烈でないやうに思ひます。 此のあたりの特徵がすべて英のポープによく似てゐます。 これは私が同君に面と向つて幾たびもいつたことで、今更いふも何ですが、例へば、其の千錬萬鍛の鹽梅から、文字の濃艶纖麗なところから、諷刺嘲罵に長じてゐた呼吸から、議論の常識的な點から、其の蒲柳質で多病であつたことから、また其の性質までが、よう似通つてゐたことだと今でも尙思ひます。 只ポープよりもはるかに不遇であつた爲に病も重り、彼れよりも弱かつた意志が更に一段弱くなり、彼れの如く一代の詩王と崇められる盛譽もなく、剩へ不幸短命で果てられた一生を思ひやれば、甚だ氣の毒なことゝ存じます。

爲人は、決して君の書いた嘲罵文などのみを讀んで輕卒に想像してゐる人々が思ふやうてはなかつた

本來は至極内氣な、義理堅い、臆病といつてよいほどに用心深く氣の小い、併しながら頗る勝氣な、隨つて阿諂追從は大嫌ひ、すぐ剝るやうな虚言などは決して吐かぬ、自尊心のある、見識高い、折々は人に憎まれる程高慢のほのめく、親分、兄分になることを好く、狷介な、選り好みの何につけてもむづかしい、さりとて面と向つては極々口數の寡い、優しい、おとなしい、ひよろ〳〵と痩せた、色の白い、目元に愛嬌のある、白い齒をちらと出して冷かに笑ふ口元に忘られぬ特質ある、先づは上品な江戸式の若旦那でした。 詩人肌を狂熱とか空想的とか沒常識とか不羈奔放とかいふと一つにして見ることになると、君は詩人的ではなかつた、即ち物事に凝りはしても逆上せて氣ちがひのやうに熱するやうなことは決してなかつたらしい。 他人の疵瑾はもとよりのこと、自分の疵瑾さへもよく心得てゐるほどの十分の常識があつて、江戸式通人を理想とする所から生ずる洒脫主義を奉じ、都會自慢の田舍嫌ひで、そしてどちらかといへば樂天主義であつた。 こゝらも彼の英佛の十八世紀かたぎそつくりで、先づは常識に立脚して自然や人生を觀察した人といつてよいでせう。 シニックではなかつたが、唯物主義的であつたことはほゞたしかです。「金があれば樂天、なくなれば厭世です」などは諷刺半分折々同君の口から漏れた。 戀愛神聖論などは君が得意の諷嘲の的でした。 嘗て「色百種」といふ一篇を作つて「五人女」の向うを張る積りといふ話の序に「當世風にいやあ戀百種でせうけれども、ツマリ同じことですからねえ、わざとむきだしに」といつて、例の冷かに白い齒をちらと見せて、殆ど聲を出さずに笑つた君の面影は今も尚見るやうに思ひます。 新躰詩なども大ぶ嫌ひでした。 これは俗曲通であつたゞけに一しほくすぐつたいやうに感じたのでありませう。

本鄕眞砂町に私が住んでゐました時以來、こちらから訪ねたことは十餘年間に前後たかゞ二三度以上はなかつたのでしたが、先方は毎月大概一度位は必ず訪ねて見えて、來れば短くて半日、長ければ殆ど一日、低聲での話の題目は大抵は文壇の事、疵瑕探しめくことがマア多かつたが、さりとて決して口汚く人を誹るといふ風ではなく、むしろ慷慨乃至歎息の口吻で、甚だ靜かに、柔かに、言葉ずくなに、當人が傍聽してゐても恐らく一言も無からうやうな、適切な、道理に合つた批評をするのが習ひでした。 尤も折々は、例の白い齒をちらと見せて、聲を出さずに薫り笑ひをしながらの諷嘲の秀句、文章其のまの警句などもまじりましたつけが。 此の種の來訪はツイ六、七年以前まではつゞいたのでしたが、いつとなく疎遠になつて、小田原からこちらへ戻られたといふことを聞いたばかり、どこと居所さへも知れずに居ましたうち此度の凶報、まことに氣の毒な、殘念なことをしました。 お尋ねによつていろ〳〵過去を思ひ出せば今昔の感に堪へない。

同君が二度目二六社へはいられた時分、何か書いてくれとの事であつて、紋切形の祝詞でもないから、或は惡口でもよい、何か書いてくれといふ頼みに任せ、書簡體に綴つてやつたのが「文學其折々」の七五八ページに載せてありますから、只今お話申したことゝ對照して見て下さい、さうしたなら私の眼に映

じた同君だけはほゞ盡きようと思ひます。

拜啓仕候、手紙ばかりは肩の張らぬ書きものと存じ居り候ひしに、うたてや近頃は內證の一通もだしぬけに生捕られて、とんだあかるみの曝しものとなる慣はし、其の流行の上をゆきて、新聞紙の埋草にといふ斷つきの返書の催促、さて〳〵けうとい御注文かな、恐縮とは一定かういふ句取の次ぎへ入る文言と發明はしても、廻らぬ筆のあとやさきが案じられ、成らうことならといふ名聞も混り磨る墨は雲を流せども、龍はさておき蚯蚓がきも紙にはのぼらず、何故といひたまへ、度々噂ばかりにだまされし痔の蟲が今更の出陣をすなほにお目でたいと申すべきか、さりとてポープ、スヰフトとの比較も二度の勤はさせたくなし、善馬劍といふ表德もことふりたりといふ文句と共にことふり、結句言ふことのないは久しい知交の君なればなり、但しいふことのないとは申分がないとのと義にはあらず、君ほど申分のある人はなし、苦情屋といへば申分そつちもちなれど、皮肉な男いふときは申分こつちもち也、いづれにしても申分の本山、狷介といふ熟字は君の爲に作られしかと思ふほど、さつても七むづかしい人かな、誰れやらが君を文壇の三猿とはよい見立、三つ子の魂百まで、あはれ、僕がはじめて君を知りしころは、さてさて氣むづかしいお孃さまの、あゝで無い斯うでもない〳〵の好嫌ひやかましく、他人の疵見通しの其の身じまひも念入にて、文章の艶ぽいこと舞子の如く、げにはじめは處女の如しといふ本文通りなりしに、いつの間にやらずんと垢ぬけした

洗ひ髮、ざつくばらんの大姉え、廣い世間におれの氣に入つた野郎ひとりぱちもないといふ權幕おそろしく、口の惡いこと此の上なかりしが、色氣はなほしたゝるばかりと見る〳〵廣袖をひきぬいた善馬劍、かんぬきざしの町奴、强きを挫き弱きをすくふ一通俠となりひら文治、と語呂の都合にていへば優美に聞ゆれど、高慢と我儘の華族臭きは、さしづめ松平長七郎の格也、されば馬子觸るれば馬子を嚙む、譬へば人の下につくことびやくらい厭だと額に銘打たるじや〳〵馬にひとし〻、乘せるが職分でありながらまがきでも小粟でもてんぐりかへすを專賣の身勝手作者、所詮文を賣つて世を渡ることの出來ぬ皮肉男、若し此のまゝで靑山天王寺に埋葬となれば、見識と狹量等分の男なりしといふ墓碑銘が至當なるべし、さてこそ這入つたといふや否や飛びだし、書くといふかと思へば中止し、面白さうな題目と面白さうな趣向ばかりちらつかせて、つひぞ正體を見せぬ人じらし、此の變幻出沒を龍と見立つれば『二六』は差結め雲の如し、今此の雲を得てあらためて正太夫をあらはし、尙何のなす所なくば、君が狷介はけんくわかひと下落し、君が高慢はほんのわれぼめの高慢たるに止まらん、あはれ此んな返事を得るは、日ごろ惡口の因果せうことないと思ひたまへ。

故小泉八雲氏の著作につきて

私が故小泉八雲氏と相知るに至つたは、つい昨今といふさへもいかゞと思ふほど、ほんの淺い〳〵知合であるから、深く愛敬してゐた先輩であるにも係らず、其の著書も二十種ほどあるうちで、僅か八九種しか知らず、其の傳さへもやつと此頃承知したといふ次第ゆゑ、さしあたつて批評らしいことは申しかねる。けふは、只ほんの、其の以前同氏の著書を讀んだ時分の感じだけを述べませう。おひ〳〵讀殘しの分をも讀む積りですから、或は將來の評は今日申す所と多少異なるかも知れません。

我が特殊なる風俗の紹介者、解釋者、回護者としての同氏の功勞は、今更改めて言ふまでもあるまい。餘りに溫い同情を以て、ひたすら我が風俗人情の美なる側面のみを拾ひ、醜い方面、厭な部分は目を塞いで通り過ぎたといふ風があるゆゑ、外國の人々は、同氏の著書を讀んだ時と實際我が人情風俗に觸れた時と、感を異にすることも屢〻ありませう、併し我〻日本人は同氏の著書を讀むにつけて毎に慈母に對するやうな思ひがする。私しなども時〻は餘り贔負目過ぎて裏耻かしいやうなと思ひつゝも、或は是れは餘り主觀的な見かたのやうだと思ひながらも、坐ろに感謝の涙を催したことがあつた。氏が日本風俗論の幾分が正當で、幾分が主觀的解釋であるかなどいふ點も、大ぶ趣味ある論點かと思ふが、今はそれを論ずべき折でもなく、且つ私しは其の任でもないから、旁〻今日は單に一種の短篇名家(スケツチライター)として

の故人を評して見ませう。いや、評てはない、私しの當初の感じのみを述べて見るのです。

私は世間の同氏愛敬者よりもはるかに後れて同氏の著書に觸れたので、しかも年代的には讀みませんでした、丸善で買求めた最初のは、たしか "Shadowings" 及び "A Japanese Miscellany" それからその次が "In Ghostly Japan" であつたと思ひます。前者では「夢魔(うなされ)」に關する推理と「夢中の飛行」に關する說明とを最も面白く讀みました。後者では、犬の吠える聲を殆ど耳元に聞くやうに叙した一節又それに關する例の主觀的解釋及び "At Yaidzu" と題した一文——浪の音を物すごく寫し出した獨得の筆、それが今も尙忘れられぬ。總じて海邊の事を叙記したのに佳いのがある。辭書家(レオドペインター)といふ評は屢〻名文家の上に下される所で、小泉氏の如きも夙に此の褒稱を得てゐたらしいが、私はそれだけでは足らぬやうに思つた。同氏の筆は頗る音樂的である。平仄を整へるともなく、韻を蹈むともなく、語調がおのづから其の物の聲になつて鳴響してゐる。近いころ英譯でダンヌンチオの小說を讀んで原文の特質を想像した場合にも、小泉氏の名文を連想したことであつた。

たしか其の次には "Glimpses" や "Out of the East" や "Kokoro" などいふ作を讀んだ。"Glimpses" を讀んだ時から個人としての同氏が慕はしくなつた。それまでは只名文家として愛讀してゐたに過ぎない。「グリムプセス」は日本にての著書中の最も古いもの〻一つだが、最初の感じが寫されてあるだけに一しほ味ひがある。かの出雲中學の敎師としての日記(ダイヤリ)の如きを讀んでは、誰れしも愛敬

の心を生ぜざるを得ない。如何にも深切な優しい人柄が浮上つて見える、如何に心性を直覺することに秀てた人て、如何に觀察が穿細であるかが見える。就中「盆踊」の一章は絶妙です、新代の畫家などに話して畫にかゝせて見たい。

"Out of the East" の中にもいろ〳〵面白いのがあるが、「柔術」と題したのは同氏得意の說であつたらしいから、讀まぬ人には是非讀んで貰ひたい、我が維新の大活動を柔術の極意に基くものと解し、通例惡しく見做す歐化熱を立派な意味に解し、さて日清戰爭に論じ及ぶあたり、その論の當否はさておき、如何にも捉へかたが面白い。蓋し小泉氏の魔力は一に其の文にある、これは餘りに主觀的な說明のやうだと思ひながらも、次第に引込まれて行かざるを得ないほどにチャーミングです。論でも話でも兎角枝に枝の花が咲いて、飛んだ脇路へ外れるが癖だが、その外れるのが本海道を行くよりも面白く、彌ゝ外れて彌ゝ愉快に感ぜしめる。かの "Ghostly Japan" のうちで、或は薫物を論じ、或は犬の上を語る間に恍々として空想に耽るかとすれば、何時の間にか一種の哲理談へ融け込んでゆくのが何ともいはれなく面白かつたが、此の獨得の脈は多少濃淡を異にしてどの作をも〳〵貫いてゐる。

"Exotics and Retrospectives" のうちでは、先づ「富士登山の記」が讀みものですが、それは題目を見て期待したほどではなかつた。時々白い雪が岩間に殘つて見えるのを同氏が曾て見た黑く燒けた女の頭蓋骨の齒のみ白かつたのに比したあたり、且つそれから例の瞑想に入つて總て人間の理想は正體

に近づいて見れば皆かうしたものだと打眺めたあたりは流石に面白い。"Retro." のうちに却つて味ひの深いのがある。「美の凄哀」を論じ、「碧色の心理」を論じ、空色の何故になつかしいかを論じたあたり、特質が見えて尤も妙。此の篇中にも例の夢魔哲學の一片があり、又得意の輪廻論、遺傳論などもある。プレトーと佛教とダアヰンとスペンサアとを打つて一丸としようとする著者の哲學談は、論としての是非は別格の話だが、文章として見ると、如何にも神祕的色彩を帶んでゐて、何となく味ひが深い。"The Eternal Haunter" この小品がまた甚だ可憐です。ホオソオンのやうな筆附といつては言ひ足らない、着想の上には彼れ以外、あくまでも十九世紀末のロマンチストたる趣が見えてゐます。

「心」といふ作「骨董」「怪談」などいふ作も取々に見所があります。「心」の如きは東西文明是非論とも見做すべき箇所があるから、廿前後の人たちは兎も角も一讀なされるがよからう。

之れを要するに、故小泉氏の筆は、諸評家も已にいはれた如く、淸新で流麗であると同時に寂しみを特質とし、神祕の影を帶んでゐます。基督教臭味を拔き去つたホオソオンのやうなところもあり、怖しみを和らげたアランポーのやうな脉も見え、アヽギングのやうに善良に深切に、アヂソンのやうに穿細に溫潤に、時々はロマンチシスト風の夢を見てゐるやうな朦朧とした悲觀的な骨脉も見え、それに十九世紀末らしい國體論やら、文明論やら、宗教論、哲學論、倫理論の綾絲が織入れられ、とりわけ一見相容

れまじきやうにも思はれるダアヰン一派の科學的精神が不思議にも調和を破らずに織入れられてあります。西洋最近の利己的、巧利的、機械的、繁文褥禮的の所謂物質的文明の大壓迫にえ堪へずして暫し東洋に隱れ家を求めた最も多感な最も多想像なファン、ド、シェークルの一天才の紀念だと思へば、故小泉氏の著書は長く東西の文學史に特筆すべきものでありませう。（三十七年十二月）

百合若傳說の本源

遠きは今昔、宇治、中頃はお伽、舞の本、下つては淨瑠璃類、八文字屋本、讀本、草冊子等によりて人口に膾炙せる物語のうちにて、其出所の明白に國史に因めるもあれば、古き巷說に原けるもあり、或は全くの空想に成れるらしきもあれば、外國種を我國振に引直せるものもあり、總じてやゝいかめしく武張りたるは人物の名だけなりとも、國史か口碑かに原きて出所の辿り易きならひなるがなかに、一つ二つ不思議の例外と思はるゝがあり、百合若大臣の物語の如きは是れなり。

予が始めて百合若大臣の名を知りしは十二三歲のころ讀みし「大伴金道忠孝圖繪」（浪華の作者某著）なりきと覺ゆ、其の頃は眞鳥、金道、輕大臣、佐の宰相などを皆一つらに正史の人物と信じたりしが、長じて國史を學び雜書を讀むこと稍ゝ多きに及びて、百合若の名のみは曾て相似たるをだにも史に見ざるを異しみたり、高麗或は蒙古征伐の大將たるほどの名將にして、力は爲朝を凌ぐばかりの强弓を引き四年の間孤島に棄られて俊寬僧都にも似たる艱難を嘗め、中ごろには靈鷹の之に奉仕するあり、末には賊臣を誅するの快擧あり、全くの架空談としては筋の餘りに複雜なるが不審なりと思ひながら、史家に質すこともなくて年を經たりき。

按ふに百合若傳說は最も廣く流布したるもの、一なるが如し、されど之れに關して予が知れる限りは太だ狹し、其の最も古きはお伽草紙中に見ゆるものと聞きしが、未だ見ず。予が知れるは舞の本の中なるを最古とす。其の次に來るは古淨瑠璃の諸作なるべし。水谷不倒君の說によれば、井上播磨掾の正本に「百合若應」あり、岡本文彌のに「百合若高麗攻」ある由。予が讀みたるは寬文二年版の日暮小太夫の正本也。（小太夫は說敎節の太夫なる由、これも不倒君の考證なり。）其他は巢林子が「百合若大臣野守鏡」爲永太郎兵衞の「百合稚高麗軍記」、前にいへる「大伴金道忠孝圖繪」などのみ。さて寬文二年版の筋立は舞の本の中なるを其の儘に潤色し敷衍したるまてにて、筋も人名も殆ど全く同じなれば、今は假に舞の本のを最も古き筋立と見做して批判せんとす。萬一お伽草子のを有せらるゝ人あらば異同を稽査せられたし。五月蠅けれど後段の考證に要あれば左に其の粗筋をかゝぐ。

嵯峨帝の御時、左大臣きんみつが大和泊瀬の觀音に祈りて得たる子に百合草若といふあり、十七にて右大臣になれり。 さるほどに蒙古より我が朝を襲ふと聞えければ、神託によりて百合草若は總督に任ぜられ、鐵の弓箭を準備して弘仁七年二月に都を立ち「大臣殿の御勢は三十萬騎」、其の外幾萬人を隨へて發向す。 さて蒙古どもは四萬艘に打乘つて日本と唐土の潮境へ押出し、妖術を以て霧を降らせ、頻に討手を惱ます。（日暮本の挿畫によれば、蒙古は鬼面、人身也）。 百合草若すなはち神に祈り、其の加護を得て霧を拂ひ、鐵の弓にて射立てければ「四萬艘に打乘つたる蒙古多く討たれて僅一萬艘になり」日本軍全勝となりぬ。

かくて此の凱旋の途次玄界島に上り「大力の癖やらん寢入りて左右なく驚き給ほて夜日三日ぞまどろみたまふ。」時に乳母子の別武兄弟逆心を起し、大臣は手疵にて果てられたりと本船の將卒を欺き、眠れる百合草若を棄置きて歸國す。 大臣は「船數八萬艘一度に帆を上げ楫を取」りし物音に驚き覺めて船を呼び、波間に躍り入りて追ひ試みしも効なく、獨り島にとゞまり、海草を摘みて命をつぎ憂き日數を送りぬ。 さる間別武兄弟は筑紫に歸着し、豐後に在る御臺所に大臣戰死の由を語り、尙都へ上りて左大臣夫婦をも欺き剩へ御臺所に艷書を送りければ、御臺所怒りて自殺せんとす。 乳母之れを止めて、別武へは御臺所に代りて「君の蒙古へ赴きの時、宇佐の宮に參り、千部の經を書き讀まんと大願をかけ」既に七百餘部は果したれど尙二百餘部を剩したれば、今三年間俟ちてよと返書す。 かくて御臺所は、いつ死ぬとも圖られねばとて、大臣の紀念の品々をそれ〴〵始末するとて、大臣が飼ひならしの鷹どもの足緒を解いて放ちける中に綠丸といふがあり、放たれて後遙かに玄界が島に渡り、大臣に近づきて見知られ、通信者となりて歸り、百合草若の存命を御臺所に知らす。 されど再度の使の時身に重き物をつけたるに得堪へて島が根に落ちて死す。 大臣見つけ、憫み歎くことあり。 さる間豐後にては、御臺所が宇佐に七日籠りして大臣の無事を祈りしゝるしにやゝいきの浦の釣人漂流して玄界が島に着き鬼の如き容貌したる大臣を救ひて伴ひ歸り、本名を知らざれば僮として使ひをれるを、別武聞傳へ、其の鬼の如き僮をやがて都へ具し上りて物笑の種にせんとて召寄せ、門脇の翁といふにあづけおく。 此の翁は年ごろ大臣に仕へたりし者なりしが、尙ほ其の人とも心附かず。 かくて翌年の正月、筑紫の在麗集りて弓のとうを始め、別武を觀ふことあり。 足も顏も苔蒸したるやうなればとて苔丸と呼ばれたる百合草若、矢取の役を命ぜられて弓場に侍し、わざと射術の拙きを笑ふ。 別武怒りて、さらば汝試に一矢仕れ、否といはゞ立所に切棄てんといふ。 大臣、弓弱うして心に叶はずといひ、持來る限りの弓を悉く引折る。 別武大きに驚きながら、昔、大臣が用ひし鐵の弓矢を取寄せて、引けと命ず。 大臣容易く之れを彎きて大音揚げ「我れをば誰れと思ふぞ。 いにしへ島に棄てられし百合草若大臣が今春草と萠えいづる」云々と名宣りしかば、大友諸卿、松浦黨、一度に畏り服從す。 別武も走りおり、降參と手を合するを高手小手に縛め、其舌を抜き、尙首をば七日七夜引首にぞしたりける。 云々。

こゝに別武兄弟とあるは「野守鏡」にては別府鄕武者雲足、同雲澄といかめしく、末に別府親王と名宣りて、僧上の暴威を振ふ件は大友の眞鳥、平將門さながらなり。 又出陣以前に百合若の寢首を搔かんとする件ありて「大力の癖やらん」の一句は病癖といふ意味に取做され、「癖の長寢の死人同樣」などありて、熟睡癖が一篇を貫ぬく伏線となれるもをかし。 又「綠丸」といふ鷹は、此の作にては雌鷹の羽にて矧いだる矢の精なり。 大臣が情婦立花といふの死體に宿りて玄界が島に渡り還城丸といふ子を生み、後、見あらはされて、飛去るあたりは、「大內鑑」なる葛の葉の前身たると明かなり。 按ふに島より大臣を救ひいだしゝいきの浦の釣人及び門脇の翁の役は府內の太夫秀主といふ忠臣及び其の子惡文次秀景市郎丸秀虎などに當るべく、尙舞の本などには無き人物にて此の作の立おやまは惡文次が妻の松が枝なるが、これは舞の本なる「入鹿」に見えたる鎌足僞盲目の件を女形に引直したるに外ならず。 時代は平城天皇の御宇とありて、處其の他、大筋は舞の本に同じ。

爲永太郎兵衛の「高麗軍記」は原の筋と隔ること甚しく、作としても見るに足らず。 只一ついふべきはこれにては綠丸は原話通りの生きたる鷹にて、名を「靑陽」と呼び、後に島に渡り來て大臣の爲に敵を防

ぎ、別府宗澄が三男三郎雲澄に切殺さると作り做したる事なり。 原話にては健氣にも文使ひして途中に疲れ死し、こゝにては主の爲に忠戰して死す、共に鷹をして通信の役をなさしめ、兼ねてペソスの料となせり。 「忠孝圖繪」は原話を離るゝと更に甚しく詩趣蕩然たり、綠丸の事是には無し。 要するに外國征討と島住居の件と鷹の通信と歸り來りての復讎といふことが百合若傳說の骨子なるが如し。

百合若傳說の出所は古人も既に不審がりしものと見えて「松屋筆記」に「百合若草紙に見えたる百合若大臣未だ定かならず、豐後國志に大分君稚臣が事也といへり、大分君稚臣は天武紀に見えたる勇士にて豐後大分郡の人なり」とあり。(天武紀を案ずるに、只其の名見えたるのみにて何の事もなし。) 又「鹽尻」には「百合若(或は大臣と稱す)豐後國船居に傳へて故事あり」といひ、次に「或說に百合若は淸海公の三男、參議宇合、一には烏養と稱せし此人なりと云、されども確なる古事を見侍らざりしなり」といひ又其の次に「百合若の女を萬壽と云(中略)奸臣別府太郎、同次郎が塚とて別府村にあり(又略)百合若が愛せし鷹を綠丸と云(又略)凡百合若の事九州風土記の說にして普其人ありと聞ゆ、されど古記實錄に所見なきにや、上野國妙義山の脇に百合若の射貫きし岩ありて故事を語るもいぶかし、浦島が故事丹後風土記に見え、武州金川、信濃國寢覺にもいふが如し」とせり。 尙ほ「嬉遊笑覽」にも「肥後國八代領內に百合若塚といふあり」と記したる前後に牽强の說一くだりありて「百合若は筑紫の人にて玄界が島にて鬼を平ぐるを百合若の舞に作り侍り、然るに奧州の島のうちに百合若島といふありて綠丸といふ鷹のことまて確にある島あり」など見えたれど、これらは疑ふらくは舞の本又は古淨瑠璃等に原きて後人が假作せる地名、人名をさりとも見ぬき得ずして立てたる臆說らしく、斯く引用するさへも徒ら事なるべくや。 百合若といふ稚びたる名から、流石に異樣に感ぜられけるにやあらん、舞の本には「夏のなかばの若なれば花にもよそへて育てよとて百合若どのと名をつけ」たりと說明し、巢林子は別に本名を立てゝ「豐後の國の旗頭太宰の 太郎和田丸」と名宣らせ「百人の力を合する强力」なるが故に、帝勅して百合若と命じたまふと故事つけたり。 若と呼びながら大臣の位あるもいぶかしとてや、爲永は大臣に經昇るべき年齡資格ながら、繼母轟御前と賊臣宗澄とが奸計の爲、二十三才にして尙ほ前髮を拂はず、云々と解したり。 或は宇合の子とし、或は宇合と同人とするなど、いづれも、百合といふ字面に縋りたる牽强なるべし。

さて斯やうの穿鑿三昧、そも〳〵何の要あるにかと不審がる人もあらんかなれど、これは出所が出所だけに流石に棄てかねし仔細あり、實は近頃所要ありて希臘上代の事蹟を取調ぶる序に、彼の國の古名作及び之れを論じたるものなど二つ三つ讀みゆくうちに、ふと百合若物語とホーマアの名作オデッシーとが頗る相似たりと思ひ附くと同時にオデッシーの羅甸名のユリシスたることに思ひ及びて、と言はゞ餘は語らでもあるべきなれど、尙ほ普通の讀者の爲に二者の關係を說明して此の取調の局を結ぶべし。複雜なるオデッシー物語を約め說かんことといと困難なれば、こゝには百合若傳說に關係ある節々のみを

擧ぐべし。

オデッシウス又の名ユリシスは太古希臘なるイサカ國の君主にして膂力絶倫、秀れて奇策に富めり、人稱へて多智王と稱す。希臘列國の聯合して小亞細亞なるトロイ王國を征するや一方の將となりて出陣し、十年の攻圍の間智勇兼備の譽れ高し。堅城陷るに及びて諸將と共に凱旋す、途中誤つて妖婦カリプソーの爲に魅せられて、其の部下と共に孤島に抑留せられ、年を重ねて歸る能はず。ユリシスが守護神にミヂルヴァといふ女神あり、ユリシスの爲に天神ヂウスに哀訴し、カリプソーを諭してユリシスを放たしむ、然るにユリシスが諸島漂泊の業因尚ほ滅せずして、或は一眼の巨靈の爲に、或は種々の女妖の爲に、或は水夫等の過失の爲に、九死一生の厄に遭ふこと更に數回の後、竟にフイアシヤといふ海國に漂着し、其の國王に優遇せられて歸國の便船を得、前後二十年を經て故郷イサカに上陸す。ミヂルヴァ再びユリシスに姿を現じて告げて曰はく、今や汝が王宮には幾多の專横なる賓客ありて、戚臣と結托し、汝が妃ペヂローブが後配たらんことを望み日々燕飲して亡狀を極む、速に假裝してかしこに赴き、汝の子テレマカスに力を戮せて撥亂反正の功を遂ぐべしと。やがて神通力を以てユリシスを一老翁に化せしむ。ユリシスは教へのまゝに乞食姿となりて國内に入り、先づ舊老臣 *Eumeus* ユーミヤスを訪れて暫く其の家に寄寓す。さる程に之れより先、ミヂルヴァ神の告によりて父の行方を尋ねんとて家出せし王子テレマカス、此の時外國より歸り來り、圖らずもユーミヤスの家にて父に遭ひ、主從親子の名宣りあひあり、それより相携へて王宮に入る。ユリシスは尚ほ乞食姿のまゝなり。さて人は未だ其の人とし知られどユリシスが愛犬アルガスの、今は老いて歩み得ぬほどに衰へたるが、さとくも認めて嬉しげに尾を搖かしゝが、やがて喜び死に死にぬ。かくてユリシスはアポロ神の祭典の日に、尚ほ乞食姿のまゝにて、亡狀なる賓客等の盛宴に侍し、侮辱せらるゝをも忍びて、報讐の機を俟つ。時に妃ペヂローブは强請を拒むべき辭に窮して、若し夫ユリシスが手馴しの强弓を彎きて十二箇の環を射通すことを得る者あらば其の人の配たらんと約す。賓客等おの〳〵弓を引き試む、一人の之れを能するものなし。ユリシス乞うて弓を彎き、剩へ十二環を射通し、こゝにはじめて本名を明し、返す一箭に元兇 *Antinous* を斃す。滿堂擾然たり。テレマカス及び舊臣甲乙ユリシスを助けて、奮鬪し賓客及び賊臣等を壓にす。ペヂローブ夫に再會することを得て歡び極りて泣く、云々。

ユリシス王は百合若大臣、イサカは豐後、漂流中の妖魔は妖術を使ふ蒙古人、故國と漂流先との間に通信者となれる女神ミヂルヴァは綠丸といふ鷹たることは、ミヂルヴァが忽然として双翼を開いて上天する樣を叙したる本文、又は海鷲となりて飛去る條などを思ひあはすれば明かなり。又ユリシスが老乞食となりて王宮に入るは苦丸の條に符合し、鐵の弓の件と十二環の件とは、正しく話の血統を同じうす。舞の本の門脇の翁、淨瑠璃の府内某はユーミヤスに該當し、王子テレマカスの役廻りは市郎丸秀虎、惡文次秀景、又愛鷹綠丸が非情の飛禽にありながら忠勤を盡して死するいぢらしさは、愛犬アルガスが主を見知りて喜び死に死すといふ條と因みあり。要するに百合若物語はオデッシーの粗筋を翻案したるものたると些も疑ふべきにあらぬものから、いづこの國人より、いつごろ我が國には傳へたりけん、我が文藝復興のフロレンス、ヂープルスともいふべき山口、堺などを經て生ひたちしならんかとも思はるれど未だ考へず。若しお伽草紙のを最古のものとすれば、今より四百年以上の昔なるべきが、それが尠くとも二千八九百年前に成りたる希臘太古の名篇而も東西古今に亘つて比類なき名作のオデッシーの翻案とは思ひがけなき關係にはあらずや。これによりて考ふれば我が足利以降の文學と西洋文學との交渉は、從來の考證以外にいでゝ更に尋ぬべき點尠からざるが如し。

オデッシーとの關係は以上述べたるに盡きたれども、尚其れとは別に、巢林子が「野守鏡」に見えたる惡文次が妻の松ヶ枝が僞盲人となりて別武兄弟に近づき、苦計の爲に猛火に陷るを辭せざる段と希臘古

傳說との間に多少の聯絡あるもおもしろし。件の巢林子の脚色は、舞の本の中なる「入鹿」の末段、鎌足が僞盲人となりて入鹿に近づき、其愛兒の火中に陷りたるを故と救はずして入鹿に心をゆるさする條に胚胎せること勿論なるが、件の僞盲人の件は、正しくユリシスに關する古傳說に原ける者〻如し。傳說によれば、始めアガメノン王がトロイ討伐の師を興すや、希臘列國の諸王此の役に與らざるはなし然るにイサカ王ユリシスのみは、其最愛の妃ペテローブに別るゝを厭ふの餘り、佯りて狂を粧ひ、野牛と馬とを同じ犁車の軛に繫ぎ、海濱にいでゝ、砂路を犁き、穀と稱して鹽を蒔く。パラミデスと云者あり、謀つて犁車の行く手にユリシスが愛兒テレマカスを横たへて試ろみ、ユリシスが車を行るに忍びざるに及んで說破し、竟に從軍を肯ぜしむ、云々。是れ豈に入鹿に於ける鎌足が苦計の出所にあらずや。彼れにしては子を殺すに忍びずして佯狂を自白し、我れにありては子を殺しても國家の爲に盡す。苦計の種子は一ながら、國民精神と倫理思想の異なるとによりて彼此按排を殊にする、面白からずや。

（三十九年一月）

學者頭と詩人頭

物の見かた、考へかたを大づもりに見れば、知惠學問に關係なく、古今東西を一貫せりと見ゆる二大區別あり、一方は科學家式、俗に碎いていへば學者肌の考へかたなり、他方は文藝家式、つゞめていへば詩人質の見かたなり。此の二つは陰陽の如く、男女の如く、匣と蓋との如く、相補つて初めて完き考へかたとなるものなれば、其の偏りたるには多少の過失あること勿論なり。

何事につけても先づ經驗を第一とし、事實や名目の取調を第二の必要件となし、且つ其の取調べたる事を分析し、解剖し、分類し、或は比較對照し、或は圖表、統計表を拵へ、徐ろに歸納し、或は反對說を萬べんなく檢べ、場合によつては自身て拵へて持出し、自ら詰り、自ら痛めつけ、それを又反駁し、辯解し、自問自答の獨相撲幾番の後にも、尙ほ念に念を入れて批判し、考察し、推理し、概括し、萬止むを得ぬ時には假定說などいふ間に合せの足場を築いて立脚し、さてやつとの事で最後の斷案を試る、是れが學者肌の本領なり。

耳目に觸るゝ、やがて直に其の物の本體を會得し、面倒なる工夫、段取を嫌ひ、推理、研鑽を經ず、一足飛に大體の考を纏むるを主とし、直覺を尙び、總合を重んじ、出來るものなら只一つ二つ見聞したばかりて物の道理が百から千まで、底の底までも見え透くやうにありたく、叶ふべくんば一朝豁然として心機一轉して頓悟すると同時に宇宙の實體を直觀して自然人生を律すべき千古の天則を呑込んでしまひたく、尙十二分の慾をいはゞ、思ふとすぐに其の事が實行さるゝやうありたいものと願ひ、兼ねてさやう

の方面の心的作用に於ては慥かに先天的の特長を具へたりとも見ゆるもの、それが詩人質の持前なり。勿論双方共に敎化、薫陶の効能乃至自省、自修の力によつて種々の變化、階級を生ずべく、學者肌ながらに詩人質の長所を兼ね、詩人だちにして學者肌の研究法を利用する大ぶ重寶な合ひの兒もあれば、中間ぶらりのどちらつかずで虻蜂捕らぬ出來ぞこねもあり、又いづれの役目も丸さり勤まらぬ全くの片輪ものも隨分ある習ひなれど、先づ大體をいへば、所謂學者肌は血の氣の薄いはらの頭腦の作用あり。その美なるものについていへば、注意深く、思慮細かく、逆上せず、ひがまず、くねることなく、かたよることなく、心におちつきあつて事物を八面から鑑定する餘裕ある也。 但し其の二の町なる者に至つては、おつかなびつくりに類し、因循に類し、呑込わるく、機轉鈍く、些細の勘定までも算盤とらねば氣がすまず、何事も十二分考へぬいた上でなくては決斷のつかぬといふ姑息肌、どちらかといへば老人かたぎなり。 然るに詩人質は之れに反して、小氣味よいほど突飛的なり、尤も聰明だの、機敏だの、一を聞いて十を知るだのといふは其の美なるものを褒め立てた言葉ながら、總體に呑込よく、事の分り早し。若し夫れ其の似て非なるものに至つては氣短かの向う見ず、とつたか見たかの早呑込だけに大づかみは勿論、勘たがへ、はきちがへ、屢〻あり。 すべて考へかた馬車馬の走るが如く一直線にして、右左りさへも顧ることなし。 血氣の頃は俗人も學者も男も女も、實は大抵是れ也。 さればダアヰン一派の科學者に言はすれば、かくの如きは「劣等、種族の特質」との事にて、大人に尠く、少年に多く、男に尠く、女に多く、學者よりも無學者、文明人よりも未開人、英人、獨人などよりも日本人、支那人などに多き肌合にて、畢竟は鍛錬の足らぬ程度の頭腦、主として本能的に働く類の頭腦を意味し、いづれかといへば女性肌の心性 *womenish quality of mind* といふべきものと一概に貶す次第なれど、彼のヘルデル、シェリング等を音頭取としたる近世の詩人、藝術家の辯護者、所謂ロマンチシスト等にいはすれば、直覺に秀づるは人の最も人たる所以にして、宇宙の實相に悟入するの法は此のものに頼るの外なし、直覺は是れ第二の視力、天の賜へる豫言の資、彼のニュートンが地心引力の發明、彼のゲーテが植物學上の創見いづれも皆演繹の結果、直覺の作用、哲學的問題とてもトゞのつまりは是れ沙汰、其の他投機商の駈引、宗教家の頓悟、古往今來何事にもあれ煎じつめた果は大概此のものゝ庇を被らぬものあるまじ、プレトーは此れあるが爲にアリストートルよりも大なり、ベーコンが到底シェークスピヤたるべからざるも此のものゝ力なり、曰はくどうした、曰はくかうしたと効能しらべとめど無かるべし。

寔にそれも一理にして此れもまた一利なり。 按ふに學者肌は眞昏暗の中を卷尺をたぐつて小田原提灯をぶらさげて、方十里といふにめげもせず、地勢の探檢を試みんとする氣の長き隱居などに喩ふべしあぶなげのない所が取りえなれど、まだるつこいこと此の上なし。 これに對して詩人質は提灯の微小を卑み、老人の迂遠を嘲り、自轉車で五重の塔にかけつけ、其の頂に馳登つて偶然の閃電を俟つ短氣者の如し、同じく方十里の山水の全景をば只一瞥の下に看て取らうといふ魂胆なり。 いかさま此れは機

轉の利いた巧い思附には相違なけれど、いつ首尾よく稻妻が閃くやら知れたものでなく、萬一草臥れて假寐の間に通りぬけてしまつたら、一生昏闇に立往生して石龜の地蒲を蹈まざるを得ざるべし。 幸ひ都合よく閃電があつたりとしても、それによつて全景を瞥見したるは己ればかりとする時は、畫などにかいて見すれば格別、さなくば我れ面白の獨合點にとじまり、他に傳ふるの術なかるべし。 そこに至ると小田原提灯は百も千萬も製造自在、配分自在のこととて、凡人も俗骨も女も子供もその恩澤にあづかることを得る便宜あり。 是れ此の勝劣が考へ物たる所以なり。

伊豆の國の海岸に三尊窟と呼ぶ名所あり、其のあたり巉巖おそろしく峙つて浪風いと荒くすさまじければ不斷は船を寄せがたし、麗かに晴れたる日、纔かに退潮を俟つて櫓を操り、辛うじて窟の內部に進み入るに、高浪は船を弄んで大いに高く僅かに低く、屢巖の天井に打あたつて微塵ともならん危險を忍び浪の下るを機として漕入り、さて遙かに奥の方を窺ふ時は、髣髴三體の黃金佛が黑暗々中の巖壁に當つて燦然としてきらめくを認むることあり、但しこれ浪の下る只一刹那の機勢なれば、信心極めて堅固にして冥助甚深のものならずば見そこなふこと勿論なりといふ。

さて俗說はかくの如くなれど、其の事實を叩けば、此のもの阿彌陀佛でも何でもなし、纔かに閃き入る日光が暗中の巖に映ずるとき、先入主となつたる看る者の成心が迎へて以てしか解するのみ、猶品川の廿六夜待に今も尙ほ東京の翁媼連がチラと出かたの月の影のほのかなるをば三尊の阿彌陀さまと拜むがごとし。 所謂主觀的の解釋に外ならず、手前尺度の測量なり。 而して詩人式の考へはともすれば、此れに類し易き所に病ひあるなり。

かうはいふものゝ、此の詩人式の考へかたには慥かに人心を魅する魔力あるなり。 その名目のつけかた、解釋の鹽梅にこそ疵あれ、本場仕込の直覺家が睨みには、必ず何か一廉か二廉位は遍通不朽のうまみ、有りがたみ有つて、そゞろに涙ぐまるゝばかり、いつまでも棄てがたし。 例へば、希臘文明の絕頂に立つて長へに人間が渴仰心を歌ひかなづるにやと思はるゝプレトーが理想論、何がさて自立、自利一邊の武斷時代の眞只中に生れて南北東西に亘つて萬古變るまじき人間社會經綸の大緯を繰出したりと見ゆる基督が絕對訓、乃至老莊が直觀に成れる一種の復初說、近うしてはルッソーが感慨に生れし自然論、感情主義、此れも彼れもいづれ皆同じ流れの產物にあらざるはなしと考へて見れば、此の式の有難がらるゝも理り千萬といふべき也。 いや、そればかりて無し。 彼の中世の神秘論派が獨合點の達觀、ロマンチック哲學者が大獨斷の空中伽藍、ニイチェが空想、トルストイが一邊觀と大科學者にてもなつた積りて叩き崩さうとするものゝ、氣を持直して目の据ゑ方を換ふるときは、崩しかけた其の目前に碎けて散らばる明月や夜光、碧玉、紅玉、燦爛錯落、眞珠やら瑠璃やら、それを悉く拾ひ集めたならば、明光大ラボラトリーの黑暗を照して餘光幾千燭光の電氣燈をも凌ぐことなきを保せず。 只どうして拾ひ集めたものであらうかゞ疑問なり。

要するに學者肌の長所は其の愼嚴周密にして一言一斷苟もせざる所にあり、而して其の短は煩瑣迂遠の形式、繁疑不斷の內容、無情に似たる其の冷淡、其の乾燥、殘忍に類する其の苛細、其の深刻、其の屑々と其の拘々と其の鑿々と其の齪々、さながら地藏會の惠に洩れし賽の河原のいたいけ亡者の、積んでも崩れ、積んでは崩す小石細工埒あきかねて、待てども〳〵出來ず、千年萬年待つたとても恐らく此の爲體ではと覺束なく思はるゝ所が弱身なり。 それに反して詩人式の長所は單刀直入、直指人心、或時は拈華微笑の幽玄、或時は不立文字の簡淨、漲る黑煙、めまぐろしい陰影には目もくれず、飛びかゝつて化物の正體を引捉へ、鳶口只一挺大紅蓮、小紅蓮の眞只中へ向う額卷で躍り込む氣負ひの働き、きび〳〵と心地よき直截、思ひ切つたる手つ取早さは純粹の學者肌のかけても眞似えぬ所ながら、たゞ困つたことには、かゝる考へかたの弊として、兎角手前尺度の測量に陷り易く、情に眼昏みて一寸前の文目も分らぬことあり。 然らざるも其の咄嗟の心的作用たるより生ずる自からなる結果として、おしなべて疎枝大葉の觀察、散漫にして簡產、甚しきは孟浪杜撰、支離滅裂、自家撞着、前後矛盾勝手次第、さなきものも盧山の格好を只一面から窺ひ、乃至稻妻でちらと見たる全景、只もう茫漠としたる大體觀なれば、己れすら程經れば夢の心地となりゆくを、同氣相求むる者、よしや一時は之れにすがつて何等か得たる所ありげに思ふとも、やがては元の木阿彌に立戻つて、精神上に寸益なく、胸に手をあてゝ考へて見れば風がはりの狐につまゝれたやうな心持ばかりが殘るべし。

併しそれもよし。 鰯のかしらも信心からなれば窟の奧の日光が阿彌陀佛と拜まれしために勇猛精進の菩提ごゝろが奮ひ起り、神が憑いたと思ふばかりの一信で飛んだ目覺しい離れ藝のしてのけらるゝ不思議の利益なきにしもあらざるべければ、詩人式も臨機の別方箋としては重んじ用ひて然るべきものなり。 只いつも〳〵此の呼吸一つにて宇宙百端の料理鹽梅が出來ることゝ心得る手合こそ氣の毒、殊に其の柄でも無い癖に見事此の式で押通さるゝこと、僭上がるやからこそ氣の毒なれ。 眞物にさへ色盲、藪睨多からば、贋ひ、受賣には皆目にも劣るものあるべき理なり。 皆目見えざるは始末よし、見當大きにちがつたるに、自身はちがつたりと思はぬ者ほど世に厄介なるものはあらじ。

併しそれもよし。 只此の詩人式の考へかたが他の學者式に比して復然立優つたる思想式なるかの如く寡聞の青年者間に言ひ囃され、其の簡便な所が無精者共の氣に入つて、唯一無上の思想式でゝもあるかのやうに崇められ、一切の思想の是非、宗教から道德、人倫の根本義、日常實際の擧措進退までが之れによつて律せられんとする傾あるに至つては、着實なる人々の取越苦勞せらるゝ、もつとも至極ならずや。

今日の思想界が前古未曾有の大亂脈にして人々思ひ〳〵ともいふべき亂調子なれば、之れを分つて相對峙する二派又は三派となさんは、到底望まるまじきことゝ一應は見ゆれども、若し假に何とかして强ひて二大別し得るものとすれば、その法は只一あらんのみ。 即ち形式上よりは上に謂へる學者式と詩

人式とに分つこと是れなり。　さて又內容上よりは所謂「開化」「文明」「社會の進化」を讃美することに於て大同する者と之れを呪咀することに於て大同する者とに分つこと是れなり。　千分萬裂、紛々然、錯々然、囂々然たる混戰亂鬪の中に於て此の二つばかりは稍〻鮮明なる旗色なり。

然るに詩人又は詩人式の思想家は比較的に多く呪咀軍に投じ、學者乃至學者式の思想家は比較的に多く讃美軍に馳參ず、是れ先づ頗る注目すべき現象なり。　次に注意を要するは、此の二大思想式の對峙が社會進歩の要具たること是れなり、即ち一方は二三の大樹のみを見て全林を見ず、他方は無數の樹々を見て同じく全林を括る能はざるの概あるが故に、彼れに三分の實相、此れに七分の眞理、少しく檢覈すれば、決して偏棄すべからざるの理明かなると同時に、双方の內容を分析し、比較し、その一々に就いて勝劣是非を明かに決せずもあらば、「文明」の是非曖昧となつて、世に處し身を修むるに當り、去就進退に迷ふ者生ずべく、殊に青年者流は詩人式の說を悅ぶ習ひなれば、或は爰に飾非の口實を得て品性墮落の緣を釀さんもの必ずなしともいふべからず、要するに文明是非の鐵案を下すことは今の德育上の一の要務なりといふこと是れなり。

次に更に注意すべきは「文明」の呪咀に於て大體は相同意したる詩人者流が其の內容の是非に至つては往々甚しく相牴牾し、或は甚しき自家撞着を包藏せること、即ち此れと彼れとを相照らし、前說と後說とを對繚せしむれば必然慘烈なる同士打を生じ、其の論半以上自殺又は敗走に歸すること是なり。ゾラとトルストイ、トルストイとニイチェ、ニイチェとイブセンなどは其の手近き例證とも見るべし。　その他所謂ロマンチシストの亞流中にもかゝる例は乏しからず。　本營既に然り、その旗色によつて動く野武士の群れに至つては、一知半解の必然の結果として、精刻なる批判の一突擊に逢ふときは潰え走らんこと一定なり。

只其の批判の法、辯明の法が工夫物にして厄介物なり。　學者式を以てせんか、肝腎の讀んで貰ひたき當の相手が讀んで呉れまじく、さりとて詩人式を以てせんか、是れ五寸を以て五寸に易へ、暴を以て暴に易ふるの似たり寄つたりなり、さて何としたものか、工夫つき易からず。

此の論まだ終つたのにあらざれば、いづれ題を改めてまた說く所あるべし。（三十六年）

「文明」の研究

同じく「文明の研究」といふうちにも樣々の色別けあり、彼のモンテスキュー、バックル、ドレーパア諸家の如くに主として歐洲文明の由つて來れる經歷を演繹的に推論するもあれば、最近の文明史家の如く

に成るべく推理を避け、批判を愼み、專ら精選せる事實を平叙し、隱約の間に因緣果報の連鎖をほのめかし、其の最後の判斷は成るべく之れを讀者が心々に一任すること彼の獨逸邊の文明史家の如きもあり、これら皆一種の「文明研究」なり。或はまた更に遠く開化の源流に遡つて、此の人間社會が原始自然の混沌單純の狀態より現に見るが如き複雜多端の所謂文明社會と成り來れる其の發展の蹟を考覈して、歐と言はず、亞と限らず、廣く東西古今に涉つて、洽く「文明」の由緒を探り、進化の因緣を明かにせんと試る者あり、而して之れを爲すに當つて一方には例の單刀直入に其の因果の理を推斷せんとする詩人式もあれば、他方には徐ろに因果の連鎖を手繰つて歸納的に取調を進むる學者式もあり。要するに其の手段方法こそ樣々なれ、コントもスペンサアも此の意味に於ける「文明研究」の同行(コムパニオン)にして、近くば彼の進化律に立脚せる社會學者連中、ウォード、ギッヂングスが一流も先づは同じ鱗の魚族(いろくづ)と見て差支無し。假に以上諸派を總稱して因緣上より文明を研究する者と做す。

或はまた專ら文明の濫觴即ち原始狀態ばかりを取調ぶる學者もあり、未開時代の言語、法律、技術、習俗宗敎、道德等、總じて後に至り發展して所謂文明の要素(ファクトルス)となれるものを其の源泉について研究することを手近くは例のラボック一流の如きもの、かゝる類の文明研究は人類學專門家の著書中に就いて求めなば一大ライブラリーをなすほどに夥しきことなるべし。

又は主として文明の精髓即ち國家をして文明たらしむる所以の原動力(モーチーヴパワア)の何たるかを論究して之れが鼓吹奬勵に努力したる者もあり。例へば、コントの人情(ヒューマニチ)に於ける、カーライルの人傑(ヒーロー)に於ける、バックルの科學(サイエンス)に於ける、近くは、キッドの物質的兼社會的境遇の改良(アメリオレーション)に於けるなど、原動力のつかまへかたこそ論者の氣質々々を現して同じからざれ、飽くまでも實際問題として文明論に熱衷せる模樣は相同じ。按ふにかゝる態度は文明其の者を論じたるものといはんよりはおのが經世策上より若しくは理想上より文明を論じたるものといひて妥當なるべし。

或はまた利害得失の上より、文明を論ずる者あり、一層適切にいへば、世俗が所謂文明の利益恩澤の夥しく且つ端手やかなるに眼眩み、只其の利あるを見て弊害の甚しきものあるを知らざるが如きを慨き憤るの餘り、主として文明の流弊を數へ、或は「大道廢れて仁義あり」と唱へ、或は「自然に復れ」と叫び、文化人工の加はらざりし古代の方が今よりも遙かに善美なりしやうに說く者あり、或はさほどに極言せざるも頗る文明の利澤を疑ふ者あり。例へば、ルッソーが非文明論、ロマンチシスト等が所見、近くばフルードの進歩論(プログレス)、カーペンタアの文明論、ラスキン、モオリス等詩人文學者が著述中に散見せる非文明論、ニイチェ、トルストイ、ゴルキーなど最近諸作家が所見乃至或一派の宗敎家の論說など。これらは直接に本論に關係ある所謂文明呪咀軍の大旆下に屬すべきものなれば、折々引合にいだす便宜上、假に總稱を附して濃淡厚薄引つくるめて非文明論者と名づけおくべし。

或はまた主として現文明の成行きを占ひ、或は暗き或は明るき將來のたどずまひを豫察せんと試る者

あり。ビヤソンの"*National Life and Character*"の如き、ウェルスの"*Anticipation*"の如き、彼の黄禍論を主眼とせる諸著の如き、其の他ベラミーの"*Looking Backward*"の如きを筆頭と做せる彼の理想國物語一流の小說家乃至"*Cæsar's Column*"の如き大破壞、大動亂を豫言する一派の傾向小說など、これらは專ら豫想上より現文明の傾向を研究するものと見做しつべし。

更にまた一派の研究者あり、そは文明の要素調べを眼目として甚だ生まじめたる學者式にて、或は多少詩人式をも取りまぜて、文明其の者を研究せんと試むる輩なり、一二の例を擧ぐれば、バーリスが"*Civilization as a Science*"フェルガソンの"*The Philosophy of Civilization*"乃至クロージャアの"*Civilization*"のたぐひ是れなり。按ふに文明といふ語が十九世紀以來の大流行語なるだけに、此の流の研究に成れる著書は列國に涉つて求めなば定めし汗牛充棟ならん。

さて以上種々の研究法あるが中にて此の最後の取調は、言はゞ研究の土臺石を据ゑつくるやうなものにて最も大切なることゝ思はるゝなり。夫の濫觴しらべ、因緣しらべなどは或は定義沙汰を二の次になし、又は大概の定義で間に合せても濟むべきが、利害得失を論斷し又は其の精髓、原動力などいふものを論定せんとするに當つて肝腎勘文の「文明」の定義がきまらず、其の要素さへもあやふやなるは、譬へば敵味方を見定めずして突貫の號令を下し、眞くらやみのなかで新縞柄のよしあしを論じあふやうなものにて傍ら痛し。成程、定義調べなどいふことは隨分學者式中の仕事としても興味索然たる仕事にて、天下如何にも太平げにおのれが讀みたる限りのあらゆる著述より見當りたる限りのあらゆる定義を寫し取つて來て一山百文並に陳列し、あれかこれかと心長く比較研究に及ぶに至つては到底腦充血連中の我慢し得る所にあらずと雖も、さりとてまた首から定義調べなどは五月蠅し、まだるつこしと罵つて驀地に是非論の本營に亂入し雌雄を一擧に決せんと試るは、是れまた甚しき事毀しにして、取りも直さず彼の緒を見附るだけの辛抱がしきれぬために幾百束の絹絲を茶々無茶苦茶に縺れさせてしまふ手合と相擇ぶ所なし。尠くとも「文明」の要素は何々、其の根本義は何、其の定義は如何位の地ならしは是非止むを得ざる研究者の義務なりと思はざるべからざるなり。

さるによつて、先づ兎も角も「文明」といふことの內容調べに着手せんに、先づ此の語の根本義に凡そ三つの要素あり、一は進步發展といふこと、二は團體本位といふこと、三は比較上最善なる狀態といふこと、是れなり。以下此の三要素につきて少しく解釋を試みん。

第一「文明とは進步、發展したる人間の狀態なり」といふこと、此れは文明論の中興ギゾーこのかた諸文明論者のほゞ一樣に必須と認めたる一要件なるのみならず、隨分激烈なる非文明論者と雖も、よし意味の取りやうは異るとも、幾分かは認めざるを得ざる所なり。例へば、精神上の進步は認めざるも物質上の進步は認めざるを得ざるが如き、道德上の發展は認めざるも知能上の發展は認めざるを得ざるが如き、是れなり。

第二「謂ふ所の進歩、發展は個人を本位とせずして團體を本位とすといふこと」、くはしくいへば、文明とは個人としての人間の狀態が發展進歩せるを主とするにあらずして團體(社會全體)としての人間狀態が發展進歩せるを主とすといふこと、按ふに是れも亦た文明論者間の輿論たるに近し。古くはギゾーの如きも、一面に於ては個人の發展を重んじたると同時に明かに「社會の圓滿に成りゆくこと是れ文明の根本義なり」といひ、バーリスも「社會といふことは文明の精髓なり、これなくば文明は存在せず」といひ、フェルガソンも「文明とは社會的狀態をいふ、社會外に在る人間は文明の感化外に在るにひとし」といへり。

さて此の個人本位か、團體本位かといふことは餘り緊要にもあらぬ閑問題の如くなれども、多少是非論に關係あるゆゑ、後々の邪魔にならざらんため、一通り爰に辯じおくべし。世の非文明論者の中には偉大なる個人を養成することが文明の本來面目なるかの如くに解して、切りに其の名の實に伴はざるを口實(とうで)として現代の社會を責め罵るものあり、奸佞怯懦の徒は輩出し、大聖大賢は全く跡を絶つ、大英傑もいづること稀に、大詩人、大藝術家のいづることも稀なり、古へに比して劣るとも勝る所なし、かくの如きもの之れを文明といはるべしやといふものあり。按ずるにこれは大ぶ的違ひの氣味なり。いかさま、道德程度、技能程度の大きに進歩したる少數の個人を輩出せしむることが文明の本旨ならば、釋迦も出ず、仲尼も起たず、基督、ソクラテス、弘法、日蓮、ホーマアやシェークスピヤ、フィヂヤスやミケランゼロ、成吉汗やアレキサンダア、其の他此のたぐひの偉人、天才がねつから出て來らざる今の社會は、恐らく大失敗の文明ならんが、社會全體の品位と調子、即ち社會全體の知識、道德、技能其の他の水準を比較上高めるとが文明の本意なりとすれば、數百年以前の最上流の知識の平均は今の中流以下のよりも低かるべく、個人的には退歩せり、墮落せりと文明の讃美者みづからも認めざるを得ざる道德とても、社會全體の上より見れば、數千年前は勿論、數百年前に比しても今日の調子の方が遙かに〳〵高かるべし。成程、上中下ともに僞善者は夥しかるべく、知識ばかり、口先ばかりなる場合もいと〳〵夥しかるべけれど、而も數千年乃至數百年以前には單に上流中流にのみ貫流したりし道德の潮汐(例へば、四海同胞といふ感情、動物にまでも同情する感情の如き)が今は最下流にも波及しつゝあること事實なれば、個人について言はず平均上よりいふときは今の方がいにしへよりも勝るべし。キッドがその『社會進化論』中にいへる道德思想の擴充も、かく解し來れば事實なり。即ち史に傳へ來れるが如き聖人や賢人は絶無なる代りに彼の子路、子貢程度、十二弟子程度の人物に於ては必しも乏しきを告げざることが所謂文明社會の特質なるが如し。之れを要するに、一國の文野は偉人、天才の有り無しによつて決せらるゝにはあらずして偉人、天才を解し得る力、容れ得る力の多少によつて決せらるゝなり。偉人、天才は未開時代にも出て「文明時代にも出づれども、只一つ異なるは、未開時代は之れを解し得ず、容れ得ざること多くして、或は迫害し、殺戮し、或は悶死せしめ、徒らに埋沒せしむ。基督にして十九世紀

にいでなば十字架上の厄難あるべき筈なく、ソクラテスをして廿世紀にあらしめば彼れを獄に下す程の事だにも殆どあるべからずと思はるゝなり。又コロムブス以前に幾多冒險の航海者ありき、就中メキシコ發見者の如きは東西兩洋にわたつて調べなば二人三人のみにはあらざるべし、而も前者は當社會に歡迎せられ、後者は皆當代には其の名さへも得知られず、否敢て知らしむるだけの便宜なく自信もなくて埋れ果てたり。一つは交通の不便にもよりたらんが、主として社會の我れを解すまじく、容るまじきことを豫想したればなるべし。宗教界に於ても、學問界に於ても、之れに似たることは幾らもあり、彼の英のウィクリッフが其の熱誠と技倆とに於ては必しもルーテルに劣らずして而も其の功を奏せざりしが如き、彼の佛のラマルクが勿論其の說に精粗の差こそはあれ、ダァ非ン、ヘッケルよりも遙かに以前に同じく進化論を唱道しながら殆ど何等の反響をも得ざりしが如き、いづれも其の時代の未開なりし證、非文明的なりし證據なり。よりて考ふるに、文明は猶地味、季候の如し、神卉、靈艸をして能く花咲かしめ實を結ばしむるや否やによりて其の地の靈凡の定め得らるゝが如く、偉人、天才をして首尾よく功を成さしむるや否やによりて其の國の文野を決すべしと比喩せば如何。所謂文明は果して讃美すべきものなるか、將た呪咀すべきものなるかは別問題として、そが個人的狀態を指すにはあらずして、主として、社會的狀態を指せるものたる一廉だけは以上の解によりてほゞ定まれりと見做すことを得べし。

さて第一と第二との取調べによりて「文明とは進步發達したる社會的狀態なり」といふことだけは先づあらかた定まりたるものとして、更に第三の要件たる「比較上最も善き方へ向ひつゝある社會の狀態」といふことの當否如何を檢せんに、さて是れこそは文明是非論の分かるゝ所以の根本問題なるだけに、大ぶ厄介なる代物なり。何となれば、先づ、「過去に比して善き方へ向ふ」といふ一條件は如何ばかり確實なる基礎の上に立てるにや、果していつまでも維持せられ得べき合理の見解なりや、若しや文明も或程度に達すれば、恰も彼の一個人が壯强極つて老に入り、老積りて耄に墮するが如く、次第に老朽し若しくは糜爛しゆくやうのことはあらずや、希臘や支那の文明がいつしか窮極して亡びしが如き同じ轍を踏むことはあらずや、進化と退化とは相表裏して宛然糾へる繩の如くなるにはあらざるか、進步發展といふことは、語を換ふれば、次第に增長し、募りゆき、甚しくなりまさるといふ意味にも解せらるゝにあらずや、されば進化といふことは其のはじめより成住壞滅の悲慘なる理法を暗示しつゝあるにはあらずや、即ち文明には定壽あるにあらざるか、されば文明よりも未開の方が寧ろ理想的の社會狀態にはあらずやなどいふ種々の疑問滾々として泉の湧くが如くに起り來ればなり。

さてかく論じ來つて見れば事が稍ゝ面倒となるなり。從前の如く今の所謂文明を頭から一種善美なる方向へ進步發達したる人間社會の有樣、未開、半開の狀態よりは遙かに〳〵優れるものと認定し、よしや若干の缺陷、餘弊等があらうとも、兎に角比較的に慶び迎へて讃美稱揚すべきものと信じ込みたり

し時分とちがひ、既に文明の定義を疑ひ且つ其の利害得失を疑ふものが輩出し、呪咀黨、讃美黨と派分けまで出來て、嚴正に其の是非を決せざるべからざる今日と成つては、「文明」又は「シヰリゼーション」などいふ褒意を含める語は甚だ以て非科學的にして不便なりと言はざるべからず。蓋し「文明」とは易に所謂「天下文明」を連想し易きが故に「至善」「圓滿」「黄金時代」「文質彬々」などゝも解せられ「シヰリゼーション」將た「都雅」「文雅」「高尚」など、要するに人間の幾段か高雅に成り登れる狀態 *elevated state* と、語原上からも、慣用上からも連想せらるゝこと自然なり。然るに嚴密に批判を下すときは、目下文明を以て自ら居る歐米諸國の狀態は其の原始自然の狀態に比して大に發展し、大に進化したるものなることは言ふまでもなく明かなれども、(已に上にも反問せるが如く)かゝる發展、かゝる進化のトヾのつまりは果して至善、至美の理想的結果を齎すべきものなりや否やは、畢竟謂ふ所是非論の解決を俟つて後に定まるべき事にて、それまでは尚ほ一の疑問のみ。花が咲き盡して散り落ち、實が熟しきつて腐り爛るゝ例を思へば、大發展の其の裏面には大收縮が潜むとも疑はるべく、大進化の傍流には退化の暗潮があるらしとも推するを得べき理なり。若し果して然らば、今の歐米の社會狀態を指して大進歩、大進化、大發達などゝ稱するさへも大ぶ樂天氣の勝ち過ぎた獨斷の命名沙汰なるべきを、まして「文明」だの「シヰリゼーション」だのとお目出たき名目を並べんこと恐らくは間ちがひの種ならん。何となれば、一に常識を標準として聞く者、讀む者は恐らく文明を非とすることを首から甚しき悖理なるが如く

に豫想すべく、或は無意義、自家撞着とも解すべく、或は其の反對なるは、其の美なる名の實に副はざるの甚しきを憤るの餘り、進歩、發達などいふことの全分を擧つて抛ち去らんと焦立つにも至るべし。是れ皆用語の弊なり。若し夫の「文明」を字の如く解し「高尚なる道義の波及せる時代」又は「眞善美具足の時代」、尠くとも故福澤翁が其の文明論中に述べたる定義通りの文明を指すなりといはゞ

(福澤翁の定義によれば、文明とは「天地間の事物を規則の内に籠絡すれども其の内に在ゝて自から活動を逞うし人の氣快發にして舊慣に惑溺せず身躬から其の身を支配して他の恩威に依賴せず、躬から德を修め躬から智を研き古を慕はず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未來の大成を謀り進んで退かず達して止まらず、學問の道は虛ならずして發明の基を開き工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用ひて其幾分を餘し以て後日の謀を爲す」たゞひのものに外ならず)

今の激烈なる文明の呪咀者といふとも、強ち剛情にウンニヤそれでもいやだ、嫌ひだと草摺引の五郎がいふやうなことは言はざるべし。彼等は讀んで字の如き「文明」を惡むにはあらずして今の所謂と肩書の附く文明、否、むしろ進化(エヴリューション)といふことに伴ひ易き弊、發達(デヴロプメント)といふものに隨ひがちなる流毒を惡めるなり、その證據には彼等の中に「僞文明」といふ語を慣用する者があるにも明かなり、即ち「文明」其の者を非とするのではなく「老耄せる文明」「糜爛せる文明」一言に言へば「文明の弊」を非とするに外ならず、と斯う釋きほぐし、取捌いて見れば、非文明黨の呪咀は餘り埒の無き、たはい無きことゝも聞ゆべし、何となればどこの國にか僞文明や老耄文明を歡迎し、進化の餘毒や流弊に讃美歌をさゝぐる輩があらう筈なければなり。よしや或一部にさる蒙昧の徒があればからとて、それが爲に僞となすべからざ

る文明の要素をも抛ち若しくは弊となすべからざる部分の進化をも棄つるが如きは更に一倍の没分曉的の振舞なればなり。かくいはゞ、否々、然らず、非文明黨の面々が嚴しく文明を非難するは今の所謂文明には種々の拔くべからざる惡弊流毒がさながら累代の遺傳病の如く、又は三つ子時代から染込んだる惡癖の如く、鳥獸式にへばりつき、怨靈並に附き纏ひて、迚も／＼如何なる良方箋を以てするも決して之を根切にするの望みは、理論上は兎も角も、實際に於ては成立ちがたきが故に、さてこそ其の弊を惡むの餘り是非なく文明の全體をも惡むなり、畢竟足下等は歐洲に於ける僞文明、老耄文明の弊害が如何程に甚しき度合に立到れるかを察り知ることが出來ねばこそさる悠長らしき論をも立つれ、佛國革命の前例又は我が維新の大變にても知らるべきが如く、百年以上の積弊が甚しく重疊し、凝着し、固結したる場合には、鋤鍬は勿論、鐵挺でも鉅でも役に立つとにあらず、修繕や取舍は姑息の沙汰、根つぎは到底出來ぬ相談、さういふ場合には悉く打毀して建直すか、全く別の地に建前をするか、それより外には工夫なし、今の呪詛者の見る所また此の意味に外ならざるを知らぬか、と辨解する者もあらんかなれども、それがかの例の詩人式の短慮に近し。ろく／＼脉も診ず、病症の見當もつかぬうちに此の病ひ他にも療治の見込なし、截開々々と叫ぶやうなものにて、玉石共に焚くの悔あらずんば幸ひなりと云はざるべからず。（此稿尙書きつぐべき心組なりしが中絶す、卅七年）

牛のよだれ

知らぬが佛といふことは古い諺なれども、知つたが地獄とは今の世の人の上なり。十九世紀以來假にも文明國の仲間入せる國民にして、誰れやらの所謂「自知の怖しき訓錬」を經驗せざるものなきは今更いはずともながら、廿世紀に入つて此風潮東洋の新參國を同じ渦中に卷込み「自意識病」といふものが膏肓に入りかけた證據には、東西とも神經衰弱の大流行、世間に靑瓢簞のやうな男ばかり夥しくなるは氣のひけるとなり。自覺、自知を社會大進化の賜と謳歌し、自然に役せられずして逆まに自然を役し、人爲を以てして天工を補ふこと是れが人間の人間たる本價だなぞと謳歌した口振はいつの間にかおひおひ減り、野蠻や子供の何にも知らぬのを無上に羨ましがり、二言目には文明といふものを先祖以來ちつとも世話になつたとの無い仇敵でゞもあるかのやうは疾がり、繁文褥禮、汽車、電車、會社、製造所、いづれも人間の小才覺を以てして天然の善美を毀損するものに外ならずと泡を吹いて慷慨し、肴をたかぶらせた眼で觀るゆゑ、見聞くものが氣に逆ひ、神經は彌ゝ過敏になり、自意識益ゝ鋭くなる爲、未開人には針ほどの苦みたるべきことをも棒で刳られた程に感じて苦悶すること文明 社會の現狀にして、

餘り名譽でもなけれど、お互ひに多少經驗する所なり。此爲躰にてこゝ三四代遺傳を重ねなば、「時代病」「世紀末」などいふ名稱はやがて「人間病」「世界末」などゝ改稱さるゝことゝなつて、天が下を擧つて半きちがひ、半よい〳〵のやうな人間ばかりになつてしまふのではあるまいかといふ取越苦勞も萬更無理にはあらず。文明呪咀黨の所謂現代の諸弊は一へにこゝに發源するかとも疑はる。夫れ詩人、作家、藝術家は仲間中にては、褒めて豫言者などと稱すれども、俗人にいはすれば、其の國、其の時の最も薄手な人間、凍りつめた諏訪の湖に譬へなば最も春暖に感じ易き部分、瀨戸物ならば瑕入り、國民としては豫め素因あつて最も早く時代病に罹り易き蒲柳の質とも解し得らるべし。さすれば彼等が好んで寫す所の人物は、大昔の小說のとはちがひ、總じて假面を被つた作家自身であると同時に、恐らくは當に來るべき人間を暗示するのかとも想像せられ、歐洲作家の或作を讀みては羅甸民族滅亡の豫言も如何さま全くの夢話でないらしく思はるゝ消息乏しからず。かくまで自意識が深刻となり强烈となるに至つてはと杞憂を抱く人おひ〳〵に增加す。予の如きも全の他人のことゝ思はれぬゆゑに自他のために寒心すること屢〻なり。

そも〳〵自意識のかくの如く過度に發達するに至れるは、餘り久しき間他力ばかりを頼み過ぎ、他律ばかりを尊び過ぎし反動とも見るべきなり。他力とは神、運命、自然等の力をいひ、他律を尊ぶとは君父の命令、輿論、習俗等に律せらるゝことをいふ。姑らく時局の影響によつて特別の心狀態を生じたる我が國人を除外していへば、今の文明國人の最新代に屬するものゝ眼中には先づ兎角君もなく、父もなく、神もなし、といふが當然なり。ロマンチシズム勃興の當時に詩人、藝術家の間にのみ唱へられ又は實行せられたりし美的生活、本能滿足は、今は普通人の言ふ所、行ふ所なるが如し、彼等は大抵奇蹟を信ぜず、他界、未來世を信ぜず、祈禱力をも信ぜず。たま〳〵神を奉ずる者あるも、其の所謂神は主觀的の神にして、めい〳〵が思ひ〳〵に立つる所なり。イブセンが『ブランド』に

"Ye need, such feebleness to brook,
A God who'll through his fingers look,
Who, like yourselves, is hoary grown.
Mine is another kind of god!"

とあるは善く此の間の消息を傳へたり。彼のハウプトマンの作にもまた同樣の意味見えたり。畢竟在來の神樣は最早耄けて了はれたるなり。現代の所謂神は當人が主觀の投影、其の人みづからの理想たるに外ならず。つまり今人は何事につけても自分一個の判斷を標準とするなれば、自分の心以外に信仰の的もなく、本尊もなく、縋り所もなし。此の意味に於ける「自己中心主義」は實に十九世紀以來の時代精神なり。之れを主觀癖と名づくるも可なるべし。さてかくなりては、眼中に釋迦もなく、耶蘇もなく、孔子もなく、アリストートルもカントもなく、君父もなく、國風もなく、只自分を標準の智慧競、意地競となる故に、必然の結果として希臘古代のソヒスト、支那戰國の諸子百家を想連せしむべき

獨斷說の額合せとなり、めい〳〵別々の世界觀、人生觀、宗教觀、倫理觀、種々雜多の見解、いはゞ無數の尺度を持つて來て一枚の着物を仕立おろさんとするやうなものにて、姑、小姑嫁、針妙、乳母、小間使、家內中を擧る衝突、矛盾、軋轢のごつたかへしては、誰れか烏の雌雄を知るべきや、是非、正邪、美醜悉く紛糾し、一寸先は眞黑暗の中に成人が悉く迷子となつてしまつた形なり。　さて此の事實が世界の人心に及ぼせる影響は、當人々々の性質によつて一樣ならずと雖も、押しならして免れがたきは無主義、無理想の弊に墮することなり。　凡そ自分尺度の結果は、兎角無定見に流れ易し、而して無定見の必然の結果は、信仰無く、向上心無く、道義無きことなり。　思ふに件の時代精神をほのめかせる文學上の作物は十九世紀以來算ふるに遑なきほどなれども、最近時の傾向を代表せるものとしては伊のダンヌンチオの作などは其の著きもの丶一なるべく、彼のシェンキヰッチの「ウィザウト、ドグマ」といふ小說などもそれなり。　其の主人公たる男は、無論宗教上の信念なく、道德上の主義もなく、戀愛の外に殆ど何等の渴望も向上心も無き懷疑家にして、世界に遍からんとする無主義、無理想の時代精神をスラヴ氣質中より撮影し來れるものとしては穿細至極せり。　やゝ詳しくいへば、彼の徒らに空中樓臺を築くことに長じて、活動の能力に乏しく、事每に理窟を附けて自家を回護する癖あり、存外に他人には無慈悲なれども、多感多情は持前にて、何事につけても感受力驚くべく銳く敏く、感銘は細かく深く、就中自他の心の働きを分析し、解剖し、批判することの精刻なること到底十九世紀後半以前には其の例を見出し

がたしといふもの是れなり。　按ふに、今日文藝に從事するものにして、此の性質評を讀みて全然他人のことのやうに思ふことを得るものは餘り澤山はあるまじ。　本來此の氣脈は、英に於ては十八世紀の中ごろリチャードソン、スタアンに萠し、佛のルーソーに發展し、獨のゲーテに花を開き、全歐のロマンチシストに實を結び、其の後科學の大活動に逢うて標落し、近頃に及びて更に第二回の花實を着けんとしつ丶ありと評して可ならん。北はシェンキヰッチ、南はダンヌンチオと全く風土、習俗、歷史、人情を異にしながら、只此の自意識深刻といふ一氣脈だけは相似たることの著しきを見ても、其の全歐に漲る時代精神たることほぼ察すべきにあらずや。

世間的にいへば、彼のロマンチシズムといふ思潮は一大濁流なり。　詩歌學藝の美名の下に血の氣多き我儘者どもを驅つて徒らに空想に耽溺せしめ、幾千人の怠惰者の爲に飛んだ躰裁よき口實を供したるに過ぎざりし氣味あり。　されど其の源は時勢の必要から湧いた淸泉なれば、フイヒテ、シェリングなどはいふに及ばず、ヘーゲル、ショーペンハウエルの跡かたづけ連までが孰れも幾らかづ丶ロマンチシストの傾ありて、今日の研究的態度から見れば彼等も自分尺度の空想家たる氣味あり。　彼等の大哲學は一言以て蔽へば大根が主觀的なり、埋立地へ速地形してゴシック式の巍々たる大々迦藍を雲間に冲らせたやうなもの、輪煥の美人目を駭かし、一代の評判が唾壺からクロコダイルが這ひ出した程に喧しかつたゞけに、一旦地盤がいざりかけて土崩瓦解の塲合となつては「主觀的見解」の信用おそろしく下落し、

「事實」の相場が今更のやうに暴騰し、「經驗」「歸納」「客觀」などいふ語が流行り出し、何事も實驗の上、實試の上と、堀越式飯たきの格て、念に念を入れた一粒選り、服紗捌きやら、毒の試驗やらの管々しさ此の上なし、されどもの當座は見物皆細かい〳〵とて感心せざるはなし。是れ畢竟ロマンチシズム流の空想や獨斷が餘り流行りすぎたりし反動にして、即ち主觀的判斷法に對する客觀的判斷法の勝利なりしなり。英語でいへばロマンチック、サブジェクチヰチーの勝利なりき。かゝる因緣にて科學的研究はあらゆる方面に波及し、哲學崇拜熱は頓に冷却し、科學てなうては夜も日も明けぬことゝなり、觀察、試驗、分類、統計、比較研究、史的研究などいふ言葉は通用語のやうになり、一時は歸納推理萬能の勢ひ、科學の力を以てすれば宇宙間の事物何でも分らぬものないかの如き早呑込の噂、受賣姦く、何さま此の割合にて押行くときは、誰れやらがいつたやうに、兩氷洋の氷山(アイスバルグ)を大軍艦の力で熱帶まで引いて來て地球の溫度を平にすることも強ち大氷山の浮いた話でも無からうやうに思はれし頃もありしが、さても知ること彌〻多大にして疑ふとも彌〻多大となる習ひとて、科學の進歩造詣は(肝腎要の根本問題に關する限りは)或程度までにて止まり、それからは牛の歩み、取わけ活物(いきもの)の人間問題となると、懷疑又懷疑、研究の上にも研究の必要が生じて、複雜煩瑣の取調果しなく、所謂、"Scientific spirit takes nothing on trust" で、兎角斷定をしかねるゆゑ、事毎に might be と would be の「てもあらう」づくし自烈つたく、「事情にして變移せずば」とか、「或意味よりいへば」、とか、「一面より觀れば」とか、「或程度まで」とか、「何々は別問題として」とか、何事につけても憶病らしく條件附(コンヂショナル)の判斷(ジャッヂメント)七うるさく、袁切らぬこと夥しく、つゞまる所は底無しの井戸へ墮込むやうな氣持にて、何一つ心持よく解決の出來た例なし。なして壽美藏の政岡では血の氣の多い向う正面連が鶴千代や千松に同感し「かゝさま飯はまだか」と總立になりしも道理あることなり。總じて科學者氣質は頭腦の冷靜を重んじ、感情を貶しめ、斷信し斷行することを嫌ふゆゑに、宗教、詩歌、藝術若しくは現世的事業とは、まさか犬猫のやうてないまても風する馬牛の趣あり。そこて以て詩と學問とは次第に中がわるくなりはじめたり。昔は歴史といへば何處の國のも半分は小說のやうなものなりしに、十九世紀以來のは、先づ印度護謨(インヂヤゴム)を嚙むやうなのを本塲物とするならはし、又哲學書とても大昔には莊子やプレトーのやうな洒落れたのもあり、天文學や植物學を韻文て書綴つた時代もありしを、今は哲學者科學者の文章といへば的の字づくめの乾燥無味が學者らしいと相塲定り、「二二が四」といつても濟みさうなところを、氣取つた手合は「二といふ數を以て之れを其の同數に乘ずとせよ、吾人の經驗せる限りにていへば、概ね該原數の二倍たることを常とするもの〻如し……」是れ豈腦充血連中の我慢し得る所ならんや。

ヂョン、モーレーの說によれば、彼のルーソーの獨斷論が當代に歡迎せられしも、其の一因はモンテスキュー一派の史的研究が餘りに煩瑣に流れたりし反動なりとか。蓋しルーソーによりて開かれし空想

派の泉流がロマンチシズムに至りて汎濫の極に達し、こゝに再び科學派の捲土重來を招き、科學萬能が再度頓挫するに及びて新ロマンチシズムまた起り、今日現に見るが如く、新舊の思脈亂麻のやうに入亂たるなりとも見るべきか。

扨又之れと同時に新聞雜誌的科學思想の普及は、一知半解者流の濫用と相俟つて、大に科學の信用を損じ、「淺薄なる科學」なぞと、根つから科學に緣のない我こにまで大きにチヤチがらるゝとゝなりたり。それも本元さへ隆々の盛運ならば、何のかけかまひなきことながら、實際大本營は當分冬籠の爲躰、肝腎の根本問題は扨も其の後ちつともそつとも進歩せぬ地だゝら、天地の本躰、本源は扨おき、吾々人間の眞相、歸趨からが不分明なること十八世紀ごろとさして異つたこともなし。嗚呼ニュートン、ダルトン以來科學上進歩はあれども革命はなし、科學は今も尙ほ過去の推測者、現在の穿鑿者たるにとゞまれり、到底將來を豫言するの資格はないものだわゑといふ半疊を打込むもの漸く多く、科學萬能の褒言葉いつの間にか歇み、科學崇拜熱めつきりと冷却し、尠くとも詩人肌の多血質連中に對しては科學は其の信用を失ふことゝなつたり。之れを世に「科學及び實驗哲學の破産」と稱す。昨今の形勢も尙此體なり。

彼のロマンチシズムの汎濫は、世間的に見れば、新代の個人が浮世に處し惱みし苦鬪煩悶の結果とも見るべかりしが、今や科學の破産と共に第二の失望煩悶がはじまりたり。一方に於ては物質的文明の進歩に目を眩まして黄金時代がつい鼻の先へ近づいたやうに思ひ、精神界の事も科學如來の御誓願で萬遍なく救はるゝこと、望を屬せし度合の餘りに甚しかりしだけに、失望も憤激も煩悶も前代の幾層倍に烈しく、氣早の若手は、世界は全く機械的なもの、人間の事は言はゞ夢の戯れ、何でも只利口で押しの強い奴が勝、宗旨も道德もあつた者かゑと放埒を意見する實の親に食つてかゝつても、和解へる叔父貴と兄貴からが善惡論で目に角立て爭みあふといふ思想の紛糾、大亂脈、何が何やらさつぱり分らず。之れを要するに無理想、無主義の濁浪が天に漲る現代は、進退是れ谷まり、天を仰いだところが、神も佛も本躰が分らぬので頼みにならず、只力綱は自分の智慧ばかりとなつては、度胸のあるなしが人間品定めの唯一の目安となり「意志崇拜」の世の中となること自然の數なり。夫れ信仰もなく、主義もなく、理想もなく、何等向上の念もなく、只自分の利益を專一の時代には、生中の人情はどうやら無用の長物に過ぎざるが如くなれども、そこが人間の悲しさには、此の人情といふものを流石根こそぎにも棄てかねて、利己と愛他の中有に迷ふ氣の弱い我利々々亡者も夥し。若し此の一代の心的傾向に何等かのイズムありとすれば、假に之を現世主義と自家滿足主義との二大イズムに歸收すべし。濃淡の度、高卑の質にこそ驚くべき別はあれ、現代人心の向ふところ、先づ此の二者を出でずとも見るべし。蓋し我意强くして他人を思ひやる情薄ければ、眼中に宗教なく道德なき論理上の結果として、人間つまり五六十年と高をくゝり、我欲を遂ぐるより外に滿足はなしと合點し、哲學者の講義を俟たずとも快樂主義、本

能滿足說に立脚する筈。扨又靈魂の不滅を信ぜず、他界の在存をも信ぜざる自然の結論が最も高くして娑婆即淨土說となり、それから墮落した「今日主義」To-day-ism といふ贋ひ物の流行一世を風靡せんとする勢ひあり。現世安樂が一點張の望み、功名が無上の手段、我が園遊會の立食は今日主義者生存競爭のシムボリズムなり。

かういふ時勢となつては意志の薄弱な連中は一段と可憫なり。自身定見なきゆゑ、君子肌なれば、それも一理これも一理と退讓づくめで埒あかず、つい一生を無能に終り、小人肌は時勢の然らしむる所生中智惠だけがよく働くゆゑ、左右前後が二三間宛はよく見え、それが爲足がすくみ、手がすくみ、只管世間が怖ろしく、人の鼻息が怖く、何事も天眞爛漫にはえせず、阿附し、面從し、矯飾し、僞善し、宿無し犬が家々の掃溜を探りあるくやうに人目をぬすみて窃々と快樂主義を行ひ、自家滿足主義を行ふ。按ふに輿論を奴隷的に怖るゝことは慥かに現代の通弊にして彼のイブセンが諸作に亘つて痛罵せる所のものは是れ也。然らざれば、徒らに疑惑し、危惧し、苦悶し、怨嗟し、自暴を起して墮落し、果は氣が狂うて自殺する者もあり。若しくは筆舌に無責任の破壞論を唱へ、他人をして自家が實行し得ざる所を實行せしめんと願ふ者もあり。之れを要するに、小膽者は僞飾し、剛膽者は横暴をも敢てす。輿情の傾向が著しく爲我的なること明かなり。此の間の消息を傳ふる作家としてイブセンは實に其の一番鷄なるべく、ゴルキーの如きは夜明鴉に比すべし。

爲我的といふこと必ずしも惡い意味にあらず。自家滿足主義もまた然り。甚だ高上な意味にも解するを得。例へば、彼のグリーン一派、バウルゼン一派の倫理說の如きを此の時代精神の醇化されたるものと見る場合の如き是れなり。よしさなくとも個人主義全盛の世に人心が私欲一點張といふ意味の爲我主義に流るゝとも、それは昔から有中の事にして不思議がるに及ばず、隨つて取越苦勞をなし、狼狽へ騷ぐにも及ばぬことながら、只こゝに注意すべきは現代に限り、利己主義といふ意味の爲我主義にも「自是的」といふ特徵の伴ふことなり。昔もアリスチッポスや楊朱やマンドギルやホッブスやあり、これらは或は利己主義に立脚し、或は利己主義を是認し、そこに倫理の地盤を据ゑ、表立つて利己主義を主張したりし連中にて、かゝる例は決して今日にはじまつたことにはあらねど、それらと目下上中下に瀰漫する粗造品並の「自是的利己主義」とは、唱ふる連中の本意、目的、適用の範圍、實際の作用の上に際立つた相違あり。今は中小學の童兒までが爲我的功利主義の信者にして、學問經驗の生中な手合は底を拂つて楊朱、マンドギルの亞流たらずんば、ホッブス、アリスチッポスを生嚙にした連中らしいはまだなこと、ニーチェが新しげに說き立てし倫理說も彼等に取りてはとつくの昔に實踐したることに外ならざるの概あり。彼の佛の澆季派一派の言行に徵し、若しくは近き三四十年間の歐洲大陸文學が明示し又は暗示する所によつてかゝる風潮の如何に現代に盛なるかを察すべし。「斬取强盜は武士の習ひ」とは階級制度と武家的功利主義とに伴へる自是的利己の一例なりしが、近來流行の姦通是認、自

墮落是認などに至つては、非階級的、非功利主義的なるだけに、其の影響に於て大ぶ關心すべきものあり。要するに過去の利己主義は大抵半無意識にして半自非的なりしに、現代の傾向は悉く意識的にして且つ多少自是的なり。自ら責むるの心無きゆゑ悔悟遷善の機緣乏しく、自墮落募り易し。昔は「義務だぞ」と言はるれば奮然として起つたものなりしが、今日は其の反對は「義務だ」といはるれば意志が麻痺るなり。是れ畢竟は教育普及の結果、平等自覺の結果として、一度は社會が經過せざるべからざる倫理的狀態なるべく、即ち平等主義に伴ふ個々人が自尊心の然らしむる所と、例の科學者風に沈着拂つてしまへばそれまでの事なれど、かくの如き變現象は、尠くとも天保生れの頭腦をして國家の滅亡を杞憂せしめて餘りあるほどの倫理上のがんどう返しなり。何故といふに、純然たる自分勝手一方を最上善と立つるに及んで、倫理說は全く其の開闢以來の標準を逆まにしたりといふべからずんば、尠くとも二三千年以來の臺座を顚覆したものといふべければなり。ニーチェが見事新倫理見を創始したりと信じ、第二の基督を以て自任せしこと謂れありといふべし。

語は新時代精神の引札にして、舊時代精神の化石なり。十九世紀に入りては "self-ness" "self-life" 及び "self-hood" に關する語の殖ゑたること驚くべし。大陸の事は知らず、英語の中にて大陸文學の飜譯、新倫理學說其の他の必要上より十九世紀も其の後半中に造られたのではないかと思はるゝ語尠からず。一寸した見本が、例の倫理學上の用語たる "self-realization" や "self-satisfaction" 乃至 "self-

fulfilment" "self-centricism"、其の他 "ego-theism" "self-worship" "self-idolatry" "egomania" 等、又熟し用ひたる例のうちには "cult of self" "aggressive egootism" "egoism incarnate" "delirous individualism" "individualism gone mad" "each-for-himself-ness" "in-and-for-one-self-ness" など。明治の社會にも大ぶ用ありげな語あり、以て時代精神の趨向を窺ふべく、兼ねて現代の變調は無我、献身、克己、遜讓を絕對の理想としたりし東西幾千年來の舊道德に對する反動の結果たること學者先生の取調を俟たずとも明かなるにあらずや。

此の爲我主義大全盛の陰影は特り西洋諸文明國の小說中に黑々と映じ居るのみならず、我が明治作家が作中の人物も多少同血脈の人種たることおひ〳〵明かになり來れり。歐洲最近名家の作中の男性人物の著しき特質は、いづれも神經過敏にして痛ましきほどに自意識的にして、喜ぶにつけ、悲しむにつけ、只の刹那も忘我することが出來ず、隨つて深刻に爲我的にして我が最愛の情婦とすらも曾て同化する能はざるものさへあり。或者は餘りに聰慧にして想像臆測に長じ、直覺に拙く、決斷に鈍く、何事につけても兎角本能的に行動することを難ぜんとす。女性と教育無き下等社會だけは尙ほ流石に然らず。彼のツルゲネフ、ゴルキーが作中などに、頗る克く此の間の消息を傳へたるものあり。されど其の實此の傾向のひとりスラヴ民族中にのみ存在するものにあらざる證據は、那、佛、獨、伊、いづこの近代小說を見るも多少類似の人物の寫されたるによりて會得すべき也。イブセン、ゾラ、モーパッ

サンなどの作中について見るも、眞に他人の爲に忘我し、献身し得る人物は大抵女性にして、男は品性(パーソナリテイ)の高下に拘らず、又意志の強弱に拘らず、十中九まで瞬時も忘我する能はざる人物なり。 智餘りあつて意志足らざると同時に「自我」といふ念の餘りに強烈なるなり。 按ふに是れ將たロマンチシズム以來の暗流にして「ハムレットはやがて日耳曼(ジヤルマニー)なり」と稱せられたる頃よりのことにして、露西亞などへも大ぶ早くより流れ込みしものらしく、たしかツルゲヱフの所論の中にもハムレットとドンキホーテを比較して後者の勇往直進を稱歎したるものあり。 多智に伴ふ懷疑、不決斷、多想像に伴ふ空想、臆病、深刻なる自意識に伴ふ深刻なる利己主義、此の血脉の因つて來る所遠くして且つ深し。

かゝる不健全なる傾向のおひ〳〵甚しくなり來れる時に際し、他方にまた之れをして益ゝ激烈ならしむるに與つて力あるべき一事實あり。 他なし、人工の進歩に伴ふ不健全なる傾向是れなり。 此の事の詳細は、到底今こゝに述べ盡すべくもあらねど、只一言すれば、文明の進歩によつて萬事萬端が餘り便宜になり過ぎ、それがため、便安逸樂がふんだんになり、身をも心をも苦に慣らすといふことなきより、先づ人間の身體からがおのづから脆弱に育つといふことなり。

"Thus first necessity invented stools,
Convenience next suggested elbow-chair,
And luxury the accomplished sofa last."

奢侈便安が慣れつことなつたる文明社會の通弊は懦弱懶惰の生活なり。 現代の人間は自意識の強さ

ため感覺さらぬだに鋭敏なるに、早くより便安逸樂に慣るゝゆゑに、聊かの苦をも忍ぶ能はず、又自由時代の弊として放縱の癖が沁込み、慾を節するの勇に乏し。 現代の理想は gastronomy(食道樂)と literature(輕文學)なりと或露西亞小説の飜譯中に見えたるは克く此の惰風を喝破せるものなり。 夫れ精神上の悦樂は再三にして饜くことなけれど、肉體上の快樂は屢〻すれば興さむるを常とす。 神經過敏の癖とて、一寸した不快感にも飛びあがるほどに感ずるが常なれど、快感に對しては、視聽味嗅觸ともおそろしく遲鈍になり、到底尋常の物品や尋常の手段方法では滿足を覺えがたくなる奢侈の增長、衣食住とも、人工全盛時代の然らしむる所とて、工夫に工夫を重ねて天然を磨損し、不健全を募らするに忙しく、飲食から、服飾から、娯樂、遊藝、何でも皆五感を快くくすぐるが目的で出來てゐる故神經片時も休まる間なし。 取りわけ上中流の人間は、一世を擧つて珍物を漁る有財餓鬼、榮燿に餅の皮などは今は樺太あたりですら通用のいかゞはしき俚諺なり。 香料、嗜好品、リフレッシメント、興奮劑、强壯劑、曰はく何、曰はく何、名は藥、實は毒藥の發明果を知らねば、何の事はなし、滅亡間際の羅馬貴族の贅澤が平等時代の恩澤にて最下級にも波及する爲躰(ていたらく)、就中中央首都に在つては理髮師のアップレンチスから小ペトロニウス其人なり、電車八通の今日は、日給十五錢の六尺男にして其の足一代三町とは都の土を踏まいでも濟む大便利、運動不足して不消化(こなれわる)く、腸胃カタル、神經衰弱、いづれを見ても文明がる手合に青瓢簞のつらがまへならぬはなし。 かてゝ加へていづこも同じ生存競爭の激甚、生活難に驅立ら

れ、おのれが健康や才分には斟酌なく無理詰込の速學問、只我れ先と出世成功を急ぐゆゑ、さらぬだに神經は過勞すべき筈なるに、鐵と蒸氣と電氣との効力で、急に五大洲が縮小り、西洋と東洋とは壁一重の隣づからなれば、バリー、モスクワの爆裂彈の碎片がッィ支那、日本へ飛んで來まい者でもない世界の狹さ騷がしさ、目まぐろしさと氣ぜわしさとて深刻な自意識の苦みは彌ゝ以て堪へがたく、或は毒と知りながらも種々の麻醉劑を濫用し、酒と阿片と女色との爲に慢性自殺を行ふ者の增加するも道理、さすがに此の三つの魔藥だけは一時忘我さする効能あればなり。 まして彼の「戀」といふ魔藥の力は餘程甚しき爲我家をも恍惚として忘我せしめ、時として向上の志を發せしめ、死を怖るゝの念をさへ全く解脫せしむることあり。 宗教の威信衰へて昔の神樣は耄けてしまはれた現代に、酒ならずして、阿片ならずして、此の靈驗を有するもの、此の外には亦有るべしとも思はれず。 若し假に有りとすれば、所謂大文學、大藝術なるべけれど、下戸にはアルコールの向かぬが如く、文學、藝術の功德にはおのづから限界あり、迚も彼の「戀愛」の如く普遍なること能はざる勿論なれば、今日戀愛の神聖が唱へらるゝは畢竟するに時勢の必然なり。 さればまた今の青年は、失戀といふことをさながら人生の身代限なるかの如く感じ、氣短かにも自暴自棄して無慚の結果を釀すこと多し。 之れを要するに、西洋諸國の一側面を「文明の食傷」と診斷するは、多少道理あることなり。 尠くとも「自意識病」の爲に神經の甚しく衰弱したる病人ならぬ病人が年々歲々に增加する傾きあることは事實らしく、彼等は、或は父母、祖父母が

蕩逸懦弱なる生活の業因により、或は自分自身の不養生によつて、いつしか身心を病的に持崩し、ヒステリー的となり、瘋癲的となり、白痴的となり、甚しきに至つては、荒淫者の末路の如く、飲食も舌に美からず、聲色も視聽に快からず、浮世の事一切を面白くなく、つまらなく、無意義、無趣味に感じながら尙命のみは何となく惜しくといふよりは、死といふことを只何故ともなく怖ろしく感じて、人百倍に苦むさも眞に憫然の至りなり。 ゾラが『人生の悅樂』の主人公、イプセンが『亡靈』の主人公などは死を怖るゝ人物の好例なるべし。 尤も特に取出していふまでもなく、凡そ羅甸民族を代表する最近小說家の作中には此の類の人物殊に多し。 又彼の澆季派の詩人中などには事實上の 的例も尠からざるもの如し。 よしや幸にかゝる甚しさには至らざるまでも、苟も現代の青年、就中文藝に從事する連中にして多少此の種の苦痛を經驗せざる者はなかるべく、時には經驗せずとも經驗したらしくものせねば幅が利かぬといふほどなり。 中には極端より極端に走つて突然宗教信者となれるもあり。 宗教家はかかる塲合を發見する毎に狂喜して宗教復活の前兆也などといへど、ロマンチシスト等の發心はともすれば感情上の道樂、徒の sublime selfishness（崇嚴なる私慾）に過ぎぬこと多ければ、餘り多くを望むは失望の基なるべし。 勢ひ此の如くなれば、それやこれやを思ひあはせて文明諸國の前途を悲觀し、或は羅甸民族の滅亡を豫言し、或は「澆季」「墮落」「退化」などゝ、種々不祥なる名稱を並べて「文明」を呪咀する人々の日々に增加する、これもまた一理あることなり。

さて之れを一概に大陸一つあなたの精神上のペストと見流し、何の豫防策も講ぜざること可かるべきか。又は風聲鶴唳に驚き、利を享樂すること未だ半ならざるに、早く既に文明の流弊に戰き、あわてゝ呪咀黨に雷同すべきか。是れ緊要なる一つの問題なり。

ルネッサンスの昔、彼の大思潮が歐羅巴一面に汎濫したりし時、英吉利は島國なれば其の利に浴することもずつと大陸諸國に後れたりし代りに、人によつては岡目八目を利用し、前車の覆轍に鑑み、幾分の弊を薄うするを得たりしものあり。我が東洋の新參國うまく此の前蹤に倣ふことを得るやいかに。

是れが第二の疑問なり。（三十八年九月）

文藝瑣談 終

坪内逍遙氏著書目錄

鈴木華邨氏畫

桐一葉

實價四十錢◉郵税六錢

英雄の末路眞に哀むべきかな。豐公死して土未だ冷かならざるに天下亂れて鼎の沸くが如し、大阪城の淪落、勢の自然に出づと雖も豈人爲の關る處無しとせむや、本編は即ち當時の史乘に據りて、大阪城内漸々薄れ行く覇圖の末を叙し、其間幼主が傅たる市正且元が孤忠、淀君の放肆、木村長門が沈勇、大野父子が佞邪、炬の如き著者が眼光に映じて、錯綜せる事件の間に必然の運命を描寫す、材料と詩眼と共に是絶代の悲劇。

小右　堀田　鞆年　音英　氏氏　畫

菊と桐

實價三十五錢◉郵税四錢

菊は楠氏、桐は豐臣氏の紋所、「二葉楠」「沓手鳥孤城落月」の二篇の新躰脚本を收む、前者は小楠公が芳はしき菊の香を後世に留めし最期を寫し。後者は「桐一葉」の後を受けて片桐且元が悲劇を結ぶ。春の舍主人が此の新作は新舊兩種の脚本の間に一橋梁を架するもの、舊劇に倦みたるものは讀んで新鮮なる興味を覺ゆべし。

渡邊省亭氏畫

牧之方

實價四十錢●郵税六錢

源家の末路は實に暗黑時代なり、史家は其表面を寫して其裏面を寫さず、其の皮相を論じて其の眞相に及ばず、本書は逍遙氏が高遠なる詩眼を以て深く時政時代の埋沒したる一面を描出せるもの、室牧の方の心術歷々として指點すべきと共に、當代の隱微に通ずるを得む。

武内桂舟氏畫

ふたゝび心

實價卅八錢◉郵税六錢

こは米人某の作を飜案せるもの、南軍亡國の將木暮武四郎、相場師となり欺僞師となり、或は金山を無人の境に求めて、忽ち崩す大惡心、西洋天一坊の活劇を演じ出して、央ば首尾能く成就したりしも、婦人の色香に迷ふたるは必竟はこれ天罰覿面、脆くも見現はされて百事休す、面白き物語なり。

春の舍漫筆

實價三十錢◉郵税六錢

逍遙氏が近頃の筆に成れる三種の文章を收めたるもの、第一種は諷世嘲俗の物語にして第二種は物語の如く綴りたる文學評論なり、最後の一種は最も興味に富みたる西洋逸話九十餘件を平易に譯したるものなり。以て當世の社界を知るべく、以て現今の文運を卜すべくし。以て奇人英雄君子才人の音容に接するを得べ

小林清親氏畫

梨園の落葉

實價五十錢◉郵税十錢

逍遙氏が我劇界に於ける希望と抱負蓋し幾許ぞ、本書は即ち掾大の筆を以て梨園の望む處の意見を述べたるものにして、慇懃周到或は憂ひ、或は鞭ち、誘導開發至らざる無し、劇に志あるもの一讀せば亦た思央に過ぐる者あらむ。

文藝と教育

實價 上製一圓 並製七十錢 ◉ 郵税十二錢 郵税十錢

博士が玄妙なる學理と、該博なる識見とにより、文藝と教育とに就いて屢々講究せられたるものを蒐めて世に示さんとす。文士と教育家との別なく、必ず座右の師とすべきものなり。

文學其折々

紙數千餘頁

實價壹圓◉郵税二十錢

是れ氏が最近數年の間に成れる論文批評諷刺滑稽等を集めて各部類を分ちたるものにして、長短大小交錯綜して出で、高遠卑近迭に參差たり。若夫東西の作家を評隲するに至りては八面玲瓏遍く照破せずといふ事なし。

近松の研究

實價一圓◉郵税十六錢

近松は實に一世の文豪にして、其世話物に於て、其時代物に於て、彼が獨得の筆を揮ふや一瀉千里宛から飛ぶが如くにして然も奇想妙文縷々として出で、滾々として盡くる事なし、今や坪内氏同好の士と共に近松の著作を評釋し、品隲して世に公にす、執筆の大家は實に左の諸家なり。

關根正直、伊原青々園、饗庭篁村、土居春曙、島村抱月、五十嵐力、後藤宙外、綱島梁川、水谷不倒、大西祝、坪内逍遙

17971

毎月一回
一日發行

編輯主任　後藤宙外氏

新小說

『新小說』は當代文藝の中樞にして常に諸大家及新進作家の雄篇を江湖に紹介し、創作界に批評界に其他社會、流行の微に至る迄全紙有益の記事を滿載し、更に本年より思潮家庭の饒味なる二欄を加へ以て文壇第一の大雜誌たる面目を發揮せり。◎本誌に執筆せらるゝ諸大家には露伴氏柳浪氏抱月氏天外氏竹風氏鏡花氏春雨氏宙外氏その他十氏風葉氏春葉氏曙山氏掬汀氏荷葉氏嘯月氏宙花氏その他十餘名あり

小說潮欄には毎號長短數篇の作を現時文壇の諸大家に起草を乞ひて之を掲ぐ。

思錄欄には宗教、文學、教育、社會に關する當代大家の學說を網羅す。

雜苑欄には高尚玄妙の文と平易曉味の記事とを併載して上下一般の歡迎に背かざるべし。

文藝欄には諸流の新体詩、美文等を採錄し傍ら寄書の名作を併載して光彩陸離。

談苑欄は俊秀なる物を社會各方面に涉りて一代の名家と稱せらるゝ人々の說話を書記し、風丰意氣共に躍々、又此外の珍奇の說聞をも掲ぐ。

叢欄には演劇、相撲、落語、講談、淨瑠璃その他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。

苑欄は趣味と實用を兼ね有して以て家庭の良師たるを期す。

庭欄は衣服、風俗、飾裝品その他社會百般の流行を精細に報導し、巧妙の挿畫を以て記事の足らざるを補ふ。

行欄は各方面の銳利周到なる觀察記にして、傳神巧妙なる寫眞版とを以て文の足らざるを補ふ。

會欄は壹張竹風氏が縱橫の筆を揮ひ、其洽博の識と明幽の觀察を以て現代文藝に忌憚なき批評を加ふ、盡しそれ我文壇の快文字なるべし。

我觀欄は宙外氏が公平穩健の筆を以て縱橫に現時の文界を評論して餘さざるべし。

時文欄は百花百姿和洋諸藝伯仲同新進畫家裝畫

實價
◎壹冊　貳拾五錢郵稅貳錢五厘
◎六冊前金壹圓五拾九錢◎十二冊前金郵稅共參圓拾貳錢◎郵券代用壹割增（外國は拾四錢）

發兌元　東京市日本橋區通四丁目角　電話本局五十一番　振替貯金口座一六一七番　春陽堂

明治四十年五月十五日印刷
明治四十年五月十八日發行

文藝瑣談
實價金壹圓

著者　坪內雄藏
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田靜子
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷者　佐久間衡治
東京市日本橋區通四丁目角

發行所　春陽堂
電話本局五拾一番
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍

●內に發行者●
●の印無き本は偽●
●本社園印を認●